

語り継ぐ 18

移り行く日常の中で

『防災から逃げないという人生（みち）』

を選んだ私たち

～被災者が紡いでくれた想いの糸

私たちらしい あなたらしい 結い方で～

兵庫県立舞子高等学校
環境防災科3年

題名	名前	項
語り継ぐ	浅 倉 隼 人	1 ～
防災と自らの役割	猪 多 星 瑛	5 ～
記憶をつなぐ	上 谷 琉 緒	9 ～
未来のために語り継ぐ	上野 このは	13 ～
語り継がれて	埴 来 知	17 ～
三つの震災	大 崎 紘 平	21 ～
語り継ぐ	大 崎 柊	25 ～
変化する未来 変化させる未来	大 杉 駿 矢	29 ～
1.17	大 西 凱 士	33 ～
「語り継ぐ」	荻 野 友 伸	37 ～
語り継ぐ	香 川 剛 大	41 ～
災害激化の時代に備えて	梶 本 知	45 ～
災害を知るあなたへ	加 藤 一 晴	49 ～
未災者だけどやるしかない	金 山 大 輝	53 ～
「語り継ぐ」	河 合 咲 生	57 ～
かたりつぐ	桑 田 優 葵	61 ～
未来へ	神足 多蘭沙	65 ～
未来の社会に生かす防災	是 友 実 和	69 ～
今を生きる人たちへ	坂本 ひなた	73 ～
「あの日」から目を逸らさずに	高 見 心 陽	77 ～
私たちにできること	多 田 智 貴	81 ～
未災者のわたしにできること	樽 家 海 音	85 ～
未来へ繋ぐ	段 塚 夢 叶	89 ～
つなぐ	鶴 田 樹 乃	93 ～
風化させない	中 島 秀	97 ～
途切れさせない	中 野 幹 太	101 ～
Make it count	信 川 悠 太	105 ～
バトンを繋ぐ	野村 陽奈子	109 ～
語り継ぐ	濱 田 明 華	113 ～
後世へ	原 康 介	117 ～
願いを込めて	平 川 歌 帆	121 ～
過去の私・今の私	真 砂 怜 生	125 ～
Providing is preventing.	溝 内 友 翔	129 ～
経験をつなぐ	三 好 彩 香	133 ～
未災者なりの語り継ぎ	森 亮 太	137 ～
過去を伝える、未来へつなぐ	森 山 結 惟	141 ～

語り継ぐ

浅倉 隼人

1 はじめに

当然私は、阪神・淡路大震災を経験していない。初めて阪神・淡路大震災を知ったのは、小学生の頃である。高速道路が横たわっている映像を見たとき信じる事が出来ずにいた。それから、中学生になり災害に興味を持ち始めた。そして、舞子高校に防災について学べる学科があることを知り、受験しようと決心した。そして、入学した後に「語り継ぐ」という言葉を耳にした。それを聞いて、「自分たちが学んだことを他者と共有するのか。」と素晴らしいことだと感じた。

それから3年間災害や防災について学んだ。はじめは、震災を経験していないのにもかかわらず語り継いでいっていいのかと考えていた。しかし、震災を経験していない人が増えているからこそ、災害や防災の知識が身についている私が、語り継いでいかなければならないと感じるようになった。正直、まだまだ浸透していない。今、読んでくださっている貴方の意識で命が助かる。これをきっかけに、災害時に活かして頂けたら幸いである。

2 阪神・淡路大震災当時の母の話

体が上に突き上げられた。最初は小さな揺れであったがだんだんと大きくなり、私の祖父に「地震や。布団被っとけ!」と言われてから地震だということを知った。その時祖父は筆筒が倒れないように押さえていた。揺れが収まり、自分の周りを見るとガラスの人形ケースが頭に落ちてきていた。祖父に布団を被れと言われていなかったら顔中血だらけになっていたかもしれない。そして、今もその傷が残っていたかもしれない。祖父の瞬時の判断が母を救った。

それからは余震が絶えなかった。3～4時間で電気がついて電話もできた。そこからテレビをつけて初めて見た映像では、高速道路が倒れており、バスが落ちかけている映像や三ノ宮のビルが傾いており、長田は火事になっていた。正直信じたくないほど衝撃的な内容であった。私の家の周りは、そこまで建物の倒壊はなかった。でも、いつも見ていた景色が一瞬で変わってしまった。ショックが抑えきれなかった。

とりあえず買い物に行こうとスーパーに行った。スーパーに着くと見たことのない行列ができていた。食べやすいカップラーメンや保存ができるものを買った。

当時から垂水に住んでいた母は、三ノ宮に職場があったのでとりあえず向かった。車が使えなかったので多くの方はバイクに乗っていた。でもバイクを持っていなかったので自転車ですべて三ノ宮まで行った。そこまでの道のりは、見たくない光景が広がっていた。「忘れられない。」

母が被災して思ったことがある。まず、神戸には地震が来ないと思っていた。みんながそう言っていたから何も備えなんてしていなかった。まさかの出来事ばかりで混乱した。何事も備えておかなければならないと感じた。だからと言って今備えている人は何人いるか。まだまだ備えていない人が多くいると思う。ライフラインが途絶える生活をしてみないとわからないかもしれないが、それでは遅い。家具の固定、備蓄品の管理、家族での集合場所などの共通理解などやらなければならないということを強く感じた。環境防災科の皆さんの持っている知識をこれからも伝えていってほしい。

3 話を聞いて

ここまで深く震災当時の話を聞くのは、初めてだった。父には話を聞くことができなかったが、長田に住んでいたことは知っており、散々だったと言っていた。「そんなことがあったん?」と自分の親がこんなにも苦しんだことを聞くと、今私が持っている知識を様々な人に伝える必要があると感じた。

これまで、様々な被災体験や当時の話を聞いて頂いた。しかし、どの講義よりも聞いていて胸が苦しくなった。聞いてから色々と考えた。「両親がなくなっていたら。」「今地震が来たら。」などと考えさせられた。両親がいなかったらもちろん私はいない。尚更、両親には感謝しないといけないうし、恩返しをしなければならない。生まれてきてくれてよかったと思ってもらえる人間になれるよう将来活躍できるよう精進したい。口で言うだけなら簡単だ。これを実現してこそ親孝行だと思う。環境防災科の存在を知ったのもここで学べているのも両親のおかげだ。私は阪神・淡路大震災を体験していないけれど、これからの世代に伝えて言って欲しいと言われた以上、私たちは伝えていかなければならない存在なのである。防災に関心を持ってもらうには工夫が必要だ。興味がわからないと人は絶対に聞いてくれない。これなら聞いてみ

たいと思わせられるよう、クロスロードなどで楽しみながら様々な意見を共有できるものの方がいい。南海トラフ巨大地震が今後 30 年以内に約 70～80%の確率で起こるとされている。私はその 30 年以内に何ができるかが鍵になると考える。私ができることは、できるだけ多くの人に防災に関心を持ってもらうことだ。同じ過ちを繰り返さぬよう防災を学ぶ私たちがもっとその知識をアウトプットしていかなければならないなと感じた。

4 環境防災科に入って

(1) きっかけ

私が環境防災科を知ったのは中学 2 年生の生徒会活動の時だった。公園の夏祭りで出店をしている時舞子高校も出店をしていた。そして、舞子高校について調べてみると、ボランティア活動を積極的に行っている学科があることが分かった。この学校に行きたい。そう思い、自分自身の長所を見つけることにした。小さい頃から人の役に立つことが好きだった。だから中学では生徒会にも入り、様々なボランティアにも参加した。自分中心に考えることは少なかった。困っている人を助けることができれば、私自身も嬉しい。もちろん喜んでいただける前提だが、両者が喜べるのは良いこと。この感情を高校生になっても感じたいと思ったからだ。

私は直接防災に関わる仕事に就くかは分からないが、災害のメカニズムや過去の教訓を知ることによって、災害時に生かすことができるのではないかと考えた。私自身の手で人を助け様々な場面で活躍したいと思ったからだ。

(2) 環境防災科で学んだこと

入学後は、授業を聞くことによって様々な知識を得ることが出来た。例えば、災害のメカニズムを知り、講師の方に来て頂いてこの学科でしか学べないことなど、これから必要であろう知識を習得できた。正直、入学前は災害について知っていることは、ほとんどなかった。知らないことばかりで、新しいことを学ぶことが楽しかった。

1 年生の「災害と人間」の授業では、多くの講師の方に来ていただいた。衝撃的な体験談が多くあった。様々な話を家族に伝えたところ、今までしてこなかった災害対策を始めた。それが、家族の防災の第一歩であった。

2、3 年では、防災の知識がついていき、グループワークなどのコミュニケーションを介する授業が多くあった。自分の意見と相手の意見を共有することによって得られることが多くあった。

このように、多くのことを収穫し続けた 3 年間であった。自分が学んだことを家族に伝えると、またそれも収穫になり、防災意識の向上のきっかけになった。もし、環境防災科で学べていなかったら、災害について知らなかったらと思うと恐ろしい。学習していて良かったと思える日が必ず来る。

5 南海トラフ巨大地震

南海トラフでは、100 年から 200 年の間隔で、マグニチュード 8 クラスの巨大地震が繰り返し発生している。政府の地震調査委員会は、マグニチュード 8 から 9 の巨大地震が今後 30 年以内に「70～80 パーセント」の確率で発生すると予想している。各地を激しい揺れが襲うとともに、沿岸部には最大で 30 メートルを超える巨大津波が押し寄せる。被害は、四国や近畿、東海などの広域に及び、東日本大震災を大きく上回ると想定されている。

最悪の場合、関東から九州にかけての 30 都府県で合わせておよそ 32 万 3000 人が死亡し、揺れや火災、津波などで 238 万棟余りの建物が全壊、焼失すると推計されている。

地震から 1 週間で避難所や親戚の家などに避難する人の数は最大で 950 万人。およそ 9600 万食の食料が不足するとされ、さらに、被害を受けた施設の復旧費用や企業や従業員への影響も加えると経済的な被害は、国家予算の 2 倍以上にあたる総額 220 兆 3000 億円に上るとされている。

一方で、早めの避難や防災対策によって被害が軽減される効果も示されており、多くの人が早急に避難した場合、津波の犠牲者は最大でおよそ 80%少なくなり、建物の耐震化率を引き上げることができれば、建物の倒壊はおおよそ 40%減らせると推計されている。

この状況からも、事前の対策や心構えが必要だ。いつ起こるかわからないからこそ迅速な対策が必要だ。家の耐震化や非常持ち出し袋とハザードマップの確認も不可欠だ。1 つの行動から人は変わる。頭の片隅に置いて欲しい。

6 将来の夢と防災のつながり

私の将来の夢は、理学療法士になることである。理学療法士になろうと思ったきっかけがある。これまでサッカーをやってきた。その中で怪我をすることが多くあった。その期間が嫌いだった。皆は好きなことが出来て、痛い思いをせずサッカーをやれている。「何でだ。」と思うこともあった。このように、怪我で苦しんでいる人を助けて、好きなことに万全の状態で復帰して欲しいと感じるようになった。好きなことが出来ないことほど辛いものはないと思う。同じような気持ちをしている人を助けたい。

理学療法士と防災のつながりを考えてみた。例えば、避難所生活を余儀なくされる場合、元気な高齢者でも活動量の減少により、運動機能が低下するなどの問題が発生する。また、障害のある方が生活しづらい環境であるなどの課題がある。そこで、理学療法士が現地に赴いて体操指導や環境整備、助言等を行うことが出来る。体操指導とは、避難所生活では、ずっと座っていたり寝込んでいたり動くことが少なくエコノミークラス症候群になるケースが多くある。この問題を無くすために理学療法士が避難所に行き指導する。環境整備とは、バリアフリーのない避難所をどうすれば生活しやすくなるかと考えたり、体が動かない人がどうすれば暮らしやすいか考える。

好きなことが出来ないということは不自由だということだ。少しでも早く治して、これまで以上に良い状態で生活して欲しい。そのためには、理学療法士になるために、勉強と向き合っていかなければならない。理学療法士になるのは難しい。どんな職業にも言えるが、やって後悔しないようにこれからの私自身が努力したいと思う。

7 新型コロナウイルス

私たちは、高校生活の大半をコロナ禍で過ごした。本当に消えて欲しい。もう元の暮らしに戻れないのかと思った時期もあった。感染した人が亡くなったと聞いた時、頭が真っ白になった。「もし自分が感染したらどうしよう。」と怖くなった。

新型コロナウイルスが、私たちにもたらしたのは、災害なのである。「コロナウイルスが無かったら。」と思うことが多くあった。私は感染しないように自分で携帯用のアルコールを持ち歩いたり、マスクの着用を徹底したりとやらなければならないことはやってきた。これからはしっかりと向き合っていかなければならない。

災害時に、コロナウイルスなどの感染症にも配慮する必要がある。三密を避ける、マスクの着用、アルコール消毒の徹底など、ただでさえ苦しい状況なのにも関わらず、対策していかなければならない。中には、その対策をしない人がいるかもしれない。このような条件下で何ができるのか考えなければならぬ。これから先、コロナウイルスと向き合い、マスクなしの生活に戻るまで気を緩めず、感染対策を継続していく。

8 最後に

これまで様々なことに視点を置いてきた。環境防災科で学んだ以上、何もしない訳にはいかない。何ができるか。私の将来に結び付ければ、病院内での防災意識向上のために、私自身の防災についての講義を開くなどができる。防災について知るきっかけが他の方にはないと感じる。小学校、中学校では、阪神・淡路大震災の追悼をする際に防災学習をしている。私はこれだけでは、足りないと思う。1週間に1度でもいい。少しでも興味が湧くような授業になれば楽しく防災が学べる。そして環境防災科などの防災を学ぶ所へ来る人が増えるかもしれない。少しでも増えて欲しい。今の時代、どんな情報も手に入る。そんな時に、興味を持たせることが出来れば調べる。それを誰かに伝える。これだけで広まっていくのだ。

私たちが行っている「語り継ぐ」という使命を継いでいかなければならない。「語り継ぎ」には様々な意味があると気付かされた。被災者から未災者への語り継ぎ。語り継がれた未災者から未災者への語り継ぎ。そして環境防災科の生徒が「語り継ぐ」という使命を継いでいくことだ。「語り継ぐ」ためには防災の知識を深め、正確な情報を提供しなければならない。中途半端な理解ではちゃんと語り継がれない。日々の授業でも、質問されても分からなくて困ることもある。3年間学んだとしても知らないことがたくさんある。あれだけ様々な方々の講義を聞かせていただいても知らないことがある。まだまだ未熟だ。これからまだ長い人生がある。これから吸収していくものは多くある。その中で防災についてはごく一部かもしれないが、積極的に関心を持ち、絶対にこれまで学んだことをこれからの人生に生かす。

最後になるが、将来私に家族ができたとする。もし南海トラフ巨大地震などをはじめとする大きな災害が私の住んでいる街を襲ったとしたら・・・そんな時、1人も死なせることなく、誰も苦しむことのない

ようたとえ自分が犠牲になっても助け出したい。だが、私自身が犠牲になると守ることが出来ない。だから、まずは自分の命を優先し安全が確保出来れば早急に家族の元へ駆けつけたい。どんな状況であつてもどこにいても直ぐに向かいたい。それだけは、決めている。家族を第一に考えたい。それは、絶対だ。愛する人。愛する子を亡くすなんて考えたくもない。だからこそみんなに防災について知ってもらわなければならない。私自身の行いでよい未来を創りたい。

防災と自らの役割

猪多 星瑛

1 初めに

1995年1月17日の阪神・淡路大震災発生から今年で27年が経とうとしている。今年で18歳になる私は震災の9年後に生まれた、いわば“震災を経験していない世代”である。このまま年月が過ぎていけば、そういった世代が大半を占め、震災という出来事だけでなく、人々の思いや教訓が風化してしまう。今までは震災経験者から震災未経験者に当時の様子や思い、教訓が語られてきた。それを、今度は自分達がまた新たな震災未経験者に正確に語り継いでいかなければならない。3年間学んできたこと、語り継がれてきたことを無駄にしないように、自分たちの役割とは何だろうか、自分がやっていかなければならない事を今までの災害、今後起こりうる災害の対策と共に考えていきたい。

2 阪神・淡路大震災

(1) 母の被災体験

阪神・淡路大震災が起きた当時、私の母は15歳で受験期での被災だった。当時被災した場所は現在私が住んでいる家だった。「ドーン」という大きな音がし、短い時間の揺れだった。被害としては、ガスが止まりお風呂に入る事が出来なくなることなどはあったものの、さほど大きな被害はなかった。それでも当時、母は受験生。受験の方式が変わり混乱した。普通なら、私立高校の受験は公立高校の受験と同じように試験問題を解いて、実力で入学する。しかし当時は、震災の影響もあり、受験生で受験勉強ができない人もいたので、書類選考という形になった。母は被害が少ない地域でもこういった形になったということは、直接的な被害は少なくとも、社会全体に大きな影響を震災が及ぼしたのだと思った。

(2) 祖父の被災体験

私の祖父は当時、歯科技工士をしており、自宅の裏にある仕事場で仕事をしている時に被災した。周りの物が大きく揺れ、命の危険を感じた。幸いにも大きな被害が出る事はなかったが、水が止まったり、スーパーから商品が無くなったりと、生活にはある程度支障が出た。須磨区には大きな被害がなく、家の倒壊などはほとんどなかったが、本来の職場があった大蔵海岸の方では大きな被害が出ていた。災害は人の命だけではなく、人びとの経済面にも大きな打撃を与えたということを感じた。

3 母と祖父の話を聞いて

今回『語り継ぐ』を書くに当たって、普段あまり話すことのない阪神・淡路大震災についての話をした。その中で2点感じた事があった。

1つは阪神・淡路大震災がどれほど大きな災害であったかという点だ。2人とも大きな被害はなかったと語っていた。当時2人が生活していたのは須磨区で、ほとんど被害がなかった地域だった。これは話を聞く前から事前に調べて分かっていた事だったのでさほど驚きはしなかった。むしろ私が驚いたのは、2人ともが違う形で生活に大きな影響を受けたと語っていたことだった。被害が少なかった地域ですら生活に大きな支障をきたしてしまうほどの大きな災害であった。その事がひしひしと伝わってきた。

もう1つは、年齢や時期によって受ける影響が違うといった点だ。母は受験、祖父は仕事に大きな影響があったと語っていた。今災害が起きてしまうと、おそらく私には大学受験で影響が出てしまうだろう。もし災害が起きて被災者の方の支援、被災者の方の心のケアをするときは、相手の方の年齢、何が今できない状況なのか踏まえたうえで取り組む必要があると感じた。

今回、母と祖父の話を聞いて、災害を経験していない自分にも阪神・淡路大震災がどれほどの脅威で、人びとが何を思っていたか、今までよりも理解を深めることができた。自分は災害を経験していない身であるが、今回で阪神・淡路大震災をより深く知れた。震災当時の人々の思いを風化させてしまうか否かは、自分たちのような若い世代がより災害を知らない世代に伝えられるかが鍵となっていく。今回聞くことができた2人の想いを語り継いでいくようにしたい。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科に入ろうと思ったきっかけは、幼いころにテレビで中継されていた、東日本大震災の様子に衝撃を受けたからだった。その時の自分がどんなことをしていて、どんな少年であったかはほと

んど記憶にないのだが、東日本大震災の凄惨な様子だけは今も鮮明に覚えている。学校から帰宅し、テレビを点けると、土色の水が車や家を流していた様子がどこのチャンネルに変えても映っていた。それを引き起こしたものが地震だと分かったとき、あの時のようなことが二度と起こらないように、自分に何かできることはないかと思ったことがきっかけだった。

(2) 入学して

入学して少し後に「災害と人間」という授業で、自分の夢を各々発表する機会があった。自分の発表は緊張や困惑もありあまりうまく出来なかった。しかしクラスの皆は僕よりも真摯に将来の夢について考え、堂々とした様子で発表しているのを見て、この皆となら3年間どんな困難も乗り越えていけるという確信があった。

3年間を通して多数のボランティアや消防学校等に参加させて頂いた。3年間勉強してきた今、思い返すとそれが当たり前でできるのでは無いということに気づいた。活動に協力してくれる相手の方の優しさやボランティア活動に応募させてくれる先生方の協力があってこそ、私たちがボランティア活動をさせて頂いているのだと感じた。だからこそ私たちがボランティアを自分の経験や将来の為に「している」という考えではなく、「させてもらっている」という事を忘れず、相手方への感謝を持ってボランティア活動をする必要があると考える。

(3) ボランティア活動

前述したように、3年間で幾つものボランティア活動をさせて頂いた。中でも一番心に残っているのは芦屋特別支援学校での出前授業のボランティアだった。最初は初めての経験ということもあり、うまく伝わるか、退屈して話を聞いてもらえないのではないかと不安があった。しかしいざ授業をしてみるとそんな心配は全くなかった。授業を始めると、とても真面目に相槌を打ちながら話を聞いてくれた。起きた災害によって避難行動をとるようなジェスチャーゲームをしてみると、とても必死に、楽しそうに取り組んでくれた。その様子を見て、授業がうまくいっている安堵感と同時に、こういった災害をほとんど知らない子供たちが、災害で命を失うなんてことはあってはならないことだと感じた。こういったボランティア活動を通して命の重さを再確認した。

(4) ボランティアの在り方

私が3年間環境防災科で学習していく中で、ボランティアの在り方に疑問を感じたことがあった。ニュースや動画などでボランティアが「偽善」だったり、「自己満足」と言われていることがあった。自分が良かれと思ってしていることが世間から見れば「偽善」、「自己満足」と思われているのかと考えることもあった。しかしそんな事は、ボランティアをすることで見た相手の方の笑顔でどうでもよかった。私が思うにボランティアというのは人の笑顔を生み出すことなのではないかと思う。ボランティアは世間的には「報酬の無い仕事」というように使われている。それでもボランティアをやる人が減らないのは人々の「笑顔」という最高の報酬があるからのように思う。私は世間が何と言おうとこれからもボランティアに関わる全ての人へ感謝を忘れずに取り組んでいきたい。

5 夢と防災

(1) 将来の夢

私の将来の夢は作業療法士になることだ。今までは直接誰かの助けになるような仕事がしたいと思っていた。それは入学当初から思っていたことで、やりたいことが見つからない時期もその思いだけは変わらなかった。ではなぜ人を助けるという大きなテーマの中で作業療法士を選んだのか、理由は2つある。

1つは環境防災科で学んだことだった。2年生になってから被災者の方の心理について勉強することが多くなった。その中で、災害で命を失わなかった人々が大きなストレスを抱えて生きていることを知った。どうにかしてそういった方々の力になれないのかと考えるようになったことが理由の1つだ。

2つ目は、医療従事者の方への憧れだ。小学生のころ私はかなり病弱で、月に一度程風邪を引いてしまうことがあった。ある日また風邪を引いて寝込んでいたといつもとは違う症状が現れた。いつもは数時間寝ると体温が下がるのだが、その日はどんどん体温が上がり、とうとう42度にまで体温が上がり、私は気を失った。目が覚めると私は病院にいた。母から聞いた話によると、体がけいれんを起こし、命が危ない危機的状態だったという。もしもあと少し対処が遅れていれば命を落としていたかもしれない。そういった場で迅速に対処できる医療従事者の方への憧れから、自分も誰かの命を救えないか考えるようになった。

(2) 防災

私が作業療法士になって取り組みたい防災は「日常的な防災」だ。私は災害を防ぐ、災害の被害を減らすためには、普段からの準備や備えが必要不可欠だと考えている。では、その中で作業療法士にできることは何だろうか。それは普段からの訓練である。例えば運動が好き、体を動かしたい患者さんとは、現在地から最寄りの避難所まで散歩をしたり、手先を動かしたい、工作がしたい人とは、防災グッズを作ってみたりと様々な防災を日常に取り入れることができる。私の最終的な目標は患者さんに末永く、楽しく人生を送ってもらえる作業療法士になることだ。その目標を達成するために、災害が多い日本では防災も必要なことになる。患者さんに防災を日常的に取り組んでもらい、災害で命を落とす人を自分の力で少しでも減らしたい。

6 新型コロナウイルス

この2年間、私たちは、新型コロナウイルスによって様々な影響を受けた。世界的に見てもすさまじいほどの被害があり、街を歩く殆どの人がマスクをつけて歩く、あらゆる施設に入るときは消毒をする等、人類の常識を覆した。世界中を脅かし、2021年6月で、1億7000万人もの感染者、300万人以上の死者を出している新型コロナウイルスはもはや災害と呼べるものだと思う。では私たち人類が、こういった暗い状況の中でやっていかななくてはいけない事は何だろうか。

それは感謝の気持ちを表現する事だと考える。今の世界で仕事をしている人は常にコロナウイルスにかかる恐怖と戦っている。今仕事をしている人々がコロナウイルスによって仕事をするのをやめしまうと、私たちの今の生活を続ける事が難しくなってしまうだろう。仕事をしている人々のやりがいは感謝の気持ちや、人々の笑顔から生み出されると考えている。しかし今はマスクによって顔が覆われており、人々の笑顔が見る事が出来ない。だからこそ感謝の気持ちを表現する事が重要なのだ。それは些細な事でもいい。バスを降りる時に「ありがとうございました」という。学校に検診に来てくれた方に「ありがとうございました」と言う。こういったことが人々の仕事のやりがいに繋がると思う。今の世界はとても窮屈で息苦しさをを感じる。そういった中で人と人とのコミュニケーションが世界を明るくするのではないかと考える。

7 南海トラフ巨大地震に備えて

(1) 被害想定

近頃、南海トラフ巨大地震と呼ばれるM8～M9の海溝型地震が30年以内に70～80%の確率で起こると言われている。そして南海トラフ巨大地震が起これば、最悪の場合、死者は23万人を超え、経済被害も220兆円を超え、全壊または焼失する建物はおおよそ210万棟になると内閣府が2019年5月に推計している。因みに阪神・淡路大震災の死者数が6,434名、被害総額はおよそ10兆円であった。この数字だけでも南海トラフ巨大地震がどれほどの災害なのかが分かる。日本人全員でこの大きな地震に対する対策を取らなければならない。

(2) 対策

内閣府の想定によると、多くの人が早めに避難した場合、津波の犠牲者は最大でおよそ30%少なくなり、建物の耐震化率を引き上げれば、建物の倒壊はおおよそ40%減らせるといえる。言葉ではこれらの取り組みは難しくは感じないだろう。しかし、市民全員がこれらの取り組みをすることは至難の業だ。早めに避難するという事。これは普段から個人として、地域として、学校などの施設として訓練をしている事が重要になる。

まず1つ目の津波。津波が起きた時どこにどのようなルートを通って避難をするのか把握が出来ていなければ、まずそこからの話し合いになり、避難にかけられる時間が減ってしまう。また、ルートが決まっていなければ避難の途中で津波に襲われる恐れがある。しかし、普段からの準備ができていれば、こういった事が起こらないだろう。日常的に避難訓練をすることや、地域や家族でハザードマップを確認し、避難経路を確保できていれば、大きな災害が起こってもうろたえずに行動できるだろう。

普段の準備が必要なのは、耐震化も同じだ。おそらく耐震化が面倒でお金がかかるという事で耐震化に取り組んでいないご家庭も多いだろう。実際私も防災の勉強をするまでは耐震化をしていなかった。しかし耐震化の重要性、どのようなメリットがあるか知ってから耐震化をしなければと思い、まずは棚や、机が動かないように固定した。家自体を地震に強くする、耐震化工事をするのはお金や時間がかかるので気軽に出来るものではないが、家具を固定するのは短い時間で尚且つ安価で済む。家具の倒壊による圧死が防げることを知っていれば、殆どの方が取り組むだろう。

こういったことから、私は防災に取り組まない人が多いのではなく、防災を知らない人が多いのだと思う。防災に取り組むことの重要性を知っていれば、絶対に今よりも日本人の防災意識というのは高まってくるだろう。すなわち、今防災において必要なのは、防災を知っている人が知らない人に教える事だと考える。身近な人に防災を教える。そうすると、その人の身近な人にさらに繋がっていく。そうして防災の輪が広がる事が南海トラフ巨大地震に対する一番効果的な対策になると考える。こういったことをする為には私たち、防災について学び、防災の知識を持つ環境防災科の役割は大きいと考える。私自身講義や授業で得た知識を家族や友人に共有すること、そして得た知識を実践する事に今後も取り組んでいきたい。

8 感想

今回の『語り継ぐ』を書くことで、防災について今まで学んだことと結び付けて考える事が出来た。阪神・淡路大震災の様子を母や祖父から詳しく聞く事も初めてできた事だった。最初に書いたように、自分たちの世代は大きな災害を直接は経験していない。しかし、今回話を聞いて、自分が何をすべきか、自分たちの役割は何なのか、という事を考える事が出来た。今の世界は新型コロナウイルスの影響により、コミュニケーションの機会が格段に減ってしまった。そういった中で大災害が起こるようなことがあれば、今までの災害を格段に超えるような被害が出るだろう。そういった最悪のケースを防ぐ為、情報交換をしていく事、自分たちが学んだことを広げていく事が私たちの役割なのではないかと思う。この文章を読んで防災の輪が広まっていく事、身近な人と防災のコミュニケーションを取ろうと思ってもらえる事が出来ればいいなと思う。

記憶をつなぐ

上谷 琉緒

1 はじめに

今から 27 年前、神戸を襲った強く激しい揺れ。何人もの人が亡くなり、財産や思い出が壊された。私は生まれてこの方大きな災害の被災者にはなっていないし、大きな事故や事件に巻き込まれたこともない。普通で何も変わらない日常を過ごすこと。それは決して当たり前のことではなく、幸せなことだと思う。その幸せを噛みしめつつ、いつこの幸せが崩れてもいいように、私は毎日一生懸命勉強し、懸命に生きていきたい。

2 阪神・淡路大震災

六甲・淡路島断層帯の一部である野島断層を震源とし、1995 年 1 月 17 日 5 時 46 分、マグニチュード 7.3、最大震度 7 (現地調査による) を記録する兵庫県南部地震が起こった。死者が戦後最多となる 6,434 人、行方不明者が 3 人、負傷者は 43,792 人にまで上る。死因は早朝だったこともあり、圧死が 9 割を占める。また、朝の支度をしていた家庭などでは火事が起きたが、ライフラインが壊れ、人と車と瓦礫で埋め尽くされた道路を消防車が通れるわけもなく、被害が拡大し長田は火の海となった。病院は人で溢れかえり、廊下をも埋め尽くした。長田区の西市民病院では、患者 44 人と看護師 3 人が閉じ込められた。生存空間があったため、何とか 46 人は出てくることができたが、1 人の命が犠牲となった。そして神戸市内の災害医療機関 3 つのうち 2 つが機能を失った。また、新耐震基準施行の 1982 年以降に建てられたビル、マンション、病院などでも全壊、半壊などの大きな被害を出した。

3 両親の記憶

父の話

(1) 発災直後

突然の揺れに慌てて飛び起きたら、ブラウン管のテレビが目の前を飛んで行った。足の踏み場もなく、家具や食器が散乱した部屋をガラスやとがったものに気を付けながら外に出た。何が起こったのかいまいち理解ができず、とりあえず車に乗って会社に向かうことにした。当時父は谷上辺りに祖母と弟と住んでいた。いつもなら谷上から会社のある灘区丸山まではそれほど時間はかからないが、その日は 4 時間以上もかかった。買ったばかりの携帯電話が使えなくなり、連絡も取れないのでラジオをつけっぱなしにしながらひたすら山を下って行った。山を越えたあたりから街の様子が一変していることに気が付いた。長田の町が火の海だったのである。ラジオはひたすらに死者を数え、地震が起こったことを自覚させた。都会に出ていくほど、被害が甚大になり悲惨な状況が広がっていた。阪急電車の線路がねじ曲がってむき出しになっていたり、阪神高速がひっくり返っていたり、ビルも家も崩れた神戸の街を見て父は強い恐怖を抱いた。幸いにも会社は歪んだだけで崩れてはいなかったが、周りは軒並み崩れていた。

(2) しばらくして

会社の中に入れる状態ではあったが、棚は倒れ、書類が散乱し、自宅以上に足の踏み場がない状況となっていた。会社に大量にあった発泡スチロールを断熱材として地域の住民に配った。

それからほどなくして、弟がインフルエンザにかかってしまった。病院に行くことも避難所に行くこともできないので薬もないまま自宅で療養するしかなかった。

当然仕事などは出来る状態ではなく、会社の片付けばかりを行う毎日だった。大阪から芦屋までしか電車が通っておらず、大勢の人が歩いて、通勤や通学をしていた。冬だったこともあり、ずっと黒やグレーの色の服を着ていた。

それからしばらくして、全国からの応援で、警察車両が多くなり、北は北海道警察、南は沖縄警察と天井に書いたパトカーを会社から眺めていた。警察官は交差点に立ち、停電して使えなくなった信号機の代わりをしていた。神戸市内では車での移動はまだまできず、バイクでの移動が主だった。しかしその時、大阪は普通なのだなと思った。テレビのニュースでアナウンサーが毛皮を着て、現地取材していたことがものすごく叩かれていた。神戸だけが別世界のようなだった。企業が神戸から立ち退いていくのが目立った。当時、ボランティアという言葉があったのかなかったのかは定かではないが、父の従兄弟も東京からテントだけを持って、公園で寝泊まりして、お弁当を作る作業をしていた。

岡山の方から、高齢者を狙った、瓦の補修工事をすると行って入り込んでくる悪徳業者がたくさん明

石や神戸に押し寄せてきた。見かねた大工の知り合いが筆頭となり、ボランティアで瓦の補修工事を行うことにした。別の依頼で、崩れた家から娘の成人式の着物を探し出して欲しいという依頼が来た。父が潜ることになり、崩れた家の中を進むと、電線が1本むき出しで、行く手を阻んだ。どうしようと悩んでいると、「電気は通っていないから安心して切れ」と言われ、切ることにした。しかし、電気が通っており、火花が散った。着物は取れたが、とても肝が冷えた。

ボランティアではない給料の出る仕事をしたのは震災から約1ヶ月経った頃である。仮設住宅の抽選発表の表示看板を作って設置する仕事だった。夕方抽選結果の紙をもらい、朝までに500枚の看板を作った。そして9時までに、各場所に看板を設置しに行った。このような仕事が、期間を開けて3回ほどあった。

2ヶ月経ったある日、阪急六甲の幼稚園の運動場をふと見たら、ドラム缶に火を焚いて火の番をしている人たちがいた。そのとき、不快感と嫌悪感に襲われた。こんな時期なのはわかるが、子供たちの居場所を奪ってだらだらと暮らしている人たちにとても腹が立った。それと同時に、なんで神戸だけ、俺たちだけがこんな思いをしなければならないのかという、やるせない気持ちにもなった。

母の話

(1) 発災直後

母は当時大学生で、大阪で下宿していた。急に強い揺れが体を襲い、飛び起きたが、物が倒れたわけでも窓が割れたわけでもなかったのもう一度寝ることにした。次起きたのが7時で、何事もなく学校に向かうことにした。少しみんながざわついているのと、学校に来ている教授と生徒が少ないことが気になった。しばらくして、友達から「神戸に地震が来た、家族は大丈夫か」と電話が来て、半信半疑でテレビをつけると見たこともないような様子が中継されており、この時初めて地震ということを知った。母の実家は三木市にあり、電話を掛けると繋がった。瓦が2、3枚落ちた程度でそこまで被害がなかったという会話をし、安否を確認したので一旦電話を切った。しかし、そこから一切電話が繋がらなくなった。再びテレビをつけたとき、阪神高速道路が横向きに倒れ、夜行バスがギリギリのところで踏みとどまっている映像が流れていた。神戸は終わったと思った。元の姿に戻るイメージがわかなかった。

後日、どの会社の電車も芦屋までしか行けないことを知った。大学に行けない友達がおり、学校を辞めざるを得なくなった友達もいた。神戸が壊れても、母の周りの日常はほぼ変わることなく、「いつも通り」があることに対してはどかしさと、何もできない自分に対する不甲斐なさを母は感じていた。あの時何かできることが絶対あった。

(2) しばらくして

この春の桜は妙に綺麗で例年よりも立派に咲いていた。地震の揺れで、地盤が緩み、木の根に余裕ができた為、急成長したのだと、教えてもらった。また、数ヶ月経ったあとでも、大阪から見る神戸は砂埃がかぶっており、神戸全体がオレンジっぽい黄色のドーム状に覆われていた。

三木市の実家に帰ることができたのは、およそ半年後になった。「若いよそ者の女性が身なりを整えて被災地に行くと犯罪に巻き込まれるかもしれないし、そもそもトイレも寝る場所もないから危ない」と先生や友人に言われ、結局ある程度復旧が進んでから実家に帰ることにしたのだ。当時、大学から神戸にボランティアに行ったのは男性ばかりで、よそ者の女性はいらない、役に立たないという風潮だった。実際、女性でボランティアに行った人には会わなかったし、そういった話も聞かなかった。大学では、「～だったらしい」「～やったそうやで」という言葉が飛び交った。なぜなら、実際の光景を見てきた人間が少なかったからである。残った人間は物事を憶測で話すしかなかった。実家に帰る際も、「神戸には行くな」「神戸を経由して帰らんほうがいい」と言われ、訳も分からず、言う通りにJR宝塚線に乗り、三田を経由して帰った。幸い、実家は大きな被害もなく、暮らすのにも支障はなかった。しかし、宅地造成を行っていた地域は、地盤が緩く、被害が少し大きかった。

母には知り合いの消防士がいたが、車両が足りず、家族の車を使用していた。スポーツカーで業務を行っていた。今では到底ありえない話だが、当時は何もかもが不足していたので仕方が無かった。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科を知ったきっかけは、中学2年生の時に行った担任の先生との面談である。私は特に行きたい高校もなく、それなりの高校にいたら良いと思っていた。そんな私に先生は「自分の意見をはっきり言えて、行動することができるから舞子高校の環境防災科とか向いているのでは？」と提案して

くれた。その時は、そんな特殊な学科がある高校があるのだという程度だった。中学3年生になってすぐに、1つ上の先輩が舞子高校環境防災科に入学したことを知った。先輩とは、朝学校に行く際に会うぐらいの関わりだったが、先輩が毎日楽しそうに学校に行くのを見て環境防災科に興味を持った。それから少しずつ災害や防災にも目を向けて、ボランティアにも参加するようになった。

また、私が災害に興味を持ち始めたのと同じころに、平成30年7月豪雨が発生した。三日三晩雨が降り続き、初めて災害に対する恐怖を覚えたのと同時に、こんな大きな事態にさほど関心を向けられないクラスメイトたちに疑念を抱いた。ニュースで見た様々なものを飲み込んで濁った綺麗な川や、浸水した地下道、水があふれかえった道路を見るたびに怖くて、早くこの悲劇が終わってほしいと思った。

(2) 入学後

環境防災科に入学した直後の私は将来になりたいものがなかった。だから自己紹介の時に夢を語れるのがとても羨ましかったし、将来の夢を言えない自分に嫌気がさした。しかし、ここなら自分のやりたいものに誰も否定しないだろうし、困ったときは一緒に考えてくれる人たちだと思い、安心して将来について考えられると感じた。私はそれが非常に嬉しかった。

建築士になりたいという明確な夢が見つかったのは、「災害と人間」の授業で避難所、仮設住宅の現状を知ったからである。「災害に遭ってもみんなで手を取り合って、現状を乗り越える」その裏側は決して綺麗事だけではないことを知った。特に、避難所での女性問題や、教育機会が失われるという事態、仮設住宅に移った高齢者の持病の悪化や孤独死の問題は早急にどうにかしていかないといけないと思った。しかし、それは誰かが横やりを入れても簡単に改善されるものではないだろうし、改善できるならこんな悲痛な声や怒りはインターネットに転がっていないだろうと私は思った。仮の住まいだけど、暮らすこと、生きることに仮はない。災害を理由に生活の安全性や快適性を捨ててはいけない。むしろ、そんな非日常下でこそ、安心できる住まいが必要だと考えた。避難所や仮設住宅をもっと快適に安心して過ごせるようなものにしたいという思いが、私が建築士を目指す理由になった。

5 将来の夢

私の将来の夢は先ほど建築士だと言ったが、今は少し違う。同じ建築に関する職業だが、その中でも、現場に出て、建設に関する指示を出す現場監督という職業に就きたい。理由は2つあり、1つ目は建設会社のテレビCMである。誰もが耳にしたことがあるだろう建設会社のCMの数々は、スーツの上に作業着を着てヘルメットをかぶった女性現場監督の姿が見られる。私がその姿に憧れたように、他の誰かにも私の姿を見て憧れてほしいと思ったからだ。2つ目は、みんなで協力して大きなものを作り上げることが好きだからである。私は中学生の時に吹奏楽部に所属しており、誰か1人が抜けると成り立たない状況下にいた。小編成のバンドではあったが1つの壮大な曲が完成していく様子はとても気持ちがよかった。高校では環境防災科の活動や生徒会の活動で、何度もそのような経験をしてきた。特に今、私はクラスの文化委員として、生徒会の一員として文化祭を成功させるために動いている。責任も重圧もあるけれど、みんなが一丸となって本気で物事に取り組む姿はいつ見てもかっこいいと思うし、この先もこのような仕事をしたいと思った。だから、建設業の中でもより仲間との協力が必要な現場監督という職業を志すようになった。

建設業は災害復旧、災害復興に欠かせない職種である。災害が起きたらいち早く到着し、最前線で応急作業を行わないといけない。この作業が遅れば遅れるほど、被災地の復旧が遅れ、復興ができなくなっていく。復興ができなくなるということは、人々の営みが失われ文化が失われていくということだ。それは何としてでも避けなければいけないことである。

そもそも現場監督という人材は少ないし、女性なんてもっと少ない業界だ。だからこそ女性という立場を生かして様々な視点から物事をとらえることのできる現場監督に私はなりたい。

6 さいごに

私はこの『語り継ぐ』を執筆するにあたって、初めて両親の震災の記憶を知ることになった。身近な人の震災の話聞くのはなぜかとても緊張した。当時の悲惨な状況を言葉や文字で表現するのは非常に難しく、特に人の心を文字で表現することは、大変なことどころではなかった。いつも講義に来て下さる講師の方たちはこんな思いを持ちながら私たちに体験を話して下さっているのかと思った。

私は上記のように、夢を持たずにこの環境防災科に入学してきた。そんな自分が、紆余曲折ありながらも、明確に自分の夢を持ち、目標を掲げられるようになったことに我ながらとても嬉しく思う。簡単な目標ではないし、困難が多い仕事だと思うが、残りの高校生活の中で、自分の夢にふさわしい人間になれる

ように努力していきたい。

災害が私たちの都合を考えてくれることはない。世の中が脆弱になっている今、災害が起きれば確実に人々の生活や大切な文化が失われる。この状態がいつまで続くのかわからない上に、今この瞬間もどこかで人知れず苦しみもがいている人たちがいる。悔しくも何もできない私たちができる最大のことは知ることと考えることそして、忘れないことである。

私たちの生活を容赦なく壊していく災害。でも、物は壊れても、人の思いや記憶は引き継いでいくことができる。被災者が未災者に語り継ぎ、未災者が未災者に語り継いでいくこのサイクルを私はこれからも大事にしていきたい。

未来のために語り継ぐ

上野 このは

1 はじめに

6,434名の命を奪った巨大地震発生から27年。激しい揺れにより家の中は足の踏み場もなくなり、生き埋めや火災に巻き込まれる方、避難所での感染症、震災により心身に障害を負ってしまった方。今もまだ苦しみ続けている人がいる中で風化が進まないために、私たちにできること、しなければならないことは何かをより具体的に考える必要がある。

震災を経験していないから仕方ないのではなく、経験していないからこそできることやこれまでと違った新しい考え方があるのではないだろうか考える。

2 母の話

ドン！という大きな音で目が覚めた後、初めに縦揺れで突き上げられグラグラと横揺れが続いた。リビングの戸はゆがんで開かなかったり、廊下のガラスの扉や食器が5枚ほど割れたりしていたが、家具の転倒や火災、倒壊などの大きな被害はあまりなかった。電気が止まり、ガス、水の順番で止まったため、最初は家族全員で車に避難した。しばらくの間車に避難していると雪が降ってきた。だがそれは雪ではなく、須磨や長田で発生した火災の灰が飛んできたものだった。

その後一旦家に戻ったが、マンション内でガス漏れがあったという報告があり、近くの中学校に1日避難をした。体育館には50人ほどの被災者であり多くはなく、避難所の運営や誘導する人はいなかった。体育館にはストーブが2台ほど設置されていたが、寒くて寝ることもできなかった。避難中も余震が何度も続き、体育館の窓はガタガタと揺れていた。トイレは水が流れないため、排出物がそのままにされていた。誰も清掃をする気配はなく、清掃されないままのトイレを使用するしかなかった。

次の日の朝、避難所でパンをもらって家に帰る途中にコンビニに食料を探しに行ったが、店内はたくさんの人が押し寄せ、店内はグチャグチャで何もなかった。家に帰った後は毎朝、家族全員で大きなバケツなどを持って近くにあるバス停留所の車庫に何回も水を汲みに行った。家に帰って3日後に電気が付き、ガスは1週間以上復旧しなかったそう。ライフラインが復旧しない間はガスボンベを使用して料理をしたり、明かりはろうそくで代用したりした。家の近くの星陵台付近のビルは全て倒壊していてボロボロの状態になり、さらにガス漏れが多発していた。

母は自転車で近くに住む友達と祖父とで、長田に住む避難している友達におにぎりを持って行った。須磨から長田までの道は火事により全面的に赤く染まっていて、家が燃えた臭いと同時に人が燃えた臭いがした。また、瓦礫ばかりでまっすぐに進める道はなく、長田に着くまで4時間ほどかかった。長田の避難所ではたくさんの方が避難し、ピリピリした空気感だったため避難所にはいられずすぐに引き返した。

震災後、叔母の会社は全壊したため倒産した。母の学校は半年以上休校が続いた後廃校となり、母は加古川の学校に転校することになった。震災発生から4、5日後に祖父の地元の姫路に行き、ようやくお風呂や買い物を済ませることができた。

家族や家に被害はあまりなく、2週間後には家の中で生活できるようになった。

3 母の話を聞いて

母の話を聞いて一番印象に残っていることは、家の焼ける匂いと同時に人の焼ける匂いがしたという話だ。膨大な範囲の家屋が燃えている中で人の焼ける匂いがしたということは、たくさんの犠牲者が苦しんでいたことを意味するのだと感じ、災害に対しさらに恐怖心を抱いた。

兵庫県は火災によって約14,610棟が被害にあい、403名が焼死者となった。長田の家屋は家と家の間隔が狭く、古い建物が密集していたことが原因となり火災が止まらず燃え広がった。区画整理事業により建物や道路の整備が行われているが、火災が発生する原因を先に減らすための対策が必要なのではないかと考える。例えば、感震ブレーカーの取り付けや定期的なガスの元栓の点検などだ。火災をなくすことはできないかもしれないが、ガス漏れやストーブなどの引火につながる可能性は低くなると考える。

また、火災による二次被害を減らすだけでなく災害関連死を防ぐことが必要である。災害の影響によって抱えたストレスや孤独感により、アルコール依存症などの病気につながるケースが多い。その中で

私たちにできることは、被災者やその家族のお話を聞くことだと考える。同じ話でも何度も耳を傾けその中で私が感じたことや伝えたいこと、伝えなければならないことを見つけることが大切である。

そのために、まずは過去の災害だけでなく自分自身について理解しておく。また、自分以外を支えるためには自分の心身が万全の状態、他人を受け入れられる状態をつくる必要があると考える。私が今できる行動が直接、災害関連死を防ぐことにつながらないかもしれないが、将来被災者の方と関わった際に生かし、心のよりどころになればと考える。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科に入学したいと考えた理由は、小学1年生の時に体感した東日本大震災だ。当時学校に1人でいた私は小さな揺れを感じ、近くの先生に聞くと「遠くでとても大きい地震が発生した」と知らされた。そのときは何も思わなかったがテレビをつけると被災したボロボロの街、津波に飲み込まれていく街の様子があり、気が付くと私は張り付くようにテレビを見ていた。その日から地震の映像が気になり、自分で調べるようになった。さらに、大阪北部地震だ。登校した直後に地震が発生し、全校生徒がグラウンドに避難するようにとアナウンスが入った。教師も慌てた様子で生徒を誘導し、中には泣いている生徒もいた。全員登校ができていなかったのも点呼の時間が大幅にかかり、登校中の生徒は地震に気が付いていなかったのも状況が飲み込めていなかった。

普段の避難訓練が役に立ったと実感することはなく、様々な視点から見た状況での訓練が必要なのだと感じた。

この2つの災害から、私自身が自分で防災を学び、日頃の生活の中で災害が発生したときに発揮できることは何か、過去の災害で何を取り組んでいたのかを学びたいと感じたからだ。

(2) 東北訪問

環境防災科に入学して4か月がたった頃に、東北訪問に参加した。バスで約15時間かけ宮城県にある石巻市の方やあおい地区の方など、たくさんの方と交流した。その中で私が一番心に残っているのは、雁部さんの「震災体験は持っているだけでは嫌な思い出だが、伝えるだけで人の命を救う価値がある」という言葉だ。今まで心の中でずっと閉じ込めていたことを言葉にしたり、人に伝えたりすることはとても難しいし、苦しいことだけれど自分の気持ちの整理になり、前に進むための第一歩になる大切なことだと教えていただいた。被災者やその家族が話したいと思うタイミングで私たち未災者が寄りそうだけでなく、話しやすい環境を提供することも必要だと考えた。他にも「命は自分だけのものであるが、決して自分だけのものだけではない」という言葉も印象に残っている。たくさん講師の方の講義を受け、自分の命を一番に考えることが大切だと話してくださったが、今回初めて命は自分のものだけではないという言葉聞いた。今までは自分を最優先して行動すると後悔してしまうのではと家族の安全を守る行動を考えていたが、この言葉を聞き家族のために自分の命を一番に考えようと思えるきっかけとなった。災害が発生した際に自分がとるべき行動や災害後に何ができるのかを改めて考えるきっかけとなった。

他にも宮城県の高校生と街歩きをし、街の様子や震災当時の状況について説明していただいた。震災当時は歩道橋の上で1日を過ごす被災者がいた。そして今でも歩道橋の裏には、津波が押し寄せたことでできた黒い跡が残っている。街の中心には大きな瓦礫の山があり、震災から10年近く経つ今もまだ復旧すら終わっていないのだという現状を突き付けられた。

その後のワークショップでは、班ごとに地図を用いてオリジナルの避難計画を立てるDIG(災害図上訓練)を行った。街の危険箇所を地図から読み取り、意見を出しながら安全で効率的なものにした。だがいろいろな状況を想定して視点を変えるだけで思うように行動できなかったのも、災害が発生してから迅速に的確な判断を出すことは不可能なのではと考えた。

東北訪問を通じて、災害を専門的に学んでも災害時に私たちは無力なのだと感じた。交流の場面で、自分から進んで行動できなかったことや話を聞いても何も言えずに心の中で当時の過酷さを受け止めることしかできなかったからだ。被災地を訪れ被災者の話を聞きたいと考えているが、力になることができるのか心のよりどころになれるのかと不安に感じた。しかしたくさんの方から話を聞いていく中で自分の感情や考え方の幅を広げていきたいと考える。

5 夢と防災

私は将来看護師として活動していきたい。講義や授業を通じて災害弱者の存在を知り、医療の面で力になりたいと考えるようになった。また私には障害をもつ家族がいて、病院や療育の場で医療従事者の

方々が親身になって治療をし、ケアをする姿を見て憧れを抱いた。災害発生時だけでなく災害後も心身のケアを行い、寄り添うことのできる看護師になるためにたくさんの方のお話を聞いたり、様々な活動をしったりしていきたい。その中で私にできることは、障害のある方の支援をすることだ。私には障害を持つ家族がいる。一緒に生活し、日頃から関わっているからこそ理解できることやしなければならぬことができると思う。障害のある方は被災地や避難所でよりストレスを感じたり、精神が不安定になったりするので特に精神的なケアが必要になる。周りの人の目を気にして自分のペースや意見を持ってもらうことの妨げにならないために避難所で別の場所の準備や、話しやすい環境を作る必要があると考える。また、障害のある本人だけでなくその家族の支援や心のケアをしていきたい。一緒に暮らしていく中で、嫌な気持ちになることやストレスを抱えてしまったときに気軽に話や相談できる人が必要だ。

さらに、体調不良を男性の医師に相談することに抵抗感や羞恥心を抱き、診断を先延ばしにする患者が症状を悪化させてしまうことが多いという問題が挙げられている。女性の医療従事者が必要とされ、女性専用外来などが設置されているので、障害のある方だけでなく女性のケアを中心にしていきたいと考えている。

障害のある方の気持ちに十分寄り添うことはできないし、的確な行動を取ることもできないかもしれないが、一人ひとりにあった対応ができればと考える。そのために聞いた話を自分なりにまとめて他人に話して整理することを大切にしていきたい。また自分以外を理解しサポートするために、まずは自分自身を知っておくことや体調管理が必要である。これからの医療現場で大切なことはチーム医療だ。他の職業と連携を図り、医療の質を高めることが大切だ。お互いが尊重し合い、任せきりにするのではなく患者自身の主体性を引き出すことが目的である。

災害時には早期発見・治療ができれば助けられた例が多かったため、「防げる死」として大きく挙げられている災害関連死を減らす必要がある。また支援者の心の準備の徹底も言われている。支援者はストレスによって心身に影響を受けることがある。支援物資などの準備はできていたが、支援者の心の準備ができていなかったためストレスとなってしまいうというケースが多かった。

自分のことは自分にしか理解や管理ができないので、情報収集をして自分なりに整理し、心の準備をしておく。被災者の教訓を次の災害に活かすことが防災・減災につながり広げられると考えた。

6 コロナウイルス

今の日本ではコロナ第4波に襲われ、医療従事者の過重労働が問題になっている。外出規制などの取り組みがされているが完全に自粛ができないため、感染者数は増える一方である。また自由が抑制され、ストレスを抱いたり鬱になったりするため引きこもりや不登校になる人が急激に増加している。日本だけでなく世界中が不景気な状況にいる中で私たちにできることは日々の感染予防の徹底である。感染予防は誰にでもできることかもしれないが、今までと違ったことを日常に取り入れることは難しいと考える。小さい子どもや高齢者、障害のある方には特に難しいため楽しく予防ができるような活動をしたい。例えばマスクと一緒に製作したり、予防に関するお話をしたり、絵本を読んで楽しく理解してもらうことだ。近くの駅では高齢者が出歩くことが多く、マスクを着用していない方もいる。コロナに対し恐怖心を抱いていないのか、感染するかもしれないという危機感はないのかと疑問に感じている。そのため、地域の方とコロナについて考えていることや感染予防を常に徹底するための交流をしていきたい。また医療現場では患者の治療だけでなく、自分自身が感染しないことが大切である。医療従事者の手が足りていない中で、クラスターが発生すれば医療現場は崩壊し、再開は不可能であると考え。感染者による、気を付けていても感染してしまったという話を聞き、1人が気を付けていてももう1人が手を抜くだけで一気に感染が広がり、誰1人怠らず予防を徹底する必要があるのだと再認識できた。

医療現場で感染予防を徹底するためには、感染予防や治療以外の行動を極力控える必要がある。切迫した緊張感のある現場で働き、さらに自分を律することは医療従事者にとって苦痛であり心身の影響にもつながるかもしれない。だが、感染者と一番近くで関わっているため感染の拡大を阻止するためには仕方ないことなのではないかと考える。

医療を通じてコロナと闘う最先端に立てるために、小さなことからできることを継続していきたい。

7 最後に

私が災害時にできることは迅速に的確な判断をすることだ。高校生活では体育委員としてクラスをまとめる仕事をしてきた。完璧にこなすことはできないが、授業がスムーズに進むように的確な指示を出す必要があるためその場の状況に合わせて素早く判断をしている。そして、今行っている活動が被災地

や医療現場でもとても大切なことだと分かった。被災地や医療現場では常に冷静な判断をし、患者の症状やニーズに合わせて対応する力が必要であるからだ。クラスをまとめるために自分が率先して行動してから指示を出そうと意識しているので、被災地や医療現場でも少しは発揮できるのではないかと考える。未熟ではあるけれど、障害のある家族と日々過ごしてきたことでその方が何を考えているのか、なぜその行動をとってしまったのかという気持ちを少しでも理解できるのではないかと考えた。周りの人は理解しがたい部分がまだまだ多いと思うし、私自身も冷静に考えられない時があるのだが自分が知っているなりに障害のある方と接し、治療に専念できるような手助けができるのではないかと考えた。

環境防災科として学んできたことを将来看護師として生かせることが理想であり、災害時に率先して行動をし、地域の力になりたい。そのために防災・減災について学んだことをどのように伝え、広げるのかを得た知識の中で見つけていきたい。

語り継がれて

埴 来知

1 語り継がれて

私が災害に興味を持ったのは、まさしく語り継がれたことがきっかけである。私が通っていた小・中学校の先生方は阪神・淡路大震災を経験した方が多かったようで、1月17日頃になると自分の体験を話してくれた。また、阪神・淡路大震災が起こった当時に撮影された映像や写真を見てきた。こういった阪神・淡路大震災の記憶にふれたことが、災害を知らない私に、災害への興味を持たせ、防災を学びたいと思わせた。私のように語り継がれたことが、防災を意識するきっかけとなる人は他にもいると思う。未来の災害で、大きな被害を生まないためにも「語り継ぐ」ことを途絶えさせてはいけない。

2 阪神・淡路大震災

小・中学校の先生から体験を話してもらうことは多かったが、身近な家族とは阪神・淡路大震災のことを少ししか話してなかった。そのため、今回は家族から詳しく話を聞くことにした。

(1) 母の記憶

私の母は、当時垂水区に住んでいた。地震の揺れで目が覚め、近くで寝ていた兄の上に救急箱が落ちて来て、痛がっていたのを見た。被害はそれほど無く、両開きドアだった食器棚から食器が飛び出て割れていたくらいだ。

母は当時、小学4年生だったので、当時の記憶があまりない。覚えていることといえば、近くの家が一軒崩れていたことや、家のお風呂が使えなくなったために、初めて温泉に行ったことくらいだ。また、しんどかったことも特に覚えている。数日はお風呂に入れなかったことと、飲み水がなく、喉が渴いても飲むものが無かったことなど、とにかく水が無くて困った。他のことはあまり覚えておらず、震災が起こってからの数ヶ月の間どんな生活をしていたのかわからない。

(2) 祖母の経験

母方の祖母は阪神・淡路大震災が起こった時のことを鮮明に覚えていた。

当時、地震が起こった時にはすでに目が覚めていた。5時半くらいに、祖父が仕事へ行くために家を出たからである。外はまだ真っ暗で、隣の部屋では母と母の兄が寝ていた。

寒かったので、起きてからも布団の中でボーっとしていた。すると、遠くからゴーと地鳴りが聞こえてきた。なんだ、と思っていると、急にドカーンと床が波打った。一瞬、地球がひっくり返ったのかと思うほどだった。その時は、「もうだめだ、死ぬかもしれない……」と感じたが、次第に地震なのだと気付いた。電気をつけようとしたが、地面が左右に揺れて立つことが出来ない。どうすることもできず、じっと待っていると揺れはおさまった。家は無事で、壊れた様子はない。余震を恐れ、揺れがおさまってからしばらくは娘の上にかぶさっていた。テレビはつかなかった。

祖父母の実家は県外だった。地震のことを知ったら心配するだろう、電話も繋がらなくなるのでは、という心配から地震が収まってすぐに、島根にある実家に電話をかけた。「地震があったけど、とにかく無事だ」と伝える。向こうはまだ、「何のこと？」といった感じだったが、すぐに電話を切った。次は宮崎の自分の実家に電話をかける。一回目はつながらず、二回目で姪っ子がでた。祖父の実家と同じように、「無事だ」と伝えた。姪っ子は何のことかわかっていない様子だった。自分が電話してから、電話は繋がらなくなったらしく、公衆電話には長蛇の列ができていた。

しばらくして、祖父が帰ってきた。どうやら、地震によって、コンビニの棚が全部倒れたらしい。ひとまず、駐車場の車に避難することにした。大事なものを棚から引っ張り出した。最後に、ご飯が炊けていたのを思い出して、炊飯器ごと外へ持ち出した。

明るくなりだした頃に避難する人たちが多くいた。4階に住むおばあさんが、5階に住んでいる夫婦の車に乗せてもらって避難している様子や、毛布をかぶって学校のほうに避難する人を車の中から見ていた。

しばらくしてから、小さい揺れは時々あったが家に帰って片付けを始めた。食器棚が倒れて食器が割れていた。ガスも水も出なかった。トイレは、お風呂にたまっていた残り湯で流していた。

9時過ぎだっただろうか。操作は何もしてないが、テレビがパッとついた。映っていたのは大きな神社

の屋根が落ちていた様子だった。この映像を見てとき、初めてえらいことが起きているんだと実感した。テレビはそれからつけっぱなしにしていた。高速道路が落ちている様子や街が燃えている様子がずっと流れ続けていた。

地震が起こってからは仕事も休みになり、子供達は学校が休みになった。テレビを見ながら片付けをしたり、公園で水汲みをしたりして過ごした。公園にある水道からは水が出た様で、団地の人が並んでいた。毎日、灯油を入れるような入れ物を2つ持って列に並んでいた。お皿にはラップを巻くなどして水はなるべく使わないようにしていた。寝るときは布団を敷かず、靴下もはいてすぐに逃げられるようにして寝ていた。

(3) 父の話

当時、私の父は西区の二階建ての一軒家に住んでいた中学2年生だった。地震が起こる前に目が覚めていて、仏壇の前になんとか座っていた。もうちょっと寝ようかと布団に入ったところで地鳴りが聞こえてきた。下から突き上げるような揺れに襲われ、布団の中に潜ろうとした。真っ暗な中、家族みんなの叫び声が聞こえた。父(私の祖父)が地震の震動と同時に立ち上がり、2階で寝ていた姉達に「大丈夫かー」と声をかけていた。

明るくなってくると部屋の様子がわかってきた。あちらこちらに物が散らかっていた。地震が起こる前に、目の前にあった仏壇はひっくり返っていた。大人の男性位の高さがあり、横幅も広めの立派な仏壇がひっくり返るほどの揺れだったのかとびっくりした。仏壇の前にいたままだったら下敷きになっていたかもしれない。

外に出てみると、車の上に瓦が落ちていた。幸いにも窓ガラスは割れておらず、走れる状態だった。家の壁にはひびが入り、少し割れているところもあった。電話はつながらない状態で電気もつかなかったが、少しすれば復旧した。なかなか復旧しなかったのは水だ。近くの学校などに汲みに行つてなんとかしていた。しかし、お風呂に入れない期間が続いた。特に避難などはすることなく地震後も家で過ごした。

(4) 話を聞いて

被害状況はそれほど大きくなかったようだが、祖母は阪神・淡路大震災の際に見たことや感じたことを、鮮明に話してくれた。それほど当時のことは衝撃的だったのだろう。母は、当時のことをそれほど覚えていない、と言ってはいるが私はある言葉が引っかかっている。母に阪神・淡路大震災の話を聞くと毎回言うことがある。「震災にあったのが子供の頃でよかった」と。私の勝手な推測だが、覚えていないだけで、大人達の苦労している様子などが印象に残っているのかもしれない。

父の仏壇の話を聞いたとき、正直なところ怖いと感じた。その仏壇は今でも父の実家にあり、私も見たことがあるが、かなり大きく、簡単に倒れる様子は想像しがたい。その仏壇がひっくりかえったというのだ。地震の揺れの威力を感じると共に、家具の固定の大切さも感じた。もし、父が仏壇の前にいたままだったら、倒れてきた仏壇に押しつぶされて怪我をしていたかもしれない。大きい物なので打ち所が悪ければ亡くなっていた可能性もある。家具の固定の大切さを感じた。

3 環境防災科—長田のまちづくり

環境防災科に入学してからの3年間でたくさんの経験をした。その中でも印象に残っているのは阪神・淡路大震災後の長田の町の復興についてである。阪神・淡路大震災の後、火災で町の多くが焼け野原となった長田の町は、区画整理がされた。町を一から作り直して、一見災害に強い街となったが、復興計画に時間がかかりすぎて、震災前に住んでいた人の中には戻ってこなかった人も多くいる。よって、長田の町は震災前の賑わいを失ってしまった。私はこれが非常にもったいないと思った。せっかく、被災者に我慢をしてもらうなどして、災害に強いまちづくりをしたのに町の賑わいは戻っていない。「災害に強い町」というのはその町が多くの人に使われてこそ、その防災力を発揮する。町が災害に強くても、そこに人がいなければ意味が無い。長田の区画整理の何が原因で賑わいが戻らないのかを探って、反省を次に活かさなければならないと思う。

私が考えるに、原因のひとつは区画整理の計画に時間がかかったことだろう。被災者は生活再建の目処が立たず、他の町へ移っていったのだろう。災害が起こる前から、住民達の間で災害が起きた後、どのように復興していくのか、どんな町にしていきたいのかを考えていく必要があると思う。阪神・淡路大震災の後の災害でも、幾度か区画整理が行われているが計画を立てるのに時間がかかっているところは沢山あるように感じる。

長田の町の中でも、被害に合わずに昔の町の様子が残っているところを歩いてみると、道幅が狭く古い家が密集していた。昔の様子が残っているのはいいことだが、南海トラフ巨大地震等の未来の災害では

どうなるかわからない。その町に住んでいるのは高齢者が多いだろうし、昔から残る木造家屋は耐震基準を満たしていない可能性もある。他の町に比べ被害が大きくなる可能性は高い。そういった町への対策も必要だと感じた。

4 活動から学んだこと

私は環境防災科に入り、ボランティア活動や他校との交流、東北訪問など様々な活動に参加させていただいた。いろんな活動に参加して、自分で考えて行動して他者と関わることで多くの学びをえることができた。

(1) ボランティア活動

ボランティア活動では、地域のイベントの運営をお手伝いさせていただき、防災ブースを作って防災に気軽にふれあえる様にした。地域コミュニティの形成に役立つと思う反面、参加している人は小学生やお母さん、祖父母世代の人が多く、高校生や大学生などの参加はあまり見かけない。地域イベントはコミュニティの形成にも役立っているので、若い世代の人でも参加してくれるような工夫が必要だと感じている。

(2) 他校との交流

他校との交流は、小学校や中学校に出向いて授業を行う出前授業や、防災を学ぶ高校生や中学生と意見を交わしたりする機会があった。出前授業ではどうすれば相手にわかりやすく伝えられるのかを考え、どうすれば防災に興味を持ってもらえるのかを考え工夫した。そうすることで、自分も学んだことをかみ砕いて理解し直したり、自分なりの考えを出したりできた。防災を学ぶ学生達との交流では、自分にはない視点から考えていたり、お互いの取り組みを話し合ったりすることで新しい発想や学びを沢山得ることができた。中には、東日本大震災や熊本地震を体験している人もいた。災害を実際に経験しているからこそ、災害のことを他人事にせず、いつ自分の身に起きてもおかしくないことだと真摯に災害と向き合っていた。私達はいつ南海トラフ巨大地震が起きてもおかしくない状況にあり、他にも災害が起こる可能性は大いにある。私達も、災害のことを他人事とは思わず、自分事だと考えなければならない。まずは自分の身を守ることからでもいいから、災害のことを他人事とは思わず、備えや対策をより実行していかなければならないと思った。

(3) 東北訪問

東北訪問では、東日本大震災の被災地に行った。印象に残っているのは大川小学校のことだ。大川小学校は学校にいたほとんどの人が亡くなってしまった。全児童 108 人のうち 74 人と教職人 10 人がなくなった。瓦礫などは片づけられているが、今でも東日本大震災が起こった当時の生々しい姿が残っている。

大川小学校の敷地内には裏山がある。裏山だからといって斜面も急なわけではなく、小学校の生徒達も授業などで登っていたらしい。そこに逃げていれば、失われた命は助かることができていたはずだ。津波が来るまでの時間も 1 時間ほどあったので、避難をしていれば本当に助かっていたのである。それなのに避難が行われなかった理由のひとつは、「津波が来なかったらどうするんだ」という心配だった。避難途中で生徒が怪我をしたら親御さんにどう説明するんだ。などの会話もあったらしい。結果、時間が無くなった大川小学校の人達は川のある方に逃げてしまい、津波にのまれてしまった。このことから学んだのは、避難訓練などの大切さだ。災害時にどうするかをしっかりと考えておき、いざというときによりよい判断ができるように普段から準備しておかなければならないと感じた。

私は、東北訪問に行く前たくさんの不安があった。今までは画面を通してだったものが目の前にくるとどんな感じなのだろう。自分はどんなことを思うのか。東北の方々は何をおもい、なにを伝えたいのかを、しっかりと自分は感じ取ることができるのかな、と思っていた。結果、東北の方々の想いをしっかりとくみ取れていたのかはわからない。それでも、自分が感じたことを、思ったことを身近な人から伝えていき、広めていくことが大切だと思う。そして、環境防災科に入学してからの数々の貴重な体験を将来生かせるように生きてきたい。

5 最後に

私は幸運なことに、小学生の頃から阪神・淡路大震災の経験を聞かせてもらえる機会がたくさんあった。小学校では 1 月 17 日ごろに防災学習があった。阪神・淡路大震災で何があったのか、映像も見させてもらった。そこで、自分が体験したことを話してくださる先生方が多くいた。中学校の校長先生は黙祷のあと、被害が特に大きかったところで勤務していたことを毎年話していた。そういった、先生方の話や震災の映像が、災害に興味を持つきっかけとなった。小学生の時は気づいていなかったが、あの時まさに

語り継がれていたんだな、と『語り継ぐ』を書くにあたって感じた。だからこそ、私は語り継ぐことが大切だと思う。

過去の災害では悲しい思いをした人がたくさんいるが、その思いを語り継いでいくことで、今までの災害が世の中から忘れられることは無い。このことによって、これから起こる災害で人々の命が救われることになり、今までの災害で被害にあった人たちの経験がただただ悲しいもので終わらないようにすることにつながると考えている。失われた命や、苦しい思い出が誰かの命を守るきっかけとなれば、被災者の方のもやもやとした気持ちも助けられるかもしれない。

災害のことを忘れないようにするには、震災を経験した人たちが自分たちの経験を語り継ぎ、それを聞いた人たちがまた次の人たちに、聞いたことを話していかなければいけない。もちろん、忘れられないことだけではいけない。語り継がれた経験から教訓を見出して活用していかないとだめだと思う。だから被災した人たちの話に耳を傾けて、そこからこんな備えが必要だなとか防災に繋げていき、後世にそれをまた伝えていくことで、語り継がれることが本当に意味を成すこととなる。

三つの震災

大崎紘平

1 はじめに

私は小学校6年生の時に、神奈川県から神戸市に引っ越してきた。つまり、私はもちろん、両親も阪神・淡路大震災を経験してないのだ。が、今まで神奈川県にいたということは、東北ほどではないが東日本大震災を経験したのである。阪神・淡路大震災を東日本大震災と照らし合わせ語り継いでいく。

2 東日本大震災

当時、私は小学1年生だった。地震が起こったのはちょうど帰りの会をしていた時で、突然、大きな揺れに見舞われた。あまりに突然だったため、机の下に隠れるのが他のクラスメイトと比べて遅れてしまった。放送で「これは訓練ではありません。」と聞こえ、先生たちがあわただしく生徒たちを避難誘導している光景を見て、これはただ事ではないと小学1年生の私でもわかった。校庭に集められ、先生方がそれぞれの親に連絡をし、迎えに来てもらうよう手はずを整えた。私は、比較的早く迎えが来た。母もちょうど仕事終わりだったらしい。家に帰るとトイレにかけてあった時計や台所の食器などが床に落ちていた。食器は落下の衝撃で割れ、時計は発生時刻の14時46分で止まっていた。その時計が、揺れの大きさを物語っているように見えたのがとても印象的だった。母は、父と連絡を取ろうとしたが回線が混雑してなかなかつながらなかった。地震発生時間から1時間15分後に電話がつながり、父の状況を知ることができた。父は会社から帰宅命令が出されたが、電車が動かず帰宅困難者になっていた。私は、母と一緒に父を迎えに行った。その後、テレビで東北の状況を知り、地震の脅威を実感した。

3 阪神・淡路大震災体験談

友人の母Tさんの話

(1) 震災直後

当時Tさんが住んでいたところは鉄筋コンクリートの3階建てだった。突然下からどんと突き上げるような、殴られるような衝撃で目を覚まし、その後すぐに起きた横揺れで、これは地震だということを理解した。しばらくの間、ベッド内で様子見をした。揺れが収まったので、すぐに家族の安否確認をした。当時、両親は留守中で、家にはTさんと弟だけが家にいた。弟は幸いにも目立った外傷はなかった。

(2) 被災後

電気、水、ガスのライフラインが止まり、すぐに、懐中電灯を用意し、飲料水を確保した。懐中電灯であたりを見回してみると食器や棚に置いてあったものが床に散らばっていた。外はどうなっているのだろうと思って玄関を出たが、自分の家も、周りの家も特に大きな被害はなかった。この状況を両親に説明したかったが、停電のため固定電話が使えなかった。その時に隣人の黒のダイヤル式電話が奇跡的に使用が可能だったので、貸してもらい、なんとか両親に説明することができた。状況を伝えることはできたものの、依然電気や水、ガスは止まったままだった。だから、トイレの水が流れなくてとても困ったらしい。しかし、これも隣人が持っていた田畑用の井戸のおかげでトイレを流すことができ、被害の情報などはインターネットやテレビが使えなかったので、携帯ラジオで得ていた。また、飲料水は家にあったが食料の準備はしていなかった。いろいろなお店に行ったがほとんどが品薄で少ししか買うことができなかった。この時に、災害に対しての備えが大切だと感じた。

4 話を聞いて

Tさんの話を聞いて、近所の人々と普段から接しておくことが大切だと感じた。近所の人自分にとって、とても身近な救助部隊だ。阪神・淡路大震災では、消防や自衛隊などの公助より、近所の人に助けをもらう共助のほうが多かった。これからの時代、ネット社会になり、外と接点がなくなっていくかもしれない。だが、近所の方とつながりがあれば、もし、自分の命があぶないときでも助けてもらうことができ、Tさんのように、トイレの水や電話などを貸してもらうことができる。だから、人とのつながりを持つことが大切だと感じた。

また、Tさんが自分の家の電話が使えなかったと話されていたときに、それはとても不安になっただろうと思った。なぜなら、前述したとおり、私も東日本大震災の時に父と連絡が取れなかったからだ。災

害時には停電や回線の混乱などで電話が使えなくなることが必ず起こる。そのため、家族の避難場所を決めておくなどをして連絡がつかなくても再開できるようにしておく必要がある。

今の神戸は、とても街がきれいで災害が起こったとはとても思えない。しかし、震災で傷ついた人の心は今も復興している最中だと私は思う。そのような人たちを支えていくために、今を生きている私たちが阪神・淡路大震災のことを学び、次世代にも伝えていくことが必要だと感じた。そうすることによって、継続的な支援が可能となるからだ。

5 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科を知ったのは、中学3年生の進路で舞子高校に進学しようと決めて、色々調べている時だった。私は、東日本大震災の影響もあり、災害についてもっと知りたいと思っていた。環境防災科を知ったとき、ここなら自分が知りたいことを学べると思い、進学したいと考えたようになった。

(2) 入学してから

私は環境防災科に入学して、とても驚いたことがあった。それは、クラスメイトの将来に対する考えだ。クラスのほとんどが夢を持ち、それを叶えるために環境防災科に入学していた。私と同じ歳の人が、はっきりと夢を持ち、人に伝えている。私は、この仲間となら自分をさらに成長させることができると思った。

1年生では、自衛隊や消防、水道局、電力会社など様々な職業の方から話を聞くことができた。それぞれの職業の方が災害に対し、視点が違っていたのでとても興味深い話ばかりだった。それに、私たち自身も災害や防災に関する施設に行くことがあった。普段の授業でも教えられていなかった話もあって、より災害に関する知識を深めることができた。

また、岡山県の高校生と交流するボランティアがあった。それが私にとって初めてのボランティアだった。内容は、舞子生と岡山県の高校生とが4、5人で班をつくり、災害の時に4次元ポケットの様なものがあつたらどんなものを取り出すのかなどを話し合うというものだ。私たちの班は「爺婆サーチ」というものを発表した。この道具の効果は災害で行方不明になってしまった高齢者の方がどこにいるのかがすぐ知ることができることだ。そうして話していくうちに徐々に打ち解けていき、自然に話せるようになった。私は、今まで顔も知らなかった人と同じ問題について考えることがこれほど楽しいものだと思わなかった。この経験のおかげで私は初対面の人に臆せず話せるようになった。また、話し合っている途中に平成30年に発生した7月豪雨の話になった。その岡山県の高校生は、直に被害を受けていた。その時、「大変だったとしか言いようがない」と言っていたのを覚えている。平成30年7月豪雨は6月28日から7月8日にかけて、西日本を中心に北海道や中部地方を含む全国的に広い範囲で発生した、台風7号及び梅雨前線等の影響による集中豪雨のことだ。特に被害が大きかったのが広島県、岡山県、愛媛県である。岡山県では河川の氾濫や堤防の決壊による浸水、土砂災害が相次いだ。全半壊・浸水家屋の数は7月19日時点で少なくとも14,000棟に上り、岡山県内の風水害による被害としては戦後最悪となった。岡山県内でも被害が大きかったのが倉敷市真備町である。この地域では7日朝までに小田川と支流の高馬川などの堤防が決壊し、広範囲が冠水。真備町だけで51人が死亡し、ほとんどが水死とみられる。死者のうち43人は屋内で発見され、うち42人は住宅の1階で発見された。土木学会の調査によると、浸水の深さは南北1キロ・東西3.5キロの範囲で5メートルを超え、最大で5.4メートルに達したと見られる。浸水範囲は真備町の4分の1にあたる1,200ヘクタールに及んだ。国の調査委員会の見解によると、小田川では合流先の高梁川の増水に伴い水がせき止められるバックウォーター現象が発生し、越水により堤防の外側が削られ決壊したとみられる。真備町における堤防の決壊箇所は小田川で2箇所、支流の高馬川で2箇所、末政川で3箇所、真谷川で1箇所が確認され、小田川では他にも6箇所が法面の崩壊が確認されている。今は復旧復興が進み、以前より頑丈な堤防が作られている。

2年生では、長田のまち歩きがとても印象に残っている。長田は阪神・淡路大震災の時に大規模な火事が発生し、甚大な被害を受けた場所だ。そんな長田の街は、区画整理という災害で大きな被害を受けた地域の道路を広くしたり、大きな公園を作ったりして防災力を高める事業を行った。ここだけを聞くと、とてもいいことに聞こえるがデメリットが存在する。それは、道路や公園を造る際にコミュニティを崩壊させることだ。例えば、まだ使えそうな家が複数あるが、ここに大きな道路を作りたいと思っている。だから、この家の住人には別の場所へ移動してもらおう。そうすると、今までその地域で作り上げてきたつながりがなくなり、共助の割合が下がることや、区画整理を行う前まではにぎわっていた商店街などが活気を失い経済的に苦しむ人が出てくるなどがある。それに、区画整理した場所としていない場所で年齢

の差があることも問題である。区画整理した場所はきれいで公園や緑も多くとても住みやすそうだった。しかし、区画整理していない場所は、路地が狭く入り組んでいて、ご高齢の方を見かけることが多かった。私は、もしまた震災が起きたときにこの人たちだけで平気だろうか。若い人の力が必要ではないのかと考えた。高齢者の人達のサポートを町全体で行っていくことが重要になると思った。

長田のまち歩きでは、阪神・淡路大震災の後の状況を身をもって経験することができ、授業では習わなかったところも教えてもらい、とても興味深かった。

6 夢と防災

私は将来、テレビ業界で働きたいと思っている。そう思ったきっかけは、テレビで見た東日本大震災の映像だ。私は、東日本大震災をもっと多くの人に知ってもらい、これから生まれてくる次世代の子供たちにこんなことがあったと伝えていきたいと考えている。その手段として多くの人が持っているテレビならば可能だとも思ったため、目指すようになった。

テレビ業界では、子供向け一般向け防災番組の制作・放映や学校用教育コンテンツの提供、防災特集番組の制作を行っている。これを行う目的としては、テレビを通して防災の意識づけやきっかけづくり、若い時の吸収力を利用して防災の知識を増やし、日本の防災力を上げる。日々の生活に防災を取り入れて、人々の意識を防災に向け、安全な社会を構築するなどだ。しかし、まだ防災や災害の面で課題がある。それは、報道するときのヘリコプターだ。テレビから見る災害の映像はほとんどの人が上空から撮影したものを目にするだろう。しかし、その撮影用のヘリの音がうるさく、生き埋めになった人の声が聞こえなくなるといった意見が上がった。もちろん高度の基準は存在するが、実際は基準を守っていても音はうるさいようだ。それから、被害の大きさだけを伝えているというものもある。被災した方は、様々な辛い体験をした。被災した方達にとって、被害の大きさだけを伝える報道はとても腹立たしいものだったのだろう。しかし、報道された地域は多くの人にその地域のことを知ってもらえる。そのおかげで、いろいろな支援物資が届く。でも、被害が出たのに報道されなかった地域は支援物資が届かず、地域ごとで支援物資の格差が生まれる。私はこれを学んだ時に、テレビの影響力というもののはすまじいと思った。

そんなテレビ業界で、私は、防災の重要性を伝えたいと考えている。災害というものに対して、準備をしている人は、残念ながら多くはない。そのため、防災の重要性を知ってもらいたいが、ただ単に重要だということを伝えても人々の記憶には残らないだろう。だから、興味がそそられる内容にしなければならない。そこで、被災した方の当時の話を聞き、忠実かつ迫力ある再現ドラマの制作や災害映画の再放送をしたいと考えている。ドラマや映画は、日常生活の娯楽として見ている人が多くいる。そういった人たちを対象として行っていくことで、防災の重要性を知ってくれる人が増加し、災害で亡くなる人の数を減らせると思う。ただ、再現ドラマの基盤は被災した方の経験談だ。そのため、取材する際には相手の方が話したくないことや思い出したくないことを無理して話していただくというようなことが起こらないように気を付けたい。

7 新型コロナウイルス

新型コロナウイルスが発生して、日本の経済だけでなく、世界中の経済が打撃を受けた。その打撃はとても大きく、就職にも影響が出るほどだ。就職できない人だけでなく、リストラされる人も増加している。そういった人たちに対して国がどのように対応するかが重要になる。

コロナ禍では、感染拡大を防ぐためにテレワークを利用する企業が増えた。テレワークではメリットとデメリットが存在する。メリットは、通勤時間を省くことができ、通勤時の精神・身体的な疲労をなくすることができる。それから、自分のペースで仕事ができる為、作業効率が上昇する。出産や育児・家族の転勤・介護などの事情により退職せざるを得なかった方たちも、テレワークによって仕事を継続できる可能性が高まるなどがあげられる。デメリットは、仕事と仕事以外の切り分けが難しいことや家では誘惑が多くて自分を律することが難しい。朝でも夜でも仕事ができる為、長時間労働や昼夜逆転して、生活リズムが崩れるなどがあげられる。こういったデメリットを解消するために、2つの方法が良いとされている。1つ目は、勤怠管理ツールを導入して、労働時間を記録することだ。これを記録することにより、上司や周囲の人間が本人の働きすぎを知ることができる。2つ目は、タスク・進捗状況を上司へ共有することだ。テレワークをすることによりコミュニケーションがなくなる。直接のコミュニケーションがなくなるため、些細な連絡・報告漏れが大きなトラブルにつながるという課題がある。そういったことを防ぐために、上司と連絡を取る必要がある。

また、コロナに感染した人や医療従事者に対して誹謗中傷する問題が上がっている。ある学校の部活

動でクラスターが発生した。その部活は寮生活で、学校側は対策が不十分でなかったと謝罪。そのうえで生徒に非はないと話した。しかし、ネット上では、生徒の活動を紹介する学校の公式ブログも標的となった。ある部活が県独自の大会で優勝した際、屋外でそれを祝っている写真が火種となり、「マスクもつけずにコロナをばらまいている」との批判が殺到した。その批判は80件に及んだ。生徒の心身の不調を懸念した学校は、臨床心理士・公認心理師協会に協力を依頼。約50人から「寝られない」などの相談が寄せられているという。それから、コロナ感染拡大を防ごうとしている医療従事者への誹謗中傷や社会的にいやな思いをされるということが増えている。例えば、医療従事者というだけでタクシーに乗車拒否やレストランの入店拒否などがあげられる。ましてや、医療従事者の家族だという理由で、接触もしていないのに出勤拒否や保育園、学校でのいじめの問題もある。医療従事者はコロナと最前線で戦っている人たちである。もし、医療従事者の方たちがいなかったら、今の感染者数の何倍も増加するだろう。そのような人たちに対して内側から追い込むような真似をしてはいけない。海外では、医療従事者に対して感謝と敬意を伝える活動が広まっている。日本もそういう気持ちをもって接するべきだ。

8 最後に

今の神戸は町並みがとてもきれいで、阪神・淡路大震災が起きたとはとても思えない。しかし、実際に話を聞いて、市民の方のとてつもない努力のおかげで今の神戸があることを知った。そんな神戸のために私たちができることは、阪神・淡路大震災のことを伝え、周りに防災と減災の重要性を教えることだと思う。現代の人は災害に対しての備えがおろそかになっているという。そういった方々の災害への意識を変えるには、災害がいかに恐ろしく、そして対策をとるだけで生存率が変わるのかということを説明せねばならない。今後30年以内に南海トラフが起きる可能性があるといわれ、それが起きた時、もし私が防災と減災のことを周りの人に教えていたら、亡くなる方や負傷する方を減らせるかもしれない。阪神・淡路大震災の時のようなことは、今後、起きてほしくない。私は話を聞いてそう思った。

語り継ぐ

大崎 柊

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に阪神・淡路大震災が発生。それから月日は流れ、2022年の今年で27年となる。震災当時のことは生まれてないから分からない。私を含めて震災当時のことを経験していない未災者が神戸市内でも増えている。でも、未災者だからといって何もしないのは違うと思う。

私は、阪神・淡路大震災という1つの災害の風化を防ぐために、未災者でありながらも当時を経験した方々から様々な話を聞いて、その方々の経験、教訓をさらに下の世代へと語り継ぐことが大事だと考える。この場をお借りして文字で語らせていただく。

2 阪神・淡路大震災の概要

名称：兵庫県南部地震

発生年月日：1995年(平成7年)1月17日午前5時46分

震源地：淡路島北部(北緯34度36分、東経135度02分)

震源の深さ：16km

地震の最大震度と規模：震度7、マグニチュード7.3

死者：6434名

行方不明者：3名

重傷者：10683名

軽傷者：33109名

全壊：104906棟

半壊：144274棟

一部損壊：390506棟

「内閣府 防災情報のページ」より引用

3 父の話

震災当時、ポートアイランドの14階建てのマンションの6階に住んでいた。前日の16日に見た月はいつも以上に大きくてとても気持ち悪かった。翌日朝、「ゴーツ」という地鳴りで目が覚めた。すると、突然ベッドが浮き上がるくらいの揺れが襲い掛かった。最初はテロか戦争が起こったのではと思った。家具が倒れて食器も割れて電気もつかない状況だった。外を見て三宮の方を見たら、燃えていた。やっぱり戦争なのかと思った。

そして、自宅から離れた場所に停めていた車にラジオを聞きに行こうとしてバイクで移動しようとした瞬間、何かにはまった。液状化現象だ。太ももの高さまで水に浸かった。バイクは動かなくなった。当時は、液状化現象のことを知らなかったらしく、津波が来たと思っていた。外が明るくなって、地震だと分かった。神戸大橋が通行止めとなり、父はポートアイランドから出られなくなった。夜には電気が通ったが、水分と食料が不足した。そこで、ポートアイランドには工場が多いという特性を生かして、自動販売機で飲み物とコーンポタージュを大量に買った。3日目に自衛隊から船で救援物資が届けられた。父は、余震がとても怖かったと言っていた。余震の度にあの大きな揺れを思い出した。

4 母の話

震災当時、短大の1年生で総合運動公園駅から徒歩10分ぐらいにある13階建てのマンションの5階に住んでいた。前日の夜は、学校のレポートに追われて日付が回って3時まで起きていた。ようやく寝たと思ったら、突然体が揺らされて目を覚ました。状況が全く理解できず、母(祖母)の元へ向かおうとしたら、突然激しい揺れに見舞われて壁をつたわないとともに歩けない状態だった。リビングについたら、母と2人でこたつに身を隠した。激しい揺れは数回続いた。マンションの下から「マンションが倒壊する恐れがあります。下に降りてきてください。」と拡声器でアナウンスがあり、階段で外へ避難した。家の中は食器が割れたり、ピアノが数十センチ動いていたり、テレビが倒れて床に落ちていた。住んでいたマンションは当時まだ建てられて築半年と新しかったのだが、多数のひびが入っていた。ロビーに住民が集まった。母は、公衆電話で親戚や東京に単身赴任中の父(祖父)に連絡をとった。

夜が明けると、東の方の空が真っ赤に染まっていた。そして、ラジオの情報によって長田で大火事が起こっていることを知った。しばらくしたら、マンションは倒壊の恐れがなく大丈夫だと判断された。まだ水が出ていたため、もし水が止まってしまった時のためにお風呂の浴槽に念のために水をためておいた。

地震から3日後、父が東京から車に乗って水と食料をもって駆け付けた。そして、西区玉津にある玉津の湯に行き、3日ぶりに風呂に入った。いつも以上に気持ちよく感じた。食料を買うために菅の台のコープと名谷駅のダイエーに行くと大行列ができて、パンやカップ麺は売り切れていた。

5 2人の話を聞いて感じたこと

まず、いつも忙しいのに時間を割いて私に当時の経験を語っていただき感謝しかない。父が液状化現象にはまってしまった話は初めて聞いたのでとてもびっくりした。ここまで詳しく阪神・淡路大震災の時の経験を聞いたのは初めてだ。

この話を聞いた際に、2人が共通して言っていた言葉があった。それは、情報の大切さを知ったということだ。現在の社会は、スマートフォンが普及して誰もがいとも簡単に次から次へと情報を仕入れることができる。しかし、阪神・淡路大震災が発生した1995年の社会は、スマートフォンがないのはもちろん携帯電話を持っている人も限られていた。その分、情報の収集にとっても苦労した家族はたくさんあったと思った。

今回両親から聞いた話は、ここで終わっていけないと思う。最初にも書いた通り私は、災害を経験していない未災者であるが、体験していないからと言って他人事で考えるのではなく自分事として捉えて、私と同じように災害を経験していない方に伝えていきたいと思った。

6 環境防災科

(1) きっかけ

私は、須磨区の竜が台中学校に通っていた。正直、阪神・淡路大震災については小学校の時から学んでいたが、中学3年まで災害そのものについて興味はあまりなかったし、舞子高校に環境防災科があることすら知らなかった。竜が台中学校では、毎年1月17日ごろに防災教育として震災メモリアル行事を行っている。そこでは、震災を経験した方が自らの体験を未経験の私たちに語って下さった。そこでは、私が環境防災科に入学してから外部講師としていらっしゃった高井千珠さんやピアニストの中谷幸代さんの話を聞いた。それがきっかけで少しずつ、災害や防災について興味を持つようになった。そして進路学習の際に、舞子高校環境防災科という文字を初めて見た際に気になったので調べてオープンハイスクールに行くことにした。環境防災科について知る中で「ここに行きたい」という気持ちが湧いてきた。

(2) 入学後

私は、環境防災科の入試になんとか合格し、2019年4月より舞子高校環境防災科の生徒となった。入学当初の夢は、私自身小さいころから鉄道が好きだったので、鉄道会社に就職して乗務員になることだった。

入学して驚いたことは、授業で外部講師の方が多くことだった。外部講師の職種は様々で、消防士の方、警察官の方、大手企業の方、震災で家族を亡くされている方などたくさんの方の講義を聞いた。震災を経験した方々から色んな話を聞き、そこから学べることはたくさんあった。舞子高校では、環境防災科の普通科も交えて学校全体で行う防災行事もあり学校全体で防災を積極的に行っていると分かった。

ボランティアの数がとても多く私も部活動の関係で行く回数は限られていたが、部活動がオフの日などを中心に行かせていただいた。舞子高校と地域のつながりを肌で感じることもできた。ボランティアで様々な方々からありがたうという言葉が掛けられるととてもやりがいを感じた。また、ボランティアではみんなをまとめている先輩方の姿を見て自分も3年後こんな先輩になりたいと憧れをもつきっかけでもあった。

(3) 東北訪問

私が、入学してから一番印象に残っていることは1年生の夏休みに行った東北訪問である。東北訪問は長時間バス移動をする。その時間は14時間。現地では、毎年お世話になっている宮城県あおい地区で過ごす。あおい地区に住んでいらっしゃる方々は小野竹一さんをはじめいつも笑顔でいっぱい温かく私たちを迎えてくださる。あおい地区を初めて見たとき、とてもきれいで空気が気持ちいい町だと思った。

しかし、大川小学校を見た際にとても衝撃を受けた。東日本大震災から8年が経過していたが、校舎が当時のまま残されていて、校舎周辺は何もない空き地で2011年3月11日から時間が止まっているかのよ

うに感じた。大川小学校で起こったことを想像したらとても胸が痛かった。それと同時に、大川小学校の風景や佐藤敏郎先生、只野哲也さんの話から学べることも多かった。今後 30 年以内に 70－80% の確率で起こるといわれている南海トラフ巨大地震において大川小学校で起こったことを繰り返さないためにどうすればよいのかも考える良い機会になった。

東北訪問を通して、様々な講義から命の大切さ、あおい地区での流しそうめんの人とつながることの大切さを学んだ。東北から神戸へ帰った時にもっとあおい地区にいたかった、大人になってからでもいいからもう一度あおい地区に帰ってきてつながり続けたいと思った。

7 夢と防災

(1) 将来の夢

私の将来の夢は、救急救命士となって地元の神戸市消防局で働くことだ。なぜ私の夢が救急救命士になったかという、環境防災科で様々な災害について学んでいく中で災害時に多くの命を救いたい。そして、テレビで救急救命士の迅速な救命処置を見たときにかっこいいなと憧れの気持ちをもったからだ。自分もこうやって人々の命を助けていきたいと思った。いろいろな人から信頼され愛される救急隊員になりたいと思った。

(2) 救急救命士と防災

私は、救急救命士になったら様々な防災に力を注いでいきたい。例えば、高校時代に舞子高校環境防災科で学んだ防災の知識を職場仲間や地域に住む方々に伝えていく。他には、地域の小中学校に防災教育、地域の防災訓練へ参加し地震発生時の対応や救急救命士として子供にでもできるような簡単な応急救命措置の方法を教える。このように様々な形で防災と減災とかかわっていきたい。そして、環境防災科の授業で災害時の人の心の状態やメンタルケアについて習ったので、被災者への心理的支援にも力を注いでいきたい。

私は、救急救命士となったときに大切にしたいことが1つある。それは「自分自身の命が守れないと、ほかの命を守ることができない」ということだ。自分自身の命なしでは、いくら救急救命士という肩書きがあっても他に救助を必要としている人たちに対して何もすることができない。救助することができない。あくまでも、一番大事なものは自分自身の命だと私は考える。私は今まで様々な場面で色々な方に助けてもらうことが多かった。私が人を助ける場面の方が少なかった。しかし、私はもうみんなから助けてもらう立場ではない、私がみんなを助ける立場なのだと頭をいつも入れておきたい。

また、近年は新型コロナウイルスの影響もあり減少しているが、アメリカや中国など外国人の方も日本にたくさん訪れて、外国人のなかには日本語が話せない、わからないという方もいらっしゃる。日本語が聞き取れなかったり、話せない方が日本語しか理解できない話せない救急救命士に助けてもらうようになった場合、もし私が外国人の立場であれば、とても不安になると思う。これから他国の言語を話せるように学んでいき、外国人の方でも安心できるように英語など他国の言語を1つでも話せる救急救命士になりたい。

(3) 日常で

私は、仕事の時だけ防災にかかわっていききたいとは思ってはいない。それは、日常から私は自分の住んでいる町で防災を大きく広げていきたくて考えており、災害に強いまちづくりに1人の市民として貢献する。私の家では家族で協力しながら防災バッグを作ったり、家で1か月に数回ハザードマップを用いて様々なシチュエーションで様々な災害を想定した防災会議を開いて発災時の家族の集合場所を決めるなど、家族一丸となって防災に取り組んでいきたいと考えている。また、地域で火災・地震・津波・土砂災害など様々な場面を想定した避難訓練を実施して災害に強いまちづくりに積極的に取り組んでいく。

8 最後に

私は、舞子高校環境防災科を卒業して大人になってからも防災と深くかかわっていききたい。

日本では、近い将来南海トラフ巨大地震が起こるといわれており、最大でも32万人の死者が想定されている。私は、巨大災害が来てもみんなが死なずに生きていけるためにも、舞子高校環境防災科で過ごし学んできた3年間の経験を發揮し、家族や友人などの身近な人たちをはじめ、様々な方々に防災・減災の重要性や、自分の身を守る方法を教えていきたい。

私は、救急隊(救急救命士)になったら、環境防災科で行ったような出前授業を地域の小学校あるいは中学校で行って子供たちにも防災意識を高めてもらいたいと感じている。そのためにもまずは、災害に興味を持ってもらう。私自身、災害について興味を持ったから環境防災科に入ったし、興味を持ったから

3年間学び続けることができたので、まずは災害に関して興味関心を持ってもらおうと思った。そして、いざ災害が発生した時にしっかりと自分の命は自分で守れる人を育成する。

変化する未来 変化させる未来

大杉 駿矢

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災の存在は大きい。しかし私たちのような未災者が増えて、この存在は薄くなりつつある。神戸で生まれた身として、阪神・淡路大震災での教訓を忘れることなく、あかるい未来を切り開いていきたい。

2 阪神・淡路大震災の教訓

10の柱

- いのち(1) 命を守ること、命を救うことの大切さ
- 暮らす(2) 生活拠点となる住まいの確保
 - (3) 生活資金、心身の健康、生きがいなどのくらしの回復
 - (4) 地域経済の復興としごとの確保
- 創る (5) 人をつなぎ互いを助ける地域コミュニティ
 - (6) 住民が主体となり、地域の特性を生かしたまちづくり
 - (7) 災害時に対応できる人材の育成
- 支える(8) 平時からの危機管理体制の構築
 - (9) 被災地の主体的な復興を支える社会制度の整備
 - (10) 公民協働の新しい社会システムの構築

出典(兵庫県ホームページ／伝える－阪神・淡路大震災の教訓)

3 母の家族の話

当時、母は垂水区に住んでいた大学生だった。震災発生日も母は大学に通っていた。バイトで疲れ、帰ってきた母は、まだ寒い1月ということもあり、こたつで寝てしまった。家族は皆2階の部屋で寝ていた。そして午前5時46分、こたつで寝ていた母は、突き上げられて地震だと思った。今までに感じたことの無いような強くて長い地震だったので、2階の家族は大丈夫かと思った。そしてすぐにこたつの中に身を潜め、安全を保とうとした。揺れが収まるとすぐに2階から祖父が心配し、駆けつけてくれた。祖父はすぐにスリッパを家族全員に履くように言った。なぜなら、食器棚から出た食器類が割れて飛び散り、とても歩ける状況ではなかったからだ。その後祖父は近くのコンビニに行くと言った。家族は反対したが、祖父はただ事ではないと言って、その場を去った。一目散にお金を持って行き、ありったけの食料と飲み物を買って行ったが、もうすでに食料は減っていた。家で飼っていた金魚も水槽から飛び出し、気を失っているようだった。

祖父に後から聞いた話では、ベッドで寝ていた妹にタンスが倒れてきたが、ベッドで止まり隙間ができ、危機一髪で命が助かった。テレビをすぐ付けたがすぐに切れ、ラジオを用意して状況を家族で確認した。

また、家の前の道路はひび割れが発生していた。家の中で一番重たいピアノも動いていた。その夜、テレビをつけると長田の街が映し出された。焼け広がっていた映像を見て、母は垂水区まで燃え移ってくるのではないかと、祖父に聞いた。ガスと水道は止まっていたので、水は近くの水道局に家族全員で並んで水をもらいに行った。お風呂は、近くのゴルフ場に並んで入りに行った。多くの人が来ていたために、湯船はいっぱいだった。

少し落ち着いてから、食料を確保するために、田舎の方に買い出しに行った。祖父は大阪の職場に行くために、かなりの遠回りをして車、電車、歩きで向かった。

当時、母の妹は大学受験の最中だったが、交通網が麻痺していたため、祖父が車で試験会場まで送った。もう1人の高校受験の妹は、私立の入試が書類審査の受験に変わった。

4 話を聞いて

今回改めて母から話を聞いて、母は5人家族で2人の妹は受験生といった特殊なケースだったと感じた。私は兄が京都に住んでいるので、安否確認をすぐにはできないと思った。また、阪神・淡路大震災は、火事も同時に発生していた。二次災害を減らすための備えや判断が大切だと思った。災害時、祖父はこの

状況を瞬時に理解し、コンビニへ食料を買いに行ったことに対して、私も祖父のように素早く判断したいと思った。

また、阪神・淡路大震災では目の前の命を救うことができないこともあったため、この教訓を未来に活かしていくことが必要だと感じた。今後の日本では少子高齢化が進み、若者の人数が減る中で救助活動や地域コミュニティを作っていかなければならないという状況を理解し、今私自身ができる最善を尽くすことが大切だと思った。

5 祖父と父の存在

私の祖父と父は警察官である。祖父は高校卒業後から定年である 60 歳まで働き、また父は警察学校の教師だった経験もあるということは、警察官になってからの努力があるからだと思う。私が小さいときは父の努力に気付かず、ただ憧れの職業と思っていた。しかし、父の努力に気づいた時には私自身も努力することの大切さに気付かされ、私も努力して進路実現したいと常に思うようになった。そのため、私は部活動で何度も挫折したが、その度に努力を重ねた。そのため、入部当初よりも精神面で成長することができた。

一方で、祖父は私に防災の知識を伝え私が困難に直面した時に、いつも励まし、支えてくれた。私も誰かを支え、影響を与えることができる人間になりたいと思うようになった。

6 環境防災科

(1) きっかけ

私が中学生の頃、友達と帰る途中に煙が上がっている所を目撃した。そこには燃えている家の中から市民を救助している消防士の姿があった。その姿を見て、私も市民を救うことのできる人間になりたいという強い責任感を抱いた。その目標を実現するためには、防災に関する知識や過去の災害を知ることが必要だと思った。舞子高校環境防災科では、消防学校体験入校を行っていることを知り、実際に消防士がどのような訓練をしているか学ぶ経験ができると思い、舞子高校環境防災科を目指すきっかけになった。

また、私は災害にも興味があった。今日では災害の頻度が増え、異常気象も伴っている状況を見て、こういった災害を詳しく学ぶことは、日頃からの備えに繋がると感じた。そのため、今後災害が発生しても、過去の災害を学んでいれば防げることもあると思った。言い換えれば、既知を増やせば、未知の出来事にも対応できると思った。

(2) 入学後

私は無事、舞子高校環境防災科に入学することができた。環境防災科では、専門的な授業が組み込まれていて、パソコンを使ってレポートを作成、発表があった。授業では外部講師の方が舞子高校に出向いてくれることも多くあった。その中でも、吉椿さんの講義では「最後のひとりまで」という目標を挙げている。阪神・淡路大震災では救えなかった命がたくさんあったので、その教訓としてこのような取り組みを行っていることに心を動かされた。

また、消防学校体験入校では 1 年生では初級、2 年生では上級に分かれていて、1 年生の時は規律訓練を行い、周りとの協調性を身に付けた。2 年生では部隊ごとに分かれて、様々な訓練を行った。暗闇体験では、周りが見えない状態で人を見つけなければいけない大変さを知ることができた。この 2 年間を通して、消防士の方々が日頃から厳しく、熱心に訓練を行っている姿を見て、私自身この夢に対しての責任感を感じた。

1 年生、2 年生、3 年生と垂水消防署で実際にどのような訓練の日頃行っているのかを体験させていただいた。1 年生の時は、夏休みに 3 日間という長い期間で内容の濃い訓練の日々を送った。毎朝、消防士の方は 1 日交替で前日の報告などを行っていた。日を重ねるごとに訓練の質や声など前日より意識が向上していた。

2 年生では、1 年生よりも短い期間だったが去年の経験を活かして、訓練のスピードも視野に入れて行うことができた。

全国防災ジュニアリーダーオンライン会議では、初めての参加だったが良い経験を積めたと思う。住んでいる地域によって、どのような防災対策が行われているかなど共有し合うことができた。また各校の取り組み発表では舞子高校の取り組みを全国の学校に広めることができた。この会議で学んだ新たな知識を身に付け、将来に活かしたい。

(3) ボランティア活動

入学当初、私はボランティア活動を学業の次に優先すべきことだと思っていたが、そうではなく学業、

部活動、ボランティア活動の優先順位に驚いた。この3年間で私は多くのボランティア活動に参加させていただき、ボランティア活動の意味ややりがいを感じることができた。また、誰に防災を伝えるのかによって伝え方が変わってくることを学んだ。

私は募金活動を舞子高校と駅で行った。舞子高校では緊張感があまりなく、活動を行うことができたが、駅では違った。駅に来る人は年齢層もバラバラで、言葉遣いを考えた。東日本大震災への募金で、10年経った今も震災の影響を受けている人がいることを考えた。東日本大震災は震災複合災害と言われ、地震と同時に津波、福島第一原発事故も発生した。福島原発事故はNBC災害と呼ばれ、救助がスムーズに行われない場面も多くあり、困難なできごとだった。NBC災害のNはNuclear(核)、BはBiological(生物)、CはChemical(化学)による災害の総称で、特殊災害とも呼ばれている。

7 夢と防災

(1) 将来の夢

私の将来の夢は、消防士になることだ。その中でも救助隊員を目標としている。救助隊員はレスキュー隊員とも呼ばれている。

小さい頃は、父や祖父の職業である警察官に憧れていたが、実際に火事の現場を目撃した時から消防士への思いが固まった。また消防士の中でも最前線で救助活動を行い、人々の命を救う救助隊員に憧れた。救助隊員は山岳救助や水難救助の時、精神的にも体力的にも過酷な状況下で行うため、自身の体調を管理、把握し救助に努めたい。

私は環境防災科で様々な職種の方々から講義を聴くことで防災への取り組み、減災の方法などの多くの知識のほか、語り部さんの深い思いを学ぶことができた。将来、救助隊員として働くうえで大切にしていきたい言葉をたくさん継承していただいた。

将来消防士になることができれば、地域の人との交流を通して、防災意識を持ってもらい、災害に強いまちづくりがしたい。災害時には、自助の割合が半分以上の割合を占めることから、一人ひとりの防災に対する意識を変えていきたい。

(2) 防災面

阪神・淡路大震災の教訓として、震災などの大規模災害に備えて、「高度救助隊」や「特別高度救助隊」が配備されている。これらの部隊は防災の知識が必要不可欠だ。そのため、環境防災科で学んだ知識を最大限に活かせると思う。また災害時には災害から人々を守る中心人物となり、通常時では災害に対しての取り組みを促し、防災・減災の必要性を広げていきたい。

阪神・淡路大震災では自助・共助の割合が97.5%と非常に高いため、市民一人ひとりの防災意識が大切だと考える。そのため、環境防災科の一員としてこの3年間で学んできたことを地域の人との交流や防災活動を通して、少しずつでも伝えていきたい。

また、防災力のあるまちづくりのために、一つひとつの家が災害に対して安全な状態かどうか、確認することも大切だと思う。最近では、ゲリラ豪雨によって突然起こりうる土砂災害や、台風などの威力が増してきている。今後南海トラフ巨大地震の発生確率が高いとされている中で、どのようなリスクに備えて、いかに被害を減らせるかが大事な点だ。南海トラフ巨大地震では、多くの人的被害のほか、経済的にも大きな影響を受けると予測されている。そのためには、市民が一体化となる必要があると考える。例として、魅力的なまちをつくり、観光や交流の場にすることだ。にぎやかなまちになると、コミュニティの輪が広がり、活気が良くなると思う。そうすることで、地域の防災活動への参加や祭りなどへの参加者も増えると思う。だからこそ、市民の方々に自助、共助の大切さを防災活動の中で伝えたい。

大切なことは1人だけの思いだけではなく、地域の問題として、より多くの市民と想いを共有することだと思った。

8 最後に

今回、母の話とともに阪神・淡路大震災について詳しく学ぶことができた。私は阪神・淡路大震災を経験していないが、過去の教訓を忘れずに後世に残していくことが大切だと感じた。私は、経験していないことを伝えることに最初は違和感があったが、日本に住むうえで災害に遭遇することは特別なことではないと感じた。また、経験者の話を聞くことだけで終わるのではなく、その情報や過去を共有することで、一人ひとりが減災に取り組むことができ、未来を変えていけると思う。災害を他人事ではなく、身近な存在として捉え、意識することが大切だ。少しの意識が積み重なることで、人生は変わると思う。自分自身の人生が変われば、周りの人生も変わっていくと思った。

今世界は新型コロナウイルスと去年から戦っている状況だが、なかなか落ち着かない。この状況はいつまで続くのか疑問に思う。今後も向き合っていかなければいけない存在だと私は思った。しかし、いつかこの状況が収まることを願って、対策に取り組みたいと思う。そして、地球温暖化の対策も世界で取り上げられているように、皆が1つの方向に向かって取り組むことで困難を乗り越えることができると思った。

また、情報社会である現代ではすぐに情報が広がるため、フェイクニュースやデマ情報がまわっていることがある。災害時には多くの人々が情報を求めるため、正しいものと間違っているものの区別が大切で、その嘘の情報に翻弄されて命を失う人もいるため、情報発信には気を配りたい。

今回『語り継ぐ』を考えることで私の今までの経験を改めて見つめなおすことができたと思うし、将来の夢への意識が変わっていくのが分かった。過去の経験をどうやって未来に繋げていくか、人だけでなくモノも変えていくことが防災に興味を持ってもらえるために必要だと考えた。

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に阪神・淡路大震災が発生。震度7の大地震が神戸の街を襲った。

私は被災者ではない。しかし、これから生きていく上で被災者になるかも知れないし、大きな自然災害に合わずに一生を暮らして過ごしていく可能性もある。これは誰にもわからないことだ。

概要

発生日時	1995年 平成7年1月17日 午前5時46分
最大震度	7
M(マグニチュード)	7.3
震源	淡路島(野島断層)
犠牲者	死者 6435人 負傷者 43792人
特徴	縦揺れと横揺れが同時に発生
震源深さ	約16km
被害	全壊約10万5000棟 半壊14万4000棟
被害総額	約9.9兆円(特に建築物や社会基盤施設の被害が多かった)
主な死因	窒息・圧死

【出典】<http://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/pdf/101.pdf>

2 環境防災科に入った経緯

私は小さい頃から消防士という夢があったが中学校の時は自分には無理だと思い込んでいる自分がいた。中学校3年になり進路を決めないといけない時も中々行きたい高校を決められずにいた。そんな時に舞子高校環境防災科のパンフレットを見つけ、初めはオープンハイだけでも行ってみようという軽い気持ちだった。オープンハイでは、多くの中学生の前で堂々と話す先輩の姿を見た。人前で話すことが苦手だった私には衝撃を受けた。それだけでなく防災を楽しんで学んだことも覚えている。中学校での防災教育とは全く違うものだった。中学校では阪神・淡路大震災が発生した日と東日本大震災が発生した日だけ震災のことをすこし学ぶ程度だった。中学3年生ながらに他にも震災が起きた日はあるはずなのになんでこの2日だけ震災のことについて学ぶのか不思議に思っていた。他にも震災があるのに犠牲者が少なかったら学ばないということが、私に防災教育は形だけのものになっていると感じさせていた。そんな時にオープンハイで災害での教訓を伝えていくという言葉聞いて、環境防災科は中学校とは違って形だけではないと感じた。そのようなことから環境防災科で学びたいと感じた。

3 環境防災科の授業

環境防災科では色々な講師の方から講義を聞かせていただいた。その中でも私の中で印象に残っているのが大阪市立大学の准教授の方からの講義だ。講義内容は人間は自分たちが作ったものによって自分たちを傷つけているというような講義内容で、震災時にとっさに行動できた人の77%の人は怪我をすることはなかった。逆に震災時に動くことができなかった人は57%の方が怪我をしなかった。このことから言えることは震災が発生した時に諦めずにとっさに身を守れば怪我をしないという考えをもつことが大切だと感じた。人間は胸を圧迫されると亡くなることが多い。人間は胸を圧迫されることで、心臓、肺、肝臓等の重要臓器や大動脈等の大血管を破裂させる危険がある。このような知識があるだけでとっさに身を守れば怪我はしないという考えをもつことができると思う。

4 父の被災体験

父は1月16日の晩、友人に「泊まりに来ないか」と誘われ、よく父はその友人の家に泊まりに行っていたがその日は気が向かず誘いを断る。そして1月17日の早朝、阪神・淡路大震災が発生。父はこのような大地震を体験したことはなく現実なのか夢でも見ているのかわからなかった。

激しい揺れの中、家族が心配になり台所に行くと曾祖母がお弁当を作っていた。家が揺れていることによって踊っているかのように見えた。家族の確認をした後、母のことが心配になり、母の家までバイクを

走らせた。母も母の家族も大きい怪我をおっていなかった。

でも父は嬉しそうな反応が出来なかった。母の家までの道中でマンションが潰れているのを目の当たりにしたからだだった。昨晚泊まりに来ないかと誘って来た友人のマンションによく似ていた。父は母の顔をみてすぐ、友人のマンションへとバイクを走らせた。道中は生きた心地がしなかった。父の内心は友人のマンションに着くのが怖くてしかたなかった。友人のマンションに着きマンションは潰れていた。でも潰れたマンションの前には友人が立っていた。体全身の力が抜けたように立っていた。父は友人を見つけた時に「よかったなあ」と言ってあげたかったが言うことは出来なかった。友人には小さい頃から育ててもらっていた祖母がおり、震災当時も2人で暮らしていた。マンションの前に立ち尽くした友人の側に祖母の姿はなかった。父はどのような言葉をかけるのが正解なのかわからなかった。

5 母の被災体験

母は震災が起こった時、金縛りにあったように動くことができなかった。母の家の近所は揺れが少しましなこともあり外を見ても全壊しているような家はなかった。母はその景色を見て安心していた。母はこの時は長田の町があのような姿になっているとは思ってもいなかった。しかし、父が母の家に様子を見に来た時にただ事ではないことがわかった。父は普段ふざけた事を言うことが多かったり母が悩んでいる時や落ち込んでいる時には「べっちゃない、べっちゃない(=大丈夫、大丈夫!)」ということが父の口癖だった。しかし、その日はその口癖を言うことはなかった。

母は家に来た父のことが心配だったが安心する暇もなく、父は全く喋らずに母の顔を見て少し安心したような顔をしてバイクにまたがった。父のあのような不安でどうしようもないような顔を見るのは最初で最後だった。母は父の家族も心配で無事なのか確認もできないままで、できるのなら一緒にいたかったが言うことができなかった。その後母は父から話を聞き、父の友人が助かったのも、父が助かったのも泊まりに行くことをやめたからだと知った。友人の家に泊まりに行った時には父か父の友人どちらかはベッドで寝てどちらかはソファで寝ていた。たまたま阪神・淡路大震災が発生した日には友人はベッドで寝ていたので助かっている。もし、泊まりに行っていたら父か父の友人は亡くなっていたかもしれない。

6 消防士を目指す理由

私が消防士を目指すきっかけの1つは父の影響だ。私の父は神戸市環境局に勤めている。大きい災害が発生した時には2週間程実際に現地へ行って神戸市のごみ収集車や民間のごみ収集車等に指示を出してごみを片付けるということをしている。私が小さいとき、父に会えなくなるのがとても辛かったのを覚えている。中学生になり西日本豪雨が発生して父は総社市に行くことになった。中学生の自分は寂しい気持ちの半面とても父のことを誇りに思っていた。父は災害派遣から帰ってきたときは毎回、消防士の方が最前線で活躍していたと言っていたのをよく覚えている。父は人から感謝されるような人間になれるとよく言っていた。小さい時はこの言葉の意味が全くわからなかった。今の自分の考えでは『消防士』という職業は、多くの方から感謝してもらえる職業だと考えている。このようなことからとてもやりがいのある職業だと感じた。

7 消防学校

私は消防学校で多くのことを学んだ。実際に消防士の方が行っているような訓練をすることは初めてで貴重な経験になった。特に訓練では声の大切さを学んだ。消防士は命がけの仕事であり仲間と声を出し合って一体感ができる。私の弱い部分である「これぐらいやったらいい」というような甘い考えは通用しなかった。1年生の消防学校では指導員の方について行くので精一杯だった。動きも素早く無駄のない動きで暑くて倒れそうになったことも覚えている。2年生の消防学校では中隊長という役職を任された。嬉しかった半面、不安もあった。中隊長という立場で去年の消防学校の時よりも厳しいことを言われることもあったが、次の日になっても声が出せない程ほど声を出してやりきることができた。ほんの少しだけど夢に近づくことができたような気がした。このような経験は環境防災科以外では体験出来ないことであり、環境防災科だからこそ経験できたことだ。思い出したくないぐらいしんどいこともあったけど今では自分の自信になっている。

8 環境防災科で学んだこと

私は環境防災科でボランティア活動の本質を学んだ。環境防災科で学ぶまでは、ただただ何も考えずに

被災者の方のために炊き出し等をする事だと思っていた。しかし、それは被災地について調べておかないとかえって迷惑になることがある。ボランティア活動は、色々な方の協力の上で出来ていることであり活動できることに感謝しないといけないことだと思う。ボランティア活動をしているという考えではなくボランティア活動をさせてもらっているという考え方が大切だと感じた。人前で喋ることが苦手な私が初めてさせていただいたボランティア活動は垂水駅での募金活動だった。私は人前で喋るのが苦手なので大きい声で「募金お願いします。」と言うことにとっても躊躇した。でも私は高齢の方が「頑張ってるね。」と言って募金していただいたのを見て躊躇している場合ではないと感じた。半日という人生においてはとても短い時間ではあるけど私の中では自分が変わった半日だったように感じた。

新型コロナウイルスの影響もあり、自分の思うようにボランティア活動に参加することができなかった。しかし、活動できなくても自分達にはできることがあると考えた。新型コロナウイルスに感染するとボランティア活動だけでなく学校に登校することすらできなくなるのでマスク着用を徹底することを決めた。でも慣れないことから無意識でご飯の時や飲み物を飲んでいる時などや、自分がマスクをしていてもマスクをしていない人に話しかけてしまうことがあった。これでは意味が無いので新しいことを徹底することは簡単ではないと感じた。

私は普通の高校生ではなく環境防災科の生徒なのでどこの高校生よりも意識を高く持つべきであり、臨機応変に対応していけないと感じている。私が学んできた災害はいつ起きるかもわからず、今大地震が起きない保証はどこにもない。私たちはそのような甚大な自然災害に対応していけないといけない。災害大国日本において、地震で多くの方が亡くなったのに家具の固定を行っている家はどのくらいの割合なのか。現状ではあまり多くないと思う。ニュースで南海トラフ巨大地震がよく取り上げられている。しかし、南海トラフ巨大地震津波浸水想定図を見ている人はどれぐらいいるのか。私も環境防災科に入っていなかったら一生見ることがなかったかもしれない。そもそも南海トラフ巨大地震津波浸水想定図が公表されたことすら知らなかった人も少なくはないと思う。私は環境防災科で自分が災害時に生き残る方法や人の役に立つことを学んで、無知は罪だと感じた。阪神・淡路大震災ではクラッシュ症候群で多くの命が失われた。知識がないことが理由で助けようとしたはずなのに人の命を奪ってしまうこともある。「知りませんでした。」では通用するわけがないと私は考える。環境防災科の目的は人に伝えるということなので1人でも多くの人々に3年間学んだ防災の知識を伝え、無知は罪だということを実感してもらうことが大切だと感じた。

9 消防士になって環境防災科で学んだことを活かすには

私は環境防災科で学んだ自然災害の知識や災害時の知識をどのように活かすのかが何よりも大切なことだと感じた。どれだけ知識があっても使わなければその知識はなんの意味もないものになってしまう、ただのうんちくになってしまう。3年間学んだ貴重な知識を有意義なものにするのも自分であって、意味のないものにするのも自分だ。私は日本でも数少ない防災を学ぶことができる高校に入学したからには学んだ知識を無駄なものにせず、有意義なものにしたい。消防士になって私の知識を活かしてできることは、避難訓練を今以上に日常に落とし込むこと。避難訓練は学校で行うことがほとんどで、自然災害はいつ起きるかも予測することはできない。学校にいる時に地震が発生した場合には動くことができても、街中を歩いている時や出掛けしている時に震災が起きたら臨機応変に動けるのか。ほとんどの人間はパニックでどうしていいかわからなくなってしまう。実際、私も去年の消防士の方の講義を聞くまで避難誘導を待つことしかできないと思っていた。消防士の方に教えていただいたのは行動に起こす前に自分の上を見ることが大切だと教えて頂いた。このようなことは消防士として活動してきたからこそ感じたことだと思う。私は環境防災科に属しているので実際に消防士の方から講義をしてもらえるような時間があるが、普通の高校、普通科にはそのような講義をしてもらえる機会はない。このような機会を環境防災科だけでなく色々なところに共有する必要があると言える。共有することによって救える命はないかもしれないけど人間の尊い命が無駄になるようなことは防ぐことができると思う。

このようなことから避難訓練を学校内の想定で行うのではなく、学校以外の想定も行うことによって色々な状況に臨機応変に対応できるようになると考えている。ハザードマップの確認も必要だ。実際に、自宅が土砂崩れ警戒区域に指定されているけれども、高校に入るまでそのことを知らずに生活してきた人もいる。自分が住んでいるところのハザードマップは避難訓練の時などにみる時間を設ける必要がある。これから時間が経つにつれて過去の震災は薄れてしまう。実際に大地震を体験した人が亡くなっていくと僕たちのような防災について学んだ人間が動いていく必要がある。さらに今は高齢化社会で高齢者の人数がとても多く、体の不自由な方や俊敏な動きをすることが難しい方々をどのように自然災害か

ら守るかということが課題になる。老人ホームなどでは、消防士が現地に行って避難訓練を実施し、老人ホームのヘルパーの方へ指導をするなど、高齢者を自然災害から守るために対策をとる必要があると思う。

阪神・淡路大震災の時、消防署が潰れて機能しなかったのも、消防署の耐震化も必要だと言える。このような緊急時に機能できなくなることを防ぐためにも耐震化は必須だ。このことは消防署だけでなくすべての建物に共通して言えることであり、家や建物が潰れなければ人が亡くなることも減らすことができるので、耐震化はすべての建物に言えることだと思う。

10 終わりに

私は『語り継ぐ』を書くにあたって、環境防災科で防災を学ぶことができてよかったと改めて感じた。環境防災科では3年間でとても多くのことを学んだ。将来の夢に活かせることや、災害時やこれから生活していく上で活かせること等々、無駄なことは何一つなく、色々な方から講義を聞いたり、色々な過去の災害の教訓を学んだ。これからは、このような知識を有意義なものにしていきたい。

「語り継ぐ」

荻野 友伸

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分、阪神・淡路大震災が発生した。あれから、今年で27年目を迎える。現在では、神戸市民の半数が阪神・淡路大震災を経験していない。私もその中の、1人である。災害大国、日本に住んでいる以上災害と切っても切り離すことができない。今後、被災者となる可能性は高い。その時のために過去の災害を知り、教訓として生かすことができるように語り継ぐことが必要である。

2 語り継ぐ

(1) 父の話

阪神・淡路大震災当時、大学生だったため、地元(兵庫県丹波市)を離れ京都で、1人暮らしをしていた。早朝に、「ドンッ」という激震で目を覚ました。初めは、地震とは気付かずにポルターガイスト現象が起こったと思った。ポルターガイスト現象とは、心霊現象、都市伝説などのことだ。それから少し時間が経ち、テレビをつけると神戸で大きな地震が発生した事と、大火災が起きていることをニュースを通して知った。自衛隊のヘリコプターより先に、マスコミのヘリコプターが飛んでいた。それから実家のことが心配になり、電話をした。電話は、すぐにつながり家族全員無事であることを確認した。実家では、壁が崩れたり、お風呂のタイルにひびがはいったりなどの被害が出た。電話越しで、祖父が家族の中で一目散に家の外に避難したことを聞いた。その行動に対して、家族に声をかけるなどの安全確認をしてほしかった、とあきれ口調で話していた。その後、当時アルバイトをしていたスーパーでは、すぐに水が売り切れた。祖父は、NTTに勤めており、被災地で電線などの復旧作業などをしに行き、1週間ほど家に帰って来なかった。実家は、町内でも特に被害が大きく、阪神・淡路大震災を通して家のリフォームなどを行い、家の耐震強化をした。家族全員無事だったが、あらかじめ家の耐震強化や家具の固定などしておくべきだった、と振り返っていた。

(2) 父の話を聞いて

父の話を聞いて、神戸だけでなく京都でも大きな揺れが襲ったことを知った。いつも陽気な父が、真剣な顔で話をしていて、どれほど恐ろしかったのかが伝わってきた。祖母の家では、未だに、お風呂のタイルにひびが残っており、阪神・淡路大震災がどれほど大きな揺れだったのかを想像することができる。現在では、耐震強化がされている家が多いと思うが、震災当時は、少なかったことが分った。事前に耐震強化や家具の固定などをすることの大切さを改めて感じた。祖父は、震災当時NTTに勤めていて、阪神・淡路大震災後、すぐに最前線で復旧活動を行っていたことを、父から話を聞くまで知らなかった。祖父は、私が4歳の時にがんで亡くなっており、祖父から直接、阪神・淡路大震災の話を聞いたことはない。祖父との思い出は、トラクターに乗せてもらった思い出と、病院でのお見舞いの記憶しかない。しかし、高校1年生の時にNTTドコモの人の講義を聞いて、震災当時どのような復旧活動を行っているか、阪神・淡路大震災からの教訓を聞くことができた。講義のことを踏まえて実際に、祖父から直接、阪神・淡路大震災の話を聞きたかった。そして、祖父が経験したこと、感じたことを今後に生かしていきたい。

(3) 0先生の話

震災当時、0先生は長田商業高校に勤めていた。震災後、1週間生徒の搜索活動、安全確認を行った。生徒の多くは家族とともに、大国小学校や長田中学校などの避難所に避難をしたので、そういったところに足を運び生徒の安全を確認した。また、新長田の松風町では、町が丸焼けになっていた。生徒が松風町に住んでおり、丸焼けになった生徒の住所であるところにお知らせの手紙を置いて帰った。その途中に、自衛隊員の方にこれ以上奥に進むと、まだ火が出ている所があったり、ガスが出ていたりするから危険だと知らされた。がれきと化した家の周りには、多くのマスコミがいた。もともとあった住宅街は、家が崩れ、火が出火し、丸焼けになり、焼け野原と化していた。幸いにも長田商業高校の生徒は、全員無事だった。しかし、生徒のなかには、親族、友人を阪神・淡路大震災によって亡くしている生徒もいた。教員として、長田高校(長田商業高校)で、避難所の手伝いを行った。また、警察、自衛隊、地域住民の代表の方々と毎晩心理的デブリーフィングを行った。学校再開までには、約1か月かかった。1か月間授業はなかったが、入試は通常の予定で行われた。阪神・淡路大震災をきっかけに、兵庫教育大学で心理について学んだ。理由としては、当時PTSDという言葉は聞きなれないものであり、生徒たちがPTSDにならな

いように、PTSD について学びたいという気持ちと、研究したいという気持ちがあったからだそうだ。

(4) 0 先生の話聞いて

0 先生の話聞いて、阪神・淡路大震災後、教員として行ったことを知ることができた。先生の話の中で伝わったことは、自分のことよりも生徒のことを第一に考えて、行動していたことが伝わってきた。1 週間生徒の搜索活動、安全確認、焼け野原になった長田の街を何度も歩いてきたことが、話を通じて伝わってきた。さらに、自衛隊員の方にこれ以上奥に行くと危険と伝えられるほど、生徒の搜索活動を必死に行っていたことも伝わってきた。私は、高校 2 年生の時に授業を通じて、長田の町歩きを行った。長田の町歩きでは、区画整理事業が行われた道路や、行われていない阪神・淡路大震災で家屋が残った道路を見た。区画整理事業が行われた道路は道幅も広く、住宅間の間が保たれており、阪神・淡路大震災の教訓がいかにされていることが分った。しかし、阪神・淡路大震災で残った住宅は、道幅も狭く、阪神・淡路大震災前と同じだった。区画整理事業では、市民の意見を取り入れて行われたのにもかかわらず、地元の町を去っていった人が多かったと教えられた。高齢者の方に配慮した取り組みもあったのに、そういった地元を去らなければいけない人がいたことに対して改めて阪神・淡路大震災の恐ろしさを痛感した。また、長田の商店街では、阪神・淡路大震災前は、人通りも多く、多くの人でにぎわっていた。しかし、阪神・淡路大震災後、商店街は復旧されたのにも関わらず、昔のような人通りはないように感じた。さらに、シャッターが閉められた店が多かった。商店街は復旧・復興されたが、ほんとうの復興といえるのか疑問に感じた。0 先生には、実際に授業をして心理テストをしてもらい、白紙のなかに、自分の想像した木を書いた。その木から様々な自分の心情が表されているということを知って驚いた。自分は、父親の影響を受けていることなどが分かった。心理テストを行い自分のことを見返すことができ、とても興味を持った反面、鉛筆と紙一枚で心情を読み取れるのだ。また、PTSD については、過去の事例である JR 福知山線事故を元に、勉強した。事故に遭った当事者だけでなく、関わった家族や看護師などの人々が、PTSD になってしまった記事を読んだ。自分は大丈夫だ、と信じていても徐々に精神的に負担がかかり、気づいた時には何もしたくなくなるというような気持ちに陥ることを知った。自分で自分のことを大丈夫だと思うことは誰しもがすることだと思う。さらに、心のサポートを必要としている人に対して、周りの人が「大丈夫」などの声掛けをすることが大切なのではないのかと感じた。今後災害現場に行った際に、このようなことを意識して取り組みたい。自分のことができて初めて、人を助けることができるという考えを大切にしたいと思う。

3 環境防災科

(1) 入学したきっかけ

将来、消防士として人の命を救いたいと思っていた。消防士に近づくためにどの高校に行くべきか考えたときに、舞子高校の環境防災科があることを知った。舞子高校に通っていた姉から、環境防災科では、消防士の方の講義を聴いたり、消防学校体験入校ができたりすることを聞き、環境防災科について興味を持った。

中学校 3 年生の夏、舞子高校環境防災科のオープンハイスクールに参加した。オープンハイスクールではクロスロードを行った。クロスロードの中で印象に残っていることは、災害時に被災され、重傷を負っている方をカメラに収める必要があるか？という議題だ。私は、重傷を負っている人の気持ちを考え、カメラに収める行動を理解することができなかった。しかし、環境防災科の先輩が、「メディアで報道することで、被災地の現状を知らせることができる。また、報道することによって、その災害を今後見直すことができる。」と、おっしゃっていて、その意見に対して、共感することができた。環境防災科の先輩の話の中で、環境防災科にはいれば、授業を通して災害のこと以外にも、人との関わり、コミュニケーション能力が身につくと教えてもらった。先輩も初めは、内気な性格だったらしく、人と話すことは苦手だったそうだ。しかし、オープンハイスクールでの先輩は、司会進行がとても上手で、人の意見をふまえたうえで自分の意見を発表していて素晴らしいなと思った。このような要因から、環境防災科に進学したいと思うようになった。

(2) 環境防災科の授業

環境防災科の授業では、ディスカッションや、校外学習、講義を聴く機会が多くあった。印象に残っていること、伝えたいことはたくさんあるが、その中から 2 つのことを主に紹介する。

1 つ目は、消防学校体験入校だ。1 年生の時には、初級コースだった。主に、規律訓練、体力トレーニングを行った。規律訓練では、声を出すことはもちろん、隊でそろった動きを行うことが大変だった。体力トレーニングでは、体力はもちろん精神的にも、とても厳しかった。実際に、消防士の方々が行ってい

る規律訓練や、体力トレーニングはこんなものではないと感じた。将来の夢である消防士が、本当に今の自分に務まるのかを考えるきっかけになった。私は、消防士になる夢を諦めるべきなのではないかと強く感じた。しかし、消防士の方の講義を受けて、やはり最前線で人の命を救うことのできる消防士になりたいと強く思った。講義の中で、自分の命を守ることができて、初めて人の命を救うことができると、消防士の方がおっしゃっていた。この話を聞いて、どんなに過酷な状況下においても自分の命、人の命を守ることができるように、日々厳しい訓練を行っているのだと感じた。2年生の時は、上級コースだった。上級コースでは、隊に分かれて消防体験を行った。私は、中隊長という役割だった。しかし、中隊長という役割のプレッシャーからか、貧血で倒れた。パイプ椅子に座りクラスメイトが規律訓練をしている様子を見ることしかできなかった。中隊長という役割に対してよりも、自分の無力感に情けなさを感じていた。午後からは、消防訓練に参加することができた。1年生の時には、行われなかった放水訓練や器具の使用方法について学んだ。放水訓練では、中隊長として隊長の指示のもと、隊をまとめることができたと思う。消防学校体験入校を通して、消防士という職業のすばらしさと、消防士の大変さについて身をもって感じるすることができた。また、自分のこれまでの行いを見直し、今後の学校生活について考える良い機会になった。

2つ目は、高校1年生の時に行った多聞東小学校の小学生と共に地域の避難場所や、危険なところ、消火栓などの確認を行う安全マップ作成だ。小学生と地域を歩く前に事前準備を行った。事前準備の際に小学生の通学路を歩いていると自分と同じくらいの高さのブロック塀を多く目にした。もし地震が発生して、ブロック塀が倒れてきたらと考えるととても恐ろしかった。小学生に危険だと感じてもらうためには、どのように伝えたらよいのかを事前学習を通して考えた。小学生に大きな揺れが起きると、この頑丈なブロック塀も倒れてくるということを伝えた。小学生と通学路や地域を歩くことによって危険な箇所を伝えることができたと思う。また、小学生と共に地域を歩くことによって、自分では気づくことができなかった発見も多々あった。授業の一環として防災について楽しく学ぶことができてとてもよかった。

4 夢と防災

(1) 将来の夢

私の将来の夢は消防士になることだ。消防士になりたいと強く思うようになったのは、中学校1年生の夏、サッカーの練習中に熱中症で倒れて救急車で運ばれた。私は、救急隊員の方々に命を助けてもらった。このころから、人の命を救うことのできる消防士になりたいと強く思うようになった。

(2) 将来像

私が、消防士として働くときに大切にしたいことは、市民の安心・安全な暮らしを守ることのできる消防士になることだ。そのために、環境防災科で学んだことを生かしていきたい。近年では、南海トラフ巨大地震が30年以内に70%~80%の確率で発生するといわれている。そこで、私は防災を広げていく必要があると強く感じている。防災と聞くと興味を持ってもらえる方は少ないと思う。なので、防災に少しでも興味を持ってもらうために消防車や誰にでも関心を持ってもらえるものを用意することが大切だと思う。私も、小学校の時に警察官の方が学校に出向いて実施する防犯教室や交通安全の授業では、楽しさや、小学生にでも興味を持ってもらえる工夫がされており、今も記憶に残っている。楽しさや、興味を引ける様な取り組みを考えて、行いたいと思う。広い世代に防災を広めることで、もしもの時に、1人でも多くの命が助かると思う。消防士が助けることができる命には、限界があると思う。なので、防災教育を通して自分の命は自分で守ることのできる人が1人でも多くいてもらいたいと感じた。

また、消防士は、自分の命と人の命を守らなければならない。自分の命を守ることができなければ人の命を救うことができない。これから、自分のことは自分で行うことを当然にしていかなければならないと思う。残り少ない高校生活を通じて自分のことは当たり前に行えるように取り組んでいきたい。

5 最後に

様々な方々の協力のもと『語り継ぐ』を書き綴ることができたと思う。インタビューを通して阪神・淡路大震災の恐ろしさを改めて感じる事ができた。阪神・淡路大震災は、個人が変わっていくきっかけになっていたようにも感じた。父の話の中で、祖父が最前線で復旧活動にあたっていることを初めて聞くことができた。祖父がどのような気持ちで、復旧活動に取り組んでいたかを祖父から実際に話を聞いたかったというのが本音だ。また、O先生の話のなかでは、生徒のことを第一に考えた行動や、当時の長田の町の甚大な被害を想像することができた。子どもがPTSDにならないようにするために、自分自身が心理について学ぼうと思う行動力のすごさに驚いた。私も、来自分大切にしたいことが今後変わって

くるかもしれない。しかし、人のことを思いやる気持ちは必ず、どんな時にでも持ち続けたいと思う。あと残り少ない高校生活を通じて、さらに防災についての知識を深めることができるように頑張りたいと思う。

語り継ぐ

香川 剛大

1 はじめに

1995年1月17日5時46分。私が生まれた神戸の街に、阪神・淡路大震災が発生した。私は、この日から約8年後に、神戸の街に生まれた。私は、阪神・淡路大震災を経験していない。だが、神戸の街に住み、何かの縁で日本の中で数少ない防災について学んでいる舞子高校環境防災科に入学した。私は、「自分のことは自分で守り、家族や友達、地域の人々を助けることができるようになりたい。」と思っている。これは、志望動機にも書いた言葉であり、今でも変わらない想いがある。現在の私の夢は、高校の先生になることだ。この想いの中に、「生徒」という言葉を加えたい。想いから行動に移せるようにと、日々勉強に励んでいる。

2 母の被災体験（阪神・淡路大震災）

1月15日、母はポートアイランドのワールド記念ホールでの成人式に参加していた。成人式ということもあり、小学校の同級生とも約八年ぶりに再会した。

1月16日、何も変わらない、いつも通りの一日だった。まさか、翌日に神戸の街が一変するとも知らずに、夜まで遊んでいた。

1月17日、垂水区にある父の実家におり、ベッドで両親は寝ていた。父の「地震や。」という一言で母は目が覚めた。父曰く、最初は小刻みに揺れていたが、母は全く気付かず、寝ていた。母が目覚めた後、横揺れが激しくなり、次に大きな音とともに、2人がいたベッドが突き上げられるような縦揺れに襲われた。まるで、お弁当箱の中で、上下左右斜めに揺さぶられているような感覚で、自分がどこに位置しているかわからず、ずっと跳ねているようだった。父は、母に覆い被さり、倒れてくるタンスから守っていた。揺れている途中、母がふと外を見てみると、街灯がぱっと一瞬にして消えた。まさに、停電の瞬間だった。

揺れが収まり、暗い部屋の中を見渡すと、ブラウン管テレビが転がり落ち、本棚やベッドなどの家具がすべて部屋の真ん中に集中していた。まさか、神戸に地震が来るなんて、当時は誰も思っていなかった。関東大震災がまた東京で発生し、日本が終わったとその時は思っていた。

停電したためテレビが付かず、今のようにスマートフォンもないため情報が得られず、寒く暗い中、夜が明けるのをひたすら待っていた。待っている間も余震は何度も続いており、怯え、過ごしていた。

夜が明け、母の実家の安否を確認するため固定電話で電話をかけたが、何度かけても繋がらず諦めた。直接確認しに行くために外に出ると、隣の家がガレージに全て落ちていた。そのため、車を出すことができず、仕方なく家の中に戻りもう一度実家に電話をしてみようと試みると、奇跡的にその時だけ電話がつながり、家族の無事が確認できた。しかし、曾祖母に連絡が付かず、叔父が確認をしに向かっていると聞いた。それを聞き、叔父に任せましたが、母は長田区の海岸沿いにある古い家に1人で住む祖母のことが気になり、助けに行こうと父と一緒に祖母の家に向かうため、もう一度外に出た。そのタイミングで、車1台が通れるスペースは出来ており、車に乗り込もうとすると、黒い物が空から無数に降ってきていた。ずっと手で払わなければならないほどの量だった。その時はまだ、それが何かはわからなかった。車には傷が入っていたが、動かすことは出来た。

大きい通りに出ると、コンクリート整備された崖が崩壊し、その上に立つ家の基礎部分が半分以上見えており、家が浮いているように見えた。今にも落ちそうだった。道中は信号が停電によって機能しないためやや混んでいたが、パッシング等を用いてお互いが道を譲り合っていた。垂水を過ぎ、月見山に向かうにつれ、地面が隆起や沈降しており、車体が大きく揺れるようになった。それと同時に、異様なにおいと煙たさを感じた。板宿に入るところには、黒煙と遠くに火の手が上がっているのが見えた。この時ようやく、ガレージで車に乗り込む際に見た黒い物は、この火事によるものなのだとわかった。母は、黒煙と遠くに上がる火の手を見て祖母のことがより心配になった。恐怖は感じていたが、不思議と涙は出ず放心状態だった。板宿から新長田に近づくにつれ、あちこちで火の手が上がっているのが見え、早く祖母の元へ行きたかったが、なかなか車が進まず、やきもきした。やっとのことで、祖母の家にとどり着いた。

家は無事だった。周りの大きい家にもたれ掛かるようにして、辛うじて立っていた。祖母の家の近辺は、幸い火の手から逃れられていた。祖母の無事を確認しようと、インターホンを押したが、当然停電により鳴らず、外から声をかけても返事がなかったため、父が裏手にある土間から家の中に入った。しかし

そこには、祖母の姿はなかった。後から分かったことだが、先にたどり着いた叔父が祖母を車に乗せ、名谷の実家に避難させていた。

仕方なく垂水の父の実家に戻った。気づいたら、夕方になっていた。垂水の父の実家は無事だったが電気やガス、水道が止まっていたため、近くの星陵台中学校にプールの水を汲みに行った。そこには、何人もの人が同じように水を汲みに来ていた。水を汲みに行っていると、夜になり辺りは暗くなっていた。暗く寒い中、余震も大小続いており、恐怖心しかなかった。朝から何も飲まず食わず過ごしていたが、食欲もわかなかった。とにかく寒く、恐怖と相まって震えが止まらなかった。もちろん、一睡もすることができなかった。目をつぶってしまうと、またあの大きな揺れが襲ってくるのではないかと思っていたからだ。

1月18日、結局母は一睡もすることなく朝を迎えた。名谷にある父の祖父の家に様子を見に行った。そこでは、電気もテレビもついており、犠牲になられた方々の住所と名前が淡々と読み上げられていた。その時母は、3日前成人式で約8年ぶりに再会したばかりの小学校の同級生の名前が映し出されているのを見た。住所も、名前にも、間違いはなかった。この時初めて涙が出た。テレビから流れてくるニュースからは、長田の街が燃えている様子や見慣れた風景が一変していることにショックを受け、事の重大さに気づいた。昨日、神戸が震源だという噂を耳にしたけれど、それを確かめる術もなく、あくまでも噂だと思っていたものが、テレビのニュースによって淡路島が震源で、神戸にも甚大な被害を及ぼしていたのだと知った。今まで神戸は安全だと言われてきたものが、決してそうではなかったと思い知らされた瞬間だった。やはり、この日の夜も寝付けなかった。

1月19日、仕事に行ったら、前日に出勤していた人が、お店の片づけを済ませてくれていた。普段なら化粧品を買いに来るお客さんが、化粧品を買うことなく、水のいらないシャンプーを買いに来た。この商品はしばらくの間、特によく売れた。電気やガス、水道が止まっている地域がほとんどの中、お風呂に入れず困っている人が多くいたからだ。

1月20日以降、普段の生活リズムに戻すべく、無理にでも眠るように心掛けてはいたが、しばらくの間、眠ることも目をつむることもできずにいた。

現在、この出来事を詳細に思い出すだけでも、怖いという感情が蘇ってくると話してくれた。未だに、電気を真っ暗に消して寝るのが怖く、突然の大きな音も苦手になった。阪神・淡路大震災以降、何回か地震を経験しているが、少しの揺れでもまたあの時みたいに、大きな揺れに繋がるのではないかと思うこともある。

3 母の被災体験を聞いて

まず、私が今生きているということは当たり前ではないのだなと改めて思った。もし、母が阪神・淡路大震災を生き残ることが出来なければ、もし、父が大きな揺れによって倒れる家具から母を守っていなければ。こうやって、元気に毎日を過ごしていることに感謝しなければならない。

母は小学校の同級生を亡くした。聞いたことはあったが、ここまで詳しく聞くのは初めてだった。普段元気な母から、絞り出される言葉は、とても重く、初めて見る表情をしているときもあった。また、現在も阪神・淡路大震災の影響を受け、電気を真っ暗にして寝れないことがある等と聞いた。この話も、聞いたことはあった。「被災者」と言えば、特別な存在なのかなと思っていた自分がいた。しかし、一番身近である家族が被災者だった。特別なものでも何でもなかった。『語り継ぐ』を執筆するにあたって、母から話を聞く時、文章を優先し、親身になって話を聞くことが出来ていない時もあった。聞いている相手も、心にダメージを負っている。家族に寄り添うことが出来なかったのに、他の被災された方に寄り添えるはずがない。辛い記憶を思い出し、聞かせていただいているというのを、たとえ家族であっても忘れてはいけない。

人に寄り添うということは、緊急時はもちろん、平常時でさえ難しい。それは、訓練を重ねれば簡単になるというものでもない。そんな私が出来ることとは。今の私には、その答えを見つけることが出来ない。だからといって、諦めるものではないと考える。これからも防災を学ぶ中で、ヒントを見つけ出し、自分の中での答えを見つけたい。

4 東北訪問

(1) 東北訪問

私は、1年生の時、東北訪問に参加させていただいた。2年生では、新型コロナウイルス感染症の影響で行くことができなかった。神戸からバスで半日ほどかけて、宮城県まで行った。3泊4日で、大川小学

校の視察や、宮城県の大賀城高校生との交流、石巻西高校元校長斎藤幸男先生、語り部の雁部那由多さんによるワークショップ、舞子高校が毎年お世話になっているあおい地区の方々との交流など、神戸では出来ないような経験をさせていただいた。

なぜ、東北訪問に行きたかったかという、恥ずかしながら明確な目標はなく参加してしまった。何か感じるものがあつたらなと思っていた。今では、なぜ目的を持たずに行ったのかと後悔している。

(2) 1日目

長い移動時間を経て、夜にあおい地区に到着した。周りは暗かったが、舗装された道路、高い建物、道中のきれいな景色、街を歩く人々。本当に、あの時から8年前に大きな地震と津波がこの街を襲ったのかと疑うこともあった。そんな思いを持ちながら、あおい地区の集会所で寝たのを覚えている。

(3) 2日目

朝、硬い床であまり眠りにつけず起きた。阪神・淡路大震災の避難所では、寒い冬の中、体育館の冷たい床の上で、毎晩寝ていたというお話を聞いたことがある。集会所で寝るのは、そういった避難所を想定したものだった。あくまでも想定だが、そのような体験ができて良かった。午前、大川小学校に向かった。車窓からは、大きな川が見えていた。後から、北上川なのだと知った。バスから降りた瞬間、目の前に、崩壊した校舎、教室があつたであろう学校の景色が目に入ってきた。昨日見た、宮城県の街が嘘のようだった。語り部の方に、大川小学校について説明していただき、当時の光景が浮かび上がってきた気がした。次に、大川小学校の裏山に案内していただき、実際に登った。坂の勾配は急でなく、むしろ緩やかだったように感じた。裏山から見下ろすと、小学校と北上川は、とても近くにあつた。後から学習したことが、かつての大川小学校は、1960年に発生したチリ地震による津波の影響を受けなかったため、津波に対する対策はあまりされていなかったそうだ。今思えば、川の近くであるのにもかかわらず、高い校舎や建物はなかった。大川小学校の生徒も、自然学習などの「しいたけ狩り」で、この裏山に登ったこともあるそうだ。ここまで避難していれば、多くの生徒や教員の命が助かっていたと聞いた。そして、津波が大川小学校を襲うまでの時間何があつたのかを、聞いた。それらのお話を聞いて、当時避難誘導をした先生方は、裏山に避難をさせると余震の影響で山が崩れてしまう恐れがあるなど、色々な考えが入り混じる中、多くの生徒の命を守るという適切な判断を瞬時に求められて困惑していたのだと考えると、心が痛む。また、このような悲劇を二度と起こしてはならないと思った。それと同時に、自然の恐ろしさを感じた。自分にできる事として、どんな職業に就いていても、どんな立場であつたとしても、その場で適切な判断をもとに行動できるように、防災に対する知識をもっと増やしていきたいと思った。

午後は、宮城県の大賀城高校の生徒と防災ワークショップをした後、まち歩きをした。防災ワークショップは、大賀城高校の生徒と、兵庫県の防災ジュニアリーダーで行われた。

まちの中には、東日本大震災の津波が、この高さまで到達したという標識が電柱に貼られていた。教訓が語り継がれているのだと思った。

(4) 3日目

ポリ袋を使ってお米を炊いた。おいしく作り上げることはできなかったが、避難所での食事の難しさについて知ることができた。私が、おいしいお米の炊き方を習得することができれば、避難所で温かいご飯を振舞うことができるのではないかと思った。「青い鯉のぼりプロジェクト」のお話を聞き、人の命を簡単に奪っていく自然災害は恐ろしいなと改めて感じた。また、活動している組織がたくさんあると知れてよかった。流しそうめんをあおい地区の方々で行った。あおい地区の方々を招待するために、家に招待状を配りに行った。午後は、石巻西高校を訪問した。石巻西高校元校長、斎藤幸男先生に校内を案内していただいた。また、避難所運営について話していただいた。その話をもとに、東北訪問に参加した生徒が避難所を運営する立場になったことを想定し、避難所運営図を作成した。避難所には、多くの人が集まり、高校生の力が必要不可欠なのだった。晩御飯は、地域の人々と食べた。他校の生徒とも仲良くなることができた。その後、全員で東日本大震災復興応援ソングである「花は咲く」を歌った。集合写真も撮った。あおい地区の仮設住宅の集団移転のお話もしていただいた。

(5) 4日目

あおい地区の方々に見送られながら、バスで神戸に帰る。バスの中では事後学習が行われた。振り返りや、神戸に帰った後どのように防災を広げるかなど、東北訪問での学びを思い出しながら考えた。2日目の大川小学校視察で印象に残っている言葉が頭に浮かんできた。

「防災について学ぶことは、被害と向き合って悲しいものや怖いものだと思うかもしれないけれど、みんなで助け合って、生き残って、抱き合うほど喜んだりして笑い合うために、防災を学ぶのだ。」という言葉だ。その話を聞いたときは正直、何も思わなかった。しかし、帰りのバスの振り返り以降、こ

の言葉が頭から離れなくなった。防災を学ぶ上で当たり前のことかもしれないけれど、僕にとって防災についての考え方が変わり、もっと学びたいと思うきっかけになった。また、それと同時に家族や友達、語り継いでいく世代に自分の言葉で話したいと思うようになった。仲良くなった他校の生徒に別れを告げ、神戸に帰った。長い時間をかけて、夜、舞子高校に着いた。

(6) 転機

この何となく行ってしまった東北訪問だが、これを機に私の中での「防災」の目的を理解することができたとともに、ボランティア活動に対するやる気が湧いてきた。そこから、多くのボランティア活動に参加させていただいた。南あわじにある小学校への出前授業、ルミナリエの運営補助、地域防災訓練など積極的に取り組むことができた。数々のボランティア活動を通じて、自分の心が豊かになった気がしている。

この東北訪問が、私の防災について考える基盤となっている。

5 おわりに

『語り継ぐ』を執筆するにあたって、多くの支えの下、今生活ができているのだなと思った。親はもちろん、友達や先生など多くの人のおかげだ。

これから、感謝の言葉をきちんと伝えられる人になりたい。これまでは、恥ずかしがったりしてうまく伝えることができないこともあった。しかし、このままではよくないと思う。言葉を使ったコミュニケーションをとることができるのは、人だけであり、人の最大の良いところだと思う。「ありがとう。」「おかげさまで。」という気持ちを持って生きていきたい。

災害激化の時代に備えて

梶本 知

1 はじめに

あの阪神・淡路大震災から今年で 27 年が経つ。私はこの震災を経験していない。そしてこれから先、私のような震災を経験していない世代が次々と増えていく。自然災害大国日本で、災害を避けて過ごしていくことはできない。しかし、災害大国だからこそ、過去を遡ればその災害から命を守る教訓や経験が残っている。将来、同じ被害を繰り返さないように、環境防災科で学んだこと、周りの方の経験を生かして『語り継ぐ』を執筆していく。

2 母の話

(1) 地震発生直後

当時、垂水区小束山の 3 階建てマンションの 3 階に住んでいた。早朝、2 歳の娘と母と父で 1 つの部屋に川の字で寝ていた。突然奇妙な音と共に、大きな揺れがきた。かなり続いた。娘は揺れに気付かず寝ていた。明るくなって、家の中を見てみると玄関に置いてあった花瓶が倒れ、食器棚からは戸が開いてコップやお皿が下に出て割れていた。少し時間がたつと、山口に住んでいる祖母から電話があり、安否を知らせた。祖母に「こっちは大丈夫だよ」と伝え、「神戸はすごいことになっているぞ」と言われた。家はそこまで酷く被害を受けてはいなかったため、その時は神戸の街がこれほどまでに悲惨な状況になっているとは分からなかった。その後、垂水区本多聞に住んでいる父親の親の安否を確認した。無事だったが、母が「何か持っていこうか」と言うと、「それどころじゃない、こっちは大変なことになっている」と言われた。

(2) その後の生活

ガスが止まり、水道も止まった。そのため、お風呂に入ることもできなかった。近くの小束山小学校に自衛隊が大きな車で水を持ってきてくれた。しかし、大勢の人が水を貰いに来っていたので、長時間並んだがなかなか水を貰うことはできなかった。その時、自衛隊の方が声をかけてくださり、とても嬉しかったし、心強かった。同じ西区に住んでいた親戚の家は水道が止まっていなかったため、お風呂を借りに行くことができた。一時的に、スーパーもコンビニも機能しなくなり、困った。生活がものすごく不便で大変だったため、母親は娘を連れて祖母のいる山口へと帰った。その間、父は 1 人で仕事を頑張っていた。神戸にいる間、余震が続いた。車が家の前を通り過ぎるときの「ゴー」という音で、「また地震が来る」と思い、しばらく怖かった。

3 母の話を聞いて

被害がそこまで大きくなかったとしても、生活面などで困難が付きまとっていたことが分かった。当時の状況を見ていないが、発災直後の母や祖父母の言動を聞いて、相当なパニックに陥っていたことが伝わってきた。

4 父の話

(1) 地震発生直後

震災の朝、「ゴォーッ」という音で目が覚め、すぐに経験したことのない揺れが来て、「ただごとではない」と思ったが、ラジオをつけると、「けが人がどこそこで数人」と放送されるのを聞いて、「割と被害は少ないのだな。」と感じた。ただ、その後の経験で、発災直後に「けが人数人」と出るのは、大被害の兆候であるということを知った。本当に被害が少ないのなら「けが人は今のところ出ていません」という放送になることが多く、最初から「数人がけが」と出るのはもっと被害が拡大する傾向にあるらしい。職場で亡くなった人はいなかったが、ひとりが崩れたアパートの下敷きになった。ただ、その職員は学生時代、ラグビーをしていて非常に体格も良く、力もあったため、何とか這い出すことができたが、崩れたアパートでは何人か亡くなった。

(2) 電車の運休

出勤しようと駅に行くと学園都市駅が壊れていた。震災で地下鉄が止まってしまったため、職場のある元町まで数時間かけて歩いて行った。途中で神戸高速鉄道が陥没していたため通れなかった。このような道を毎日歩いていくことは困難だったため、職場に泊まっていた。

職場はロッカーが倒れ、机がもとにあった場所とは違うところへ移動しており、職場では、「もし勤務時間中に起きていたら誰かが大けがをしていただろう」という声があった。その後、板宿まで地下鉄が復旧したので、板宿まで地下鉄で行き、板宿から1時間以上かけて歩いて行くようになった。多くの人が神戸の中心部(三ノ宮・元町)に向けて歩いて通勤していた。中心部への車の乗り入れは規制されていたので、道路は人だらけで、中国かどこかの東南アジアの通勤風景でよく見るように人が道路にあふれたような光景だった。長い距離を歩いたり、交代で職場に泊まったりしたが、みんなそうしていたので、足が疲れるけどそのことは特に辛く感じなかった。

(3) 物資の配給

職場にいと、「物資が届きましたので、手が空いている方は仕分けのお手伝いをしてください」という放送が職場に流れ、その都度手伝いに行った。避難所には入らなかったのも、食事は自分で調達したが、水が使えないので食器が洗えず、紙の皿や紙コップをしばらく使っていた。節水のため、歯磨き中は水を出しっぱなしにせず、コップ1杯の水で済ますようにしていた。

(4) 災害への備え

当時は「地震なんか神戸では起こらない」とみんな思っていた。そのため、震災時にどういう行動をとるかということも職場では徹底されていなかったようで、当初、非常に混乱していた。また、父が職場に行けたのは、震災翌日であり、行っても混乱の中、何から手をつければいいか分からなかったそうだが、今では、震災直後の行動について、きちんとマニュアルがあり、また、職場が遠くても震災当日中に近くの別の支部に行く等、きちんと手順が決められている。また、日頃からの備えが大事だと言っていた。特に水、コンロ、保存食品の備蓄、また、冬場ではカイロ、寝袋が必需品だと言っていた。みんなきちんと並んで自衛隊の給水車を待ち、壊れた商店から物を盗むとかもなく、整然と職場・学校を目指して歩いて行く。他の都道府県からも心配する声が多く届き、全国からボランティアが駆けつけ、義援金が寄せられるなど、日本は素晴らしい国だとしみじみと思った。

5 父の話を聞いて

父は震災の被害がここまで大きかったとは分からなかったらしい。ということは、当時災害の状況を瞬時に知ることのできる伝達機器が普及していなかったということが分かった。父が歩いて職場まで向かったと聞いて、驚いた。私たちが日々利用して当たり前存在となっている交通機関が突然使えなくなることを考えると、それだけで生活が大きく変わり、生きづらくなるだろう。ライフライン、交通機関の重要性を改めて感じた。職場での話では、今では耐震、物の固定が第一として考えられているが、当時はあまり重要視していなかったことが分かった。私は、父から震災のことは少し聞いていたが、掘り下げて聞いてみると、当時の課題や想像を超える被害の状況など、知らなかったことを知ることが出来た。父の話では、震災の記憶には悲惨な出来事がほとんどを占めていたが、人と人とのつながりを感じた場面や、嬉しかったこともあった。語り継ぐにあたって、二度とこのような災害を繰り返さないために、悲惨な出来事を伝えるのはもちろんだが、その他にも、助け合いの大切さ、自衛隊・ボランティアがもたらしてくれた暖かさなど、その災害で得ることのできたことを語り継いでいきたいと思います。

6 環境防災科

環境防災科に入ろうと思ったきっかけは、将来の夢である消防士になるために必要不可欠である災害と防災の知識を学び、その知識を用いて適切な判断ができる力を養いたいと思ったからである。

私は、将来、防災に関わる身でありながら、防災の知識は全くなかった。環境防災科に入学して、無知の状態から3年間で多くの知識を学び、経験を培うことが出来た。入学したての頃は、右も左も分からなかった。しかし、「災害と人間」の授業で自分の夢を発表する機会があり、周りの皆が「夢を叶えるためにここにきているんだ」と感じた。中学生の時、将来消防士になりたい人は周りには1人もいなかった。そのため、同じ夢を目指す同士がいることに嬉しさを感じ、やる気が出た。

1年生では、「災害と人間」の授業で、様々な講師の方々が私たちに講義をしてくださった。水道局や電力会社、消防署や海上保安庁など多くの職業の方々の講義を聴いた。講義をきいて、あらゆる職業の防災との関係を学ぶことが出来た。一つひとつの講義には必ず、それぞれ「伝えたい経験・教訓」があった。それを学ぶことで、日々の授業でのディスカッションに取り入れることができた。

2年生では、「社会環境と防災 I」や「ACTIVE 防災 I」を通して、1年時に学んだことをより発展させて考え、知識を身につけることが出来た。被災者には、災害後 PTSD などの障害を患い、心のケアをしなければならぬ人がいることを知った。心理について学ぶことで、災害や防災を考える際、より被災者の

立場になって考えることが出来るようになった。「Active 防災 I」では、世界の災害対策の現状や、防災の視点を英語でつなぎ学ぶことが出来た。1年生の時より、ボランティア活動に多く参加させていただいた。高丸小学校の出前授業では、2年間で学んだ知識を活かして小学生に防災について分かりやすく伝えることが出来た。また、令和2年度全国中学生・高校生防災会議に参加させていただいた。新型コロナウイルスの影響を鑑みて、オンライン会議となったが、全国の同じ立場である生徒と意見を交えることが出来た。そこから得た教訓や、お話、経験を1.17 震災メモリアル行事にて、普通科を含む生徒たちに発表した。「伝える」ことの大切さを知るとともに、難しさも強く感じる事ができた。

3年生では、「夢と防災」の授業で、自分の夢と向き合うことが出来た。自分の将来の夢がどのように防災と繋がっていきけるのかを知るきっかけになった。発表を通して自身の夢に対する決意を強めることが出来た。また、被災者だけでなく、被災者の周りの支援者にも震災の影響が強く出ることを知った。このことは、周りの人たちはきっと知らないだろう。この他にも、知る機会がなければ知り得ることのできない知識は沢山あった。私が、環境防災科で学んだことを自分の中にとどめず、これからの人生で、多くの人・環境と関わり活かしていきたいと強く望む。

7 夢と防災

(1) きっかけ

私が将来就きたい職はまだ確かには決まっていない。だが、興味のある仕事は消防士と建築士である。まず、消防士になりたいと思ったきっかけは小学生の時、テレビで活躍されている消防士の方の姿を見て、自分も仕事として困っている人に手を差し伸べたいと感じたからだ。

次に、建築士になりたいと思うようになったのは、進路について考えていた高校2年生の時だった。私は、環境防災科で学んだ知識をより発展させ深く学びたいので進学を考えている。防災と人との関わりを学んでいくうえで、最も心ひかれたのが建築だった。そこで国家資格である建築士に興味をわいた。

この2つの夢に共通して私が成し遂げたい、やりたい夢がある。それは、災害から人々を守り、少しでも暮らしの負担を減らして笑顔で幸せに過ごせる土台を作りたいということだ。建築を学んでいくことは、この2つの職業にも必ず活きると考えている。防災を広めたり、考えたり、実現していくためには、まず自分が深く学ばなければならない。また、現在、少子高齢化や災害の多発、地球温暖化など、著しく社会が変化している。その中で、自分自身で適切な判断をし、最善の行動がとれる力を身につけることができると考えたからだ。

(2) 夢と防災

建築士に焦点を当てて考える。建築士と防災は深く強くつながっていると考えている。阪神・淡路大震災では圧死や窒息死で亡くなる方が非常に多かった。人々を災害から守るためにはハード面の強化が必要不可欠だと感じた。人々の最初の生存確率を上げる土台は建築物の強さである。そこに最も深く関わる建築士の仕事は、命を守る仕事と言っても過言ではない。

災害で一度壊れてしまった人の暮らしを戻すことは困難である。だからこそ人の暮らしと人生を災害から守る家や建造物を設計する建築士の仕事は、最も目に見える「防災」と考えている。また、建物を安全にすることは人々の命を守るだけでなく、そこにあった思い出やそのコミュニティでの人と人とのつながりを守ることが出来る。

では、実際にどのように防災と結び付けていけるだろうか。例えば、顧客と話し合う際、心配していることは安全性だ。そこで、今まで身につけてきた防災の知識と建築の知識を組み合わせることで顧客が安心して建築を任せられるように相談に乗りたい。また、同じ職業である建築士の方とも密接にコミュニケーションを取り、この環境防災科で得た知識を広めていきたい。そうすることで、どんどん人から人へと経験が伝わっていけると考えている。

8 新型コロナウイルスと災害

2019 年末に感染者が確認され、恐ろしい速さで世界各国に感染が拡大している新型コロナウイルス。私たちは、高校生活の半分をこの新型コロナウイルスと向き合いながら過ごした。2年生になるとともに、感染が拡大し、緊急事態宣言が出された。休校が明けても、不自由な生活は続いた。部活には規制がかかり、ボランティア活動も中止、また文化祭などの行事も中止になるなど、いままでの当たり前の「日常」が「非日常」へと変わっていくのを目の当たりにした。今まで普段通りに送っていた生活を容赦なく壊し、人々の命を奪っていく。災害も同じである。

私は、災害を経験していないが、この新型コロナウイルスの影響で、「非日常」のしんどさ、終わりが見

えないことからくるストレスを物凄く感じた。人はストレスが溜まると、イライラが溜まり、愚痴を吐きたくなる、逃げ出したくなる、責任をおしつけたくなる。それらが医療従事者などへの偏見や差別を助長する。これは、災害後の避難生活にも同じことが言えるだろう。もしこの状況下で、南海トラフ巨大地震が起きたとしたら、どれほど多くの被害が出るのだろうか、想像を絶する。

感染が収まったと思えばまた拡大を繰り返すこの新型コロナウイルスは終わりがないように思える。だが、いつか必ず収束する。多大な被害を及ぼしたあの阪神・淡路大震災が起きた神戸の街も 27 年がたった今、人々であふれ、活気ある街になっている。これを信じ、今自分にできることを精一杯取り組んでいきたい。

9 おわりに

この『語り継ぐ』の執筆を通して、阪神・淡路大震災についてより知ることができ、自分と向き合うことが出来た。母や父が経験した大震災の話は、私の心に深く突き刺さった。とてつもない被害が出たにもかかわらず、母や父は現在、元気に暮らしている。それほど人々の「復興の力」はすごいのだと感じた。それと同時に、「風化」という言葉が頭をよぎった。復興が進めばもちろん震災の跡は消えていく。阪神・淡路大震災を経験していない若者はこれから先増え続けるだろう。あの震災の教訓を次の災害へと生かし、当時の人々の経験が無駄にしないためには、私たち若者が語り継いでいかななくてはならない。新型コロナウイルスや少子高齢化、そして災害激化の社会の担い手となる私たちにはしかできない後世への「語り継ぎ」があると考えている。私たちにできることは、「今を全力で取り組む」ことだ。あらゆる困難も環境防災科で培った知識と行動力、判断力を活かして乗り越え、そして「語り継ぐ」ことを大切にしていきたい。

災害を知るあなたへ

加藤 一晴

1 はじめに

「おはよう、いってきます、ありがとう、ごめんな、また明日な、いただきます、ごちそうさまでした、おやすみ…」この当たり前の日常が1月17日午前5時46分にすべて奪われてしまった。私は被災したことのない災害未経験者だ。だが、多くの被災者の方々から被災して見えたもの、苦しさ、次に進むための取り組みなどを学ばせていただいた。環境防災科で3年間学び、取り組んできた防災・減災を読者の方々に伝える。そして、より多くの人に防災・減災を知ってもらいたい。

2 阪神・淡路大震災での母の話

(1) 震災当時

午前5時46分「ドーンッ」と下から何かが突き上げるような音と振動で目が覚めた。そこにあったのは、部屋全体が揺れ動かされ、左右に「ワシャワシャ」と揺さぶられているという光景だった。母が身動きを取れずにベッドの上で揺れに耐えていると、横の部屋で寝ていた祖母が急いで母と叔父の部屋の扉を開けに来了。しばらくすると揺れが収まり、家族4人で1階へと降りた。1階ではテレビや電子レンジ等の物が散乱し、印象的だったことはガスのにおいが部屋中に広がっていたことだ。そこらじゅうでガス漏れが発生していたそうだが、幸い火事にはつながらなかった。その後外に出て、周りの家を見てみると、横の家の2階部分が1階になっており、家族が中に取り残された人を懸命に助け出そうとしていた。母はあまりに恐ろしく、見るができなかった。その後周辺から悲鳴が聞こえてくる中、瓦礫の上を歩き、近所にある鷹取中学校へと向かった。門はすべて閉ざされており、入ることができなかった。家と学校が近くにあったため、いったん家に戻り、貴重品等をまとめた。一部損壊であったため、比較的早くに荷物をまとめることができた。7時ごろに学校の門が開いたら、貴重品を家の車の中に入れて、学校の校庭に停めた。母と祖母は車中泊で叔父と祖父が校舎の中での寝泊まりとなった。車中泊はエンジンをつけると貴重なガソリンがなくなってしまうため、凍えてしまいそうなか中で毛布にくるまり、寒さをしのいだ。お風呂には1週間ほど入ることができず、その後は加古川に住む親戚の家のお風呂に入らせてもらった。10日後には自衛隊の方がグラウンドにお風呂の設置や水、物資等の配給をしてくれた。

(2) 後悔

今までにない大災害を経験した母は「前もって、こうしていればよかったな。」と何度も言っており、主に3つ話してくれた。

1つ目は「家具の固定」だ。災害が起きた日、母の家では家具の固定は一切しておらず、足の踏み場がないほどに家具が散乱していた。家具を固定していたらもっと失わずに済んだものがあったのではないかと話していた。

2つ目は「情報を得る手段の確保」だ。母は災害が起き、少し落ち着いてきたときに、この大きな地震は関西全域なのか、それとも兵庫県だけなのかわからずに、不安だった。その他にも、阪神高速が倒れてしまったことも一切情報が入ってこなかった。これらのことから、情報の確保ができるラジオを準備するようになった。

3つ目は「防災グッズの準備」だ。母の家は半壊で済み、なんとか家の中の物が取り出せる状態であったが、もしも全壊していたら、想像を絶するほどの苦しい避難所生活になっていたと話していた。だからこそ、玄関付近に防災グッズを準備しておくべきだったと話していた。

(3) 話を聞いて

私の母はいつも強く、優しい。私も生まれてから18年間ずっと支えられてきた。しかし、そんな母でさえも大地震を前にすると、弱くなってしまう。それほどまでに自然というものが大きく、計り知れないほどの力があるのだと感じさせられた。

母の話を聞いていると、私自身がその場にいた時にどのような行動をとっていたらという考えが頭をよぎった。果たして家族や近所の方々を率先して安全な場所へと避難させることはできたのだろうか、正しい判断を素早くすることはできるのだろうか、多くの不安が出てきた。そのときに、この不安な気持ちを解消し、ひとりひとりの命を守ることを可能にするには、地域単位で行う防災・減災の取り組みが必要なのだと改めて再認識した。この防災・減災の力が必要だということを地域の方々に再認識してもらうには、被災経験のある方が当時の様子をもう一度思い出し、共有することが重要である。

もう二度とあの日のことを思い出したくない被災者も中にはいるであろう。そういった方々はずっと他者に災害時の出来事を吐き出すことができずにひとりで抱え込んでしまった方なのだろう。しかし、どのような体験や恐怖でも記憶は風化していくものである。そして数年、数十年と時間が経てば多数の人は災害への恐怖が小さくなる。こうなってしまうと何度も大きな被害を繰り返してしまうこととなる。だからこそ当時の災害に対しての恐怖、また震災当時の地域住民の団結力を風化させないように、地域で災害当時の様子を語る場を作りたいと考えた。そして、何年たっても恐怖を忘れ去ることのないコミュニティを作り、災害時に素早く地域全体で避難できるようにしたいと考えた。

3 環境防災科

(1) 語り継がれた私

中学3年生となり、環境防災科の入試に向けて日々勉強をしている中で、ある先生が私に環境防災科の方が書いた『語り継ぐ』を印刷し、渡してくださった。環境防災科の2期生の方が綴った『語り継ぐ』であった。それを読んだ時の衝撃は今でも忘れられない。今まで授業の一環として災害のことをなんとなく学んでいたが、そのときに防災・減災をするということに魅力を感じた。そして初めて過去の災害、過去から学ぶ防災・減災と向き合い、自分の住む神戸を災害から守りたいと強く考えるようになった。また、自分も『語り継ぐ』を書かれた先輩方のように防災・減災を学び、街や人を守るために活かすことのできる消防士になりたいと強く感じるようになった。

(2) 学び

環境防災科では様々な災害、防災や減災関連の授業が行われる。その中でも ACTIVE 防災Ⅰ・Ⅱの災害時の心理面のことを学ぶ授業が、私の考えを大きく変えた。私はずっと、災害が起きた時には危険にさらされている人を助け出し、病院に搬送することだけが重要な仕事なのだと考えていた。しかし、その後の避難所生活や、人間関係で生じる PTSD や PTSR といった問題から救うことも大きな仕事なのだと知った。

2年生で行う長田の街歩きの活動では、私の生まれ育った鷹取から新長田に向かって実際に歩き、震災からどのようにして復興をしてきたのかを学んだ。まだ木造住宅が密集している地域や、道幅が狭い道が残っているところもあった。しかし、区画整理が行われ、大きな公園や広い道幅が確保されており、震災前と比べ、かなり災害に強い街へと復興を遂げていた。このように実際に歩き、町のいいところや改善点を知ることによってこの街を災害から守りたいとより強く感じることができた。

消防学校での活動はかなり大きな刺激をもらえた。リーダーや副リーダーの役割を与えられ、チームの中心となって活動する機会があった。中でも、2回目に行った実際に建物に放水をする流れを一通りする訓練では、すべての指示を任せられ、緊張感がある中消火活動を行うことができた。それらの活動を通して、リーダーとは1人で突っ走るものではなく、仲間と協力し、全体を見て指示を出すものなのだという本質を学ぶことができた。

(3) コロナウイルス災害

現在世界中で新型コロナウイルスの影響を大きく受けているが、その被害状況は「災害」ともいえる。この災害を乗り越えるには、「正しく恐れる」ことが重要だと考える。この「正しく恐れる」という言葉は、環境防災科で学んだ言葉であり、どんな災害にも当てはまると考える。要するに、この世の中には数多く誤った情報が存在するため、正しい情報を入手し正しく警戒しなくてはいけないということだ。医療従事者の負担を少しでも減らせるように、国民全員が自分の管理を徹底しなくてはこの災害は何十年も収まらないだろう。だからこそ、ハード面の改善策として、通勤時の密を避けるために電車やバスの本数を増やす取り組みや、ソフト面の改善策として、コロナについて誰もが分かりやすく理解できるようにテレビやラジオで流すといった取り組みが必要となってくる。

4 将来の夢

私の将来の夢は誰よりも防災・減災の知識力の高い消防士になることだ。私はこの夢を実現させることができれば、消防士と防災・減災が1つとなり、最強のコミュニティを作ることができるのではないのかと考えた。この最強の防災・減災を生み出すためにしていきたい取り組みを2つ伝えていきたい。

1つ目は、防災福祉コミュニティをもっと若い世代にも認知してもらうことだ。災害時には「公助」の力だけでは対処できないことがあり、その場合に「市民の力」が必要になる。そのため、防災福祉コミュニティは作られた。この防災福祉コミュニティは様々な団体と連携をとれており、活動内容も消火訓練やシェイクアウト訓練といった充実したものとなっている。だが、果たして仕事や学校で忙しい働き盛りの社会人や学生はいつ、どこでこれらの活動を行っているのか知っているのだろうか。きっと知らな

い人の方が多いと考える。これでは災害が起きてしまったときに率先力となる若い世代の力を最大限に使うことができない。またこのコロナ禍の中で災害が起きしまうと、年齢層の高い世代はより災害に弱くなる。つまり、昔よりももっと若い世代の防災・減災力が問われてくる時代となってきた。だからこそ若い世代に少しでも防災・減災に興味をもってもらえるような取り組みをしたいと考えている。

2つ目は、自分が20代、30代、40代で消防士として積み上げていく防災・減災の取り組みを、学生といった若い世代に対し、講義を通して広める取り組みだ。環境防災科では災害時に様々な分野で活動をされた方々からの講義を聞くことができる機会があった。そのような場があったからこそ防災・減災の在り方を理解することができ、興味をもつことができた。そんな貴重な機会を次は私が作りたい。

私は今後数十年で様々な災害現場に立ち、救助活動を行うだろう。また、時代の流れとともに多様化する社会での防災・減災を勉強する毎日を送ることになるであろう。そうした自分なりに磨き上げた消防士視点からの防災・減災の取り組みを、若い世代につなげ、災害に対応できる社会へとつなげ、自然と共存できる世界にしていきたいと考えている。

5 伝える

私は一時期、「防災・減災は災害を経験したことがある人にしかできないのだろうか」と考えることがあった。その時・その空気・その光景を、その場で体験したことのある人にしか災害の本当の恐怖を語ることはできないのは事実である。何も経験していない私たちがどうやって防災・減災を広めていけばよいのだろうと行き止まることがあった。しかし、環境防災科での授業や講義を通してそれらの考えは単なる言い訳であり、最善の防災・減災対策を考えることを放棄したことなのだと感じた。防災・減災は決して被災者だけにしかできないことではない。過去の災害を知り、被災者の内の部分を学び、見たこと聞いたことを伝えることによって災害経験のない人にもできることなのである。これから先、災害未経験者の割合が増加してくる。そうすると、災害未経験者が伝える防災・減災はますます必要となってくるであろう。だからこそ、私は今後、力を入れていきたいことが2つある。

1つ目は、日頃から地域の住民とあいさつを交わすことのできる関係を作ることだ。阪神・淡路大震災でも「公助」の行き届く力や速さには限りがあるということが理解できた。また、家での生活をする時間は多いため、高確率で家での被災が起きることが考えられる。避難するときにも近所の住民同士で顔見知りであることにより、誰がいないのかを判断することが可能となる。そうすると、災害での死者数が大幅に減少することが考えられる。だからこそ、災害が起きる前に日頃からコミュニケーションをとり、顔見知りの関係を形成しておくことに力を入れたいと考える。

2つ目は、防災・減災をもっと身近なものとして広めることだ。具体的には幼稚園から学生を通して、防災を当たり前のように学ぶことのできる環境を作りたい。多くの人は防災・減災を難しく捉えたり、特別なものとして捉えたりしていることが考えられる。しかし、このままでは知識や備えがないまま被災してしまうこととなる。今の災害の歴史はこの繰り返しだということを気付かなくてはならない。災害の影響で甚大な被害を受けている地域では、災害は来ないだろうという軽率な考えをしており、被災してから防災が普及するといった傾向がみられる。この現状を変え、多くの人に興味をもってもらうためにも、より身近に防災・減災を知ってもらう活動に力を入れたいと考えた。

6 防災・減災

この『語り継ぐ』を読んで、「防災・減災」というフレーズを読者の方は何度も目にしたのであろう。私は「防災」も重要であると考えてるが、「減災」も防災と同じかそれ以上に重要なことであると考えている。私がこの防災・減災にこだわり始めたきっかけは、兵庫県立大学大学院の室崎先生の講義である。室崎先生は、防災から減災へという内容を説明してくださった。防災とは科学技術を使って災害を「0」にすることだ。つまり、人間が自然を抑え込むということである。一方、減災とはある程度の災害を想定した上で被害を少しでも減らすことだ。これら2つの違いは「自然との共生」である。自然は人間が想像するよりもはるかに大きく脅威的なものである。それを人間が完全に防ぎきることは今の技術では不可能である。しかし、自然の良い面と悪い面とを人間が理解し、防災と減災を両立することでより自然と調和的なハード面を形成することができないのかと考えた。また、これからはハード中心ではなく、ソフトを中心にし、防災・減災を考えていく必要がある。主に、防災教育を普及させ、日常に防災・減災を取り入れるといった活動をしていきたい。このように、人間側が自然に介入するのを最低限度にし、被害を減らしていく活動を今後していきたい。

7 最後に

母から初めて震災の時の話を聞き、驚きを隠せなかった。今は当たり前のように生活している町が震災当時は瓦礫しかなかった。このことを何度聞いても、自分の頭では実感することはできなかった。また、災害について何も知らない状態で災害が発生することほど恐ろしいことはないと感じた。

防災・減災にゴールや正解はない。1つ改善することができたとしても、また2つ3つと新たな問題点が見つかる。また、自分自身でこれは正しいと思ってしたことでも、相手からすれば迷惑なことも数多くある。しかし、行動しなければ、自然と共存できる世界を作ることはできない。行動するにもまずは防災・減災に対しての知識が必要である。そういったものから避け続けると、この災害大国である日本で生き延びることはできないであろう。このようなことを考えるたびに、「防災・減災の難しさ」を感じさせられた。だが私は様々なやり方の防災にチャレンジしていきたい。例えば、中学校で仲の良かった友達に地域のハザードマップを配ってみるといった小さな活動もしたい。そうやって少しずつ防災・減災を知る仲間を増やしていきたい。

また、新型コロナウイルスという災害のことも防災・減災の枠に入れて考えていきたい。ワクチン接種をするだけでは、完璧に感染を封じることが難しいだろう。この問題も災害と同じであり、知ることから始めていくべきだと考える。知らなければ次々と感染させてしまい、収束しなくなってしまう。その中でも医療従事者の取り組みを知っておく必要がある。終わりが見えないしんどさや、ウイルスに立ち向かう恐怖を抱えながら毎日患者さんのケアを行っている。それらの努力を無駄にしないように、防災・減災と共に大切さを広める活動をしたい。

誰もが守りたいものがあり、守りたい人がいるはずだ。そういったものをすべてのみこんでしまうのが「災害」である。私はこの街を、大切な家族を、友人を失いたくない。だからこそ環境防災科で3年間学んだ知識を私の今後の道である消防士という職で発揮し、人命救助や地域コミュニティの強化等を通して、多くの方々の命や住まいを守っていきたい。

未災者だけどやるしかない

金山 大輝

1 はじめに

阪神・淡路大震災から26年が経った今、復興が進みそれと同時に風化も進んでいる。環境防災科では色んな職種・経歴を持った方々から震災の教訓を聞いてきた。この貴重な経験を無駄にはしたくない。風化が進む社会で教訓を語り継ぎ、広めるのは私たちの使命だ。そのような思いを持って、執筆していきたい。

2 阪神・淡路大震災の経験

(1) 救急救命士だった祖父の話

阪神・淡路大震災当日、神戸市西区の自宅から芦屋の勤務地までいつも通りの出勤方法である地下鉄に乗るために西神中央駅へ急いだが、地下鉄不通の為、車で7時頃自宅を出た。通行できる可能なあらゆる道路を通り消防署へ到着したのは7時間後の午後2時過ぎだった。途上、須摩や長田、東灘は火災が発生炎上し、道路は亀裂が入り陥没しており、家屋は倒壊していた。生まれて初めて体験する惨状だった。芦屋消防署へ到着した時には、すでに消防車・救急車が全て出動していた。祖父は、すぐに消防署横の避難所になっている精道小学校の救護室へ駆け込んだ。精道小学校は大勢の避難者で溢れていた。小学校内にある教室を使った救護所にも、数人の傷病者が床に寝かされ治療を受けていた。救護所のスタッフは保健センター職員2～3名、勤務先へ行けず駆け込んできた芦屋病院看護師1名、岡山に職場がある外科医師1名、被害を受けながらも飛んで来てくれた市内の開業医(外科、内科、歯科の3～4名)の方々が治療に当たっていた。先ず、祖父が行ったのは診療台を作るために教室の机を並べることだった。同時に医薬品及び資機材等が不足のため消防署と精道小学校保健室から救護所へ運んだ。

[市内の開業医及び京都府医師団から届いた支援]

- 1 点滴台の代用品
- 2 消毒用の手洗い器
- 3 滅菌用の湯沸かし器
- 4 バックマスク
- 5 傷病者の保温のための毛布及び暖房器具
- 6 石油ストーブ(精道小学校において暖房はこのストーブ1台のみ)
※余震が続く火災の危険があるため、石油ストーブの使用は厳禁だったが、医師による強い希望があった。その理由は以下の通りである。
 - ① 患者を裸にして診るため
 - ② 風邪患者のための室温を保つ
 - ③ 診療所であるので暖房必要
- 7 カルテを作成するために必要な文房具及びカルテ入れ
- 8 ゴミ等を入れる容器
- 9 外科的処置用の明かり
- 10 コンセント(コードリール及び延長コード使用)

[活動内容]

医師・看護師の処置の補助、救護所から病院へ搬送する際の病院への連絡手配、救護所へ運ばれてきた傷病者の搬送、各教室(避難者)の診察補助等を3日間徹夜で行い、野戦病院さながらだった。又、避難者からは消防職員ということで色々な相談が持ち込まれ、対応に走った。

[悩みの内容]

- ① 身体障害者から「神戸市民であるが自宅が全壊したため精道小学校へ避難している」と、神戸市福祉事務所へ伝えてほしい。
- ② 市民からは「自宅が全壊し貴重品を持ち出せなかった。すまないが取ってきてくれないか。」
- ③ 家族に精道小学校へ避難している旨を連絡してほしい。
- ④ 家族を～病院へ搬送するため連絡してほしい。
- ⑤ 傷病者を遠方へ搬送する手段を考えてほしい。
- ⑥ 避難所から自宅へ連れて帰ってほしい。

- ⑦ 毛布、湯が欲しい。
- ⑧ 荷物を運んでほしい。
- ⑨ トイレへ連れて行ってほしい。

(2) 1月19日から京都府医師団が引き継いでからの活動

本格的に診察、処置、ベッド、薬剤に分けられ救護所も診療所と変わらなくなり、引き続き24時間体制で治療にあたった。

救護所詰めで辛かったのは、幼児を抱いたおじいさんが必死の形相で駆け込んできて「助けてくれ」と涙ながら医師に訴えていたこと。医師がすぐに診察したが、既に亡くなっていた。幼児の顔は微笑んでいるようだった。今でもあの時の顔は忘れられない。

また、独り暮らしの老人達が震災によって裸同然で救出され、避難所へ避難してきた。その内の高齢者数人に認知症的な症状(失禁等)が診られた。家族が誰もいなくて世話をする人も看護師だけだった。身寄りもなく精神的な不安があるため、一刻も早く施設へ収容しなくてはならなかった。惨めだった。救護所の感想として、スタッフが一致団結して避難者に親身になり全ての救援活動を行っていた。特に保健センターの職員、看護師の献身的な態度には感銘を受けた。阪神・淡路大震災でいかに自然の前では人間が非力ということ、そして生命の大切さ、人の優しさ、助け合いがどれほど大切か痛感した。

(3) 問題点

〔避難所及び救護所について〕

- 1 各救護所に救急隊員1名配置必要(病院、消防間の連絡及び応急処置)
- 2 避難所及び救護所内の身元確認を早急にする(問い合わせ等面会者に返答できないことがあった)。
- 3 住所不特定者が避難所内に入り、ボランティアで来たと言っていた。
- 4 自力歩行で避難してきた人たちが、時間が経つにつれ自力歩行できなくなっていた。

3 震災後

今思うと、よく無事に消防署にたどり着けた。その後、救護所(精道小学校)、消防署を行き来したが、消防署の業務に戻り1週間徹夜し、2週間後に1日のみ自宅へ帰れた。帰宅した翌日から仕事に行き、10日間に1日帰れる日ができた。その生活が2か月～3か月程続いた。通勤に普段は約50分で行ける所を2時間半かけていた。朝の出勤時間は午前5時前だった。

4 祖母の話

震災の時期に祖母は民生委員をしていた。自宅近くの公園(狩場台公園・緑地公園)や神姫バスの車庫の隣にある空き地等に仮設住宅が建っていた。仮設住宅で生活していた1人暮らしの高齢者の食事を作ったり、色々な相談にのったりしていた。

自宅から5キロ程の場所にある西体育館に全国から救援物資が集まって山積みになっていた。衣類や日用品の整理等のボランティアをしていた。

自宅も1週間程度断水していたので狩場台小学校の校庭に来ていた給水車に水を貰いに行った。生活用水(洗面・トイレを流す)はお風呂に貯めた水を使っていた。

5 話を聞いて

私の祖父母が阪神・淡路大震災を経験したということは知っていたが、ここまで深く話を聞いたことはなかった。祖父に対しては、震災時には消防車両に乗って救出・救助をしていると思っていたが、実際は避難所で任務にあたっていた。普段の授業では学ばないようなことも聞けて、とても勉強になった。消防士を目指す私にとって祖父は見本となる存在だということを改めて実感した。祖母に対しては、震災時ボランティアをしていたと聞いて驚いた。「社会環境と防災」や「人と社会」の授業で学んだボランティアの活動と重なることが多々あった。

6 環境防災科

(1) 入学するきっかけ

私は祖父が消防士で幼いころから阪神・淡路大震災の話を聞いていたこともあり、地震や自然災害について興味があった。中学校3年生時に舞子高校のオープンハイスクールがあり、そこで環境防災科の存在を知った。実際に体験授業を受けてみると、今までに体験したことのない感覚でとても充実した時間だったことを今でも覚えている。そんなこともあり環境防災科に興味を持ち、同時に普通科に進学する

のは面白くないなと思い、入学を志すようになった。

(2) 入学してから

①気持ち

ワクワクとドキドキで迎えた学校生活。環境防災科のみんなは活発な人が多く、舞子高校の第一印象は少しガラが悪いなと思った。しかし、球技大会や合唱コンクールで優勝することができ、毎日一緒に授業を受けていると次第にみんなの良い面を発見する中で仲良くなれた。また外部の人と関わることが多く、毎日新しい知識が増えていくことに喜びを感じていた。3年間で色々な出来事があったが舞子高校環境防災科でしか学べないことが多く、18期生のみんなと勉強できて入学して本当に良かったと思う。

②東北訪問

事前に必要な知識を身につける淡路合宿を踏まえて東北(宮城)の地に足を踏み入れた。バスで約10時間かけて向かった。今後の人生においても兵庫から宮城県程の距離をバスで移動することはないだろう。東北では、地元の多賀城高校の方とまち歩きやワークショップをおこなった。その他にもKIBOTCHA(キボッチャ)という施設にも行かしていただいた。

東北訪問の中で印象に残っていることは、大川小学校と東松島市のあおい地区の景観だ。

大川小学校は多くの児童・教職員が亡くなったことから大きな問題として取り上げられていた。東日本大震災から月日が経っていることもあり、まちのほとんどは整備され、あのような大津波に飲み込まれた場所だとは想像できなかった。しかし、大川小学校だけは違っていた。テレビで見たままの景色が広がっていた。津波によって破壊された校舎・津波が来たと分かる壁に刻まれた波の跡。見るものすべてに衝撃を覚えた。生徒たちがよく遊んでいた広場、校舎のあった場所に足を踏み入れると、多くの子どもたちの姿が想像できた。言葉には表すことのできない気持ちになった。写真や映像では感じ取れないものがあつた。

あおい地区には私が今までに見たことのない景観があつた。今私たちが住んでいるまちは、それぞれの生活空間が守られておりコミュニティという面でつながりが弱い気がする。対して、あおい地区は住民同士を隔てるものがなく地域コミュニティという面で最強の場所だと感じた。震災を経験されて、たくさんの方のつらい思いをしたはずなのに、そのような雰囲気は感じなかった。外部から来た私たちを温かく受け入れてくださり、赤の他人ではないみたいだった。未来の若者へのまちづくりをされていて、全ての場所に願いや思いが込められていた。まるで夢の世界にきたようだった。将来はあおい地区のようなまちに住みたい。全国すべてがあおい地区になってほしい。そう思える場所だった。

私が東北訪問したときはコロナウイルスが流行していなかった。1年生の時に行けて本当に良かった。

7 夢と防災

(1) 将来の夢

私は将来、消防航空隊で働きたいと考えている。きっかけとしては、中学生の時に参加した消防署のトライやるウィーク・高校の授業で聴いた公務員の方々の講義・東北訪問などがある。何より、消防士という職業を目指すにあたって最も影響を与えたのは祖父の存在である。上記でも述べたように祖父は人命救助の最前線で働いていた。私が幼い頃、消防士だった時の話を聞いて抱いた憧れが今に繋がっているのかもしれない。

消防士として働くことが出来たとき、私にはやりたいことが2つある。

まず1つ目は、小さな子供たちが楽しく・遊び感覚で防災に触れ合える機会を設けること。私が小学生の頃、自宅近くのゴミステーションに、防災訓練の一環ではしご車が来たことがある。そこでは実際に、はしご車に乗せてもらい、放水体験もさせてもらった。防災という言葉すら知らなかった私は遊園地で遊んでいるかのような気持ちで時を過ごした。しかし、はしご車や放水体験を通して小学生ながら火災や地震などの災害について考えた。今は年齢が低い時からの防災教育が求められている。前で先生が授業するのも1つの方法だが、年齢が低い時は遊び感覚で体験するところから始めてもいいのではないだろうか。自分が体験させてもらったことを、次は多くの子どもたちに経験してもらいたい。

2つ目は、将来、各分野の専門家となっている環境防災科18期生のみんなと災害時に活かせるモノ・システムを創ることだ。今は何もアイディアは思いつかないが、これから様々な経験を積み働いていく中で考えていきたい。

(2) 消防士を目指すにあたって

私は大学卒業後に消防士を目指そうと考えている。環境防災科で過ごした3年間で入学前には考えていなかったことや知らなかったことなど様々な面で成長できた。3年間環境防災科で教えていただいた

ことは、これからの人生で確実に生きてくるはずだ。しかし、私は、まだ防災と3年間しか触れ合っていない。多少の知識はあるもののまだまだ知らないこともたくさんある。今のままでは、大きな災害や事故があったときに力不足だ。だからこそ、大学では高校時代に勉強したことを更に発展させ深く学び、高校時代に手を伸ばさなかったボランティアなどにも挑戦したい。そうすることで、今よりも更に広い視野から防災に関わることができる。大学は高校と違って活動範囲や規模が大きくなる。それらの利点を活かして、地域コミュニティが衰退しているまちを活性化させる取り組みに参加し貢献したい。消防士は地域住民とのつながりが必要な職業だ。大学での学びや活動を通して、今より2回りも3回りも大きく成長したい。

8 最後に

私は震災を経験したことがなく、実際の体験を語ることはできない。しかし、防災を学ぶ自分たちが語らないと人々の関心は薄れ、風化は更に進むと思う。自分なんかが本当に語り継ぎをしていいのかという不安はあるが、やるしかない。今までに聞いたお話、これから聞くお話、話してくださった方々の時間を無駄にしたくない。もっともっと勉強し、どんな形であれ将来は防災という形で社会に貢献したい。

「語り継ぐ」

河合 咲生

1 はじめに

1995年1月17日に、阪神・淡路大震災は起こった。私はまだ生まれておらず、8年後にこの神戸に生まれた。小学校で初めて阪神・淡路大震災について知った。しかし震災を経験していない私はまだ他人事のように考えていた。もし今、子どもたちが私と同じような気持ちでいるのならば危険なことだと思う。なぜなら今後起こる災害に対しての危機意識が欠けてしまうからだ。過去の災害を知ること地震や津波はもちろん自然災害の恐ろしさを知ることができ、自分の命を守る行動に繋がると私は考える。だからこの『語り継ぐ』を通して多くの人に阪神・淡路大震災について知ってもらいたい。

2 阪神・淡路大震災の概要

災害名称	兵庫県南部地震
発生日時	1995年1月17日午前5時46分
震源地	淡路島北部
規模	マグニチュード7.3
最大震度	7
死者数	6434名
行方不明者数	3名
負傷者数	43,792名(うち重症10,683名)
住宅被害	639,686棟(うち全壊104,906棟)
焼損棟数	7,574棟(うち全焼7,036棟)

出典 神戸新聞 NEXT2021年1月11日【特集】阪神・淡路大震災

3 両親の話

(1) 母の話

私の母は当時北区の鈴蘭台に住んでいた。大きな揺れを感じてすぐに目が覚めた。すぐに両親の寝室に行こうとした。しかし「まだ余震が来るからじっとしてなさい」と母の大きな声が聞こえた。揺れが収まってから、家族全員が集まって家の様子を見てみると所々にひびが入っている程度だった。ライフラインは確保されており生活に困ることはなかったが、電車が動いていないため新神戸から三ノ宮まで徒歩で職場まで向かった。職場には東灘に住んでいる友達があり、その友達も東灘から歩いて来ていた。職場の人から話を聞いて、自分の地域とは違って被害が大きいことを知って驚いた。東灘方面ではライフラインが1つも機能しておらず食べるものがなかった。母はその友達のために2人分のお弁当を作って持って行っていた。そして職場に救援物資が届いた。しかし母はその救援物資を受け取らなかった。理由は毎日食べるものに困っている人が職場にいたからだだった。母の地域は他の地域と比べ大きな被害はなかったため食べるものには困っていなかった。だから「大きな被害を受けた人たちが救援物資を持って帰れるように」と、貰わなかった。それに自分が救援物資を貰うのが申し訳ないと思っていた。

また母の家族の親戚に長田区で暮らしていた親子がいた。その親子は震災で家に住めない状況になってしまった。避難所に行くことを試みたが娘さんが身体に障害を持っていたため、人が多く集まる避難所に行くことは難しいと思い、母たちの家に数日後避難してきた。祖父母は快くその親子のために一部屋空けた。

(2) 父の話

父は明石に住んでいた。初めは「ドン!!」という音で目が覚めた。初めは家にトラックが突っ込んだのかと思った。しかし、すぐに家が揺れ始め地震だと気づいた。窓の外の電線が切れたのか「ピカッ」と雷のように明るく光った。気づいた時にはベッドが壊れ、壁に掛けていたジグソーパズルの額縁が顔に覆いかぶさっていた。父は怖すぎてしばらく声が出ず、動けずにいた。早朝の薄暗い中何かが起きているのか頭の整理が追いつかないうちに長い揺れは収まっていた。電気が全く使えないためラジオをつけても、ただ自分の地域で地震が起きたことを知らせるだけで、どの地域でどんな被害があるのかなど、知りたい情報の詳細は分からなかった。明るくなってきた頃、外に出て最初に目に入ったものは家の前で大きく傾く太い電柱だった。他にも道路が上下に割れていて、安全に運転・通行できる道では無かった。

8時頃に電気が復旧した。テレビをつけるとヘリコプターからの長田の様子が見られた。長田の火災の様子や跡形もなく無くなってしまった家々をテレビ越しで見て、戦争や空襲を連想した。

父の家の近くに避難所として開かれている中学校があったが高齢者で溢れていたため自宅の片づけをして何とか家で暮らすことができた。しかし水道とガスの復旧が遅かったので東二見に住んでいる友達の家でお風呂を借りていた。父は当時大学3年生だった。大学に向かおうとも電車が動いていないため行けず、授業や試験が無くなってしまった。また、アルバイト先では頑丈な金庫が壁を突き破ってボコボコにへこんでいるのが印象に残っている。父が嫌だった事はトイレ問題だ。どこのトイレも便器から便が溢れ、異臭を放ち、とても不快だったと話していた。

（3）両親の話を聞いて思ったこと

両親の話を聞いてまず初めに思ったことは、震災当時の話をしてくれる人がいるということが当たり前ではないことだ。友達の母は阪神・淡路大震災での出来事を思い出してしまうため、あまり話したくないと言っていた。大切な人を亡くしてしまったり、震災後の辛い思い出があったりする人にとっては当然のことだと思った。だからこそ話をしてくれた両親には感謝したい。

母の話を聞いて、母の地域はあまり大きな被害はなかったが、母の周りの人は被害が大きい地域に住んでいる人が多かったのだなと思った。また母は友達のためにお弁当を作って行ったり、あるに越したことない救援物資を貰わなかったりと、相手のために行動できる優しい母だなと改めて実感した。災害時は自分自身のことで精一杯になりがちだが誰かの役に立つために進んで行動できる母のような人に私もなりたいと思った。

父の話を聞いて、父が言っていた「焼け焦げた長田の街が空襲を受けた街のように見えた」というのは本当に共感できた。私も初めて火災の被害を受けた街をテレビなどで見たとき衝撃を受けた。本当にここに家が建ち並んでいたのかと疑問に思うくらいだった。またトイレ問題は衛生面や環境面を考えて今後の課題にするべきだと思う。

父も母も口をそろえて一言目に言ったことは、「本当に怖かった」だった。私は未災者であるため、両親のように「本当に怖い」という感情は分からない。だからこそ両親の話を興味深く聞くことができた。話を聞いている途中で、災害時は人との助け合いが重要だと思った。困っている人のために何かをしたり、自分が助けてほしいときに手を差し伸べてもらったりして人のぬくもりを心で感じられるのは災害から得られるものの1つだなと思った。

4 環境防災科

（1）きっかけ

私が環境防災科を初めて知ったのは中学2年生の頃だった。同じ書道教室の先輩が環境防災科に通っていて、よくボランティア活動の話を聞かせてもらっていた。私が高校進学について迷っていた時、その先輩に「将来自分は幼稚園教諭になりたい」ということを伝えると「それなら環境防災科を受けてみたら？」と言ってくれた。その先輩が私に環境防災科を勧めてくれたのには理由があった。

1つ目は、他の高校では学べないことが環境防災科では学べるということで、2つ目は子どもと関わることができるボランティアがあるということだった。1つ目の理由に関しては、環境防災科では普通科と違って専門的な学習ができるため、同じ幼稚園教諭を目指す人たちの中でも防災面において知識と実践を持った存在となることができる。そして2つ目の理由に関しては、子どもと関わることができるボランティアがあるということ。児童館に出向いて子どもたちと交流したり、出前授業といった防災教育を行ったりすることができると思った。その時に舞子高校の環境防災科に興味を持ち受験したいと思った。

（2）出前授業から得たこと

入学してから初めての出前授業の募集があった。「私は絶対に参加する！」という気持ちがあったので参加を申し込んだ。出前授業の準備から当日までの間、当時の3年生の先輩に私は圧倒された。初めての1年生に対して気さくに接して下さり、的確な指示をしてくれた。本番では言葉の選び方や授業の進行の仕方など、本当に高校生とは思えないほどだった。私は大勢の人前で話すことが得意ではなかったため表情は固く、言葉も台本をそのまま読んでいたようなものだった。私は、こんなにも人前で話すことは緊張するものなのだと気が付いた。でも先輩や先生方は「初めはそれで大丈夫だよ」「何度も参加して継続することが大事」ということを教えて下さった。1回目の出前授業では反省や課題を見つけることができた。だからここで終わってしまっただけは悔しいと思い、2回目も参加することを決めた。2回目以降は環境防災科での発表などから力をつけ人前で堂々と喋れるようになった。学年が上がっていくにつれ

て後輩を指示する立場になり、これまでの先輩の偉大さを実感した。限られた時間の中で大変なことがたくさんあったが、それ以上に出席授業での達成感は大きかった。何よりも出席授業先の子どもたちに「お姉ちゃんありがとう。また来てね!」と言ってもらえた時には本当に涙が出そうになってしまった。子どもたちの反応や積極的に学ぼうとしてくれる姿勢を目の当たりにし、自分たちが出席授業を行うやりがいを感じられた。伝えたいことを自分の言葉にして伝えて、どうやったら飽きずに最後まで話を聞いてくれるか。高校生のうちにこのような経験ができるのは貴重なことだと思う。だから私のように子どもと関わることが好きな人や、将来教師を目指している人にはぜひ参加してもらいたい。必ず得られるものがあり自分の中で良い方向へ変わるチャンスになると私は胸を張って言える。

5 夢と防災

(1) 将来の夢

私は将来、幼稚園教諭になりたいと考えている。私が初めて「幼稚園の先生」という職業を知り、興味を持ったのは小学校低学年の頃だった。この職業を知ったとき1人の先生がまず思い浮かんだ。それは私が年長組だった頃の担任の先生だ。その先生は、人見知りの私に頻繁に声をかけてくれたり、よく一緒に遊んでくれたりする先生だった。私は今でもその先生が憧れの存在であり、私が幼稚園教諭を目指す1つの理由となった。「保育士」と「幼稚園教諭」とどう違うのか?と疑問に思う人も少なくはないはずだ。なぜなら私も高校2年生に入るまではっきりとした違いが分からなかった。保育士でも良いのではないかと思ったこともあった。詳しく調べてみると、保育士は子どもの着替えや食事を保護者の代わりにお手伝いをする。幼稚園教諭は小学校入学前の子どもを周りのお友達との関わりや遊びから通じて「教育」をすることだと分かった。私はその「教育の場」という幼稚園に惹かれて幼稚園教諭になろうと決めた。

災害時、幼稚園教諭に必要とされることは、子どもの命を守るという責任感と正しい判断力だ、と私は考えている。子どもを預かるということは他人の大事な命を任されているということだ。その重みを感じながら、災害時だけでなく普段の生活からも意識することが大切だ。また自分自身の命を守ることができなければ他の人の命も守ることはできない。そのためには迅速で正確な判断を行い行動することを心掛けたい。そして、私の目指す先生像は、子どもたちからは親しまれ、保護者からは信頼される先生だ。そのためには、子どもたちの前で常に明るく元気な先生でいること、子ども一人ひとりに目を向けることを忘れてはならない。保護者に「本当にこの人にうちの子どもを預けてもいいのか」と不安にさせるような先生ではなく、保護者とのコミュニケーションを怠らず安心して任せられるような頼りにしてもらえぬ幼稚園教諭になりたい。

(2) どのように防災を広げていくか

私が幼稚園教諭になってやりたいことは防災教育だ。私が通っていた幼稚園では避難訓練はあったが防災教育はなかった。だから私が初めて阪神・淡路大震災やほかの災害を知ったのは小学校低学年の頃だった。何も知らない、まだ防災について全くわからない子どもが震災に遭ったら大変なことになると思う。だから私は幼いころから防災教育を行うことが減災に繋がると考えている。

幼稚園での防災教育で私が心掛けたいことは幼稚園のうちは楽しく遊び感覚で、まずは地震・津波について知ってもらうことだ。「地震とはこういうものだよ」と劇をしてみたり、子どもたちが親しみやすい絵本や紙芝居で地震のお話をしてみたい、考えていくと沢山の方法がある。もしかしたら怖がってしまう子どももいるかもしれない。でも、その反応が当たり前の反応だと私は思う。だから一人ひとりそれぞれのペースで震災に興味を持ってもらえるように工夫をしたい。興味を持ってもらうためには体を動かした活動が最適だと思う。具体的には、園内の危険な場所をグループで探検し、そこに「危険な場所」を表したシールを貼る。そしてどうしてそこが危ないと思ったのかほかの子たちに共有する。この活動を取り入れることで園内の危険な場所を把握することができ災害時は「あの場所に近づいてはいけない」と警戒心を持つことができる。

そして、実践的な取り組みとして避難訓練をする。避難訓練は防災教育の中でも一番現実感のあるものだと思う。子どもだけではなく職員も災害時に落ち着いて正確な判断ができるのか試される。災害時には「臨機応変な行動」が大事だ。確かにそうかもしれないが決して、知識が裏打ちされていない状態で勘に頼り、咄嗟の行動で子どもの命を危険にさらすようなことがあってはならない。その臨機応変な対応が本当に合っているのか?そう考えたとき災害時には誰もがパニックになると思う。そんな中で必ずしもその先を見越した広い視野でものを考えられるとは限らない。だから正確で安全な「マニュアル」を作らべきだ。そのマニュアルには、複数の避難経路に加えて津波を想定した時の避難経路、園児全員の名

簿、保護者への引き渡しに関する内容を最低限含むべきだと思う。

このような取り組みを通して、幼稚園の子どもたちには小さなことから災害について身近に感じてもらいたい。そして大きくなった時には自分や大事な人を守れるような人になってほしいと思う。そして子どもたちと一緒に、自分も学びながら子どもたちの命を預かる保育者として成長していきたい。

6 最後に

私はこの『語り継ぐ』を環境防災科に入学しようと考えている人や、災害に関してまだ興味がない人に読んでもらいたい。これから阪神・淡路大震災を語り継ぐ人が少なくなってしまう。すると自然にこの神戸で恐ろしい災害があったことを知らない人が増えるということになる。そうさせないために、語り継いで貰ったことをこれから先大きな力を持つ若者が受け継いでいかなければならない。しかし、環境防災科で3年間勉強してきて語り継ぐことが簡単ではない事と、中途半端な気持ちではいけないという事を学んだ。語り継ぐために未災者の私たちは正しい知識を身につけなければならない。また震災を経験していない私たちだからこそ、被災者の方々の話を聞いて感じたことや教訓を伝えることができるはずだ。そして語り継ぐ際に、私は誰かの心に残り続ける語り継ぎをしたい。理由は1人でもいいから私の話を聞いて「聞いて良かったな」と思ってもらいたいからだ。そしてこの『語り継ぐ』がその第一歩になればいいと思う。

30年以内に起こると言われている南海トラフ巨大地震では、私たちの世代が中心となって動いていかなければならない。そのためにこれまで学んできたことを最大限に活かして自分にできることに一生懸命取り組みたい。また先の見えないこのコロナ禍で災害が起きた時の対応・対策や避難所の運営についてこれからもっと学び、私だからできることをこれからたくさん発見していきたい。

かたりつぐ

桑田 優葵

1 はじめに

阪神・淡路大震災から27年がたつ。今、この震災を体験していない神戸に住む人は4割を越し、年々増加していくと言われている。もちろん私たちの世代は震災を体験していない。神戸に生まれて今まで揺れの弱い地震は体験したことがあるが、大規模な被害を受けずに生きてきた。そんな私たちがすべきことは、震災を体験された方のお話を風化させないように後世に伝えていくことではないだろうか。被災者だからといって教訓を止めてはいけない。震災の教訓を風化させないために体験者から聞いたお話を私たちが後世に伝え、共にきたる災害に備えられるような防災に取り組みたい。この『語り継ぐ』を読んで、1人でも多くの人が命を守るために日常からどんな備えができるのか、家族や周りの人と考えてほしい。

2 阪神・淡路大震災の記録

名 称：兵庫県南部地震

発 生 日：1995年(平成7年)1月17日火曜日午前5時46分

震 源 地：淡路島北部

地震の深さ：16km

最大震度：7

震度7を観測した地域：須磨区鷹取、長田区大橋、兵庫区大開、中央区三宮、灘区六甲道、東灘区住吉、芦屋市芦屋駅付近、西宮市夙川

マグニチュード：7.3

死 者：6,434名

行方不明者：3名

負 傷 者：43,792名

全住宅被害：全壊104,906棟 半壊144,274棟

「内閣府防災情報のページ」阪神・淡路大震災教訓情報資料・概要より

3 震災当時

(1) 祖母の話

震災当時、祖母は家族4人と犬1匹で垂水に住んでいた。祖母は、家族のお弁当を作るために毎朝5時に起床していた。震災の日、いつもと変わらない朝を迎え祖父は出勤のため朝食をとり、祖母はおかずをお弁当箱に詰めていた。その時「ドーンッ!!」と下から突き上げられるような揺れを感じた。何が起きているのか把握することができず、ただその場でしゃがみ込み近くにあった椅子に掴まった。祖父は椅子に座ったまま揺れが収まるのを待っていた。揺れの影響で明かりが消え、あたりは真っ暗だった。暗い中2階でまだ寝ていた母と叔父の安否を確認するために「大丈夫かー?」と大声で祖父が叫んだ。すると2人から返事が返ってきて、家族の安全を確認できた。卓上にあった醤油瓶や花瓶はこぼれ、作りかけの弁当は床に落ちた。食器棚の皿やタンス、仏壇などの大きな家具は倒れることはなく足元に物が散らばることはなかった。外が明るくなるまでその場でずっと待っていた。やがて外が明るくなりテレビをつけたら、火災で包まれた長田区と横に倒れた阪神高速道路の映像を目にした。見た瞬間驚きが隠せなかった。電気、水道は切断されなかったが、ガスが震災1日目以降止まってしまった。それから3ヶ月ほどガスのない生活を送ることになった。外に出てみると近所の住民が家から出てお互いに安否確認をしていた。家への被害はちょっとしたひびだけで大きな被害を受けなかったのも避難所には行かなかった。

(2) その後の生活

震災後の生活は大きく変化した。当時、祖母の家はガスが中心となり生活を送っていたので、ガスが復旧するまでの間カセットコンロで食事を作っていた。3日間家に残っていた食材を使い食事をとっていた。お米はつねに家にあったため、震災後に食料不足ということにはならなかった。一度ガスが復旧し、お風呂を沸かしてみるが、風呂釜が故障して風呂に入ることができなかった。お風呂に入れないことが最も苦痛で1月の寒い季節に体を温めることができなかったのもとても辛かった。お風呂に入れない期間は自宅から少し離れた特別支援学校や、プロパンガスで生活していた近所の方の家でお風呂に入れて

もらった。祖父は電車を利用して仕事場まで行っていた。地震当日、電車が動いていなかったため仕事を休んだ。1週間ほどで電車が復旧し、その後職場から連絡がきて勤務を再開した。叔父は当時中学校3年生で垂水区内の高校入学が決まっていた。震災で灘区にある曾祖父の自宅が全壊。自宅の所有者が祖父だったため、入学金が半額免除となった。また、幸運なことに1年間の授業料を免除してもらい、お金の面ではすごく助かった。母は、高校の校舎の一部が被害を受け、運動場にプレハブ校舎が建てられた。暖房機器も作動せず半年間寒い教室で授業を受けた。

（3）震災から得た教訓

祖母は家がそれほど被害を受けなかったので避難所に行かない判断をした。しかし、人が集まる避難所に行かなくて後悔したことがある。生活が元に戻りかけている時に、区役所で救援物資の配布をしていたことを知った。そもそも、区役所で救援物資の配布を行なっている情報が回ってこなくて行けなかった。情報を得るのが困難な時に、自分から人が交流する場に行けばよかったと後悔している。祖母は福井県出身で結婚と同時に神戸にやってきた。祖母が赤ちゃんの時に福井地震が発生したが、その時の記憶は全くない。神戸に来てあれほど大きな被害に遭うとは思ってもいなかった。もちろん備えという考えもなかった。阪神・淡路大震災が人生で初めて大きな災害を体験した日になった。震災後、1週間は余震が続き、いつもは1階で就寝していたが、揺れで家が潰れ下敷きにならないように2階で寝るようになった。夜中に揺れを体験し、地震後2週間はいつでも逃げられるように、寝巻きで寝るのではなく普段着をきて寝るようになった。また、リュックに衣類や貴重品、水などが入った簡易的な防災バックを玄関に置くようにした。

4 家族から話を聞いて

祖母から阪神・淡路大震災のことをしっかり聞くのは今回が初めてだった。ライフラインが絶えると困ることがたくさんあり、気持ちの面でもしんどくなっていくことがわかった。ガスが使えなかったので、近所の人からガスコンロを借りたりお風呂に入ったりすることが出来たのは、日頃からの近所付き合いがあるからだと思った。祖母はとても社交的で話上手である。その力が災害時近隣の方と共に助け合いに繋がったのだと思う。祖母の話を聞いていると日頃からのコミュニケーションが大切だと思った。何気ない挨拶でもいいから今自分が出来る地域の人とのコミュニケーションを考える機会にもなった。祖父は戦争体験者で暗い話をするのを嫌っているが、私が祖母から震災の話を聞いている時、祖父も震災時の話をしてくれたことが嬉しかった。辛い体験をしたのに次世代のためにと話してくれたことを無駄にはしたくない。あの日のことを話してくれた家族に感謝したい。また、備えという言葉が全くなかったと言われ驚いた。何か1つでも備えをしているだろうと思っていたのに「していなかった」と言われた時、防災を教えることは本当に大事だなと思った。

祖母に「災害時私たちにしてほしいことある？」と質問したら避難誘導をしてほしいと言われた。悪性リンパ腫の後遺症で足が不自由な祖母にとって人の補助は欠かせない。これは私の祖母だけの要望ではなく高齢化社会になっている今求められていることだと思う。1つでも多くの命を救うために避難所の把握や近隣にはどんな人が住んで居るのか事前に知っておくことが大切だと思った。

5 環境防災科

（1）きっかけ

私が環境防災科に入りたいと思ったきっかけは2つある。

1つ目は、防災をより学んでみたかったからだ。私は中学生の修学旅行で熊本県に行った。熊本地震後に現地を訪ねたが、まだ復興の途中であたりには瓦礫が残っていたり、通行禁止の場所があったりした。また、雲仙普賢岳の火砕流跡や、その時に被害の状況を記録しようと撮影途中で火砕流に巻き込まれ亡くなった方の映像を見て衝撃を受けた。災害が起きる前に自分たちが出来る備えは避難訓練以外に何があるのか知りたいと思った。

2つ目は、将来の夢と防災を結びつけて人の命を救いたいと思ったからだ。環境防災科では様々な職業から講義していただく取り組みをしており、自分もたくさんの職業面からの防災を聞いて将来の夢に役立てればいいなと思ったからである。将来の夢である看護師は、迅速な判断が求められる。防災の知識や過去の災害の被害を知っていれば、緊急時にも迅速な対応ができ患者さんや負傷者を救うことが出来るのではないかと思った。

（2）東北訪問

1年生の夏休み東北訪問に参加した。東日本大震災が発生した時、私は小学校1年生で家に帰ると、家

族のみんながニュースをまじまじと見ていた光景を覚えている。ニュースに放映されていた黒い影を初めは何なのか理解できなかったが、祖父が「えらいことや。わたしの住む地域で起きなくてよかった。」と言っていた。時間がたって「東北地方でなんかあったん？」と聞いて黒い影が津波ということを知った。東北訪問をするまで実際に震災を体験された方のお話を聞いたことがなかった。事前学習を通して被災地に踏み入ってみると自分が思っていたより被害の傷跡が残っており、景色を見たときは言葉を失った。大川小学校で当時生徒だった語り部さんのお話を聞いて胸が苦しくなった。宿泊させていただいたあおい地区の皆さんはとても優しく、おじいちゃんおばあちゃんのような存在だった。あおい地区で一番残っている思い出は、地域の方とともに流しそうめんをしたことである。東北訪問をするまで流しそうめんをしたことがなかったので、とても楽しかった。ごはんを食べながらどんな生活をしているのか、震災当時はどんな状況だったのかお話をくださり、とてもいい経験になった。神戸では味わうことのできない雰囲気が東北にはあり、高校に入学してバタバタしてたまっていた疲れをなくさせるほどいいまちだった。コロナの影響でなかなか行くことができないが、落ち着いたら家族を連れて旅行がてらに東北のすばらしさを教えたい。

(3) ボランティア

私が継続して参加したボランティア活動は、意見交換が多いボランティアに積極的に参加した。私は環境防災科に入る前まで人見知りが激しく初対面の人と話すことができなかった。この短所をなくしたいと思い、できるだけ意見交換があるボランティアに参加した。部活動とボランティアの両立は難しくて一時期は全く参加できない時期があったけれども、高校生活に慣れてくると両立ができるようになった。ボランティアに参加して自分に多くの力がついた。それはおもに2つある。

1つ目は人前で言葉を発する力だ。私は、言葉選びがとても苦手だった。自分の言っていることが相手に伝わっているのか不安でなかなか自分からは発言することができなかった。しかし、様々なボランティアに参加して自分が言いたいことを頭の中でまとめて発言することができるようになった。

2つ目は、先読みする力である。自分の空き時間を把握して予定のないときにボランティアの準備をしたり、事前調べを行ったりしたり自分の予定を組み立てることができるようになった。

6 将来の夢

(1) きっかけ

私の将来の夢は災害派遣チームに所属する看護師になることだ。人を助ける職業に就きたいと思ったきっかけは、小さなおときから地域の人たちに助けられたからである。両親の仕事が忙しく1人になる時間が多かった私に、地域の方が声をかけてくれた。夏休みには自由研究の手伝いや自転車の乗り方を教えてくれ、両親からは学べないことをたくさん教えてもらった。地域に住んでいる人はみな高齢者で将来介護や身体のケアが必要とされている。人を助ける職業に就いて地域の人達に何か恩返しをしたいと考えていた。看護師になりたいと決心したのは、熊本地震で災害ナースの存在を知ったからである。修学旅行で熊本に行き、実際に自分の目で復興途中のまちを見て衝撃を受けた。立ち入り禁止の場所や瓦礫が撤去されていないまちを見て、震災当時はもっと深刻な状況で活動していた人がいると考えるようになり、過酷な状況下で人の命を助ける医療はすごいなと思えた。また、新型コロナウイルスの時代を生きているからこそより一層医療関係者になりたいと思うようになった。感染拡大により一時期は医療崩壊といわれた時期もあった。しかし、懸命な活動によって救われた命がいくつもある。感染症がいつまで続くかわからないが、私が大人になった時に新たな感染症が流行するかもしれない。その時に、私自身が医療関係者として働いていたら何か貢献できるのでないかと考え、看護師になりたいと思った。

(2) 防災との関わり

もし病院勤務中に地震が起きたら、避難誘導をするのは看護師の任務である。夜中に発生した新潟中越地震、熊本地震、胆振東部地震では、看護師がパニックになり避難訓練でした行動ができなかったことがある。災害時は被害の規模が予測できないので、患者さんの命を助けるために看護師の防災力は欠かせない。病院で勤務する場合の看護師の防災力とは、毎日の患者さんの状態管理や、順序よく避難誘導をするために病院の作りを誰よりも知っておく必要がある。呼吸器疾患患者には酸素ボンベが欠かせない。停電した暗闇でも懐中電灯の光だけで処置できるように練習している。私は看護師になって避難所での活動に力を入れたい。こう考えるようになったのは環境防災科で避難所について学ぶ機会が多く、そこから多くの課題が見えてきたからである。まずは感染症対策である。避難所生活に感染予防は欠かせないが、コロナが流行しさらに感染症対策が求められるようになった。人の力でできる予防は換気・消毒・マスクの着用が挙げられる。しかし、人の力だけで防げない時がある。そんな時に環境防災科にいる仲間

や卒業生の方たちと共に協力して問題解決に取り組みたい。また、避難所で大事なことは初動であると考えている。避難所には身体に不安を持った人や脆弱者など様々な人が避難してくる。どんな人が避難しているのか把握するために、健康チェックリストを避難所の医療関係者と共有し、発病や病気の悪化を防ぎたい。

看護師になって大切にしたいことは2つある。1つ目は、命を守ることである。人の命を守る・救う側としてまず自分の命を守らなければ意味がない。2つ目は、プライバシーを守れる環境を作ることだ。これは特に避難所での活動時に徹底したいと考えている。避難所は個人のプライバシーが守られにくい環境になる。そんな被災者が安心して心を休ませられるような環境づくりをするのが大切ではないかと考える。

7 次世代へと

この『語り継ぐ』を書いて、震災後の祖母を含めた周りの人たちの生活を知ることが出来た。阪神・淡路大震災を機にボランティアが広がり、誰かを支援することは改めて大切なことだと感じた。祖母は震災時に弁当配布や、全壊した住宅の撤去を行っているボランティアを見てとてもありがたいと感じたそう。環境防災科に入学してボランティアに参加する機会があって本当に良かったと思う。いろいろな年齢層が集まるボランティアで同年代とは違った意見を聞いて、今までは1つの目線から物事を考えることがしか出来なかったが、新たな立場から物事を考えるようになった。防災を学ぶ環境が身近にない人に、私たちが学んだこと伝えることで防災の輪が広まると思う。環境防災科の先輩方から続いている地域ボランティアも防災の一種だと考える。地域の方との繋がりを切らさないようにボランティアに参加するのではなく参加さしていただいている気持ちを持って、これからも地域の方と交流を続けていきたい。地元である神戸の素晴らしさを守っていけるように、環境防災科で学んだことを将来生かし、災害が発生してから防災に重点的に取り組むのではなく、災害が起きる前から取り組む防災を築いていきたい。

未来へ

神足 多蘭沙

1 はじめに

今から 27 年前の 1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分、阪神・淡路大震災が発生した。この震災で多くの尊い命や日常が奪われた。震災から 27 年たった今、震災を経験していない人や知らない人が増えてきている。私も震災を経験していない 1 人だ。しかし、経験をしていないからといって震災を忘れてはならない。風化を防ぐために、今後起こり得る災害から身を守るために語り継いでいかななくてはならない。そのために、実際に被災した母、祖父から聞いた阪神・淡路大震災を私は語り継ごうと思う。

2 阪神・淡路大震災の概要

発生年月日	1995 年(平成 7 年) 1 月 17 日 午前 5 時 46 分 52 秒
地震名	兵庫県南部地震
震源地	淡路島北部(北緯 34 度 36 分 東経 135 度 02 分)
最大震度	震度 7
規模	マグニチュード 7.3
死者	6434 人
行方不明者	3 人
負傷者	43,792 人
主な死因	圧死 窒息死

[出典：神戸新聞NEXT]

3 母の話

(1) 震災当時

神戸市西区に住んでいた。あまりよく覚えていないが、覚えている限りのことを話してくれた。当時、父と同じ会社で働いていた。17 日は会社の定休日、三宮に結婚指輪を見に行く予定だった。地震が発生した時、2 階のベッドの上で寝ていた。すると、「ドンッ」と突き上げられるような感覚がして目が覚めた。地震直後は何が起きたか全く分からなかった。少しの間、何が起きたのか理解できずに、放心状態だった。しばらくしてから、地震が起きたのだと理解した。部屋を見渡すと、写真立てが倒れたぐらいで、あまり被害はなかったため、安心した。そして、急いで 1 階にいる家族の様子を確認しに行った。家族全員、怪我もなく、無事だった。

教諭をしていた祖父は、生徒の安全確認を行っていて、とても忙しそうだった。

家の被害は、食器が割れただけで、その他の大きい被害は特になかった。棚などは淡路島の向きに置いていたので、倒れなかった。たまたまその向きに置いていただけで、もし逆向きに置いていたら、棚は倒れて、祖父母は大怪我を負っていたかもしれない。そう考えると、日頃のちょっとした備えも大切だと感じた。また、家全体でも比較的被害が少なかったのも、近所の人がお風呂を借りに来ていたこともあった。

(2) 震災を経験して思うこと

家具の固定や備蓄などの備えをしておくことの大切さを改めて実感した。部屋の家具の固定をしていたり、寝るときの頭の近くには物をできるだけ置かないようにしたりと、祖父に言われ、地震の対策は行っていた。しかし、祖父に言われたから対策をしていただけで、自分対策をしても、しなくてもそんなに変わらないだろうと思っていた。震災を経験しなかったら、備えの重要性も、災害の恐ろしさも知らないままであったと思う。日頃から災害をイメージし、「他人事」ではなく「自分事」とすることが大切だと感じた。

(3) 母の話を聞いて

母の話は、小学校低学年の頃に一度聞いたことがあった。聞いたことがあるといっても、小学校低学年だったため、結婚指輪を買いに行く予定があったということしか覚えていなかった。改めて話を聞いて、家族全員が無事で、家の被害も最小限で、本当に良かったと思った。災害を「他人事」と考えるのではなく、「自分事」として、対策をしっかりと行うことの重要性がよく分かった。印象に残ったことは、祖父母が亡くなっていたかもしれないことだ。祖父母がいなかったと考えるととても恐ろしい。

4 祖父の話

(1) 震災当時

神戸市西区に住んでいた。当時、高校の美術科の教諭をしていた。

20 年以上前のことはあまり覚えていないが、今でも印象に残っていることを話してくれた。一番印象に残っていることは、新幹線のレールが落ちていたことだ。

地震が発生した時、起きていたので揺れが収まるとすぐに生徒の安否確認を行った。美術科の生徒で、家から学校が遠い生徒は下宿していた。そのため、安否確認もスムーズにできた。学校に行くと、職員室のドアが歪んでいて開かなかった。数人の先生と協力して、なんとかドアを開けることができた。職員室の中は、棚が倒れていたり、書類が散らばっていたりと、とにかくぐちゃぐちゃだった。3 日後ぐらいに行方不明の生徒が 1 人いたので、自転車で明石から東灘まで捜索活動を行った。その後、生徒は無事に見つかった。自転車で走りながら、街を見ていて印象に残っていることは、公園にテントを張って生活している人があちらこちらにいたことである。明石に帰る途中に、行く時は火の手が消えていた長田の街が、再び燃えているのを目撃した。神戸の消防の人は、水がなくなって困ったそうだ。阪神・淡路大震災では、一番火事が怖かった。

(2) 震災を経験して思うこと

祖父が震災を経験して、思うことは 3 つある。

1 つ目は、家具が倒れないように固定する、戸棚にものをいっぱい詰め込みすぎない、非常持ち出し袋(特に水)の準備など、できることは日頃から最低限しておかなければならないと思った。

2 つ目は、よくここまで復興したと思う。今街並みを見ると、災害があった形跡はほとんどなくなっている。人間の力はすごいと改めて感じた。

3 つ目は、災害はいつ、どこで、起こるか分からないということである。

(3) 祖父の話を聞いて

祖父の震災当時の話を、今回初めて聞いた。震災当時のことをあまり覚えていないのに、思い出しながらも話してくれた祖父には感謝している。行く時には消えていた長田の街の火が、帰る時にまた燃えている長田の街を見た聞いて、火事の怖さを痛感した。また、祖父は「命さえあれば、どうにかなる。命があつてこそ。」と言っていた。その言葉が心に深く刺さった。

震災当時の話を聞いた後に、祖父と感染症と避難所について話をした。もし現在のように新型コロナウイルスが流行している時に、阪神・淡路大震災のような大規模な災害が発生した場合、避難所は密閉・密集・密接の 3 密を避けることができなくなり、感染リスクが高まる。感染症が流行している時の避難所の在り方を、考えなければならぬと祖父と話をした。

5 環境防災科

(1) きっかけ

舞子高校のオープンハイスクールがきっかけだ。そこで、初めて環境防災科のことを知った。環境防災科を受験しようと思った理由は 2 つある。

1 つ目は、生きていく術である防災を学びたいと思ったからだ。

2 つ目は、災害で大切な人を亡くしたくないと思ったからだ。私は災害で大切な人を亡くしたら、後悔すると思う。あの時こうしていたら、防災対策をもっとちゃんとしていたら、亡くならなかったのではないかと考えてしまう。災害はいつ発生するかわからない。そんな災害から大切な人を守れるようになりたい。だから、防災を学びたいと思い、環境防災科を受験した。

(2) 入学してから

1 年生の時は「災害と人間」という授業で、多くの外部講師の方に講義をしていただいた。その中で一番印象に残っているのは、CODE の講義である。CODE とは、被災当事者をはじめとし、その後、復旧・復興・減災に立ち向かう市民・学者・ジャーナリスト・企業・行政・国際機関・NGO などの幅広い“市民”が集まると核となる場。CODE が大切にしていることは、以下の 4 つである。

- ・支援からとりこぼされる地域、人たちを優先(最後のひとりまで)
- ・被災者一人ひとりの声を聴き、支援に生かす
- ・被災地の人たちと共に学び合う
- ・被災地の力(内発性)を育み、自立への道を共に歩む

この講義を聞いて、私も将来これらを大切にしていきたいと思った。

2年生は新型コロナウイルスの影響で、休校になったり、外部講師の方から講義を聞く機会が少なくなったりした。中でも、2年生の後半に行った、兵庫県広域防災センターが印象に残っている。ここでは講義のほかに、地震体験や煙避難体験、備蓄倉庫の施設見学をさせていただいた。起震車での地震体験や煙避難体験はこれまで、何度か体験したことがあった。しかし、ここで体験した煙避難体験は、水蒸気が充満した迷路室でとても熱く、想像以上にしんどかった。今まで体験してきた煙避難体験は、熱くもなく、煙に甘い匂いがついていて、前がうっすらとしか見えない状態で避難するものだった。この煙避難体験を通して、火災で最も恐ろしいのは煙だと身をもって感じた。地震などの自然災害は止めることはできないが、火災は火の点検・始末をしっかりと行えば、地震による火災でも、日常で起こる火災でも、止めることができると思う。

3年生は新型コロナウイルスの影響で、2年時に実施されず、延期となった修学旅行が中止になった。この『語り継ぐ』を執筆しているのは、6月現在である。つまり、3年生になってから2か月しか経過していない。そのため、印象に残っていることを書くことはできない。

6 災害関連死

災害関連死とは、災害の被害で直接亡くなる(直接死)のではなく、避難先で病気を発症したり、持病が悪化したりすることなどによって、間接的に亡くなることである。また、内閣府が発表している災害関連死の定義は以下の通りだ。

当該災害による負傷の悪化又は避難生活等における身体的負担による疾病により、死亡し、災害弔慰金の支給等に関する法律に基づき災害が原因で死亡したものと認められたもの。

[出典：災害関連死について 内閣府]

つまり、自治体へ災害弔慰金を申請後に調査の上で災害関連死かどうか判断されるということだ。そのため、申請されていない場合も考えると、実際の災害関連死の数はデータの数値より多いと推測できる。災害関連死に繋がる原因として主に、慣れない避難所生活のストレス、エコノミークラス症候群、適切な治療が受けられない、などがある。

阪神・淡路大震災の災害関連死者数は、919人である。避難所でのインフルエンザの流行により、肺炎で亡くなる人が多かった。新型コロナウイルスが流行している今、災害が発生すると、避難所での集団感染のリスクが高まる。この集団感染のリスクから逃れるために、車中泊避難を選ぶかもしれない。だが、車中泊は対策をしっかりと行わなければ、エコノミークラス症候群を発症する可能性がある。そして、最悪、災害関連死に繋がる恐れがある。このように、感染症と避難所の在り方を考えなければならないことがよく分かる。

では、コロナ禍で災害関連死を防ぐにはどうしたらよいのか。在宅避難を選ぶことも1つの手だと思う。自宅ではなくても知人の家などに避難するのもよい。自宅や知人の家の方が避難所よりも感染リスクは低くなると思うからである。避難所に行くにせよ、在宅避難をするにせよ、大切なのが備蓄、非常持ち出し袋の準備である。

7 将来の夢

(1) きっかけ

私の将来の夢は、看護師になることだ。看護師になりたいと思う前は、人の役に立つ仕事に就きたい、災害時に役立てる人になりたいと思っていた。看護師になりたいと思ったきっかけは、高校2年生の冬休みに見たニュースだ。それは、コロナ専用病棟で働いている、2年目の看護師たちの闘いを迫ったニュースだった。いつ感染するかわからない状況下で、患者さんと笑顔で接している看護師を見て、すごいと思った。同時に、私もこんな人になりたいと思った。看護師は人の役に立つ仕事で、災害時に役立つことができる。私がなりたいことと一致して、看護師を目指すことにした。

(2) 夢と防災

私は看護師として5年の経験を積んだら、災害支援ナースに登録しようと考えている。災害関連死で亡くなる人を1人でも減らしたいからだ。災害直接死を免れて、助かった命が災害関連死で亡くなるようなことは、あってはならない。看護の力で災害関連死をどれだけ防ぐことができるのか分からないが、防げるのであれば、防ぎたい。災害関連死の原因として、生活環境が関係していると思う。生活環境は人間の健康に大きく影響する。そのため、生活する人間と生活環境を視点にした看護が必要だと考える。具体的には、トイレ掃除をしたり、車中泊をしている人に呼びかけをしたりなどである。これらは、看護師

でなくともできることである。看護師にしかできないことと並行して、看護師ではなくともできることを行うことは大切である。また、こころのケアなど環境防災科で学んだことを日常でも被災地でも生かしていきたい。

8 最後に

私は『語り継ぐ』を執筆するまで、外部講師の方から震災体験を伺うことはあったが、身近な人から震災体験を聞く機会はあまりなかった。話を聞いてみたいと思っていたが、聞いてもよいのか分からなかったからだ。祖父の震災体験は、今回初めて聞くことができた。『語り継ぐ』をきっかけに、身近な人から阪神・淡路大震災の話聞くことができてよかった。

未来の社会に生かす防災

是友 実和

1 はじめに

1995 年 1 月 17 日に起こった阪神・淡路大震災は、私が環境防災科に入学するきっかけとなった災害だ。今年でこの大災害から約 27 年が経過する。私が生まれる約 9 年前の出来事であるため、もちろん全く経験していない。また、私が生まれた後の災害である東日本大震災や熊本地震も私が住んでいるところとは遠く離れている。そのため、テレビでしか情報が入ってこない。本当に起こっている出来事としては認知しづらく、その時は完全に他人事だった。しかし私たちも災害と無縁なわけではなく、災害のことを全然知らない、災害の備えをしていない、まだ災害を経験したことないし大丈夫、では済まされないのだ。特にこの災害の多い日本に住んでいる限り。

私は災害を経験したことはないが、災害を経験した方々から繋げられた過去の災害の教訓を、近い将来起こるとされている南海トラフ巨大地震のためだけでなく、これからの全ての災害に活かして、少しでも多くの命が助かるために災害を経験したことがない人々に語り継ぎたい。

2 灘区の被災状況

死者：816 名

高齢死者比率：54%

若年層死者比率：24%

出典：<http://www.showado-kyoto.jp/files/hansin1/106.pdf>

- ・全焼 465 件半焼 2 件
- ・全壊 12,757 件半壊 5,675 件

→東灘区、灘区の東西方向に走る阪急電鉄と阪神電鉄の間の断層に沿った地域では、既成市街地域を中心に帯状に木造家屋の倒壊被害が甚大であった。

出典：<https://www.city.kobe.lg.jp/a21572/bosai/shobo/hanshinawaji>

3 阪神・淡路大震災

(1) 祖母と祖父の話

祖父と祖母は当時、灘で私の叔母と 3 人で暮らしていた。

震災前夜、祖母は祖父と私の叔母との 3 人で一軒家に住んでいた。普段と変わらない 1 日を終え、祖母と祖父は 1 階で、叔母は 2 階で寝ていた。震災当日 1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分。いきなり地面が割れるような物凄い音がした。その音とともに大きな揺れが襲ってきた。下から突き上げるような揺れで、とても恐怖を感じた。家は全壊し、失うことになってしまった。2 階にいた叔母は何とか自力で脱出することができた。祖母もピアノの下敷きにはなったものの、余震の揺れや布団を剥いでできた隙間から抜け出すことができた。しかし、祖父は意識がある中、隣の家の下敷きになってしまった。横に倒れてきてしまったのだ。体への圧迫はなかったが、頭が潰れない程度に抑え込まれていた。声は聞こえ、姿も見えているが助け出せない。幸い近くに消防車が止まり消防士の方がやってきた。祖母は必死に「主人を助けてください」と要望した。しかし、「他の人の救助もたくさんある。あなたのご主人だけ優先することはできない」と断られてしまった。それでも祖母と叔母はあきらめず、近所に助けを求め叫んだ。しかし誰の耳にも届くような状況ではなかった。そんな祖母を見て、祖父は「もういいから逃げなさい」と言った。あきらめかけた時、大学生の男性が車のジャッキを持って助けに来てくれた。そして、祖父は助かることができた。その後すぐに、阪急岡本の駅近くの祖母の兄の家に避難した。

(2) 父と母の話

父と母は当時神奈川県で暮らしていた。特に実家の兵庫県に帰る予定もなく、いつも通りの生活を送っていた。阪神・淡路大震災の情報が耳に入ったのは 1 月 17 日の朝だった。目を疑うような光景をテレビで目にした。実家の近くの家が潰れている映像だった。急いで祖母に電話をしても全く繋がらない状態だった。その日は父も仕事があったので出勤した。その日の昼頃、神戸からの「実家は潰れたが、みんな無事」という連絡が入った。その 2、3 日後、神戸に物資を持っていくため、車にめいっぱい物資を詰め込んで母と父は兵庫県に向かって車を走らせた。助手席の足場が埋まるほどの量だった。道中で母の実家の静岡県に寄り、そこでも多くの物資を詰め込んだ。

神奈川県から神戸までの道のりは決して容易ではなかった。京都まではいつも通りだったが、そこから神戸への高速道路は通行止めだった。しかしどうしても神戸に行かなければならなかった父は伏見警察に申請し、緊急車両として通行することができた。パトカーの先導のもと、夜中に神戸に到着。通常、神奈川県から神戸は5時間ほどで行けるが、その時は約12時間もの時間が掛かった。

(3) その後の生活について

被災者の多くは、地震により多くの大切なものも失った。実際、震災を経験した私の家族も家や思い出の品を沢山失った。不幸中の幸いで親戚は1人も亡くなることはなかったが、大変なのはその後の生活だった。親戚の子供が生まれたての0歳だったため、衛生面やミルクなどの問題がたくさん発生した。物資だけでは助からない状態にあったことを改めて痛感した。

(4) 話を聞いて

正直、被害の規模が大きすぎて想像するのが難しかった。祖母からは阪神・淡路大震災の時の記憶や体験したことを環境防災科に入学する前からよく聞いていた。だが、この『語り継ぐ』を執筆することがなければ、その聞いた話を自分の中で考えたり整理したりすることはなかっただろうと思う。阪神・淡路大震災の話をしたりしてくれる時、祖母はいつも震災で無くした大切な物や思い出を語ってくれる。祖母を含め、被災者がこの災害で失ったものの大きさを感じた。もし、阪神・淡路大震災が起こっていなければ、どうなっていただろう、とも考えた。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科に入学したいと思ったのは、中学2年生の1月17日5時46分にあった阪神・淡路大震災追悼行事に初めて参加した時だった。それまでは正直学びたいことも、将来の夢も全く決まっていなかった。そのときは、追悼行事にいくという姉について行っただけだった。とても寒かったのを覚えている。寒く、暗く、店の電気もあまりついていないような時間。黙祷をしたとき、すすり泣いている人やごめんねとつぶやく人の声が聞こえた。そのとき、自分が本当に学びたいこと、学ばなければならないことが分かったように思えた。私は阪神・淡路大震災をみんなの心から忘れさせたくないと思った。そんなとき、姉の通っていた舞子高校に阪神・淡路大震災の教訓を活かした環境防災科という学科があることを知った。そこで災害や防災を学び、防災を通して社会に貢献できる人間になりたいと思った。

(2) 入学して

環境防災科に入学してから3年間、日本各地のこれまでの災害を学び、地理や物理、心理や自然面など災害要因や災害後の対応を学んだ。教科は違ってもすべて繋がっていることを、身をもって知った。普通科や他のどの高校でも学ぶことのできないような知識をたくさん得ることができた。

また、外部講師の方からご講義いただける機会がとても多くあったことで、警察官や消防士、自衛隊や災害時要援護者の方など様々な視点からの災害を知ることができ、まだ大きな災害を経験していない私たちに防災な大切さを教えてくださった。

入学して、自分たちで考えることや想像すること、コミュニケーションを通して人と関わり、自分の意見を広め発信していく機会がたくさんあったからこそ防災の大切さを感じることができた。

(3) 現在のコロナウイルス

現在、新型コロナウイルスが日本で流行してから1年半程過ぎようとしている。世界中に広がっているこのウイルスは、世界規模の災害といえるだろう。ワクチン接種も進んできていて救える命も多くなっているようだ。その中でも、学校での行事や継続して訪問したかった被災地訪問や学校外に出てたくさんの経験を積むことのできるボランティア活動も次々となくなっていく。当たり前のように通っていた学校も高校1年生の3学期にしばらく休校になり、部活では1つ上の先輩の引退試合もできずに終わった。コロナウイルスの蔓延により悔しい思いや、つらい思いをして、なぜこんな思いをしなければいけないのかと思うこともたくさんあった。

しかし、つらい思いや悔しい思いをしているのは私だけではない。世界中の人々が非日常の中にあるのだ。その中で自分にできることは何なのかを考えられる人間になりたい。また、当たり前だったことができなくなって学ぶことのできたこともあった。毎日勉強できる環境や好きなことを思いっきりできる部活など、本当はありがたい環境に置かれていたことを、身をもって知るいい機会にもなったと思う。

(4) これから

いつ新型コロナウイルスが収まるかまだ誰にも分からない。いつ災害が起きてもおかしくないし、これまでの災害とは避難所運営の仕方も全く違って来るだろう。迫りくる危険に気付いている私たち環境防

災科や日ごろからの防災を行っている人なら避難先でも対応できる可能性がある。しかし、災害や防災の知識が全くなく災害への備えを行っていない人は、命は助かったとしても避難先で準備不足によって感染症にかかったり、より不自由な生活を送ったりすることになる可能性があるとは私は考える。そのため、災害時に逃げるためだけでなく、その後の不自由な生活によって災害関連死として亡くなってしまう人を減らすために、私たちが防災のリーダーとして学び、語り継ぎ広めていく必要がある。まずは身近な存在から意識の向上に役立つ人間になりたい。

5 将来の夢

(1) きっかけ

私の夢は警察官になることだ。私はよく、友達の口や SNS など多くの場面で「警察官は怖い」「警察官あまり好きじゃない」「警察官を見ると何も悪いことをしていないのに不安になる」といった話をよく聞く。正直私もそう思うことが時々ある。しかし、環境防災科に入ってから警察官の方がご講義して下さったとき、普段どれだけ嫌われて何をされても、業務を成し遂げ国民のために働いている姿にとっても魅力を感じた。

(2) 警察官の災害時対応

- ・NBC テロ対応

NBC テロの未然防止を図るため、情報収集の強化や、関連物質の管理者に対する盗難防止の指導等。テロが発生した場合には NBC テロ対応専門部隊は速やかに医療機関などの関係機関と緊密に連携し、被害者の救助、避難誘導により被害の拡大防止を図る。

- ・広域緊急援助隊

大規模災害発生時の初動措置に当たる広域緊急援助隊や国際緊急援助隊を全国警察の機動隊員、管区機動隊員等で編成している。 など

出典: <https://www.npa.go.jp/bureau/security/intro/index.html>

(3) 過去の出勤した災害、事故

①避難誘導及び救助活動

- ・平成30年7月豪雨

高知県宿毛市内において土砂崩れに巻き込まれて倒壊寸前の家屋から、倒れた家具に挟まれて動けなくなった被災者を救出し、消防団と連携して屋外へと避難誘導。

- ・ 台風 12 号

神奈川県小田原市内の国道 135 号において、約 5 メートルの高波が押し寄せる中、交通規制を実施した上、身動きが取れなくなっていた被災者 4 人を安全な場所へと避難誘導。

- ・台風第21号

被災状況についての情報収集、被災者の避難誘導及び救出救助、交通対策等の活動を実施。

②警察用航空機の運用

- ・北海道胆振東部地震

ヘリコプターを派遣することで被災状況の切れ目ない把握、行方不明者の搜索活動、救出救助活動等を行った結果、生存者8人を発見・救助した。

出典 : <https://www.npa.go.jp/hakusyo/r01/honbun/html/vf111000.html>

(4) 自分のなりたい警察官

私は警察官の中でも広域緊急援助隊になりたい。広域緊急援助隊とは全国の都道府県警察本部に設置されている災害警備活動を行う部隊のことだ。1995年の阪神・淡路大震災での体験を教訓として創設された。私が広域緊急援助隊になりたいと思ったきっかけは2つある。1つは先輩の影響だ。女子バレーボール部に所属していた私には、1つ上に警察官を目指す先輩がいた。その先輩は忙しい学校生活や部活動があったものの高校卒業後、警察官になった。その先輩が目指しているのが広域緊急援助隊だ。先輩のかっこいい背中を追って私も広域緊急援助隊になりたいと思った。

2つ目は広域緊急援助隊が行う業務と私が将来行いたいことが同じだからだ。私は災害の際に動くだけでなく、災害が起こる前に対策し、誰かを助けられる存在になりたいと思っている。広域緊急援助隊は、他の都道府県と協力して大きい規模での訓練を行っている。また、広域緊急援助隊は大規模災害に即応できる救出救助が求められ、救助・防災のエキスパートでなければならない。これこそほかの警察官と違う、防災力の高い警察官だと思った。環境防災科で知ることのできた知識やひらめき、責任感を決して無駄にせず、将来に生かしたい。

6 さいごに

『語り継ぐ』を執筆する前から祖母や祖父からは震災当時の話を聞く機会が何度かあったが、母と父からは聞いたことが無かった。このきっかけが無ければ聞くことはなかったのではないかと思う。環境防災科に入学してよかったと改めて思った。

震災当時は、崩れた家や倒れた電柱、完全に倒れてしまった高速道路などは2021年の今現在には跡形もない。私は今とても住みやすいところで何気なく生活しているが、それは全て震災当時復旧・復興に関わり立て直そうと努力してくれた人、支えあって立ち直った被災者の方々がいたからこそあるものなのだと痛感した。今こうやって『語り継ぐ』を執筆できているという環境にも感謝するべきだと思う。

「沢山の人に伝えてくれてありがとう。そういうことしてくれるだけでほんまに嬉しいわ。」この言葉は災害を経験した方からお話を聴き、そのお話を教訓として若者に伝えていくという活動を神戸ルミナリエ会場、東遊園地で行っていた際、ある女性の方に言われた言葉だ。私はその時、語り継ぐことは次に起こる災害に備えるため、若者の為になっているというだけではないことに気づかされた。お話を聴くことで楽になることあると知ることができた。

記憶というものは悔しくもずっと鮮明に覚えていることが難しい。また、阪神・淡路大震災を経験していない若者が社会の中心となる時代が来る。阪神・淡路大震災という災害自体が風化する可能性も考えられるのだ。だからこそ、自分の将来の夢である警察官と防災の関係をより一層深めるために努力したい。

今、私たちにできることや考えなければならないことを環境防災科の仲間みんなで授業を通して考えていきたい。環境防災科で学んだ防災の知識だけでなく、これからも防災を学び将来に活かし伝え続けたい。そしていつか、人々が災害や防災の知識を当たり前を持っているような強い世界が実現するよう、小さなところからの努力を積み重ねていきたい。

今を生きる人たちへ

坂本 ひなた

1 はじめに

阪神・淡路大震災が発生して、今年で27年目を迎えた。今の神戸の街を見ていると、そんな大規模災害がおきた後には見えないだろう。阪神・淡路大震災を経験していない人が神戸市民の半数を超えた今、徐々に震災の記憶の風化が進んでいる。環境防災科で多くの震災の経験を聞き、防災の大切さを知った私たちだからこそ伝えられるものがある。これから起きる災害で、同じような被害を出さないためにも未来へと語り継いでいく必要があると思う。

2 阪神・淡路大震災

発生日時：1995年1月17日5時46分

最大震度：7

最大余震：1995年1月17日5時50分(最大震度4)

死者数：6,434名

行方不明者：3名

負傷者：43,792名

主な死因：圧死, 窒息死(77.0%)

出典：神戸市ホームページより

3 阪神・淡路大震災の体験談

(1) 伯母の話

当時、看護師として働いていた伯母は、長田区の産院で夜勤中だった。余震があり、その直後に立っていると体が吹き飛ばされるような大きな縦揺れが起きた。赤ちゃん5人中3人のベビースケールが横に滑り落ちていったのを伯母は覆い被さるように守った。同時に母親達の叫び声が聞こえたが、助けられる余裕がない程の地震だった。医師に連絡しようとしたが電話が繋がらず、とりあえず母親達と赤ちゃんを厚着させたが、母親は恐怖のあまりか震えたままだった。中には低体温児がいたので、毛布にくるんだり湯たんぽで温めたりして体温が落ちないようにした。近くの小学校に避難するためドアを開けると、隣の建物の屋根が目の前まで崩れてきていたため、ドアが半分までしか開かなかった。驚きのあまり一度ドアを閉め、もう一度開けた瞬間に大きな余震が起きた。慌てふためく母親達に伯母は必死に「大丈夫」と声をかけた。

外に出るとあたり一面は火事になっていた。横は長屋が傾いて中からうめき声や「助けて」という声が聞こえていたが、赤ちゃんを母親達を連れていたため助けることができなかった。小学校に母親達と赤ちゃんを送ったとき、校門周りは負傷した人で溢れていた。伯母自身も足にガラスが刺さる怪我をしていたが周りに言われないと気づかなかった。

校門が開いた後、周りの人に「赤ちゃんがいる」と伝えたら周りにいた人がそばに寄ったりして暖をとってくれた。少し経ったとき、他の看護師や医師が駆けつけた。ナースキャップを付けていた伯母は、他の看護師に「ナースキャップは取りなさい」と言われた。理由は、看護師だと分かたら助けを求める人が集まってくるからだだった。その後、赤ちゃんを母親達を教室に移動させて落ち着かせ、他の人たちの手当てに回った。

避難した小学校には治療できる機材は備わっていなかったため、机をベッド代わりにしたり、伯母のいた産院から持ち出した点滴を紐を使って垂らしたり、急患は車を借りて病院に運んだりした。その時は、命の優先順位を決めざるを得なかった。人手も足りなかったため圧死した人たちや遺体安置所に置かれている人の死亡診断書もすべて書いた。

忙しく動きつめて、家に帰れたのは震災から1週間後だった。伯母が家に帰られなかった1週間、両親は死んだも同然だと思っていたそうだ。家に帰った伯母の姿を見るなり両親は驚きと嬉しさで目を見開いたまま固まっていた。再開した伯母と両親は、お互いの顔を見て安心し合いみんなで抱き合い涙を流した。

(2) 話を聞いて

私は阪神・淡路大震災のことは小学校から習っていたし、環境防災科の授業内でもたくさん話を聞いた

り出来事に触れたりしてきたが、身内の震災の話を書くのは初めてだった。いつも明るい伯母が、震災の話を出しては辛そうにしている姿を見て、震災はそれだけ人の心に影響を与える災害だったのだと改めて実感した。なかでも一番印象が強かったのは、看護師が死亡診断書を書いていた話だ。実際、死亡診断書の作成は医師以外ではいけないという原則がある。その状況下で看護師が死亡診断書を作成するというのは前代未聞の話だ。伯母曰く「いくつもの患者さんの手当てをしてきたが、過去にない程の悲惨な現場だった」と語っていたので、医師だけでは死亡の判断が追いつかなかった程、死者数が多かったという、どうしても死亡診断書を作成しないといけないような想像を絶する状態だったと思う。その中で1週間も家に帰らず必死に患者さんの看護に努めた伯母含む看護師さんを尊敬したと同時に、私もどんな状況でもめげずに頑張ることのできる看護師になりたいと思った。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科に入りたいと思ったきっかけは、中学の頃に参加した震災メモリアル行事だった。もともと災害について興味があった私は、舞子高校に環境防災科があるのは知っていたが、ボランティアするだけの学科だと思っていた。ある時、私たちの学年は舞子高校のメモリアル行事を見に行くことになり発表を聞くと、震災や他の災害のことまで詳しく説明し、防災について熱く語っている先輩方の姿を見て感銘を受けた。この学科はボランティアだけでなく、もっと深く災害について学べるのだと思い、環境防災科に入りたいと思った。

(2) 入学して

環境防災科で過ごした3年間は、とても充実したものだった。初めてするボランティア活動や勉強、講義や校外学習で楽しく学ぶことが出来たからだ。学んでいく中で、初めは興味のなかった防災に興味を持つことができた。その中でも興味を持ったのは、ACTIVE 防災Ⅰ・Ⅱの授業だ。震災の映像を見たり講義を聞いたりして災害後の心理状態の変化に関心をもった。その頃から、興味のあることに対して自分で調べて積極的に勉強に取り組むことが増えた。授業やボランティア活動に参加していく中で、将来の夢や防災の大切さについて知ることができ、考え方が180度変わった。3年間クラスが変わらないため、学校行事もみんなで一致団結して参加することが出来たと思う。環境防災科は、防災を学ぶこと以外にも仲間との絆を深め、人の役に立てることの喜びを実感できる。だからこそもっと全国に増えてほしいと思う。

(3) ボランティア活動

私は3年間のボランティア活動の中で一番楽しくできたのは募金活動と多聞南小学校の夏祭りだ。初めはボランティア自体に興味がなかったのも、ボランティアの参加にも迷っていたが、友達や先輩から誘われて参加することになった。夏祭りのボランティア活動では初めての参加で緊張していたし、割り当てられた仕事も何をしたらいいか全然分からなかった。そんな時に先輩方が丁寧に教えてくれたり話しかけたりしてくれたおかげで、徐々にどんな風にすればいいのかわかるようになった。運営を行っていく中で、地域の方々と交流することが多かったのも、たくさんコミュニケーションを取ることができ、積極的に仕事に参加できるようになった。当初、夏祭りのボランティアは防災と全く関係性のないことだと思っていたけれど、夏祭りという地域交流の場で色々な人とのコミュニケーションを増やすことで親密度を深めることができ、災害時の安否確認や救助がスムーズになるのではないかと幅広い視野で考えられるようになった。募金活動は中学の頃に何度か参加していたことがあったので、多少は慣れているだろうと思っていた。しかし、高校で行う募金活動では「募金お願いします」とただ言うのではなく、事前調べなど被災地の状況も説明して募金の声掛けを行っていたので初めは驚いた。久しぶりだったということもあり、大きな声で募金を呼びかけることに最初は恥じらいを持っていたが、募金を行ってくれる人が掛けてくれる「頑張ってるね」という言葉が嬉しくて徐々に恥じらいは消えていき、堂々と募金活動を行うことができた。

5 将来の夢

(1) きっかけ

私の将来の夢は、心のケアもできる看護師になりホスピスで働くことだ。ホスピスとは、がんなどの重症患者や治癒の見込みがない症状をもつ患者の終末期ケアや看取りを行う病院である。中学生の頃に母が入院してお見舞いに行ったとき、看護師さんと話しているところを見た。後々、母に何をしていたのか聞くと「話を聞いてもらっていたの」と言われた。その頃は特に何も思わなかったが、環境防災科の授業

内で心理面について学んでいくうちに、入院している患者さん達は話す相手がおらず、ストレスを抱いたり寂しくなったり不安になったりする人が多くいるのだと考えるようになった。私は、そんな患者さん達のお話を聞き、最期まで心に寄り添い少しでも楽になってほしいと思うようになった。

(2) 大切にしたいこと

私は看護師として大切にしたいことが3つある。

1つ目は、患者さんとのコミュニケーションだ。看護師は患者さんの看護だけでなく傍で支えていくお仕事だと考えている。だから普段からの細やかなコミュニケーションを大切にすることで患者さんの心に寄り添っていききたい。

2つ目は、相手の立場になって考えることだ。自分が患者さんの立場になって考えることで、されたら嫌なことやしてほしいことが見えてくると考えるからだ。

3つ目は、心のケアだ。私はこれを最も大切にしていきたいと考えている。ACTIVE 防災Ⅰ・Ⅱの授業で震災後の心理状態の変化について学んでから、人の心にも寄り添える看護をしたいと思うようになった。それは決して簡単なことではないが、患者さんから無理に話を聞こうとせず、話してくれることに傾聴の姿勢で聞き「この人に話してよかったな」や「気持ちが少し楽になったな」と思ってもらえるような心のケアをしていきたい。

(3) 夢と防災

私は看護師になってから、災害時にどうしたらいいのかわからない看護師を減らし、冷静に判断・行動できるような看護師を増やしたい。第一に自分の命が守れないと、患者さんや他の人々を救うことができない。だから、定期的に災害のシミュレーションを行いたい。例えば、各個人が病院の危険だと想定した場所を考えスタッフ同士で共有し、実際に病院で災害のシミュレーションを行う。その際、危険だと想定された場所の防災案や避難の仕方を考えることができる。災害のシミュレーションは繰り返し行うことで自然と慣れて、災害時や非常時にも冷静に対応することが出来ると考える。さらには、アクションカードや防災マニュアルの再確認や置き場所の確認を行うことでどうしたら良いか分からなく慌てふためくことが減るだろう。他にも、入院している患者さんの非常時の行動についての説明、病院全体で定期的な避難訓練を行い、いざという時になるべく被害を最小化するために備えていきたい。

6 コロナ禍でできること

新型コロナウイルスの流行当初はすぐに収まるだろうと考えていたが、日に日に増えていく感染者・死亡者の数に徐々に危機感を覚えていった。高校2年生だった私は、分散登校が始まってからというもの、中止にされていく学校行事、徐々に制限が増えていく学校生活に嫌気がさしていた。正直、マスクをつけることも外出自粛を促されるのも嫌いだった程である。

新型コロナウイルスによるパンデミックから2年経つ今、私たちができることは今も限られている。そんな中で私がしていきたいと考えるのは、コロナ禍で行われるボランティア活動の参加だ。私たちは防災の知識を広めようとしても、新型コロナウイルスの影響により防災の大切さなどを伝えることができなかった。それを、ボランティア活動に参加して少しずつでも周囲の人に防災を広めていきたい。ボランティア活動をする上で人との接触が多い分、コロナ禍では参加する一人ひとりが人一倍の感染対策を必要とし、周りの配慮も必要になってくる。簡単なことでないが、助け合いの精神を持って取り組みたいと考えている。

この新型コロナウイルスの脅威は計り知れないものであるが、コロナ禍で様々な困難を経験したので、その経験をいつか良い経験として将来に活かしていきたいと思う。

7 さいごに

『語り継ぐ』の執筆にあたり、いままでの自分の在り方や防災に対しての意識変化について思い返されるところがたくさんあった。初めは防災に興味がなかった私が、どのようにすれば周りに防災の大切さをわかってもらえるか考えたり、防災で大切なことはなにか自然と考えたりしていて、この3年間で自分がまさかそこまで考えることができるようになるとは思っていなかった。正直自分でも驚いた。入学当初の私は、新しいことに挑戦することもしなかったし、「周りがしているからいいや」という考えをしていた。防災に関してもボランティア活動に対しても興味を持たず、自主的に学ぶことをしなかった。しかし、環境防災科で生活していく中で、周りに誘われて参加したボランティア活動や授業が楽しかった。さらに防災を学ぶ上で大切なことや人のために何かをするという気持ちの大切さなど様々なことを学ぶ

ことができたと思う。特に、初めてのことに挑戦することの楽しさや面白さなどを私は学ぶことができた。だからこそ、みんなに防災の大切さを知ってほしいと思えたり、知っていないといけないことがあるのだと感じた。これから先起こるとされている南海トラフ巨大地震での被害を最小化するために一人ひとりが防災の意識を高めていくことが大切だと思う。そのためにも私たち環境防災科が全国に防災を広めていかないといけない。

「あの日」から目を逸らさずに

高見 心陽

1 はじめに

私は、阪神・淡路大震災について小学校4年生で初めて概要を知った。もちろん小学校低学年の時から「しあわせはこぼろ」(防災教本)の配布もあり、全く知らないわけではなかった。しかし、私は辛いこと、嫌なことから目を背ける癖があり、震災のことには触れず生きてきた。だがある日、阪神・淡路大震災の特集がテレビで放送されていた。私は画面右端に“阪神・淡路大震災から〇年”というテロップを見て、もう寝ようと立ち上がった時、自分の住んでいる町が火に覆われている映像が流れた。

次々と流れる火災現場は見たことがある場所が多く、そこには小学校への登下校の道もあった。

いつも見ている綺麗に舗装された道はなく、黒煙が立ち上っていた。真っ赤な火と対面し水が足りなくて立ち尽くす消防員、逃げ回る人の姿。これが本当に自分の町の姿なのか目を疑った。

震災のことから目をそむけていた結果、初めて見た被害状況を境に“災害”が計り知れない恐怖に変わった。このように、ほんの些細なことで人の心は変わる。これから大きな災害を体験していない世代が軸になる中で、過去の教訓を忘れないものにしたい。

2 阪神・淡路大震災 概要

死者数計：6,434人(兵庫県内：6,402人)

直接死(兵庫県分のみ)：5,483人

関連死(兵庫県分のみ)：919人

行方不明：3人

負傷者数計：43,792人

震災孤児・震災遺児：573人

[出典：震災発 DATE 阪神淡路大震災-人的被害]

自助(自力、家族などの救助)：66.8%

共助(友人、隣人、通行人)：28.1%

公助(救助隊)：1.7%

[出典：東京消防庁]

3 近所のおじいさんの話

震災当時、長田区に住んでいた地域イベントで知り合ったおじいさんから話を聞いた。

(1) 震災当時

当時はまだ働いている年齢だったため、早起きが日課で午前5時頃には起きていた。妻と2人きりの暮らしで、毎日交わす何気ない「おはよう」が生きている実感だった。いつも通り、支度をしていた時に地震が発生した。最初アパートにトラックか何かがぶつかってきたのか、そんな衝撃だった。ドーン、ガッシャーン。あまりにも唐突な揺れに頭は働かず、洗面台で小さく丸まって揺れが収まるのを待っていた。揺れが終わった時にはこれが地震だとうやうや気付いた時だった。朝ご飯を作っていた奥さんのもとに行こうとすると、リビングへ入る扉が傾いていて簡単に開かなかった。「大丈夫か!」と呼び掛け返ってきた返事に安堵するものの、扉は自分ひとりの力で開くことはなかった。だが、隣人がその声を聞きつけて一緒に扉を開けてくれた、妻は無事に救出でき、隣人に泣きながらお礼をした。自分自身はそのことを振り返ると「冷静にな、考えたら扉を蹴破るとか方法はあったん。でも俺は手で開けるってことしか頭に思い浮かばなかったん。でも、多分その人が来てくれなかったら、あの扉は開かんかったと思う」と少し目を伏せながら話してくれた。

(2) 隣人との助け合い

元々、当時住んでいたアパートは隣人同士の交流が多く、余ったおかず、お土産とかお互いに持ち寄る仲だった。幸い火の手もなく誰も怪我をしていなかったため、すぐに状況を整理することができた。アパートは1階部分が半壊、2階にはあまり被害がなく扉が歪んだ程度だった。しかし、1階に住んでいた人は家に入れる状況ではなく、服と蓄えていたものも取ることは難しかった。しかも、震災当時は1月17日の朝で極寒だった。しかし、家からものを取り出せる住人は、心置きなく服もすべて貸してあげていた。泣きながら感謝を伝えている姿を見て「やっぱ世の中助け合いやと思うわ」と隣で奥さんは笑ってい

た。そのあとも、冷蔵庫に入っていた食品などを持ち寄って豚汁を作ったり足りないものを分け合ったり他のアパートやマンションに行き救出活動なども手伝った。日暮れ頃にアパートに帰り、アパートの住人全員で明日のことを話し合ったりした。明日はどうなっていくか、予想もできない中、円になって暖をとったことは一生忘れられないだろう。

(3) 現在

今はもう当時住んでいたアパートには住んでおらず、新しいマンションに引っ越した。自然と助け合った隣人とも縁はまだ続いており、お酒を飲みに行ったりする仲だ。いつも震災当時のことを昨日のことに思いだして語り合う。近くには全員住んでいないが、関係は10数年ずっと続いていた。私は震災の時に“共助”で妻が助かったこともあり、新しいマンションでもイベントや交流会など必ず参加するようにしている。名前や顔を覚えて、もしもの時に誰がいないか、生存確認ができるし信頼できるようにコミュニティーの輪を広げていきたいと語ってくれた。

少しでも自分が若い世代の一員として貢献出来たら幸いである。

(4) 話を聞いて

やはり共助の力が大きいと改めて考えるきっかけになった。いろんな職業の方が震災当時の話を講義してくれたが、全員が「コミュニティーの輪」と似たような言葉を言った。やはり公助(自衛隊や警察など)の力ではあまりにも足りない大きな災害に被災した時、私たちは自助か共助の選択肢を迫られるだろう。その時に、元から話したことがある人や名前を知っている人がいたら少しでも安心できるのではないかと考えた。そのためにも地域のイベントに参加する、自治体の会議に参加することや隣人に挨拶するなど、少しの身近なことから信頼関係を築くことが大切だと話を聞いて強く思った。

私はこのおじいさんと初めて出会ったきっかけは、マンションのエレベーターで挨拶を交わしたというだけだった。しかし地域のイベントに参加して世間話をしていくうちに、少しのことで声をかけてくれるようになった。このような少しの挨拶でも、親密な関係になるまで時間はかからないのではないかなと思う。

ぜひ、気軽に隣人に挨拶でもしてみしてほしい。

4 南海トラフ巨大地震

南海トラフ巨大地震とは静岡県の駿河湾から九州東北沖まで続く海溝で発生する海溝型地震、今後30年間以内にマグニチュード8クラスの地震が約70~80%の確率で発生するといわれている。

その中でも津波被害が想定されており、最大の津波の高さは高知県黒潮町と土佐清水市で34mと予測されている。そのため高知県では南海トラフ地震対策課など独自の課を設立して啓発活動を行っている。CMやミニ番組、過去の震災の記録などをリンクにわかりやすくまとめている。また津波と地震に対応した避難タワーを県内で複数個所に設置している。このように過去の災害の事例や、今現在のテクノロジーを活かし対策している。兵庫県でも阪神・淡路大震災のことを生かし、兵庫県では南海トラフ地震にあたる地震防災対策の推進に関する特別措置法に基づき、南海トラフ地震で被害想定が高い地域の関係事業者は、津波から利用客や従業員などを守るため、津波避難の確保に関する方法等を定めた「南海トラフ地震防災対策計画」の作成、届出が義務付けられている。

このように、ライフラインを扱う会社や市町村が対策を進めていく中、私たちもそのような計画があって被災直後にどう逃げるのかなど個人間の対策も必要となってくる。家の耐震補強や家具の転倒防止、家族間で避難場所を決める、ハザードマップの確認などたくさんすることが必要となる。災害時では普段使っている携帯では回線が混雑し家族間で連絡がとれないことも考えられる。だから、最初から家族間でどこに集まって避難するかを決めておいてほしい。このことを多くの人が知り、災害時に困惑しないようにしてほしい。

5 環境防災科

(1) 入学のきっかけ

一番初めに述べた通り、幼い時から災害というものが怖かった。いつ起こるかわからない、どんな被害が起こるか、もしかしたらその災害によって大切な人が亡くなってしまうかもしれない。そんな推測が毎日頭の隅にあった。だからこそ、少しでも災害が発生したときに被害を減らそうと思い、自分で防災バッグを作ったり、避難時の家族での決め事を書いて家の壁に張ったりしていた。しかし、インターネット情報や本の知識では限りがあり、どうしても自分の好きな分野の防災情報ばかりに偏る。

このままでは、自分のことも家族のことも守ることは難しいと思い、防災・災害のことを調べている時

に環境防災科のことを知り、防災の知識を広げるため入学を決めた。

実際に入学して、思ったことは災害の種類も対応も数えきれないほどあるということだ。

例えば地震が発生したときに、市民は自助や共助を行い助けあう。自衛隊は、がれきの中に埋もれた人や共助では難しい救助や支援を行う。ライフラインを運営している会社は復旧工事など、それぞれ与えられた役割が存在する。しかし、災害時は“非日常”で何が起こるか誰にもわからない。復旧工事で命を落とす方、救助が間に合わないこともあるだろう。だから、そのもしもに備えて災害用マニュアルを作成し、訓練を行う、そのことをいろんな方に教わった。未曾有の災害にどれだけ被害を減らせるか、今後私たち一人ひとりが考えて、過去の教訓をまだ災害を体験していない人に語り継いでいかなければならないことだと思う。

（２）ボランティアについて

私は高校に入るまでボランティア活動に参加したことがなかった。なぜなら、初対面の人と会話するのが苦手で、新しい環境に乗り込む勇気がなかったからだ。どうしても、自分から身を乗り出して参加するというのは恥ずかしく思っていた。しかし、環境防災科に入学し、たくさんのボランティア活動の募集を見て、私でも少しの勇気があれば参加できるのではないかと、そう思った時には紙に名前を書いていた。一度参加してしまえば、ボランティア活動に対する思いが変わり、３年間で沢山参加した。どれも貴重な体験で、前に立って喋る力やいろんなことに対する応用力など様々な力も身に付いた。

他にも、自分の得意分野であるイラストを描くことを出前授業のボランティアで生かすことができ、小さな子供たちが喜ぶ姿を見て、自分がどういう風に防災を広めていけるか深く考えるきっかけにもなった。

（３）新型コロナウイルス

新型コロナウイルスは2020年2月頃から流行したウイルスである。最初は新しい風邪の一種ぐらいだろう、と簡単に考えていた日常は一瞬で崩れた。ニュース番組の項目はいつの間にか「新型コロナウイルス」で溢れかえり、いいニュースはほんの1項目しか無かった。それに、学校は4月から6月の初めまで、およそ2か月間休校となった。最初は「学校休みだ」それぐらいにしか思っていなかったが、行動が制限され、したいことができず、楽しいイベントばかりが無くなるなど、いいことは何もなかった。

しかし、その中でも私たちは防災と関わりを持った。春休みの課題には「新型コロナウイルスが流行している中で私たちができること」があり、非日常での答えのない問題は難しく、たくさんの記事を読み、様々な視点から考えた。もし災害が発生したら…そう考えていたらきりがなかった。しかしそれが絶対に起こりえないとは言えない。本当に発生してしまった時の対応など非日常に対し、多くのことを考えた1年だったと思う。

6 夢と防災

（１）きっかけ

私の将来の夢は災害時に活躍できる柔道整復師になることだ。柔道整復師は、骨・関節・筋・腱・靱帯など外傷が明らかな原因により、発生する骨折・脱臼・打撲・捻挫・挫傷などの損傷に対し、手術をしない「非観血的療法」によって、整復・固定などを行い、人間の持つ治癒能力を最大限に発揮させる施術を行う医療従事者だ。

私は、環境防災科に入学し災害支援に特に興味をもった。そうして災害支援に関する記事を読んでいくうちに「被災地にいて人を笑顔にできる職業に就きたい」と思い、数ある選択肢の中から柔道整復師を選んだ。柔道整復師は、被災直後に災害地に赴き命を助けるといった職業ではないが、エコノミークラス症候群ケアを行うなど、中々手が回らない災害時の高齢者の方のケアが行える。

私はそのような活動ができる柔道整復師になりたいと思う。

（２）防災の広め方

柔道整復師は生涯働いて居る中で防災と関わる機会は少ない。今とは違い出前授業などボランティア活動に参加することも難しくなる。“広げていく”ことが難しくなる中、どうやって防災と関わって考えていくか自分なりに考えた。まず自分の強みであるイラストと関連性はないか。思いついたのは仕事場に簡単な防災イラストポスターを描いて、貼ってもらふことだ。診察の待ち時間、ふとした瞬間にそのポスターを見て知識として身につけば幸いだ。また、進学した先で知り合った方や環境防災科のクラスのメンバーの職場にも貼ってもらえるように、世代を超えた繋がりを生かしてたくさんの人と繋がっていきたいと思う。後は、仕事場での災害時の避難マニュアルの見直しや地震が起こった時に器具などが二次災害にならないかの点検など、身近な場所から少しずつ“防災”をしていきたい。

7 最後に

これから時代は“震災を体験していない人”が軸となる。しかし、私が幼少期にしていたように震災学習から目を背ける人や、災害を軽視してしまう人だって居るかもしれない。そういった一人ひとりの災害に対する意識改革は、次の大きな災害が起きたときに少なからず生かされると思う。幸い、兵庫県には過去の教訓として、人と防災未来センターや野島断層保存館など震災の記録を残し、後世に残そうとしている場所がある。神戸の小学校では、そこに遠足など、学校の行事としていくところが多い。また、阪神・淡路大震災が発生した1月17日にはひょうご安全の日の集いなど、追悼式や数々の行事が行われる。小さな頃から、震災学習を行う兵庫県は、多くの人が災害を軽視していることは少ないだろう。そんな、私たちにとってあたりまえだった事が全国でも当たり前になればいいと思う。

私は、阪神・淡路大震災という大きな地震で多くの人が犠牲になってしまったことをデータとして覚えるのではなく、どんな人がいてどんな状況だったなど数字ではなく、被災者の方の話で向き合っていきたい。私が環境防災科に入学し、たくさんの方の講義を受け「あの日から目を逸らさず向き合っていく」ことが今を生きている私たちがしなければならないことだと、思った。

私たちにできること

多田 智貴

1 はじめに

1995年1月17日5時46分阪神・淡路大震災が発生した。私は生まれてきてから命の危険を感じるレベルの災害を経験したことがない。そのため、小学校のころから防災教育や避難訓練を受けていたが自分は関係ない、自分は大丈夫とどこか他人事のように考えていた。しかし、環境防災科に入り被災体験を聞いたり、ボランティア活動に参加したりすることで、自分や家族身の回りの人にも起こりうることだと考えるようになり、防災や減災にまじめに取り組むようになった。今、減災や防災を軽視している人は少なからずいる。そういった人たちに語り継ぎたい。

2 阪神・淡路大震災当時の話

私は当時の話を知るために家族に話を聞いた。

(1) 父の話

父は当時小学5年生だった。多聞南小学校から徒歩5分ほどの所に住んでおり、大きな被害を受けた。

揺れは震度5程度だった。自室で寝ていたが全員がすぐに2階にある寝室に避難した。揺れのひどさから祖父が「もう家はだめかもしれん、みんな死ぬ覚悟しとけ」といったことを今でも鮮明に覚えている。何とか家は倒れず、揺れが収まってから外に避難した。1階は写真立てや皿がすべて割れていて歩ける状態ではなく、玄関に行き靴を取りにいった。奇跡的にテレビがついて阪神高速道路が倒れているのを見てかなり衝撃を受けた。現実だと思えず、何かの映画のワンシーンだと思った。長田の火がどんどん広がっていくのを見て、自分たちの町まで来るかも知れないと思ったらしい。その後学校は休校になり、学校のグラウンドに多くの仮設住宅ができた。父は当時のことを自分の人生で一番死が近い出来事だと考えている。しかし、当時のことを月日が経つにつれて忘れてきており、「あんなに怖いことが起こったのに忘れて行ってしまう自分が怖い」。

(2) 父の話を聞いて

震災を経験した父の話を聞くのはとてもつらいものがあつた。いつも明るい父が全く笑わず話しているところから恐ろしさが伝わってきた。また普段弱音一つはかない祖父がこのようなセリフを言ったと考えられない。またそんな恐ろしい経験をしたのに忘れてしまうのは人間が嫌なことを忘れようとするからだと感じた。今回父に話を聞いたことによって当時のことを改めて考える機会になった。この話が終わった後、あらためて家族で防災について話し合った。父の経験からベッドの下にスリッパを入れるなど、被災した人ならではの考えが出た。今回父の話を聞いて地震の恐ろしさを再確認した。また、忘れないようにほかの人に話すのが大切だと感じた。

(3) 母の話

母は当時岡山県に住んでいた。揺れはそこまで大きくなく、机の下に隠れて揺れが収まるのを待った。揺れが収まりテレビをつけると神戸が大変なことになっているのが映った。空を何台ものヘリコプターが飛んでいくのを見た。被害を見たときはどこか他人事で「大変だな」と思っただけだった。それよりも修学旅行はどうなるのだろうと考えていた。実際に自分が被害にあっていないと実感がわかないものだ。

(4) 母の話を聞いて

今まで神戸にいる人の視点で話を聞いてきたので、被災していない人の視点での話は新鮮だった。母の話の中で「他人事」と出てきていたがその通りだと思った。私は小学1年生の時に東日本大震災をテレビで見たが「かわいそう」と思うことしかできなかった。母の話からは実際に自分が被害にあっていないと自分事として考えるのは難しいことだと気づいた。しかしそれだけではいけないと思う。たとえ自分に関係なくても、実際に被害にあってなくても、少しでも自分にできることがないのか考えられるようになりたい。この考えになれたのは母の話があつたからだと思う。

(5) 祖父母の現在

祖父母は今も阪神・淡路大震災で被害にあつた家に住んでいる。当時震度5で倒れそうになった家だ。もちろん耐震強化はしているがそれでも不安は残っていると思う。一度倒れかけた家だ。さらに去年には白アリが発生していたことがわかっている。耐震強化したとしてもさすがに南海トラフ巨大

地震に耐えられないかもしれない。それをわかったうえで祖父母はその上に住んでいるのか疑問に思い話を聞いてみた。

実際話を聞いたところ、駅近くのマンションを購入して引っ越す予定はしている。なぜすぐにでも引っ越さないのかと質問してみると、家族と過ごした思い出が詰まっていたなかなか引っ越せないと述べていた。私にとってはその思い出よりも祖父母の命のほうが大切かもしれないが、祖父母からすると子供と孫が集まる場所でもあり思い出も多くある。そんな家を離れるのはつらいことだ。祖父母の気持ちもわからなくもないが、最優先は命だ。何とか祖父母を説得し引っ越しをしてもらうことになった。

この問題は私の祖父母だけでなく多くの人が悩んでいる問題かもしれない。何らかの理由で危険な場所に住み続けている人がいるかもしれない。しかし命を失ってしまっただけでは何も解決しない。もしも自分の周りで他にもそのような人がいたら、引っ越しのサポートをしようと思った。

3 環境防災科に入って

(1) きっかけ

私が環境防災科に入学したきっかけは、2つある。

1つ目は地域で行われた夏祭りにボランティアとして活動している環境防災科の生徒を見かけたことだ。毎年地域の夏祭りに参加していたが、いつ行ってもボランティアに参加していて、明るく一生懸命に働く環境防災科の生徒に憧れた。また自分の祖父が環境防災科の生徒と地域の活動をしていた時「若い子たちが明るく元気に手伝ってくれるとこっちまで元気になる」と話しており、私も誰かの役に立てる高校生になりたいと思い入学した。

2つ目は災害から命を守る術を学びたかったからだ。私は小学2年生の時に震度4ほどの地震にあり、母親がけがをした。これがきっかけで恐怖心を覚え災害にとっても敏感になった。南海トラフ地震が発生するといわれている中で家族や友人そして自分の命を失わないためにも防災を学ぶことが必要だと考え入学した。

(2) 入学して

環境防災科に入学した当時はとても不安が多かった。周りの人たちは防災に関する仕事に付きたい人や目標を持って入ってきている人が多かったからだ。そんな中、私は防災に関する仕事につきたいわけでもなく、防災に対する意識もそこまで高くなかった。本当に入学してよかったのかと感じていた。

しかし1年生の時、水道局や自衛隊、電力会社などいろんな視点から防災を学ぶことで災害への考えが他人事から自分事へと変化し、防災を真剣に学べるようになった。

環境防災科の授業ではパワーポイントを使った発表やグループワークが多くあった。私は大人数を相手に1人で話すことが苦手だった。最初は話をうまく伝えられない、声が小さくなる、前を見て話せないことが多かった。しかし、何度も発表しているうちに周りがよく見えるようになり落ち着いて発表できるようになった。

3年生になると「夢と防災」という授業で、自分の将来の仕事と防災がどのように関わってくるのかを考える機会があった。発表という形で言葉に表すことで、以前より自分の夢を明確にすることができた。

(3) ボランティア活動

私は地域の夏祭りやスタンプラリーなど地域の活動をサポートするボランティアに参加することが多かった。地域の人たちはいつも環境防災科の生徒がボランティアに参加すると喜んでくれていた。これは環境防災科の先輩たちが何年間にもわたって一生懸命ボランティア続けてくれたからだ。そして地域の人たちは環境防災科の生徒を信頼しており環境防災科と地域の人々のきずなを感じた。地域の人が信頼してくれている、その信頼を失わないためにもいつも全力でボランティアを行うことができた。私がボランティアで大切にしていたことは感謝の気持ちを言葉で伝えることだ。ボランティアをしているとお菓子やお茶などをいただくことが多くあった。そういった時どうしてもやってあげているという考えが脳裏をよぎった。そういった時、やらしてもらっているという気持ちを忘れないためにも、相手に感謝の気持ちを伝えるようにしていた。

この3年間のボランティアはとても有意義なものばかりだった。特に相手に信頼されるということの素晴らしさや難しさを学ばされた。これはボランティアだけでなくこれからの自分の人生でも活かされることだ。そして環境防災科と地域の人たちが信頼してボランティアを行う関係がこれからも

続いてほしい。そのためにも、これからの環境防災科生も全力でボランティアを行ってほしい。

4 夢と防災

(1) 理学療法士

私の父親は神戸市を拠点にリハビリ特化型デイサービスや児童発達支援事業所、放課後等デイサービスなどの社会福祉事業を行っている。私はその会社のリハビリ特化型デイサービスで働き高齢者のリハビリをしようと思っている。児童福祉を選ばず理学療法士を選んだ理由は、スポーツをやっていてよく怪我をして体のストレッチをしていた。それがきっかけで人の筋肉の動き、関節の動きに興味を持つようになった。将来の仕事に生かしたいと思い、たどり着いたのが理学療法士として高齢者のリハビリをすることだった。

(2) 理学療法士と防災

理学療法士として働くということは常に体の不自由な人が隣にいるということだ。災害発生時の理学療法士の仕事は、災害に対して脆弱な患者さんを安全に避難させ安全を維持することだ。

[具体的な死亡例]

直接死

- ・家屋の倒壊による圧迫死
- ・家に閉じ込められ火災による死亡

災害関連死

- ・地震発生や余震による心的ストレスにより急性心筋梗塞を発症し亡くなる
- ・長時間の車中避難生活によりエコノミークラス症候群の疑いで亡くなる
- ・慣れない避難生活により肺炎症状になり入院先で亡くなる

このように直接死だけでなく災害関連死も気を付けなければならない。

(3) 自分にできること

災害について意識している介護者はほとんどいないと思うので、介護者の災害に対する意識の向上に取り組みたい。方法としては過去の災害のデータを見てもらって、高齢者の災害に対する脆弱さを知ってもらい、危機感を持ってもらえるようにする。

また身の回りの安全や避難経路の確認など具体的な対策をしていきたい。特に利用者の様態管理に力を入れたい。なぜなら、利用者によって動作が不自由な場所、痛めている場所は違うからだ。これが原因で避難がスムーズに行われず逃げ遅れたなどの事例はよく耳にする。このような事故を減らすには、介護者一人ひとりが自分の担当している人以外のすべての利用者の顔、名前、様態をしっかりと把握することで避難をスムーズに進められる。また避難だけでなく、避難所での生活も支援したい。高齢者は避難所でのストレスによる災害関連死が多いからだ。具体的には、余裕のある従業員や近隣の人などの話し相手になり孤独にならないようにする。困っていることがあればすぐに話を聞ける環境を作るなどだ。

月一度の避難訓練も行いたい。利用者に参加してもらうことで災害時の事故を減らせるようにしたい。この避難訓練には近隣の人たちなど地域の人たちにも参加してもらいたい。避難の際に最も力になるのは地域住民の助け合いだと思うからだ。この際、災害時に困りそうなことなどをあらかじめ伝えておくようにしたい。

(4) 今後の課題

高齢者の災害による死者数を減らすためには、介護者側(介護福祉士や理学療法士など)が防災の知識を身に付ける必要があると思う。災害発生時すべての判断は介護者に託される。判断ミスで命を失わないためにも災害についての知識は必要だ。高齢化が進むにつれて介護者の人数も増えていく。この介護者一人ひとりの防災意識を高めることが今後の課題になると思う。

(5) 大切にしたいこと

私が理学療法士として防災と関わるうえで大切にしたいことは、地域の人とのかかわりを増やすことだ。高齢者の避難をするのも避難所支援をするのも自分たちだけの力ではどうしようもないことが多い。そういった時一番の支えになるのは地域の人々の助けだと思う。なので、避難訓練をするにしても何をやるにしてもなるべく多くの地域住民に参加してもらい災害時に困りそうなことをあらかじめ伝えるなど、協力を促し、高齢者について少しでも理解してもらえるようにしたい。

5 最後に

環境防災科での学びによって私の物事への考え方は大きく変わった。入学する前はニュースで流れ

てくる被害などを見ても「かわいそうだな」とどこか他人事で考えていた。しかし今では何か自分にできることはないかと常に考えられるようになった。

今回、『語り継ぐ』を執筆していく中で、たくさんの方々の意見を聞くことが出来た。今まで知ることのできなかった両親の話などを聞けて良かった。実際に阪神・淡路大震災を経験した人が減っていく中で語り継いでいくのは私たち震災未経験者だ。初めは震災未経験なのに語り継ぐなんておかしいことだと思っていた。しかし両親やいろんな人の体験を聞いているうちに私たちが伝えなければいけない、少しでも多くの人に知ってもらいたいと思うようになった。

未災者のわたしにできること

樽家 海音

1 はじめに

私は大地震を経験したことがない。人の生死に関わる重大な危機に直面したこともない。そんな私が経験したことの無い阪神・淡路大震災を語り継ぐことができるのかと問われると、自信を持ってはいと答えることはできない。しかし、阪神・淡路大震災を経験した人が語り継いでくれた体験や教訓を、震災を知らない世代へ伝えることは、この時代に生まれた私たちの使命だ。それは大切な人を守りたい、災害の犠牲者を減らしたいという思いは両者ともに同じだと思うからだ。被災者と未災者の狭間である私たちが次世代へ語り継ぐことで、過去の災害の惨禍をいつまでも後世に遺し、再び大災害の危機が迫った時には1人でも多くの命が救われることを願う。

2 阪神・淡路大震災から27年

(1) 母から見た阪神・淡路大震災

阪神・淡路大震災の話は母親から聞くことにした。私は1月17日が近づくと、学校から出された宿題のためによく被災した記憶を聞いていた。改めて聞くと今まで学んできたこと以外にも多くの発見があることに気が付いた。そのことについても述べていきたい。

(2) 等身大の被災体験

母は震災当時高校1年生で垂水区に住んでいた。1月17日の地震が発生する前の夜にも地震があったが、その時はもっと大きな地震が発生するとは思っていなかった。そして1月17日の午前5時46分、明石海峡を震源に発生したマグニチュード7.3の揺れは神戸や淡路、阪神間の都市を襲った。母はその時寝ていたが、大きな揺れで目を覚ました。最初はすぐに収まると思っていたが、あまりにも長く続くのでこわくなり、隣の部屋で寝ていた両親を呼んだ。その後両親のいる部屋に行こうとしたが、揺れが大きくなり歩くことができなかった。

幸運なことに被害は本棚から本が落ちたり皿が割れた程度で、家が傾いたり火事になるということではなかった。割れた食器が危険だったため、両親が靴を履いて片付けをしていたのが印象的だったそうだ。電気、水、ガス、のライフラインが止まってしまったためテレビを見ることはできず、携帯やインターネットも無かったため情報を手に入れることができなかった。電話もつながらず、ひとまず西区にある学校へ行こうかと思ったが、道路には亀裂が入っておりバスも動いておらず、あきらめた。昼前になっても空は暗く、そして赤かった。長田の街で火災がおきていたからだ。しかし、テレビがつかず長田の火災も知らなかったため、電気が復旧しテレビを見たときにはじめてこれほどの被害が発生していることを知った。

(3) 震災から数日

それからしばらく不自由な生活を強いられることになり、その生活の中で特に辛かったことに水汲みが挙げられた。近所の小学校に来る給水車へ大量の水を運ぶため長い列に並ぶことは過酷だった。垂水区は被害が少なかったもののライフラインの復旧には時間を要し、そんな日々が長く続いた。またお風呂にも入れなかったため、グリーンピア三木(現在はネスタリゾート神戸がある場所)や銭湯、水道やガスが生きている友人の家でお風呂に入った。食事はカセットコンロで調理したものを食べたが、何を食べたかや何をして過ごしたかなどの詳しいことは覚えていない。

1995年はまだインターネットなどの通信機器が今日のように普及していなかった(高校生だった母は尚更である)。そのため友達と連絡を取ることができず、安否確認を取れなかったことが一番心配だったという。そんな中で母は長田に住む友人のところへ無事を確かめ、物資を届けるために徒歩で行った。道はがれきが散乱して通ることができなかったため、屋根の上を歩き長田を目指した。長田の友人は無事だったが、家は半壊で入ることができず避難所で暮らしていた。家に帰ることもできず、多くの人といえなければならない避難所生活はとても辛いと話していたそうだ。母が持っていった物資のなかでは、水のいらないシャンプーが一番喜ばれたという。

(4) 地下鉄サリン事件

震災から2か月がたった3月下旬、東京で地下鉄サリン事件が起きた。地下鉄サリン事件とは1995年3月20日に発生した無差別テロ事件で、東京の帝都高速度交通営団(現在の東京メトロ)の地下鉄車内で猛毒の神経ガスのサリンがオウム真理教によって撒かれ、多くの死傷者を出した。死者は14人、負傷者

は6,400人と死傷者数でみると日本最悪の殺人事件だった。

テレビや新聞などのマスメディアはサリン事件のことばかりを報道し、母は内心モヤモヤしていた。東京や日本全体が恐怖に陥っていることはわかってはいたけれど自分たちもまだまだ大変なのに、震災のニュースもしなくなると忘れられたように思ってた腹立たしかった。震災から〇ヵ月という報道も今でも大変なのに、だんだん過去のものとされているようで嫌だった。

(5) 27年経った今

時が流れ震災から数年が経った時、ふと、街を見渡すとよくここまで復興したなと思う。たしかに街は以前よりも災害に強くなり安心して過ごせる日々が帰ってきたが、時々地震が起こるとやはり”あの日”を思い出す。今日に至っても小さな地震を感じると、その揺れが止まらず、どんどん大きな縦揺れになっていく感覚を必ず思い出すという。また、阪神・淡路大震災の前日にも地震があった経験から、夜中に地震が起こると翌日に大きな地震がまた来るのではないかと怖くなることもある。

(6) 話を聞いて

前述したとおり、私は母から被災した話を聞く機会はこれまで何度かあったが、高校に入ってから災害や防災の知識を身につけて聞くことはあまりなかったので、改めて聞くと今までよりも鮮明に理解することができた。また、これまで多くの方々に講義していただき阪神・淡路大震災についてのイメージを捉えることはできていたが、ごくごく一般的な高校生から見た震災は、年齢や住んでいる場所が近い自分と重ね合わせることができ、この『語り継ぐ』を作るうえでとても助かった。

また、サリン事件についての葛藤は、事件の被害者の心情に配慮したのか、今までに聞いた講義ではほとんど出てこなかったためとても興味深かった。他の場所で新たに発生した災害を取材するため被災地からメディアが消え去ったエピソードに似通う点があり、被災地の長期的なサポートについて改めて考えさせられる良い機会になった。

母の話を聞いて特に印象に残ったことは、容易に情報を手に入れることができなかったことだ。今日では高校生であってもほとんどの人がスマートフォンを所持している。電話をかけることも、メールを送ることも、ネットニュースを読むことも、ラジオを聴くこともできる。27年前と現在をそのまま比べることはできないが情報という面からみても防災は飛躍的に進歩している。しかし、技術を過信し、災害から身を守ることを怠ってはいけない。いくら科学が発展しようとする自然の力がそれを超え、想定外の災害が発生することがあるからである。いつの時代であっても最後に自分の身を守るのは自分だけであることを忘れないでいたい。

3 わたしと環境防災科

(1) 入学のきっかけ

私が環境防災科を知ったのは中学2年の初秋だった。通っていた塾の進学相談会に母と行った時のことである。その頃はまだ学びたいことや志望する高校もなく、どんな学校があるのか見ておこうという程度だった。まず自宅近くの高校のブースで話を聞いたが、強く興味をそそられることもなくパンフレットを貰うだけに終わった。そんな中、母がある高校のブースを見てみないかと言ってきた。それが舞子高校環境防災科だった。話を聞くと防災の勉強やボランティア活動を行っているとの説明を受けた、というよりもそのことしか覚えていない。もともと防災には興味があり、面白そうな学科だと思ったが、候補からは外れかけていた。自宅から通学に1時間もかからないが、近隣に高校が多くある名谷に住む身としては”遠い”学校であることや、普通科よりも少ない一般科目の授業時間のことが理由だった。しかし、その中で特に関心があったのは公務員への就職率の高さだった。当時私は将来警察官になりたいと思っており、公務員の、特に公安職への就職実績はとても魅力的だった。そんな話を聞き帰路に就いたがその時は舞子高校に本当に入学するとは思っていなかった。

中学3年生になってから本格的に高校を考えているときに、ふと環境防災科のことを思い出した。どの高校も行きたいと思う理由はなかったが環境防災科には行きたいと思える理由があったため環境防災科を第1志望として無事入学することができた。

(2) 入学してから

入学してから多くの変化があった。バス通学になったことや学校にスマートフォンを持ち込めるようになったことなどだ。しかし一番大きく変わったと思うことは、生徒の価値観や考えの違いだ。小中学校では大多数が小学1年生から同じ環境で育ち、馴染みもあるため一緒にいて特別違和感を覚えることもなかった。しかし、入学してから数ヵ月が経つと”違い”に気づくことが多くなった。特に、同じ部活でよく一緒に帰っていた先輩と放課後にいろいろな話をしていく中で感じるが多かった。しかし、そ

ういった価値観の違いは社会に出る中で多くあるだろうと考え、成長もともに感じた。

また授業を通して今まで知らなかった災害・防災についての知識をつけていくうちに、自分が防災について人に説くことができるのか不安になっていた。阪神・淡路大震災を経験しておらず、大災害をこの目で見たこともない。しかし震災を経験していなくても過去の教訓を次の世代に語り継ぐことは不可能ではないと信じ、今日に至るまで学習を続けてきた。近隣の学校への出前授業や地域のイベントで多くの人に私たちが学んできたことを伝えることができたと思う。こういった経験により私が語り継ぐことができるのだと気づくことができた。

4 将来の夢

私の将来の夢は自衛官になることである。もともと人の役に立つことができる警察官になることを志していたが、自衛隊の広報官の方の講義や募集ポスターに惹かれ、自衛官になることを目指している。自衛隊は言わずもがな災害・防災のプロであり、隊内には私よりも防災に詳しい人間がごまんというだろう。しかし、環境防災科で学んだ災害のメカニズムや防災の知識だけでなく、被災された方の心のサポートや復興への携わり方など様々な学びを得たと思っている。

自衛隊は普段表舞台に立つことはないものの、他国から侵略されたり災害が発生したりするときには国民のために活動する。自衛隊が活躍するのは国民が困窮しているときであり、自衛隊がなんとかできなければ国家は存亡の危機に瀕することになる。縁の下の力持ちのような自衛官になるにあたって体力的にしんどいことや嫌になることがきつとあると思う。それでも私は自分が最後の砦であることを自覚し、多くの人の笑顔を取り戻すために自己犠牲の精神で仕事に取り組みたい。

5 防災を知ってもらうために

(1)「防災離れ」の考察

私は入学してから防災に関してある疑問を持っていた。それは「なぜ人々はそこまで防災に関心がないのだろう」ということである。私は環境防災科に入学して防災について学べば学ぶほど災害に対して人間はか弱い存在であることを知った。いくら高い防潮堤も優れたマニュアルも想定外の自然の脅威の前では人の命を守れないことが数多くあった。だから私達は科学が発展した今日であっても自分の身、そして大切な人の身を守るため防災を学ぶのだと考える。

なぜ自らの命に関わる防災に人々は関心を向けないのか。それは災害の発生確率と現実感の無さ、知識の無さが関係していると予想している。例えば交通ルールを例に出すと、車の往来の多い交差点で赤信号にも関わらず横断歩道を渡る人はいないだろう。それは、横断歩道を渡れば車にはねられてしまう可能性が高いことを理解しているからだ。人間は危機に遭遇する可能性をある程度想像することができ、危機に遭遇する可能性が高ければその危機を回避する行動を取る。

ここで話を災害に戻すと、災害には危機を回避する行動(=防災)を起こそうとするきっかけが少ないことが分かる。災害は発生すると大きな被害をもたらすが、その確率は交通事故などに比べると低い。人間は確率の低い、悪いことに対してはきつと起こらないだろうという考え方をしてしまう。この発生確率の低さが防災をおろそかにしてしまう理由の1つではないかと考える。

また、もう1つの原因として災害の恐ろしさを知る機会が少なく、被害を想像することが難しいことがあると考える。私はこの3年間でさまざまな災害について学び、その恐ろしさはよく知っているつもりだが、実際に経験したことはない。きつと想像を超えるほど凄惨な被害をもたらすのだろうと思う。3年間災害について学んでもうまく想像できないことを、災害に触れることが少ない人が想像できるだろうか。きつと不可能である。これらのことから、もう1つの原因は被害を想像できず、災害が現実の延長線上にあることを実感できないから防災に取り組むことができないと考える。

(2)『語り継ぐ』を書くにあたって

以上の2つの原因が人々の防災意識の低下を招いていると考えたが、それを改善するにはどうすれば良いのか。それは被災者が未災者に語り継ぐことで解決できる。古来より、人々はあらゆる手段を用いて過去の災害を次の世代へ伝えようとしてきた。書物に書き残すだけでなく、津波が来たことを地名として残したり、人の名前に災害を思い出させる言葉を入れ、その人が生きることによって災害を忘れないようにしたりしてきた。過去の災害の教訓を次世代へ遺す。その一環としてこの『語り継ぐ』は存在している。たとえ災害を経験していなくても、私達に語り継いでくれた人々が持っていた「次の世代に同じ経験をしてほしい」という気持ちは私達も同じである。だから私は過去の教訓だけでなく、この思いも後世に伝えていきたい。

6 最後に

わたしはこの環境防災科で防災だけでなく人の心理に関することや人と接する上で大事なことを学んだ。それは授業のみならずクラスや部活動でも学ぶことが多くあった。そんな高校でしか経験できないことと自衛隊で磨きをかけた防災の知識によって、退職後など公的な防災に関わらなくなったときは身の回りの人の安全や地域の人々の防災意識の向上に繋がられるような活動ができればいいなと考えている。正直、今この『語り継ぐ』を執筆している自分には十分な働きができないかもしれない。しかし、卒業までの数か月で努力できることは進んでやり、胸を張って環境防災科を卒業できるような人間になりたい。

未来へ繋ぐ

段塚 夢叶

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に兵庫南部地震が神戸の街を襲った。27年前の出来事だ。当時私は生まれていない。今や震災を体験した人と体験していない人を比べると体験していない人の割合が多くなっている。

体験していない人がこれからも増えていく。そして、震災の記憶は風化し忘れられていく。そこで大切となるのが「語り継ぐ」ことになる。被災者と私たちが会話し、それを次世代へと繋げていくことで風化を防ぐことができる。これからの将来に繋げることができるように、また、多くの命がなくなるらないために。

2 母・祖母の話

(1) 地震発生後

祖母は生まれて73年。戦争を知らない祖母が一番恐ろしい体験をしたのが平成7年1月17日の阪神・淡路大震災だった。明朝、ゴーという地鳴りと上下左右に揺れ、最後は家が上から投げ落されたようだった。我が家もこれで終わりだと思った。揺れが止まって次は余震が来ると思い、娘(母)と生後4か月の犬と一緒に前の公園へ避難した。周辺はガスの匂いが充満していた。そのうち、向かいの方に火の手が上がってきた。しばらく公園におり、我が家に帰ってみると、東西に置いていたものはそのまま南北に置いていたものは全部倒れていた。ガス・水道は止まり、幸いにも我が家の電気はついていて。そして、すぐにテレビを付けてみると地震のニュースが流れていた。阪神高速道路の倒壊が映っていた。すぐに米を購入し、水を店に取りに行く途中、信号は停止しており、ビルは崩れ、見たことのない風景だった。

(2) 困ったこと

風呂に入らず最初は体も頭もかゆかったけれど、3日もすればなれてきた。風呂に入ったのは地震が発生してだいぶ後のことだった。風呂屋に雪の降る中3時間半～4時間並び風呂に入った。

(3) 困らなかったこと

困らなかったことは2つあり、1つ目はガスと電気ですトットプレートやガスコンロが使えたので料理をすることができた。2つ目は食料で、父が中央市場で働いていた為、魚を貰えたりできたのでいつもみたいに食べることが出来たので、食料品にはあまり困らなかった。

3 父の話

会社に入社して社会人として新たなスタートを独身寮でできた。そして、船の進水式を3日後に控えた17日の早朝、激しい揺れで目を覚ました。そろそろ起床の時間ということもあり頭の中では、「ああ地震だな」くらいにしか思っていなかった。ただ部屋の立てかけていた鏡が倒れて割れ、部屋の外で大きな声の会話が聞こえだし、どうしたのかなという感じだった。部屋の外に出てみんなと会話をしながら寮の外に出て駐車場を見ると、地面に大きな亀裂が入っているのを見つけみんなでビックリした。

テレビもつかない状況の中、出社しなければと準備をしていると、電車が動いていないとの情報で会社に連絡を取るすべもなく、とりあえず両親に安否の連絡を取る為、寮内にある公衆電話に向かったが長蛇の列が出来ていた。順番が来て掛けたがなかなか繋がらなかった。ようやく繋がり会話もでき両親が安心したのを覚えている。そして、出社が出来ないとの事なので自家用車で実家に帰省することにした。西の方面に向かうということもあり道路は比較的スムーズに進むことが出来た。同期の友人達も同乗し途中の駅まで送りながら帰省した。そして実家のテレビで、倒れた高速道路や町全体が瓦礫の山と燃えている光景を初めて目の当たりにして驚愕したのを今でも覚えている。よく自分たちは寮が倒壊することも無く生存できたなどテレビの映像を見て思った。生きていることの有難さと共に、会社員として思ったのは、会社は大丈夫かなということだった(進水する船は大丈夫かななどの思いが強かった)。そして、数日後に出社できれば出社してくれとの電話を受け神戸へ帰省しようとしたが、至る所が通行止めで、なかなか寮にたどり着くことができなかった(岡山から寮まで8時間くらいかかったのを覚えている)。そして、いざ出社しようとしても須磨駅までしか電車で行くことが出来ず、そこから須磨水族園前ぐらいいまで歩きそこから会社が手配したバスに乗り出社した。バスの中から見る光景は想像を絶するものだった。

そして、会社の中でも進水前の船がゲートにぶつかり止まっている状態が印象に残っている。通勤は道路の渋滞が続き、とても大変だった。社会人1年生ということもあり訓練期間中の為、仕事をする事も無く日々を過ごしたが、会社の人の家の倒れたピアノを起こす手伝いをしたりするような作業もした。

一方寮では、風呂場を近隣住民の方に開放するなどみんなが協力し合いながら日々の生活を必死に送っていた。そして、自分たち寮生の為に、少ない量だが毎日の食事を提供してもらいとても感謝した。

また、長田に親戚が住んでおり、建物は大丈夫だったが、一番困っていたのが水だったので同期の家の井戸水をもらい、車で何回も運びとても喜んでくれた。大変な経験をしたが、みんなが協力しあう姿が心に今も残っている。

4 祖母と父の話を聞いて

祖母と父の話を聞いて思ったことは、今までこんな話をしたことがなかったと改めて思った。父も祖母も防災について話をしない。最近の地震や豪雨・台風などは家族で話していることは多いが、阪神・淡路大震災についてあまり話をしなかった。多分それはあまり普段の生活とあまり変わらなかったからだと言っていた。そして周りの環境が整っていたからこそ、こんなにも被害がなく暮らせたと思った。日ごろから周りと支えあうことで、なにかピンチに陥った時みんなが支えあえることができる。そういった環境を作っていくことが大事だ。

そして今、祖母は和田岬に住んでいる。いつ起こるかかわからない南海トラフ巨大地震に備えてもっと呼びかけたいと思った。海拔がとても低いことは知っていた。だが、祖母はあまり気にしていないと思う。いつも災害の話をすると津波が来たらここは浸水すると言っているにも関わらず、すぐにそういった話は終わってしまう。自分にとって大切な祖母を守りたいと思ったので、阪神・淡路大震災の時とは違う。もっと大きな災害となるということを伝えていきたい。

祖母と両親の「語り継ぐこと」を受け止め、私自身がもっと阪神・淡路大震災の教訓や体験談を語り継いでいく大切さを改めて感じた。阪神・淡路大震災と聞くと悲しいことばかり思い浮かべると思う。だが、その悲しみのなかには笑顔もあるということを忘れないでほしいと思った。被害が大きく、家族を失って最悪の悲劇と思っている人もいる。そういった人には失礼だと思うが中には笑顔があったことも忘れてはいけないと私は思った。

5 環境防災科

(1) きっかけ

当時、自分は将来の夢がなく進路もまともに決まっていなかった。しかし、将来何がしたいと考えたとき人となにか関わり、人とコミュニケーションをとり人の役に立ちたいと思った。そう思っていた時環境防災科を勧められた。その勧めてきた人は環境防災科の卒業生で、僕が小さいころから遊んでいた人だった。とても頼りになる人だったのでその勧められた環境防災科に興味を持ち、調べるようになった。調べていくとボランティア活動をたくさんしていて人の役に立てると思ってこの科に入学しようと決めた。

(2) 環境防災科に入学してから

入学して最初に思ったことは、「しんどい」の一言だった。1年の時、講義や校外学習などが多かった。その度にレポートを提出で1週間に1回のペースぐらいで書いていた。テスト期間中とかもよくあった。そして、部活動も入っていたのももっとしんどくなっていった。勉強・部活これだけで精一杯だった。それに加えてボランティア活動にも挑戦をした。たくさんの方に手を付けてしまい大変な1年だった。でもその中で最も学んだこと、それは「ボランティア活動はしているのではなく、させてもらっている」ということだった。人のためにと最初は思っていたけれどそれが相手にとっては負担になることもあると知った。ボランティア活動を受け入れてくださる人への感謝の気持ちを忘れないこの気持ちが大切だと知った。

(3) 今

環境防災科に入学して約2年半たくさんの方のことを学んだ。「命の大切さ」「傾聴」など防災と関わるうえでとても大切なものを学べたと思う。他の学校なら絶対学べないことだったと思う。

今最も印象に残っている取り組みは「令和2年度全国中学生・高校生防災会議」が一番印象に残っている。今まで自分は勉強や部活や課題に追われて東北訪問や防災会議などに行こうとしなかった。2019年は東北・熊本を会場として行われ、2020年は東京を会場として行われる予定だったが、新型コロナウイルスの影響でオンラインという形になった。この交流に参加するにあたって3つの意味があると言われ

た。

1つ目は「井の中の蛙にならない」ことだ。自分たちは特別な存在などと思い込んでいる人がいるが、それは視野が狭いだけであって実体験にもとづく考え方や行動力は持っていない。こうやって交流することで自分になにが足りないか、どんな勉強をすればいいのか、具体的に知ることができる。

2つ目は「リーダーシップを磨く」ことで学校や地域でのリーダーになりたいという人は多いが、実績のない人、チャレンジしようとしらない人がいざという時、頼られるかといわれると頼りにはできない。全国の中高生との交流で勇気を出して意見を言うことで自分の役割を見つけ出せる。そして、成長して学校や地域で伝え、広めることができる人間になる。

3つ目は「恩返しをする」ことで、舞子高校は全国各地から応援を受けている。だから、被災地からの講演に来てくださる人もたくさんいる。それは阪神・淡路大震災の語り継ぎがあるからこそ応援してもらっている。これまでの繋がりを大切にしていけることが大事だ。

この3つを大切にしてい取り組んだ。色々な学校が参加する中、代表校として取り組みを発表した。東北訪問やネパール訪問や防災学習について発表し、自分たちがしてきた防災活動を全国に広めることができた。他校との意見交流をした際、舞子高校でしたことのないような避難訓練を他県では行っていたりしていて、本学科では防災について学んでいるが、まだまだだと感じた。もっと他県や全国と交流することによってもっと防災を学ぶことができるし、もっと防災について語り、広め、語り継いでいきたいと改めて思った。

6 夢と防災

私の将来の夢、それは警察官になることだ。

警察官は防災とは深く関わっていると思う。警察は、災害が起こると必ず出動し救助活動にあたる。救助活動以外にも、避難誘導や道路整備などがある。だが、ここには命の危険がある。東日本大震災では、最悪の事態が起きていた。津波情報や防災行政無線等による避難指示が十分にいき届いていなかった。そのため警察の広報によってはじめて避難する人が多かった。そして、津波が来ていることを知らない車を海岸から離すために交通規制をしていた。そして、津波への意識が低かったため、警察本部などの指示が浸透していなかった。そのため、避難誘導や交通規制をしていた警察官が亡くなったことが確認されている。命の危険と隣り合わせである、警察官は怖いと思った。だが、その中で人の役に立つ、そして人を助けることに優れているすごい職業だと私は思った。私は、人を直接救えるのではなくても人の役に立つ。もしくは、防災・減災を通して人の命を救えるような警察官になりたい。

警察の中でも今までの大きな災害の教訓を元にして創設された部署がある。それが、広域緊急援助隊と警察災害派遣隊である。広域緊急援助隊は阪神・淡路大震災を元にして創設され、全国の都道府県警察本部に置かれている。普通の警察官との違いはこの部署は都道府県の枠を越えて出動すること。そして、警察災害派遣隊は、東日本大震災の教訓を元にして創設された。部隊を拡充することとなったために作られた。この部隊は派遣後、警察本部の指揮下に入る。こういった起こった災害から学び、防災が強化されていくことはいいことだと私は思った。

災害は起こると必ず被害が出る。これは防ぐことのできないことだと私は思っている。しかし、被害の大きさは個人の対策そして周りの環境が関わってくる。この2つが脆弱ならば被害が拡大する。もしもその2つが対策されているのであれば、被害を少なくすることができると私は考えた。

7 高校生の私たちにできること

私たち高校生にしかできないことがあると思う。それは、気軽にコミュニケーションを取れることだと思う。大人になるにつれてコミュニケーションの機会が減っていくと思う。高校生だとSNSなどを使って拡散することが可能だ。そして、ボランティア活動や地域での挨拶なども高校生までがみんなが気軽にできることだと思うのでこの高校生にしかできないことだと思った。このコミュニケーション能力を使って防災・減災について、その重要性を語り継いでいかないといけないと思った。私たちは講義などを受けてきて防災や減災について学んできたが、みんなはその違いについて知っているだろうか。ほとんどの人が知らないと思う。防災は、簡単に言うと災害が起こること自体を防ぐという意味となる。減災は災害を防ぐというよりも災害の被害を減らすことだ。こう考えると全然意味が違う。こういったことを広め、語り継いでいることが私たち高校生にできることだと考えた。

8 最後に

この『語り継ぐ』を書くにあたって様々な思いが込み上げてきた。最初はこの量を書けるかが不安だった。しかし、この3年間とても楽しく大切なことを学ばせていただいた。そのことを一つひとつ思い出すとこの量では書き収まらないくらいの量になる。1年の時は講義がたくさんあり、入学したときは知識が全然なく未熟者だったが講義を受けていく中でたくさんの知識・たくさんの人の想いについて学べた。2年になると、1年の時の知識に加えて内面の心情であったり、心のケアであったりなどの考えること、思考力を身につけることができた。災害は知識だけでは通用しないと思った。その災害によっての被災状況は違うし、人によっても違う。そこに同じ対応をしてしまうとどちらかは治るかもしれないが片方は治らない。このようにならないために一人ひとりに臨機応変に対応していかないといけない。

今、高校3年になってもまだまだ学ぶことはたくさんある。この『語り継ぐ』を書くからこそ、家族との会話に防災を混ぜることができたと思う。まずは、身近な人から防災について語り継いでいきたいと思う。

これから起こるとされている南海トラフ巨大地震は阪神・淡路大震災よりも大きな災害になると思われる。しかし、阪神・淡路大震災よりも被害を少なくしていかなければならない。南海トラフ巨大地震が起きたとしても、大きな被害がでたとしても教訓を忘れてはいけない。

語り継ぐことの大切さをもっと広め、未来へ繋いでいきたい。

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に阪神・淡路大震災が兵庫県を襲った。この震災から27年目を迎えた今、震災を経験していない人が半数以上を占めるようになった。私もそのひとりである。あの凄まじい出来事を忘れる事、同じような被害を出すことは、絶対にあってはならないことだ。阪神・淡路大震災の教訓を風化させないように環境防災科に入学し、3年間学んできたことや震災を経験した方のお話を語り継いでいくことが必要であると考え。その一歩として、父が経験した阪神・淡路大震災を語り継いでいきたい。

2 父の話

父は当時、須磨警察署に勤務していた。

(1) 地震発生時

地震を認知し、いち早く勤務地に向かうため車で向かうことにしたが、通常ならば30分で行ける道のりに3時間かかった。須磨区内に近づくにつれ道は渋滞し、周りの家屋のほぼ全てが倒壊している状況だった。今まで見たことのない光景に唖然とした。勤務地に着くと、たくさんの人が至る所に座っていた。被災者の姿を見ると、柔道着や剣道着を着ている人が目に付いた。後から聞いた話だが、地震が発生し軽装で逃げたことから、寒さに耐えきれず署内にある柔道着や剣道着を着て寒さをしのいでいたことが知らされた。その状況を見て、逃げてきた人の大変さ、必死さが分かった。

(2) 救助活動

上司から「被災されたご遺体が病院にあるから今すぐ病院に行って遺体の搬送をしてくれ」との指示を受けた。上司と2人で須磨海岸沿いにある総合病院に向かった。病院に到着したのは発生日の午後3時頃だったが、病院内は、地震の影響で電気がついておらず真っ暗な状態であった。しかし院内にはたくさんの人が詰めかけており、騒然たる状況であった。病院内の廊下やソファ、階段には、たくさんの毛布が置かれており、足の踏み場がなかった。被災されたご遺体がどこにあるか確認するため、医師や看護師を探したが、なかなか見つけることができなかった。病院内を歩いているとようやく1人の看護師を見つけたことができた。その看護師に運ばれてきたご遺体が安置されている場所を尋ねたところ、看護師は一言も話すこともなく無造作に廊下に置かれていた毛布を指さした。この時初めて、廊下やソファ、階段に置かれていた毛布がご遺体をくるんでいたという事が分かり、地震の本当の怖さを思い知った。父は上司と遺体の搬送を一日かけて行った。ご遺体の中には高齢者、小さな子供もいた。搬送場所は須磨区内にある大きな体育館であり、空っぽであった体育館がみるみるうちにご遺体で埋め尽くされていった。その体育館には数百体のご遺体が整然と並んでおり、その光景は今でも忘れない。また、その広い体育館は電気が点かず、ろうそくが灯され、ご遺体の枕元で泣き崩れている家族の姿は今でも目に焼き付いている。また遺体搬送が終了した時は、すでに夜が明けており、飲まず食わずの状態だった父の疲労は限界になっていた。

被災者からの救助要請に対応するために、家屋倒壊現場に向かうことになった。その現場はすでに、2階部分が1階部分に崩れ落ちている状態で、家族の人と思われる方が「おばあさんがまだ中にいます。助けてください。」と叫びに近い声で父に駆け寄って来た。地震発生後も、大きな余震が続いている中、倒壊している家屋に入り救助作業をするのは自分の命が危ないと思った。しかし、家族の方の悲痛な叫びと、何とか生きているのなら助けてあげたい。と思う気持ちから倒壊家屋の中に1人で入ることにした。人1人が入れる場所を探し、何とか奥に入ることができたが、崩れ落ちた壁や木材などで前へ進むことは困難だった。また、大きな余震があるたびに倒壊した家屋がギシギシと音を上げ、今でも崩れそうな状況だった。その余震があるたびに、「もうだめか。生きて戻ることはできないのだろうか。」と思ったが、「おばあさんを助ける。絶対に助ける。」という強い気持ちで何とかおばあさんが使用したと思われるベッドにたどり着いた。しかし、おばあさんに何度も声をかけるも返事がなく、がれきの隙間から白くなった、おばあさんの手だけが見えていた。その状況からおばあさんは亡くなっていると判断した。家族の方には「おばあさんは亡くなっていました。生きている方の救助を優先することになります。すみません。亡くなられた方は最後になります。」と残念な報告をしたところ、家族の方は泣き崩れながら「ありがとうございました。」と言った。人を助ける事ができない無力さを痛感した瞬間だった。また、亡くなって

いる人をがれきの下から出せないという虚しさを感じた。須磨警察署管内では約 300 人の方が亡くなり、数えきれない人数の方が負傷した。

（３）長田の炎

倒壊した家屋は無惨な状態で、道路は無数の瓦礫で散乱しており、交通網は遮断され、救助活動は困難だった。隣接する長田警察署では、倒壊した家屋による火災が発生し、須磨警察管内にも延焼している状況だった。父が消火活動や残された方を救助するため火災現場に行ったところ、そこは映画やテレビで見るような想像もつかない現場だった。目に入る全ての物が燃え、見渡す全ての物が火柱を上げ、今にも私を飲み込むかの勢いで炎が燃え上がっていた。灼熱の地獄を見ている光景だった。人間の力では消すことのできないどうしようもない状況だった。父は救助活動に入ろうとしたが、何もすることが出来ず、ただただ、その燃え上がる炎を見て呆然とした。あまりの熱さに身の危険を感じ、逃げるようにその場を後にした。何もできない自分に腹立たしく感じた。

（４）震災の教訓

震災の教訓は、３つある。

１ 強じんな体力

阪神・淡路大震災では、24 時間睡眠・飲食をしない状態での救助活動を行わなければいけなかった。日頃からの体力づくりや災害はいつ起こるか分からないということを頭に入れ、すぐに災害に対応できるようにしておかなければいけない。

２ 強じんな精神力

阪神・淡路大震災の現場では死と直面することが多い。例えば、目の前で亡くなる方や亡くなった方を多く見る事になる。また、自分も死ぬかもしれない。阪神・淡路大震災は死と隣り合わせの状態が続いていた。人を助けるためには、常に平常心を維持し、心を乱すことなく救助活動を行う強い精神力が必要になる。

３ 自然の怖さ

今まで自然の怖さというものを感じなかったが、今回の、阪神・淡路大震災で自然は恐ろしいものだと感じた。また、人間には限界があるということを痛感させられた。自然に逆らうということは、絶対に出来ない。阪神・淡路大震災で失ったものも多い。しかし、阪神・淡路大震災は私たちに常日頃から、準備、対策することの大切さを教えてくれた。準備と対策をすることで、被害を最小限に出来ると思う。

３ 話を聞いて

私は環境防災科に入学してから、阪神・淡路大震災に関わった方や被災された方の講義やお話を聞いたが、父から聞いた阪神・淡路大震災の話は少し違うものを感じた。今まで、身内の人に阪神・淡路大震災のことについて聞く機会がなかった。なので、父が阪神・淡路大震災の時に何を行ったのかを聞いたのは、初めてだった。このような機会がなければ、父が阪神・淡路大震災の時、何を行っていたのかどのような心情だったのか聞くことはできなかったし、聞くことはなかったと思う。今回、このような機会があって良かったと思う。また、父の話を聞いて、阪神・淡路大震災は絶対に忘れてはならないものだった。

今回父の話を聞いて、とても過酷な被災地で死ぬかもしれないと思いながらも倒壊した家屋や、火災現場に入り救助活動を行っていたと初めて聞き、とても驚いた。さらに、倒壊家屋の下敷きになっている人を助けに行ったが、一緒に戻ってくることはできなかったと聞き、救助の難しさも分かった。また、災害の恐ろしさを改めて知ることができた。地震だけでなく、火災が起り、町中が焼けつくされ、ライフライン、交通網が閉ざされ、災害は本当に恐ろしいものだと感じた。しかし、阪神・淡路大震災は私たちに備える事の大切さを教えてくれたと思う。阪神・淡路大震災が起こらなければ、今でも「神戸は災害が起きない街」と思われていたかもしれない。また、私たちも防災を学んでいなかったかもしれない。災害に備える事の大切さを教えてくれたのは、阪神・淡路大震災だと思う。そして、阪神・淡路大震災を経験した人がだんだん減っていつている。震災を風化させないために私たちが、阪神・淡路大震災を語り継いでいかなければならない。阪神・淡路大震災の教訓を語り継ぐことで、30 年以内に起こると言われている南海トラフ巨大地震への対策、備えができると思う。阪神・淡路大震災のような多くの犠牲者を出さない為に、語り継いでいきたい。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科を目指したきっかけは、2つある。

1つ目は、中学3年生の時に行ったオープンハイスクールで先輩方が優しく丁寧に環境防災科の魅力について教えてくれたからだ。私も先輩方のようにになりたい。人前で堂々と喋ることのできる人になりたいと思ったからだ。

2つ目は、将来看護師として働いていく上で、防災は絶対に必要だと思ったからだ。環境防災科に入学して防災を学ぶ事で、いつ起こるかわからない災害に対応することができ、助かった命を少しでも減らすことができると思う。また、環境防災科なら自分を成長させることができると思い、環境防災科への入学を決めた。

(2) 入学して

高校に入学するまで防災の知識は全くなく、授業についていけるかとても不安だったが、環境防災科に入学し多くのことを学ぶことができた。また、多くはないがボランティア活動にも参加した。ボランティア活動では特にコミュニケーションの大切さに気付くことができた。私はとても人見知りで、人前で話すことがとても苦手である。ボランティアに参加しても、自分から話を聞きに行くことができず後悔したこともあった。しかし、2年生の時に参加した出前授業で教えることの楽しさを学ぶことができた。そこから、少しずつではあるが人前で話すことができるようになった。環境防災科に入学してから大変なこともたくさんあった。しかし、環境防災科で学んだことを災害支援ナースになり活かしたいと思うようになった。

(3) 東北訪問

環境防災科に入学したら実際に被災地に訪れてみたいという気持ちから、1年生の夏休みに東北訪問に参加した。被災地ならではのこと、東日本大震災の教訓を学ぶ事が出来た。東北訪問で印象に残っていることが2つある。

1つ目は、大川小学校に訪れたことだ。大川小学校を見た時、想像以上に衝撃を受けた。東日本大震災が起きるまではここでたくさんの元気な生徒が過ごしていたと思うと、胸が苦しくなった。大川小学校の見学が終わった後、裏山にも上った。小さな子供でも登れる裏山だった。ここに逃げていたら、「助かっていた。」と聞き、言葉を失った。大川小学校の周りには、行方不明の家族を見つけるために、一生懸命探している方の姿があった。津波の恐ろしさを再認識した瞬間だった。

2つ目は、多賀城高校の生徒に案内してもらい町歩きを行ったことだ。町の至る所に、津波到達点の看板が記されており、津波の恐ろしさを知ることができた。また、復興が進んでいると思った東北だったが、ショッピングモールの屋上駐車場から見たがれきの山に驚かされた。まだまだ継続した支援が必要だと思った。

東北訪問で命の大切さ、津波の恐ろしさを改めて知ることができた。震災を風化させないために、東北訪問で学んだことを伝え続けていきたい。

5 将来の夢

私の将来の夢は、1人でも多くの患者さんに「ありがとう」「楽になった」と言ってもらえる看護師になることだ。きっかけは、父から東日本大震災の話聞いたからだ。父は東日本大震災が起こった翌日から1か月間福島県に派遣され救助活動を行ったそうだ。その時、避難所にいた看護師の方が、被災した人の手当や不安そうにされている高齢者のもとに駆け寄り話を聞いていたと聞き、私も災害時に頼られる看護師になろうと思った。災害支援ナースになろうと思ったのもこれがきっかけだ。災害支援ナースとは災害発生後3日以降から1か月間、病院や社会福祉施設に派遣され、被災者のケアや被災した看護職の心身の負担を軽減し支える役割がある看護師のことだ。

私は看護師になり、災害時怪我をした人の手当てはもちろん、心のケア(PTSD)に力を入れたいと思っている。PTSDは急性期から亜急性期にかけて起こりやすいが、慢性期でも急に発生することがある。私は、急性期や亜急性期だけでなく災害が起き、時間が経っても支援を続ける看護師になり、1人でも多くの人を救いたいと思っている。

看護師、災害支援ナースで働くにあたって私は、大切にしなければならないことが3つあると考える。

1つ目は、患者さん、患者さんの家族と共に向き合うということだ。重症度の高い患者さんを担当することや、精神面のケアを行うため病気から逃げずに向き合うことが大切だと思う。

2つ目は、1分1秒に責任を持つことだ。命にかかわる仕事だからこそ、正確かつ迅速な判断が求めら

れる。自分が行った迅速な対応、判断に責任を持つことが大切だと思う。

3つ目は、体調管理だ。看護を提供する側なのに、看護を提供してもらう必要が出てしまうと意味がないと思うからだ。自分の体調管理をしっかり行い、看護を提供することが大切だと思う。

看護師、災害支援ナースになり環境防災科で3年間学んだことを活かしたい。また、震災が起きた日時（1. 17、3. 11）等に合わせ院内でイベントを開き、震災当時のことはもちろん、次の震災に向けてどのように備えるか、備えることの大切さ、子供には遊びながら覚えてもらえるように絵本を使うなどの工夫をし、防災を広げていきたい。他にも、災害支援ナースの活動を通し、被災地で学んだことを発表する機会を作り、防災を伝えていきたい。

6 最後に

今回『語り継ぐ』を執筆して、このような機会がなければ父が震災当時どのようなことをしていたのか知ることが出来なかった。今回、このような機会があって本当に良かったと思う。

父の話を聞いて、父が倒壊した家屋や火災現場に入り救助活動を行っていたことを初めて知り、とても驚いた。また、今まであまり知らなかった阪神・淡路大震災の時の、救助方法について知れてよかった。父の話を聞いて、様々なことをことができ、災害について再確認する良いきっかけとなった。また、まだまだ阪神・阪神淡路大震災について知らないことが多いと感じた。

私は今、何の不便もない住みやすい街で生活している。また、そのような生活が当たり前になっている。しかし、神戸では27年前に大きな地震が起こった。今、阪神・淡路大震災の教訓は薄くなってきている。実際に震災を経験した人が少なくなっているのは事実だが、それを理由に私は、忘れてもいいものにしてはいけないと思う。災害はいつ起こるかかわからない。いつどこで起きてもおかしくはない。日本で生活している限り、災害は起きる。だからこそ対策・備えが大切である。二度と「神戸は地震が起きない街」と思われないように、災害を経験していない私なりに、阪神・淡路大震災の教訓を未来につないでいきたい。

風化させない

中島 秀

1 はじめに

私は阪神・淡路大震災を経験していない。今年の1月17日午前5時46分をもって阪神・淡路大震災兵庫県南部地震(1995年・平成7年1月17日5時46分)の発生から27年の月日が経過した。震災を経験していない被災者が神戸市や兵庫県に暮らす人口の半数以上を占めている現在。2年生の授業で学んだ被災者(心身共に傷ついた人)の心のケアや復旧・復興をこの目で見て感じたことも実際に支援に行った経験もない。それなのに、被災者の気持ちに同情するなど簡単にできるはずがない。

私たちが住んでいる日本で、今後30年という長くも短い時間の間に、70～80%の確率で南海トラフ巨大地震が襲ってくると想定されている。この巨大地震は人知を超えた津波が東海・東南海・南海などの沿岸地域に到達し襲来するだけでなく、東日本大震災同様に津波が河川を遡ることも考えられている。私たちはこの未曾有の大災害に対して今日から少しずつ防災や減災に関する知識を身に付け、備えていく必要があるということをこの『語り継ぐ』を読んで考えてほしい。

2 両親の話

阪神・淡路大震災発生の前年、1994年4月から両親は母の実家がある神奈川県厚木市内に暮らしていた。父は神奈川県内の製薬会社に勤め、母は看護師として診療所に勤務していた。

阪神・淡路大震災発生のおよそ15分前、5時半ごろに起床した父はラジオを聞いていた。するといきなり、「地震発生」というアナウンスの後、途切れ途切れながらも父の実家周辺や神戸市内の聞き覚えのある住所が読み上げられていることに気づいた。少しの間、アナウンサーが何を言っているのか困惑した。やがて、放送内容が大地震によって被害を受けた地域であることがわかり、体中の血の気が引いたような気がした。父が「あれほど焦ったことはなかった」と話した。

父は地震発生から2日後に祖父母と叔父の暮らしている神戸市東灘区御影町の実家に向けて、新幹線を使い急いで帰ろうとした。しかし、思っていた以上に現状は悲惨だった。テレビやラジオでは交通事情に関する情報は関東圏には数少ない量しか入ってきていなかったため、神戸市はおろか阪神地域にすら新幹線や私鉄等で行くことができず、京都で新幹線を下車した。京都駅から西宮市までタクシーを使い、さらに西宮市から2、3時間かけて御影町にある実家まで徒歩でたどり着いた。父は実家に着くまでのタクシーや徒歩での移動中の状況として、歩道の人の多さに驚いたという。「震災前は2号線を車が途切れることなく走っていたのに震災後は大荷物を乗せたバイクや「救援」と書かれた緊急車両が行き交い、町の人も悲しみに暮れていたため静寂だったから、祖父母が言っていた戦後の様子の話を思い出して身震いを何回もした」と話した。

父は「亡くなられた方々が成し遂げることでできなくなった夢や希望に満ちた神戸に根強く生き、多くの人々を間接的にも治療するという手助けをしたいと思って地域薬局を開局した」と話した。

3 叔父と祖父母の話

(1) 地震発生初日のできごとと分かったこと

叔父は震災当時、実家の真横に存在した、御影工業高等学校(現在は神戸市立科学技術高等学校に統合)に通う高校2年生だった。叔父と祖父母が私に教えてくれたのは地震発生から数日間の行動内容である。

「ズゴゴゴ」地震発生直後、寝室で寝ていた叔父は大きな揺れと地鳴りを感じて目を覚まし、起き上がった。しかし、地震の揺れを夢の中で起こった体の痙攣か自分自身のいびきだと思い、もう一度眠りについた。そして、地震の揺れだったと確信したのは約30分後に叔父の安否を確認するため、3階の部屋に上がって来た祖父母の大きな声だった。叔父は祖父の「生きとるかー」という問いかけに瞬時に反応し、起き上がり「何があったんやー」と聞き返した。そして祖父母からの「地震」という2文字の言葉に呆然として、体の動きが止まった。実家を出ると2号線の交通量がやけに少ないと感じた。

阪神・淡路大震災発生の数年前から東灘区御影町には外国人移住者や外国人労働者のアパート等への入居が増えつつあった。叔父の実家横の祖父母所有の4階建てビル(現在は外国人旅行者専用民泊施設)の中にも外国人労働者が各部屋に1人、合計5人が入居していた。

祖父母と叔父が近隣の家屋に生き埋めになっている生存者の確認のために見回りをしている最中、倒壊した木造家屋に生き埋めになった人を救出する人ばかりを見つけた。叔父は「日本人の力には限界が

あった」と話した。そして叔父はすぐに実家まで引き返して隣のビルに駆け込み、外国人労働者に救出の手伝いをお願いした。「救出活動を行ううちに外国人の数がどんどん増えてきてなぜかとても安心して見守れた」と祖父母は話した。

叔父は震災発生後の6～7時間後(幸いにも学校用具への損害が無かったため)学校に登校した。いつもの様に教室に入った叔父の目には、簡易のベニヤ板製の棺桶の中に遺体が入っているという光景が飛び込んできた。また、数も教室(簡易遺体安置場)いっぱい埋め尽くされている状況だった。遺体の側には泣き崩れてしゃがんでしまった遺族の姿が数多く見受けられた。叔父はこの光景を見たときに、御影町全体の建築物やその構造によって生死が分かれたのではないかと思った。叔父の実家(父の実家)はコンクリート製になっており、震災の数年前に改築して頑丈な造りになっていた。また、地震の揺れによって万が一倒壊しても、人が生き残ることができるスペースが確保されるように設計してもらっていた。しかし、叔父の実家のような家屋がある一方で、御影町全体家屋数のおよそ7割近くの本造密集型の家屋を中心に大きな損害や被災状況が出ていると見て取れた。

叔父と祖父母は「住宅の構造や建築資材の中身を考えることは人生を左右する重要なことだ」と話した。

(2) 震災発生初日からの支援と被災状況

神戸市灘区にある神戸市立王子スポーツセンター(王子陸上競技場兼王子動物園)は震災発生初日から防衛省(陸上自衛隊)のヘリポートになり、全国から援助にきたヘリコプターの駐機場になった。またそこでは生活に必要な物資の大半が手に入るなど、被災者や避難所生活をしている人々への支援力が万全になっていた。

神戸市東灘区にある兵庫県立御影高等学校のグラウンドでは簡易テント等を日本赤十字社が設営し無償で診療や治療を行う場を設けていた。叔父自身も震災で多くのストレスを抱えるうちに精神不安に陥った。その様な時に日本赤十字社の看護師に点滴を打ってもらった。また、カウンセラーの方に話を聞いていただく等の処置をしてもらい、回復し健康に安心して復旧生活を送れるようになった。叔父と祖父母は日本赤十字社の活躍の場となった体育館を「一時大病院」と呼んでいた。

震災による被災状況は私たちが学んできた内容以上に過酷なものが多かった。特に祖父母の復興生活を困難にしたのは、JR 神戸線の六甲道駅から住吉駅間で発生した橋桁崩壊だった。橋桁崩壊に関する情報は一日も経たないうちに御影町全体だけでなく、東灘区全域に広まり「橋桁の下を通るときは崩落してこないように注意して」という呼びかけがあった。阪急御影駅に向かう道路頭上に半崩壊状態の橋桁があった。その橋桁は太い電線に乗りかかるようにして、崩壊を免れている状況だった。祖父母が高架下を通るときは2人一緒に走って通るように心掛けたと話した。

(3) 避難生活

震災発生から1週間後、御影町に住んでいた祖父母は、ひよどり台に住んでいた祖母の兄弟の家に避難した。ひよどり台、特に北区を中心に震災による影響は小さな地震の揺れのみだったため、ほぼゼロに近かった。そのような経緯から神戸の市街地から避難してくる住民や病院の移転先候補に選択されている病院も点在していた。

ひよどり台での生活は避難生活かと思うほどの不自由がなく、祖父母が到着した際には祖母兄弟によって一斗缶に水を満杯まで入れたものが駐車場前に積んであった。この水は御影町に帰った時に排泄物を流すための物、町の彩りを戻すために育てた花壇の水やりに活用した。

4 話を聞いて

この「語り継ぐ」という機会以上に、これほど長い時間にわたって身内にインタビュー(会話)する時間は今までに無かったと思う。

私は環境防災科への入学前後に、阪神・淡路大震災当時の話を両親にインタビューすることも、両親の方から話してもらうことも無かった。両親自身が阪神・淡路大震災を神戸で経験していないという事情から、経験談を話してくれなかった大きな理由になっていたのかもしれない、しかし私自身は「高校生だから」両親と話したくないという気持ちがあった。この『語り継ぐ』のインタビューを行う時間は今まで参加してきた防災訓練の時間以上に、家族の災害に対する考えや防災に関する備えについて詳しく聞けて、決して忘れてはいけない時間だと感じた。

私は両親や祖父母、叔父に話を聞いて、話を受け継ぐことや語り継ぐことが神戸に暮らすうえで何よりも大切だと感じた。現在、神戸には震災からの生活再建や経済面での苦境を乗り越え、神戸の街に尽力してきた世代の人々の高齢化が進んでいる。それは被災者の数が減少している一方、私たちのような未災

者の数が増加しているともいえる。この状況下で私たち未災者は、次の世代に向けて今まで学校で講義してくださった先生や地域の方々の当時の震災経験談や貴重なお話など、悲惨だった神戸や淡路の状況を受け継いでいかなければならない。ただ語り継ぐだけで終わりにするのではなく、継続的に講義を行っていくことも大切だと考えた。

阪神・淡路大震災から27年、今回聞いた話や講義を生きている限り語り継ぎ、神戸から阪神・淡路大震災の記憶が忘れ去られることが無いように努力していきたい。

5 環境防災科

(1) 入学のきっかけ

私が環境防災科に入学しようと思ったきっかけは2つあり、1つは、小学校入学前まで暮らしていた地域で行われていた「クリーン作戦」という清掃活動の影響だ。月に一度行われる「クリーン作戦」は地域住民全員参加型で行われ、各家の周囲にある歩道や道路脇の水路の清掃を行う。また、児童館と隣接する保育園では年長組から中学生の児童がペアになり、近くを流れる川の中に溜まったごみの撤去と引き上げたゴミの仕分け学習を行っていた。私は地域に暮らす人と短時間ながら一緒に活動できる時間を忘れることなく、もっと多くに人と関わりたいと思うようになった。

2つ目のきっかけは、中学校3年生の時に学年主任をしていた先生に「多くの人と関わる学校に行きたい」という相談を持ち掛けたことだ。学年主任の先生も人と会話することが好きで教師になったと打ち明けてくれた。そのような話をする際に勧めてもらったのが舞子高校環境防災科だ。夏休みに母とオープンハイスクールに行き、その際に梶田先生や先輩方と学校や授業、進路実績について話したときに入学を決断した。

(2) 入学からの歩み

環境防災科に入学した当初「自分自身が地域内で防災力を発揮し、率先して避難行動ができる人間になることが可能なのだろうか」と疑念を抱くことが多かった。

私は中学校在学中から現在に至るまで、自身の体調を上手くコントロールすることができない。そのため、1年生の夏休みに開かれた防災ジュニアリーダー合宿や東北訪問を諦めた。進路決断や成績悪化など数多くの苦しい時期や時間を乗り越え、3年生に進級した時に人に自分の思っていることをありのまま伝えること、話すことの楽しさを覚えた。それまでは1人で取り組んでいた授業内のグループワークも以前の自分を反省し、班員全員の意見を取りまとめて全体に向けて発表するなど、発言する機会を自ら率先して作ることを心掛けた。

私が最も苦戦した活動は、南あわじ市立神代小学校に在籍する5年生を対象にした防災出前授業だ。2年生最後の環境防災科の活動になっていた。そこで、3年生(最高学年)に進級する自分にどれ程の語り継ぐ力や防災について教える力が身についているのか、再確認したいと思い応募した。私は小学生との授業前のふれあい遊びの司会をすることになった。「だるまさんの一日」というゲームを防災バージョンにリメイクし、小学生と高校生全員で行うことになった。私の任務はルール説明だった。私自身がルールすらわからない未経験のゲームを年下の小学生に向けて説明することは困難を極めた。1回目のリハーサルを終えて、出前授業当日の朝まで担当の先生やメンバー生徒数名に台本文章の修正をサポートしてもらった。この活動を通して、私自身が防災だけにとらわれず、日ごろから考えていることや経験してきたこと、未経験のことに関して発する言葉の使い方や言葉の持つ力を今一度考え直すきっかけになったと同時に、文章を書くことの難しさを学ぶことができた。

6 将来の夢と防災

(1) 夢の在る意味

はじめに、私の夢は父と同じ薬剤師になることだ。父が話していた「亡くなられた方々が成し遂げることのできなかつた夢や希望に満ちた神戸に根強く生きー」という言葉に衝撃を受けた。この言葉が心に響き、より一層「医療従事者として働きたい」「多くの人の役に立ちたい」という思いが強くなった。

私が将来の夢である薬剤師を目指すにあたって、次の2つの事柄を心に留めている。

1つ目は、父のように地域薬局を開局するのではなく、地域薬局よりも幅の広い視点を必要とし、患者との接し方が常に求められる病院薬局に勤めることを考えている。病院薬局は1つの病院に1つしか存在しない。それゆえに忙しいことも必ずあると覚悟している。また、病院に1つしかない薬局だからこそ多くの患者に薬を処方し、心身の安全を守ることも病院薬剤師にしかできない仕事だと考えている。

そして2つ目は、2019年12月ころから徐々に世界中に広まった新型コロナウイルス感染症(COVID-19)

に対して日々活躍されている医療従事者だ。この感染症は私たち高校生にとって欠かせない、大切な学校生活を奪い去っただけでなく、修学旅行などの学校行事までも消し去った。私は猛威を振るう新型コロナウイルスを憎む一方、その裏で医療従事者として一生懸命働く父母の姿を目の当たりにした。新聞に写っていた防護服姿の医師や看護師の姿を見て「私も将来は人の役に立ちたい」と思ったことも将来の夢を決定づけた1つの要素だ。

（2）防災を夢に活かす

防災は全ての職業に活かせるということを「夢と防災」の発表を通して感じた。私は環境防災科に入学する前まで「防災＝消防士、警察官、自衛隊」だと決めつけていた。しかし、1年生の時に講義に来てくださった先生方はそれぞれ違う職業であり、違った視点からの防災についての考えを持っていた。この時に、防災は1つの視点から見るとはではなく、様々な視点から見て学ぶことで成立すると思った。

私は病院薬剤師として現場に立った際、地域内に存在する薬局内の調剤棚や棚周辺の見回りを実施したいと考えている。調剤棚の周辺には時と場合によってさまざまなものが置いてあることがある。もしも地震の揺れによって調剤棚から飛び出した薬が火器や電気系統周辺に落ちたとすると有毒ガスが発生するかもしれない。そのような二次被害を防ぐためにも見回り活動は必要だと思う。また、見回り完了の病院薬局や地域薬局には「災害対応シール」を店先に貼り、地域の方々や入院・通院中の方々の安心感につなげたいと思う。

このように薬剤師として働きながらも防災との関係を築いて行きたいと思う。

8 最後に

『語り継ぐ』を執筆するなかで、多くの大人の記憶力という力を借り、未災者の私に多くの記憶と当時の心情を伝えてくれた。私自身も両親も阪神・淡路大震災を引き起こした兵庫県南部地震の揺れを体験していない未災者である。執筆やインタビュー前の私と母は復興の様子や段階がどのような状況だったのか、いまいちわからないという現状だった。そのため母にも私と一緒に地震発生から復興の段階までの話を聞く必要があると考えた。この執筆に至るインタビューが終わった時に、母は自ら「防災に関する意識を変えることができた」と話してくれたことに『語り継ぐ』の意義を感じた。今後もこの記憶を「風化させない」ためにも、防災に関して知識ある大人になり1つでも多くの命を救うことができる「災害に強い薬剤師」になりたいと思う。

途切れさせない

中野 幹太

1 はじめに

私は阪神・淡路大震災を経験していない。これから被災していない世代は増え続け「被災していない」を言い訳にってしまうと風化してしまい、あの悲劇を知ることさえない世代が来てしまう。そのために未災者である私たちが未災者に語り継いでいく必要がある。

2 阪神・淡路大震災の概要

名 称	兵庫県南部地震
発生日時	1995 年 1 月 17 日 午前 5 時 46 分
震源地	淡路島北部
最大震度	7
地震の規模	マグニチュード 7.3
死 者	6435 人（注：2021 年宝塚市が認定した災害関連死 1 名を含む）
主な死因	圧死

出典：「内閣府 阪神・淡路大震災教訓情報資料集阪神・淡路大震災の概要」

3 母の話

当時大学 1 年生だった母は、下宿先の大阪からたまたま長田の実家に帰省しており、震災当日の朝、大阪に帰る予定だった。

（1）地震発生

震災前日の夕飯時に体感できる程度の小さい揺れを感じていたが、気にせずに流していた。寝ていると下から突き上げるような大きい揺れで起き、一緒にリビングで寝ていた祖母が「ジグソーパズルが壊れてしまった」と地震よりもパズルを気にしていた。しかしすぐに冷静になった祖母は「地面がすごいことになっているから」と母にスリッパを渡した。近所の住民が近くの喫茶店で火が出たと叫んでいる声が聞こえ、外に出ると比較的新しかった実家と向かいの家以外の古い長屋など、辺り一遍全ての家が潰れていた。

（2）地震発生後

明るくなってきて周りを見ると写真で見るとような戦争の焼け野原のようだったと言う。この時も、余震で電信柱が揺れていて危険に感じていた。母は火が回ってくると思い、家の中のものを外に出し始めた。祖母は「欲張って何でも出そうとするな」と言い、いつ崩れるかわからない家に生き埋めになることを危惧していた。その中、板宿の親戚の家が無事で電気とガスが使えることを知り避難した。その時には、もう夕方になっておりそれまでご飯を食べたいともトイレをしたいとも思わなかった。それほどに必死に作業をしていて何が起きているのかも把握できていないなか、息をするので精一杯だったらしい。親戚の家のテレビを見てみると震災の報道をしており、実家が燃えていくのを見てショックを受けていた。1 か月ほど大阪に帰らずに親戚の家で避難していると、周りの人たちが仕事を失ったと聞いた。祖父も仕事なくなるのではないかと思いそんな中で大学に行かせてもらってもいいのか心配になった。しかし、心配しなくていいと言われ、大阪の下宿先へ戻った。

（3）震災を振り返って

寝ている間に発生したこともあり、すぐに頭を守るという行動はできなかったと言う。すると、起きた時に頭のすぐ横に重いブラウン管テレビが落ちていて家具を固定することの大切さを学んだ。また、地震など来ると思っていなかったため、今までの避難訓練も遊び半分で行っていたことを後悔していた。

地震発生直後は、何が起きたのか状況がつかめずにいたが数日して整理すると友人の安否やこれからの生活に対する心配が出てきてしまう。母は、私が防災グッズを補充しようと提案してもあまり賛成しない。それは、救援物資が非常に早く地震発生翌日には近くの体育館や公園で物資がもらえたからだだった。また、避難所ではなく電気とガスの通っている親戚の家に避難したため物資がある程度そろっていたからである。周りの家が全部潰れて、自分の家だけが建っているというのは申し訳なく感じてしまっており、その後、火が回ってきて燃えていくのを見て少しほっとしていた。様々なものを持ちだしたが今までの思い出の入っていたアルバムを持ち出さなかったことを後悔していた。

祖母は、実家と隣の家の土地を保有しており、区画整理の対象地域だったため、神戸市に売り地震発生

から1年もたたない間に東灘に新居を建てた。なぜこんなに早かったのかというと、親戚の家についてでもお世話になるというのが申し訳なく、家を再建したかったが長田の街はいつになれば家を建てられるかもわからず仮設住宅の建設にもお金がかかるためだった。

母は、とにかく家族全員が怪我無く無事だったことが一番良かったと話してくれた。

4 母の話を聞いて

母の話を聞いて私は思ったことがある。それは、地震が発生した瞬間にすぐさま地震が起きたと認知することは難しいが大切だなということだ。祖母は地震発生時、地震ではなくジグソーパズルを気にしていたが、その一瞬が命取りになる場合も十分にあると思う。なので、地震が起きたのならすぐにその事実を受け止め、身を守る行動に移すべきだと思った。しかし、母が避難訓練を遊び半分で行ってのように、地震なんて来ないものだと思ってしまうと地震の発生を受け止めることができない。なので、普段から防災に興味を持ち、災害は必ず起こるものだと考えるのが大切だと考えた。母が大学に行かせてもらってもいいのかと祖父に相談していたが、その時のことを私は祖父から聞いており、そのような心配をさせたことがつらかったと話していた。このような異常時だからこそ、お互いのことを考え助け合おうとするのは非常に大切だなと思った。母は私が幼い時から当時のことを質問すると何気ない顔をして答えてくれていた。しかし、母は家を無くし自分が今まで生きてきた記録のアルバムも消え、友人も亡くなっていた。いつものように明るく乗り越えたのだろうと勝手に思い込んでいた。しかし、大きなショックを受け後悔をしてそこから強く立ち直り今があるのだと知り、このようなつらい経験を思い出して話してくれた母に感謝した。

5 環境防災科

(1) 入学のきっかけ

私が環境防災科に入学しようと思ったきっかけは私の夢である消防士が大きく影響している。当時私は将来消防士になりたいと考えていたがどうすれば消防士になれるのか全く知らなかった。その時に母が環境防災科ならば消防士に求められる防災・減災の知識を身に付けられると勧めてくれたことだ。

(2) 入学してから

防災への興味はあったが知識が全くなく、様々な防災の話を聞いて知識が得られる楽しさや嬉しさよりも悲しさや怖いなどのマイナスな感情のほうが多かった。過去の話や防災にかける思いを聞き、自分の消防士になるために防災を学ぶという考えは甘いのではないかと不安になった。しかし、環境防災科で過ごしているうちに防災のあり方やボランティアの大切さを知り消防士になるためだけではなく、自分の大切な人たちを守るために防災に興味を持つようになり不安はなくなった。また、不安が無くなったことでより消防士に対して真っすぐな気持ちで目指すことができた。

入学するまでボランティアは被災地に訪問しそこで様々な活動を行うことだけをさしていると思っていたが、入学してから被災地訪問だけでなく募金活動や地域の小学校への出前授業も立派なボランティアだと知り驚いた。

私は環境防災科に入学してから様々な活動を行ってきたがその中でも印象に残っているのが3つある。

1つ目は、消防学校体験入校だ。この活動は入学前から知っておりどのような活動をするのか楽しみにしていた。将来の夢である消防士がどのような訓練をこなしているのか非常に興味深かった。厳しいとは聞くものの、運動部である私は心のどこかで難なくこなせるだろうと余裕があった。様々な訓練があったが、その中でも規律訓練は厳しく余裕はすぐに消えた。1年生は初級で規律訓練を受けた。自分だけでいていけばいいという意識ではいけなく周りとの息を合わせ、足をそろえて指の先まで意識しなければならぬのは非常につらく良い経験となった。2年生では部隊に分かれ放水訓練が行われた。私は中隊長として部隊を率い指示を出した。上からの指示を聞いて即座に判断し、部隊に的確に指示を出すのは難しく、声を張り迅速に動くのには体力もいるのだと学んだ。

2つ目は、高丸小学校出前授業だ。幼い小学生相手にどのようにすれば自分たちの話や防災の話に耳を傾けてくれるかを工夫しながら行うことで防災・減災の伝え方について考えることができた。また、相手が何を気にしているかも分からないため言葉遣いに気を付けなければならないということを知った。

3つ目は、消防署体験だ。1つ目の消防学校体験入校とは違い、行きたい人が消防署に行き、訓練や講義を受ける。消防学校体験入校で行った規律訓練はここでも活用することができ、ホースを使った消火訓練も行うことができた。この2つ以外にも様々な訓練があり、とても良い経験になった。しかし、それよりも将来私のなりたい消防士の横で訓練を行い、消防士の訓練を見ることができるといえるのはとても

いい刺激となった。私の目指す姿を近くで見ることができた。1年と2年の2回行い、1年生の時は声を出すことを恥ずかしがってしまい出来も悪かったが、2年生の時では、声をよく出し訓練も積極的に行うことができとても良い経験となった。

6 将来の夢

私は将来の夢は、消防士だ。消防士になりたいと思ったきっかけは、中学生の頃の職業体験で消防署に行ったことだ。なんだかっこよさそうだなと思い選んだ消防署だったが、そこで消防士の方の命に対する真剣さに憧れた。だが、この時はまだ将来必ず消防士になりたいという強い意志ではなかった。職業体験から数か月後、家族で出かけたときに、母が阪神・淡路大震災当時住んでいた長田の街を通った時に泣いていたのを見て、普段平気な素振りで震災の話などをしていても心に傷は残っているのだなと知った。このような思いをする人が生まれないようにしたいと思い消防士を目指すことを決めた。

私は消防士となり地域とのつながりを作り地域の防災力を上げたい。そのために、消防と防災・減災をもっと身近なものとしてとらえてもらいたい。消防士も災害時などの緊急時には市民との協力が必要となる。普段から関わりのある消防士である方が市民に受け入れてもらいやすく協力を仰ぎやすいと考えている。

その具体的な例として、防災訓練などのイベントを行いたい。イベントは今までも行われてきたが、若者の参加人数が少ないことが挙げられていた。以前幼少期に近隣で行われていたイベントでは、消防車見学や煙体験ハウスなどが非常に興味を持たれやすかったもので、若者を集められると思う。しかし、それだけのために参加するというのはあまり期待できないので、年齢関係なく人がよく集まる祭りにブースを出すことで、たくさんの人が訪れ、市民と消防士のつながりを作ることができると考えている。煙体験ハウスなどは、火災の疑似体験として防災学習に非常に効果的だと思う。災害の疑似体験(ぶるるなど)をできるようにすれば災害を身近に感じ防災・減災の必要性も挙げられると思う。これは1つの例だがこのように、ただイベントを開くだけではなく、開き方や人の集め方などを考えて効果的に防災・減災を広めていきたい。その中で災害は必ず起こるということを市民の方に伝え防災・減災をもっと身近なものと感じ、そこから防災・減災への興味を持ってもらえるようにしたい。

7 語り継ぐ

私は高校3年間で多くの方々に震災の経験談を聞かせていただいた。今までお話をしてくださった方々は、全員災害を経験しており当時の悲劇が鮮明に思い浮かんだ。これから世代は移り変わり、私たちが語り継いでいく時が来る。そのなかで私は、語り継いでいって良いのかと不安に思った。私たちにお話ししてくれた方々に永遠に語り継いでもらうことは不可能であるからと言って代案もない。しかし、私が語り継いでいこうとしても今までたくさんの方々にしていただいた経験談を壊してしまうのではないかと不安に思っていた。しかし、今年災害関連死が認定され、死者は6,434名から6,435名となった。阪神・淡路大震災から4半世紀以上すぎても災害は終わっていないと感じ、未災者の私でもできることはあると感じた。壊してしまうのではないかとこの不安を無くすことはできないが、ありのままのことを少しでも多く伝えるように「語り継ぐ」が途切れることがないようにしていきたい。そのなかで、話を大きくするなどは行わず起きたことをありのまま話して正確な経験を語り継いでいきたい。

8 最後に

母は今の神戸に阪神・淡路大震災の当時の姿はなかなか残っていないと話しており、それは復興が進み賑わいを戻した誇りであると同時に過去の記憶が消えて行ってしまうということだ。完全に消え、風化してしまう前に記憶を残していかなければ、いつか災害が起きた時に同じ悲劇を繰り返してしまう。

そのようなことを防ぐために『語り継ぐ』がある。大きな災害を経験したことが無いからと何も行動を起こさないのではなく、行える防災・減災は多数あり、それ等を行っていくべきだ。そのために防災・減災に興味を持ってもらう必要がある。そのために、過去の経験の中に防災・減災の話を混ぜ入れて語り継いでいくなかで防災減災に興味を持ってもらいたい。

現在世界では、新型コロナウイルス感染症が蔓延しており、この1年間様々な活動が無くなり行動も規制された。私はこの現状も災害と称していいのではないかと考えており、コロナウイルスにより生活を壊されたり命を落としたりしてしまうことが世界中で起きている世界規模の災害なのではないかと思っている。いつまでこの状況が続くかはわからないが、収まったとき私たちはこの災害を語り継いでいかなくてはいけない。これから語り継いでいくなかで同時に防災・減災についても広げていこうと思って

いる。その時、災害は必ず起こるということを伝え、市民一人ひとりが防災・減災を行うようにしていきたい。

9 追記

私がこの文章を書いたころは、消防士という夢を叶えようとする途中だった。しかし、追記を行っている12月現在、来年から神戸市消防局で働くことが決まった。私がこの夢を叶えられたのは、私1人の力ではなく、最後まで応援してくれた親や友人、先生のおかげだ。このことを常に心の中に留め、環境防災科で学んだ防災の知識を生かし市民の命を守っていきたい。

1 はじめに

1995年1月17日、阪神・淡路大震災が発生した。私はこの震災を経験していない。これからの時代、阪神・淡路大震災を経験した人よりも私のように震災を経験していない人が増えていく。人々の記憶から震災の記憶が薄れていってしまう。それは阪神・淡路大震災だけではなく、東日本大震災などの災害も同じことが言えるだろう。だから、経験していない世代が語り継いでいかなければならない。私たちは過去の災害の経験を通して、防災について考えなければならない。自分たちにこれから襲い来る災害から命を守るために。

2 小野先生の話

(1) 小野先生の震災当時

1971年生まれで、阪神・淡路大震災の時、小野先生は23歳で社会人1年目だった。実家は星陵台にあり、当時住んでいたのは東灘区深江本町だった。

金曜日から小野先生の両親が法事の為、大分県に帰省していた。小野先生は3年上の姉が出産を控えていたので実家に帰っていたが、両親が不在の為、何かあった時の為に仕事終わりの金曜日の夜から実家に帰っていた。また、年末に飼い犬が子供を6匹生んでいたのも、その世話もかねていた。そして3連休で火曜日に仕事に行ってからそのまま東灘の1人暮らしのワンルームマンションに帰る予定だった。

(2) 地震前日

小野先生は舞子タワーを見に舞子の浜(現在のアジュール舞子)に行った。夕日がいつも以上にきれいだったと後から思ったそう。何か忘れたが神棚に置いていたリンゴが落ちてきた。地震速報によって須磨沖で地震があったのを知った。それぐらいの気持ちしもなく、実家に帰ってきたこともあり、高校時代の野球部の友人に電話をした。彼は大学を卒業し、消防士として働いていた。訓練を終えて長田消防署で働いていた。彼は「明日休みでゆっくりするわ」「消防隊員はどんな時に出勤するの」「震度5以上」「ないな」と笑って電話を終えた。

(3) 震災当日

いつもと違う電車に乗ることもあり、6時に起きて、7時35分の舞子駅発7時50分三ノ宮駅着の電車に乗る予定だった。三ノ宮駅からは健康の為、新神戸駅近くにある会社まで毎日歩いていた。三ノ宮駅は映画の「ほたるの墓」でも映像で流れたこともあり、震災が起きるまで50年もそのままの形で残されていた。小野先生がとても大好きな風景だった。

6時に起きることもあり、うとうとしていると頭の方からゴーという音が聞こえてきた。小野先生は北枕が嫌いだから南に枕を置いていた。その日は実家にいたが、1人暮らししているマンションが43号線という高速道路が上に走っている大きな幹線道路の横の為、トラックの走る音と勘違いしていた。すると5秒後ぐらいに「ドーン」と大きな音がした。車がぶつかった音だと一瞬思った。

(4) 地震の瞬間

次の瞬間、大きく縦に揺れた。この瞬間「地震や」とすぐに分かった。その瞬間、かけ布団を身体にかぶせた。それは頭の上に額・盾などを飾ってあったのをわかっていただけだ。その揺れは体感で5秒もなかったそう。

そして1階に姉が寝ていたのを思い出し、部屋から出て階段を降りようとしたとき2回目の地震がきた。これは先ほどの地震と違って立ってられないほどの大きな横揺れだった。この揺れで1階では「ガシャン」とガラスが割れる音、タンスが倒れる音、いろんな音が部屋の中で鳴り響いていた。そして、外では瓦が落ちる音が鳴り響いていた。小野先生はその場で腰が抜け立つことができなかった。しばらくして姉がいる1階に降りた。1階では玄関の置物、鏡などが割れて散乱していた。玄関にある靴を履いて姉がいる場所に向かった。幸い姉は和室で寝ており、家財道具などがなく無事でいた。年末に生まれた子犬は箱の中でじっとしていた。何回起こったかは覚えてないが、その後も余震が続いた。恐怖のあまり2人で和室にいた。テレビも映らないので状況が全く分からず、外に行くと小雪が降っていた。7時くらいに、本多聞に住んでいた4つ上の姉が車で実家に来た。本多聞から実家までの被害状況を教えてもらい、兄弟3人でどうするか考えた。

（５）地震後①

電気が夕方に復旧した。地震であらゆるものが崩壊した様子がテレビに映し出されていた。私たちが写真などでよく見る風景だ。長田の町が燃えている様子、ポートアイランドの液状化、スキーバスが高速道路で宙に浮いている様子、そして小野先生が一番衝撃的だったのは、高速道路の倒壊だった。なぜなら、当時小野先生が１人暮らししていたマンションの隣の高速道路が倒壊していたからだ。

マンションに戻るができないため、しばらく実家にいることにした。小野先生の両親は水曜日の夕方に帰ってきた。

生活はというと、水は大門橋の山陽バスの駐車場にもらいに行った。近所の人から何時に水か配られるという情報を聞きつけたり、自治会の看板に貼ってあったりして情報を共有していた。ガスは１週間ぐらい復旧せず、一口カセットコンロで対応していた。お風呂は入れなかったのでタオルで体を拭いていた。

（６）地震後②

小野先生が当時勤めていた会社から木曜日に電話がかかってきた。「明日、何時でもいいから出勤するように」と言われた。電車が須磨―灘間で動いていなかったため、バイクで出勤した。長田の町や変わり果てた神戸の町を１カ月間バイクで通い続けた。

（７）まとめ

小野先生は自分・家族が生き延びること、生活することしか考えることができなかった。みんなの為にどうすればよいかという発想は浮かばなかったが、１カ月間バイクで通勤する中でボランティアに助けられた。

そのようなこともあり、小野先生は２年後のナホトカ号の重油回収作業に仕事を休んで参加された。

３ 小野先生の話から

私は、先生から震災の話聞くことは今まで一度もなかった。たぶん、この『語り継ぐ』の機会がなければ、この貴重な経験を知ることはなかっただろう。私は小野先生の話聞いて、災害は何気ない日常を急に襲い、その日常を奪ってしまう、当たり前が当たり前ではなくなることを知った。自分は災害を経験したことがないため、当たり前が当たり前ではなくなる怖さを知らないし、想像することが難しい。しかし、当たり前が奪われたという事実がある限りそのことに備えなければならない。急に訪れる非日常を少しでも日常に近づける為に今から備えなければならない。災害を予期することは難しいから、いつかやろうではだめだ。そのいつかを今にしなければならぬ。小野先生のお話からこのことを私は学んだ。

４ 環境防災科に入ってから今まで

（１）はじめに

私が環境防災科に入学を決めたきっかけは兄の影響である。兄は環境防災科の卒業生である。多くのボランティア活動に参加をしていた。兄は学校から帰ってくると毎日楽しそうに環境防災科のことを話していた。その楽しく話す兄の姿を見て環境防災科に入りたいと思った。その頃は楽しそうだからというだけで防災やボランティアなどには興味がなかった。テレビで流れてくる地震速報などに関しては邪魔と思っていたほどだ。しかし、今では防災やボランティアにはとても興味がある。テレビや新聞などで防災などの文字を見ると必ず目が行ってしまう。それは高校１年生から自分が今まで経験したことのおかげである。その経験は自分だけのものにしておくのではなくいろいろな人に共有しなければならないことだと考える。だから、この『語り継ぐ』を通して発信していきたいと思う。

（２）環境防災科で印象に残っていること、伝えたいこと

私が環境防災科に入学してから今までで、一番印象に残っていることは東北訪問である。その現地に行くにあたって防災のことや東日本大震災のことなどを知るため、そしてどのような考えをもって参加すればよいのかを考えるきっかけとなったのが防災リーダー育成のための淡路合宿である。この合宿は防災に興味のある人だけが参加するので、周りの考えや防災に対しての姿勢、先生方の講義などにとっても刺激を受けた。その中でも一番印象に残っている講義がある。それは、「他人事から自分事に」という講義である。自分はその講義を聞くまではどこか違う場所で災害が起きても自分には関係ないと思っていた。災害だけではなく、どこかの国で困っている子供がいると知っても他人事だった。しかし、この講義を聞いて環境防災科で防災を学ぶにはまず、自分には関係ない問題を自分だったと考えることが大切だと学んだ。また、その講義を聞いてから東北へ行きたいという想いが強くなっていた。そして、自分の考えが大きく変わった淡路合宿を終えて東北へ向かった。

東北にはバスで10時間以上もかけて向かった。現地では多くの方々と関わり様々な場所を見て回った。それはどれも自分にとって大きな衝撃を受けるものばかりだった。その中でも一番衝撃を受けたのが大川小学校だ。大川小学校とは東日本大震災発生時、津波に飲み込まれ逃げ遅れた多くの児童や教師が亡くなられた場所である。その場所に行く前はもう時間が経っているから何もないと思っていた。しかし、そこには震災当時の大川小学校が残っていた。大川小学校の周りは何もなくなっていたのに。それを見た時、震災当時の生々しい傷跡を見ると同時に、大川小学校だけ時間が止まっているように感じた。私はこの光景を見た時、この光景は自分だけのものにせずクラスメイトや家族、もっと多くの人に伝えていかなければならないと思った。被害者の遺族の方々があの日を忘れないために残した小学校を。あの場所だけ時間が止まっている深い意味を考えて。

私は部活動や勉強などで忙しくコロナウィルスの影響もあり、2、3年生ではほとんどボランティアに参加することができなかった。だから、1年生の時に行った東北がとても印象に残っている。もしあの時東北に行っていなかったら、自分はここまで防災に興味を持てなかったと思う。だから、これからも東北とかかわっていきたいと思う。

5 新型コロナウィルスと災害

今、日本はコロナウィルスの影響でできることは限られてきている。もし、今災害が起きたら現地に行きボランティア活動をするができない。避難所での生活も困難になってしまう。災害に災害が重なりもっと大きな被害が出でしまう。その被害を少しでも和らげるためには防災にコロナ対策を取り入れていくことだと思う。例えば防災バックにマスクや消毒を入れておくことだ。このような時代に沿った防災を今後していかなければならないと私は考える。

6 環境防災科卒業後

私は環境防災科卒業後にどうなりたいかどこに行きたいかは明確に決めていない。だけど、防災のこと学びたいと考えている。なぜなら防災についてとても不安だからである。もし、今災害が起きたとしたら自分には何ができるのか、本当に市民のリーダーとなって行動できるのか、率先して避難所運営を行えるのか。不安だらけだ。環境防災科で学んだことだけでは自分は市民のリーダーとしてこれから起こる災害と向き合うことはできないと思う。だから、これからも環境防災科で学んだこと以上に防災について学んでいきたいと思う。そして、これから起きるいろいろな災害から自分の大切な命と自分の大切な人の命を守る。

7 南海トラフ巨大地震

私は中学生の時に南海トラフ地震を知った。最初はどうせ来ないだろうと思っていた。しかし、その発生確率が30年以内に70%から80%あると知ったときとても怖くなった。だが、その時は現実から目を背けようとしていた。今は環境防災科に入って南海トラフ巨大地震と向き合うようになり、防災の知識を習得し、備えを充実させることで、漠然とした恐怖感もおさまっていった。だから、怖くて目を背けようとしている人に少しでも興味を持ってもらうためにこのことを書こうと思う。

南海トラフとは、ユーラシア大陸プレートの下に、海洋プレートであるフィリピン海プレートが南側から少しずつ沈み込んでいる場所だ。この2つのプレートの境界にひずみが蓄積されている。その蓄積が一気に解放されて起こる地震が南海トラフ巨大地震である。この地震は過去にも何度か起こっている。近年では、1944年の昭和東南海地震、1946年の昭和南海地震のことだ。昭和東南海地震と昭和東南海地震が起きてから時間がたつにつれてひずみが蓄積され南海トラフ巨大地震が起こる確率が高くなる。これを聞いて安心する人はいないと思う。しかし、防災に興味を持っていない、他人事になっているのが現実だ。だから、これを見た人が1人でも防災をしようと考えてくれたら被害を少し減らすことができるかもしれない。

災害はいつ起こるかわからない。明日自分が生きていると断言できる人間はこの世にはいない。だから、防災はいつかではだめだ。そのいつかを今に変えなければ自分の命は守ることができない。

8 最後に

私は『語り継ぐ』を書くにあたって改めて語り継ぐことの大切さがわかった。語り継ぐことが大切な理由は3つある。

まず、1つ目は風化を防ぐことである。阪神・淡路大震災や東日本大震災などの災害からはどんどんと

時間が経ってきている。ということは経験している人が経験していない人よりも少なくなってしまう。最悪の場合経験した人が1人もいなくなってしまうのだ。そんな時は自分のような災害を経験していない人が語り継いでいかなければならない。そして、その経験を次に襲い来る災害時に生かすことができれば多くの命が救えるのだ。

2つ目はコミュニケーションをとることができることだ。今、阪神・淡路大震災を経験しているのはご高齢の方が多い。ご高齢の方が震災を経験していない若者に震災当時のことを話すことで普段あまりコミュニケーションをとることのない年代の人がコミュニケーションをとることができ、関わりを持つことができるのだ。これは災害時の共助で役に立つ。

3つ目は記憶をアウトプットすることで自分が感じたことや失敗や成功を整理できる点だ。整理することによってより明確な対策が見えてくると思う。

この『語り継ぐ』が大切な3つの理由はすべて防災と繋がっていると私は考える。つまり、語り継ぐということは自分と相手を災害から救うことに繋がるのだ。100%災害から自分の命を守ることはできないかもしれない。だが、助かる確率を上げることはできると思う。だからこれからも命を守る確率を上げるために防災を学び続けたい。いつかではなく今から。

バトンを繋ぐ

野村 陽奈子

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分、私たちが住む神戸の地で阪神・淡路大震災が起こった。最大震度7、死者6,434名、負傷者43,792名、家屋の全壊約105,000棟と、未曾有の被害を受けた。しかし今日、阪神・淡路大震災から27年が経とうとしている。そのため、この神戸の地に震災を経験したことがないという人は年々増えつつあることが現状だ。私もそのうちの1人で、震災から8年後に生まれた。また、私の身の回りでも、神戸に住んでいたが被害が少ない地域に住んでいた、たまたま神戸を離れていた、という人が多い。これらのことから今、様々な被害と教訓、思いを共に、被災者から未災者へ、未災者から未災者へと繋いでいくことがとても重要になっている。私は今回、被災者の方の経験や想いを聞き、震災の未災者として自分に何ができるのかを、自分の経験を踏まえ、考えながらこの『語り継ぐ』に記していきたい。また、この『語り継ぐ』を読んだ人が、少しでも防災を自分事になって考えるきっかけを見つけれられたらと思う。

2 阪神・淡路大震災での経験

(1) 伯祖母の話

私の伯祖母は震災当時、東名谷のアパートに住んでいた。震災の前日に前震があったことも覚えている。震災当日の朝、夫と2人で住んでいた伯祖母は揺れで目が覚めた。揺れはとても長く感じられ、すごく怖かった。家の中はキッチンの水切りが揺れて、食器が2つほど割れたことや、西向きの食器棚の中で食器が割れたくらいで、大きな被害はなかった。外の様子を見ようと、家を出て周りを見渡すと、向かいの家の屋根の瓦がずれ落ちている以外は特に大きな被害は見られなかった。

1月20日から21日にかけて、義母の家があった長田の駒ヶ林(現在の地下鉄海岸線の駒ヶ林駅の前)へ様子を見に行くことにした。東名谷から長田まで歩いていると、どんどん景色が変わっていった。長田の町からは黒い煙が立ち上り、まるで戦争のときのように思った。伯祖母は義母が無事かどうか、不安が増すばかりだった。義母の家の付近に到着すると、消火活動をしている消防車のホースが地面いっぱい這っていた。伯祖母は夫と一緒にホースを踏まないようにそっと歩いていた。義母は無事で、近くの小学校の体育館に避難していた。義母の家はたまたま工事をし直したばかりだったため、隣の家は全壊していたが、無事だった。体育館の中をのぞくと、避難してきた人たちがぎゅうぎゅう詰めになっていた。義母は少し落ち着いたところに、家が無事だったため、帰っていった。後日話を聞くと、家が大きな道のそばだったため、救援物資をもらいやすかったそうだ。救援物資は近所の人からのおにぎりや東北からの食料など、種類も場所も様々だったそうだ。

伯祖母が夫とともに自宅へ戻る途中、大正筋商店街を通った。上を見上げると、屋根が焼け落ちており、衝撃的だった。自宅では自給自足の生活ができていたため、特に不自由を感じることはなかった。東加古川にある職場に向かおうとすると、通勤に使っていた第二神明道路が通行禁止になっていた。そのため、西神や大久保を大きく回って職場に向かった。職場の人の中には、兵庫の東に住んでおり、普段はJR神戸線を使っていたが、止まっていたため、JR福知山線を使って通勤している人もいた。道路が復旧するまで交通手段は苦労したが、何とか生活はしていけていた。

(2) 父の話

私の父は電力会社で働いている。父は震災当日、仕事の都合上北海道におり、神戸の地を離れていた。神戸で地震が起こったと知った父は、まず家族の安否を確認しようと思った。携帯電話を持っていなかった父は、空港の公衆電話で連絡を取ろうとしたが、つながらなかった。ひとまず旅館へ行き、もう一度電話をかけると、やっとつながり、家族の安全を確認できた。ひとまず全員無事だったことがわかったため職場に戻ろうとしたが、帰ることが叶わなかった。そのため、一緒に北海道に行っていた人と現地に留まった。旅館のテレビで被災地の状況を見ていると、倒れた阪神高速道路や焼けた長田の町などを見て「え？」と驚きでいっぱいだった。

数日後、ようやく帰ることができる見込みが立ったため、家へ帰った。そのまま会社へ行き、ドタバタな仕事が始まった。会社では同じ会社の社員だけでなく、下請けの会社員がたくさん集まっていた。そのため、仕事をしていると、お昼ご飯のお弁当が配られた。しかし、会社がお弁当を依頼していたため、余分に注文し、余ってしまうことが多かった。そのため、父は来所されているお客様に少しでも役に立てば

と、余ったお弁当を配ろうとした。しかし、上司から止められてしまった。理由は、毎日一定量のお弁当が配れるとは保証されていないこと、もしこのお弁当を食べて食中毒などが出来しまった時の責任が取れないこと、ただでさえ今の仕事で手がいっぱいなのに、他に問題が出たら更に忙しくなるなど、様々だった。父は自分の目の前に役に立つ物があるのにそれを無駄にしまうことにもどかしさを感じた。

(3) 母の話

震災当時、母は大学4年生で、名谷小学校の近くに住んでいた。1月17日はちょうど卒業論文の提出日だった。前日の夜、月が変な色をしていることに違和感を覚えていた。17日の朝、家の2階で寝ていた母は地鳴りで目が覚めた。そこから本震までは一瞬で、人生で初めて死ぬかと思った瞬間だった。揺れている間は、家がつぶれないように祈っていた。隣の部屋で寝ていた弟も1階で寝ていた父母も無事だった。しかし、2階の本棚と1階の観音開きの食器棚は中身が飛び出し、後片付けが大変だった。家の近くにあった福田川を見に行くと、色が濁り、いつもの福田川ではなかった。友達の安否確認をしようと家の固定電話を使って連絡を取っていたが、震災当日のお昼前からは電話がつかなくなかった。

そこから数日間は家の片付けをしたり、明石や加古川へ車で食料の買い出しに行ったりした。車のガソリンを補給しようとガソリンスタンドへ行ったら、レギュラーガソリンは売り切れており、ハイオクしか売っていなかった。仕方がなく補給し、帰路に就いた。家のライフラインの状況は、ガスはプロパンで通常通り使用でき、電気も一週間ほどで復旧し、水も北九州から給水車が来てくれていたため、困ったことは特になく、日常に近い生活を送れていた。電気が復旧する前は、長田の友達の安否状況が確認出来ず、家の発電機を使ってずっとテレビを見ていた。その中でも特に印象強く覚えているのは、サンテレビで放送されていた行方不明者情報だ。母が友達の名前が呼ばれないように願いながら見ていると、ずっと同じアナウンサーがお風呂も入らずに名前を読み上げていた。そのアナウンサーの姿は今でも鮮明に覚えている。また、情報がない状態のときは、大きく揺れて怖かったけど震災が起ったという実感がなかった。情報が回ってきたときは、火事の様子や阪神高速道路が倒れている様子などを見て、実感がわいた。少し落ち着いたら、神戸外大へ救援物資の仕分けを手伝いに行った。大量に届いた物資の中には古着やぼろぼろの布団など、使えなさそうなものがとても多かった。また、冬の避難所では冷たいおにぎりなどが受け入れられず、捨てられる物も多かった。バスの運行が再開した際に、一緒に乗車しているお客さんの中でタバコを吸っている人がいた。その人を見たサラリーマンが「あんただけやない！そんなんしとってもあかん！」と説教しだした。タバコを吸っていた人はその説教をへらへらと聞いていた。母はその状況を見て、普段ならただただタバコを吸っている人が迷惑と思うだけだが、震災で身も心もぼろぼろになってしまっている人も多いため、どちらの気持ちもわかると思った。

2月に入ると大学の卒業式が行われた。例年通りならきれいな着物やスーツで溢れていたであろう会場も、みんなスーツのような服を着ているだけで、活気がなかった。しかし、卒業式で久しぶりに友達に会えてほっとしたし、嬉しかった。卒業式では、暗黙の了解のように、会場のほとんどの人が震災の話はしなかった。このころから、街であしなが育英会の募金活動を目にするようになり、見るたびに募金をした。また、電車が動き出し、大阪へ行く機会があった。その時、母は人も街もきらびやかな大阪を見て啞然とした。「本当にここは隣の県なの？この人たちは神戸で震災があったことを知っているの？」そう母は感じた。また、仕事の帰りに、兵庫駅の南でおでんの屋台から湯気が立っているのを見つけた。母は、心が温かくなった。

1年ほどたった時に、やっと友達と震災の話をするようになった。東灘に住んでいた友達は、同じく東灘に住んでいた子と震災当時連絡が取れず、その子を探しに行くことにした。その子の家の辺りへ行くと、全壊になった悲惨な状態の家が見えてきた。もしかしたらと、倒壊した家をかいくぐっていき、家の柱をのけると、頭が陥没した友達が見えた。また、長田の友達は家が全壊して体が下敷きになってしまったが、近所のおばさんの助けにより脱出できた。しかし、その助けてくれたおばさんは頭から血が流れており、大けがをしていた。被災地ではそのような人は少なくなく、みんな必死の状態だった。

母は自分の体験を振り返って、震災当時は大学生と社会人の間だったため、時間に余裕があり、被災地のお手伝いをよくしていたりしたと語っていた。

(4) お話を聞いて

今まで阪神・淡路大震災に関するお話は、講師の方や先生からよく聞いていたが、家族というよく知っている間柄だからか、少し違う感じがした。今回3人のお話を聞いてまず思ったことは、同じ身内でもその場その場で経験が全く違うということだ。

特に父はたまたま神戸の地を離れており、実際には震災を経験していない。この話を聞いた時は、ある意味強運の持ち主だと衝撃を受けた。父は阪神・淡路大震災に関わる話をしてくれた際に、実際に地震は

経験していないけれど、職場に戻った際に、震災の大変さや防災の大切さを実感したと言っていた。自分事に置き換えて考えると、もし震災が起こったときに家族や友達など大切な人たちと離れ離れだったら、無事かどうか不安と恐怖でいっぱいになってしまうだろう。また同時に、いてもたってもいられなく、もどかしくなってしまうだろうと思った。

また、母や伯祖母の家には、田舎だったこともあるが、もしものときに生きていけるような備えが十分だったため、震災発生後も自分の家で生活できたと言っていた。その言葉を聞いて、自分が普段から備えを大切にと習い、考え、伝えてきたことに今まで以上の実感を持った。

今までは、家族間で阪神・淡路大震災の話題を避けてしまうことが多かった。理由はもしかしたら傷をえぐってしまうかもしれないという思いからだ。そのため今回『語り継ぐ』を執筆するにあたって、ほんとうに聞いていいのかためらった。しかし、今回話を聞かせてくれた3人とも、「あんまり覚えてないけど…」と言いつつ、快く承諾してくれた。辛い経験を思い出しながら、時間をかけて話してくれたことに感謝の気持ちでいっぱい。私が聞く勇気を出せたことも、話してあげようと思ってもらえたことも、私がこの環境防災科で3年間学んできたことが大きいと思っている。

3 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科に入ったきっかけは2つある。

1つ目は、中学2、3年のときの担任である理科の先生からの影響だ。その担任の先生は、大学生の時に火山や岩石の研究をされており、ホームルームの時間や理科の授業中に地球の話を大きく取り上げて話して下さることが多かった。その先生のお話を2年間聞き続けていたため、私は地球がもたらす恩恵や災害、自然現象を深く学び、私たちがどのように対応していかなければならないのかなどを考えることに興味を持ち始めた。

2つ目は、オープンハイスクールでたまたま環境防災科のワークショップに参加したことだ。本来は普通科の説明会に参加するつもりだったが、同じ中学校の友達が環境防災科のワークショップに参加すると言っていたため、一緒に参加しようとしていった。そこで、避難所運営ゲームをし、環境防災科は自然災害のメカニズムを学び、過去の災害から防災について考え、市民のリーダーとなって広めていく学科だと知り、興味を持った。

(2) ボランティア活動

入学後はたくさんのボランティア活動に参加させていただいた。その中でも継続的に参加してきた活動は出前授業だ。南あわじの出前授業を始めとし、授業の一環で行われる多聞東小学校の出前授業や愛垂児童館・高丸小学校の出前授業にも行かせていただいた。これらの出前授業の対象者の年代は様々だが、共通して意識してきたことは共に学ばせてもらっているということのを忘れず、コミュニケーションをとることを大切にして活動するということだ。1年生の頃は、とにかく自分の伝えたいことを伝えることで精いっぱい、自分が出前授業をすることに自信が持てなかった。それでも回数を重ねるうちに、だんだんと流れをつかみ、自分自身も学ぶ余裕が出てきた。また、授業を盛り上げるために試行錯誤していくうちに、コミュニケーションの大切さを学んだ。

この3年間の全てのボランティア活動で、人とのコミュニケーションの取り方や大切さを学べた。これは私のこれからの人生で大きな財産となるだろう。

4 私の夢

私の夢は地質調査業界で働くことだ。地質調査業界では、ボーリング調査や物理探査など、様々な地質調査方法を用いて、普段の生活では見ることができない地下の部分について分析することが主な仕事だ。しかし、調査をして分析しただけでは何の意味も持たないものになってしまう。自分が調査をする目的を建設業界の地盤調査に定めたり、土砂災害のハザードマップ作製の事前調査に定めたりと、明確にし、自分が環境防災科で培ってきた力を最大限に発揮し、防災を広げるために幅広く活躍していきたい。

5 最後に

今回この『語り継ぐ』を執筆していく中で、今まで家族と向き合っただけでなかった震災の話をし、3年間の自分自身の活動を振り返り、これからの自分を見つめなおす良い機会となった。

日本が地震大国だということは、今日、だれもが知っている事実だろう。しかし、今回家族や親族に阪神・淡路大震災の話を聞いた時に、全員が「当時はあんな大きな地震が神戸に来るとは思ってもなかつ

た。」と口をそろえて言っていた。私はそんな想定外をなくしたいと思っている。30年以内で70%~80%の確率で起こると予想されている南海トラフ巨大地震は、神戸の地に大きな被害をもたらすだろう。先ほどの項目で記したように、私は将来、地質調査業界で働きたいと思っている。このクラスや『語り継ぐ』を読んでくださっている人の中には、将来、建設業や行政に携わりたいという人も多いだろう。私はその人たちとともに、お互いの夢をかなえて、一緒に災害に強いまちづくりをしていきたい。この『語り継ぐ』の題名にあるように、違う業界から業界へバトンを繋いでいけたらと思う。この方法が、私が『語り継ぐ』を執筆しながら考えた未災者から未災者への語り継ぐ1つの方法だ。これからの未来の担い手となる私たちがすべきことや課題はまだまだ多く、手が付けられていない部分もある。しかし、そのやるべきことや課題を、いろんな職業に就いた私たちが、一つひとつ解決していけたらと思う。

最後になりましたが、今回『語り継ぐ』を執筆するにあたって協力してくださった家族や親族の方々、先生方、ありがとうございました。

語り継ぐ

濱田 明華

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に起こった阪神・淡路大震災から27年が経った。その時、私は生まれていない。私のように震災を経験していない世代が増えてきている。30年以内に起こると言われている南海トラフ巨大地震に備えるため、未来の災害に備えるために未災者が増えていくこの社会に自分の親から聞いた被災体験を語り継ごうと思う。

2 阪神・淡路大震災の概要

名称：兵庫県南部地震

発生年月日：平成7年（1995年）1月17日午前5時46分

震源地：淡路島北部

震源の深さ：16 km

地震の規模：マグニチュード7.3

最大震度：7

死者：6,434人

「阪神・淡路大震災について（確定報）」より

3 父の話

（1）発災前の意識

父は、防災教育を受けた覚えがなく、関西には地震は来ない、地震は関東のものだと思っていた。

（2）地震発生

1995年1月17日午前5時46分、神陵台にある家のベッドで寝ていた父は、トラックが突っ込んできたかのような音と衝撃で目を覚ました。真っ先に布団を頭まで被った。後から思い返せば、部屋には落ちてきそうなものはなかったが、揺れが続いていた間は身を守ることに夢中だった。布団の中で揺れが収まるまで待っていた時間はとても長く感じた。その間にバリバリと窓ガラスが割れる音が聞こえた。普段聞くことのない音だったため、印象に残っている。揺れが収まった後、外へ逃げようとしたが、玄関に行く途中に食器棚が倒れており、割れた食器が散乱していた。外に出ようとする一心でその上を歩いた。足の裏を怪我した。なんとか玄関にたどり着くも、建物自体が歪んでしまい、ドアがなかなか開かなかった。力尽くで開けた。外に出ると、下の階に住んでいたお婆さんの家のドアが開かないと騒ぎになっていた。近所の人たちで協力して開けた。余震で家が潰れてしまうかもしれないと思った父は、車の中で外が明るくなるのを待った。避難所に行くという発想はなかったそうだ。車の中は暗くて寒く、不安な気持ちが込み上げた。

外が明るくなると、実家がある板宿に戻る。混雑している道、瓦礫で車が通ることが出来ない道があったため、細い道でも通ることのできるバイクで板宿まで向かった。板宿に向かう途中、公衆電話に長い列ができていたところを見かけた。実家では水道、ガスは止まってしまったが電気はついた。

家族が全員無事であることを確認すると、父は水を買に行くためにバイクに乗り出かけた。どこにも水は売っていなかった。火事になっている家を見つけ、バケツリレーに参加したがバケツで水をかけるだけでは火は到底消えないと思い、その場を後にした。1月17日の夜は空が真っ赤だった。その日の夜は実家の2階でみんな寝た。揺れる度にドキドキしたそうだ。

（3）その後

1月19日、祖父がJRに勤務していたため、父は家族で被害が少なかった明石にある社宅に移り住むことができた。水道、電気、ガスが無事だったので、お風呂に入ることもできた。ペットボトルに水道水を入れてバイクで神戸にいる友達のところまで運んだ。友達がお風呂に入りやってくることもたびたびあった。しばらくしてからポケットベルで友達から連絡があり、その時に無事を確認した友達も多かった。

(4) 今

父は阪神・淡路大震災での出来事を振り返り、「震災は今までの生活が無くなる」と言った。災害に今までの生活を完全に壊されないように、我が家では水と食料のローリングストック、家族の緊急避難先を把握するなどといった防災対策をしている。

4 話を聞いて

私は、今回家族に初めて阪神・淡路大震災の被災体験を聞いた。母は被災体験を語ろうとしない。そのため、私はこれまで母の前で震災に関する話をできるだけしないようにしていた。母に『語り継ぐ』の経緯を説明し、インタビューをさせてほしいと話した時にも父に聞くようにと促された。

人に被災体験を話すことはとても勇気がいることだと思う。それと同時に、自ら被災体験を語ろうとしない人から話を聞こうとすることもとても勇気のいることだと感じた。父に話を聞く際も、聞いていいものだろうかと不安を感じた。父が話を始める前にあまり覚えていないと言った。しかし、話し始めるとあんなこともあった、こんなこともあったとたくさんのことを話してくれた。

父の話に度々バイクのことが出できた。災害時に車では通行が困難な道でも、バイクならば通ることができることがある。自転車よりも長い距離を短時間で移動することができる。バイクは、危ない、怖い、うるさいなどの悪い印象を持っている人が少なからずいるが、災害時にはとても役に立つものだと感じた。

父の話で明石に移り住んで友達のところへ水を運んだり、友達にお風呂を提供したりした話が出てきた。この話を聞いて、私は驚いた。誰もが大変な中、友達のことまで気にかけて助け合いをした父がすごいと思った。私も父のように友達を気にかけることができるような人になりたいと思った。今のよう明石から板宿までスムーズに行ける状態ではなかったと思う。そんな中でも助け合えるのは本当に素晴らしいことだと思った。

5 夢と防災

私の夢は、高等学校の先生になることだ。そこで、教育現場における防災との関わりを書こうと思う。

(1) 防災教育

父は話の中で阪神・淡路大震災よりも前に防災教育を受けた覚えがあるのかという私の質問に対して全くないと答えた。私はあえて防災教育を受けたかどうかではなく、防災教育を受けた覚えがあるのかを聞いた。それは、防災教育を行う上で防災教育の内容が記憶に残るものでなければ意味が無いと考えたからだ。

私は小学校で防災教育を受けた覚えがあるが、防災教育の内容は全くと言っていいほど覚えていない。唯一覚えていることは、小学校のグラウンドを使用して行われていた防災を目的とする地域の運動会だ。そこでは防災に関する〇×クイズやチーム対抗のバケツリレー、毛布を使った担架を作りリレー形式で繋いでいくといったゲーム形式で友達と楽しみながら学ぶというものだった。

これは学校の防災教育とは別物だったが、普段の教室で自分の席に座り、先生の話を書くといったことより内容が記憶に残りやすいと私は考える。体を動かす、友達と楽しみながら学ぶなど少しの工夫で大きく変わらと思う。私が先生という立場で防災教育をする時には、ゲーム形式や生徒だけでなく先生も一緒になって考える機会を作るなどをして、授業を受けているという感覚から解放されて、防災教育の内容が少しでも記憶に残りやすいものにしたい。

防災教育のデメリットとして、学校卒業後は自発的な行動を取らない限り防災に関わる機会が少ないということが上げられる。だがそれは、学生の間は防災に関わる可能性があるということ。つまり、全ての生徒にしっかりと記憶に残るような防災教育ができれば、社会全体の防災力の底上げに繋がるのではないかと考える。だからこそ防災教育を記憶に残るようなものにすることはとても大切なことだと思う。

(2) 避難所運営

防災計画において、多くの学校が避難場所として指定されていたが、グラウンドや体育館への一時的な避難のみが想定されていたにすぎなかった。そのため、阪神・淡路大震災では、多数の避難者が長期間生活するために必要な施設・設備がないまま、管理運営面においては手探りの状態で、試行錯誤しながら避難所がスタートした。

そうした予想外の事態を大混乱に至ることなく乗り切ることが出来たのは、各学校における教職員の努力が大きいとされている。断水によってパンク状態となったトイレは、多くの学校で教員が素手やス

コップなどを用いて汚物を取り除き、プールなどから水を運んで流すという大変な労力を要した。食料などの物資が届き始めると、受け入れが教師の負担となる。さらに、その分配は避難者からの不満を避けるため、何よりも公平さの確保を考慮しなければならない。このように、教職員が避難所の運営リーダーとして活動した学校は全体の82%にのぼった。

私は、東日本大震災当時、石巻西高校で教頭として働いていた齋藤先生の避難所運営のワークショップに参加させて頂いた。そこで避難所運営をするにあたって子供の力の大きさを学んだ。大人が注意喚起をしても治らないことが、子供が注意喚起をすることで治る。大人にはできないことが子供にはできるかもしれない。しかし、このことを知っているだけでは意味が無い。これをしっかりと大人にも子供にも伝えることで避難所運営の際に役に立つと思う。そして、子供の協力を得るためには普段からの信頼関係も必要だと考える。災害時に共に何ができるか、考えておきたい。

避難所運営には明確な正解がない。避難所によって避難者が違い、求められることにも違いが出てくるからだ。そんな中で最善を見つけ出すために、知識をつけ、たくさんの選択肢を持っておくべきだと思う。

6 環境防災科

環境防災科に入るきっかけは、インターネットでたまたま東日本大震災の動画を見たことだ。その時、防災や災害に興味があった訳ではないが、何故かその映像に釘付けになった。その後も時間さえあれば阪神・淡路大震災や東日本大震災当時の映像を見ていた時期があった。環境防災科の存在を知った時、ここに行きたいと思った。

環境防災科の授業の中で災害の定義についての話をしたことがある。人や社会の営みがあり、そこに自然現象が起こり人的被害や物的被害が出た時、災害になる。私はこれを聞き深く納得した。人的被害や物的被害が出ない場合災害にはならない。また、人的被害、物的被害を最小限に抑えることで大災害にはならない。これから起こるであろう地震、台風、豪雨などの自然現象にどのような対策をしていくかが大切になってくると思う。いろいろな防災グッズがある今、対策をすることは難しいことではない。だからたくさんの人ができる限りの対策をして欲しいと思う。

7 私の好きな事

私は数学が好きだ。小さい頃から数字に触れながら育ってきた。問題を解くようになってからは、分からなかった問題が理解できた時や、自分の力で解けるようになった時がとても嬉しかった。友達に問題の解説をすることも好きだ。数学に苦手意識を持つ友達が、自分の解説で理解してくれ、友達のテストの点数が上がった時には一緒になって喜んだ。得意科目を聞かれると必ず数学と答えた。しかし、高校3年生になると、問題をスラスラ解けることが少なくなった。それでも、私は問題が理解できた時、解けるようになった時には喜びを感じ、楽しいと思う。その楽しさを生徒に伝えるために、数学の先生になろうと思う。

今の日本の教育で、災害について学ぶ機会の多くは社会と理科の授業の中にあると思う。私は今、数学の知識が多い訳では無いので分からないが、将来は数学と災害を結びつけた授業をしたいと考えている。私の今の担任の先生が数学の先生だ。一度地震が起こる確率についてみんなで考えたように私も数学と災害を切り離して考えるのではなく、共通点を見つけて授業をしたい。

8 『語り継ぐ』を書いて

父と初めて震災のことについて話をした。これまでも話そうと思えば話せたと思う。でも、私には震災について聞く勇気がなかった。それはこれまで涙ぐみながら被災体験を話してくれる人を見てきたからだ。母が震災当時の話を避けるように父も話をしたくないかもしれない。そう考え、話を聞くことも話をすることもこれまで避けてきた。家で防災バッグを作る時、課題をしている時に少し話す程度だった。今回父に聞いたことは、将来学校の先生になった時に生徒に話す機会があると思う。自分は経験していないが、父から聞いたことを次の世代に話すことで少しでも風化を防ぐことができたかと考えている。経験していないから語ることができない訳では無い。経験していないからこそ語り継いでいきたいと思った。

夢と防災の授業の内容をより深く考えることが出来た。考えたことを文章化することによって整理することも出来た。自分の夢に対して向き合う良い機会となった。

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分、阪神・淡路大震災が発生。それから27年経った今、阪神・淡路大震災のことを知らない人が増加しているのは事実であり現実である。どれだけの大災害であろうが、時間とともにその災害のことを知らない人が増加し、風化してしまう。ただ、それが必然だからと何もしないことは間違っていると思う。今、自分にできることをやりきる。それが風化をさせない、少しでも遅らせる、そしてこの大災害で奪われた尊い命のためにできることだと思う。私たちに今できることは、語り継ぐことだ。私たちが語り継ぐことの最終地点になるのではなく、私たちはあくまでも中継地点にならないといけない。語り継ぐことには最終地点はなく多くの世代をつないでいかないといけない。そして阪神・淡路大震災の教訓が、今後起こる災害から人の命や日常生活を守るために語り継ぐ。

2 震災当時

(1) 母の話

当時、母は垂水区に住んでいた。1995年1月17日の朝、布団の中で寝ているととてつもなく大きな揺れを感じた。揺れを感じた時に、母は布団をかぶって身を守った。その時、台所で朝食の準備をしていた祖母の悲鳴が聞こえてきた。揺れが収まり動き出そうとした時に、揺れで飛び出た荷物の中から懐中電灯を見つけて家の中を見てみると、食器棚は倒れ、テレビは落下しとても悲惨な状況だった。台所にいた祖母は、棚の上にある電子レンジが落ちないように押さえていた。外が明るくなってから外に出るとガス臭かった。祖父と叔母が兵庫区にある曾祖父の自宅を見に車で向かった。須磨あたりからあちこちで火事になっていた。曾祖父の家は全壊していた。その家に住んでいた家族の曾祖父以外は自力で脱出していた。しかし、曾祖父の姿が見当たらずみんなが諦めかけていた時にどこからか脱出してきた。曾祖父が見つかりみんな安心していた。その頃、母は自宅の周りがガス臭いことから自宅には戻らず、その日は小学校の体育館に避難した。避難所にいる1日の間に1度だけおにぎりをもらった。おにぎりも全員分あるというわけではなく、みんなで分けて食べた。温かい飲み物がほしくなり、自動販売機を探して歩いたけれどもどこの自動販売機も売り切れていた。避難所で1日だけ過ごしてまだライフラインが全て止まっていたので、三木市にある親戚の家に2日間泊めてもらった。3日目からは、会社の人の車で出勤した。自宅のある垂水から会社のある新神戸までつくのに、朝早くに家を出て会社には昼前ぐらいに着いた。そのぐらい渋滞していた。

(2) 父の話

父は当時、加古川に住んでいた。2階で寝ていた時、下から突き上げるような振動があり飛び起きた。パニックになり何をしたらいいのかわからず、ファンヒーターのコンセントを抜いた。そのあと1階に行くと家族全員起きてきた。加古川の自宅はテレビもライフラインも切断されていなかったため、すぐにテレビをつけた。そこからはずっとニュースを見ていた。これでは仕事に行けないと思った。とんでもないことが起きたのだと気づいた。午前中ニュースを見てみると、長田の街の火事の映像が流れ始めて、自宅の2階から神戸の方を見ると煙が上がっているのが見えた。そのあと新神戸にある会社に電話をしたが繋がらなかった。震災から3日後、会社の人と車に乗り合わせて出社した。

3 震災当時の話を聞いて

私は、震災を経験しておらず、経験した方からのお話で阪神・淡路大震災当時の人々の様子を想像してきた。正直、今まで親から阪神・淡路大震災の話を詳しく聞いたことはなかった。こんなにも身近に阪神・淡路大震災を経験した人がいるのに何で聞いてこなかったのだろうと思った。『語り継ぐ』を作成するにあたって、今まで詳しく聞いてこなかった両親に話を聞いた。両親には今まで聞きにくいと思っていたのだと思う。今回実際に両親から聞いて良かったと思った。

母の行動ですごいなと思ったのは、揺れ始めてすぐに布団をかぶったということだ。阪神・淡路大震災発生前は現在よりは防災教育があまり浸透していなかったと思う。しかし、そのような状況でも揺れが始まった時にすぐに身を守る行動をとれるというのがすごいと思った。私が防災教育をあまり受けていない状況で揺れが来たら、すぐに自分の身を守る行動をとることはできないと思う。私も祖母のように自分の身の回りの物が落ちないように押さえると思う。命を守る行動が咄嗟にとれるというのがすごい

と思った。災害後の生活では被災者の状況が分かった。温かい飲み物を求めていたり、親戚の家に泊めてもらったり同じような行動をした人はたくさんいると思う。被災者は、どのようなことを求めているのかというのが分かった。

父の話では、被害は少なかったけどそれでも突き上げるような揺れがあったと聞き、被害があまり出ていないような地域でもものすごい揺れを感じていたことが分かった。人は非日常的なことが起きると自分が思っている行動とは別の行動をしてしまうことがあるのだと知った。そのくらい衝撃的な瞬間だったことが分かる。加古川から神戸までは距離があるのに関わらず、加古川からでもわかるくらいの煙が上がっていたということは、その時の火災被害の大きさを物語っていることが分かった。長田の街の人がそれほどの火災や煙を目の前にしていると考え、生きている心地がしないだろうなと思う。このように、自分の身近な人から話を聞くと今までは気づかなかったようなことに気づくことが出来た。今まで聞いてきたお話とはまた別の角度でのお話であり、私自身も自分の親から聞くという今までとは別の視点で聞くことが出来た。

私は未災者であり、阪神・淡路大震災を経験した親を持つ子供である。被災者から未災者へ、未災者から未災者へこのように後世へと話をつないでいくということを親も求めているのではないかと思う。私たちの子孫がそしてまたその子孫が災害で同じ苦しい想いをしないように親の話を大切にしたい。震災当時の親の気持ちも忘れてはいけなく、最大の教訓になるのではないかと思う。

4 環境防災科での3年間

(1) きっかけ

私は、中学生のころ将来は人の役に立つ職業に就きたいと考えていた。そこから「人の役に立つってなんだ」と考え、ボランティア活動をしたと思うようになった。ボランティア活動には前から興味はあった。しかし、公立中学校で過ごしているうちはボランティア活動をする機会はなかった。ボランティア活動をしたとは思っていたものの、機会がなく、自分から行動する勇気もなかった。その時に知ったのが、舞子高校の環境防災科だった。環境防災科はボランティア活動を行いやすい環境にあり、さらに東北を訪問することもできると知り環境防災科に入りたくなった。東北のことは、震災当時小学1年生だったこともあり覚えていなかった。しかし、3月11日に近づくにつれ放送される震災当時の映像や再現ドラマなどを見る機会が多かった。その映像を見たときは毎回大きな衝撃を受けていた。そのため、東北に一度は行ってみたいと思っていた。さらに環境防災科のことについて調べていくうちに、防災も学んでみたいと思い受験することを決めた。

(2) ボランティア活動

環境防災科入学後、様々なボランティア活動に参加させていただいた。校内募金をはじめ、出前授業、地域の行事等にも参加させていただいた。これは、環境防災科だからこそ経験できたことだと思う。ボランティアでは、思い通りにいかなかったり失敗したり、周りの方には迷惑をかけることが何度もあったが、その度に地域の方々の人情の温かさに助けていただいた。ボランティア活動は多くの人の協力があることでできることだと思う。特に印象に残っている活動は、小学校への出前授業だ。この出前授業では、準備不足という部分の課題が残り、授業では時間配分がうまくできなかった。一度しかない授業なのに自分たちの準備不足で完璧な授業ができなかった。私自身では、小学生や小学校の先生方に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。そんな時でも、小学生や小学校の先生方からは、ありがとうという言葉もらった。その時、本当にみんな優しいなと感じた。次からは絶対に同じミスをしなないと決めた。このボランティア活動では、準備がどれだけ大切で怠ってはいけないことなのかを学んだ。ボランティア活動では、毎回多くのことを学ばせていただいている。それは、地域の方々や先生方だけでなく一緒にボランティア活動をしている生徒からも学んでいる。よく周りが見られる子や地域の方とすぐに打ち解けられる子、私の苦手なことができる子など自分との違いやその生徒の行動から多く学んでいる。ボランティア活動で学んだことは、これからの生活でも活かせると思う。この経験や学びは、環境防災科に入ってボランティア活動に参加した人にしか得られない貴重なものだと思う。この経験を環境防災科卒業後も最大限に発揮できるように自分の強みとして頑張りたいと思う。

(3) 東北訪問

私は、高校1年生の時にジュニアリーダーの東北訪問に参加させていただいた。この東北訪問では、震災から8年経った東北の現状を知りたく参加した。実際に現地に行ってみると、私が思っていたよりも復旧が進んでいるように見えた。しかし所々に震災の大きな爪痕が残っているのを目にした。その中でも私が一番忘れられない光景が大川小学校だ。大川小学校に到着し、バスから降りた瞬間空気が一気に

重くなった。この大川小学校は、震災当時のそのままの姿が保存されていた。震災前は住宅がたくさん建っていたという大川小学校の周りは、一面雑草だらけとなっていた。ぽつんと建っている大川小学校は空気が重く、周りとは別の世界にきたような気分になった。校舎内の物はほとんどなくなり、渡り廊下は崩れ、どこを見ても震災の傷跡がはっきりと残っていた。大川小学校で子供を亡くされた方のお話や大川小学校で被災した方のお話を伺って、そのお話と今自分自身がみている光景が重なった時には胸の奥が苦しくなった。当時の小学生はどんなに不安な気持ちだったのか、もし私がその現場にいたらと考えてしまい、自然がとても怖く感じた。大川小学校のすぐ近くにある裏山の高台に行くと、ここまで来られていたらみんな助かることが出来たのかと思うと悔しくなった。大川小学校を訪問して一番の衝撃は、バスを降りたときに空気が重く感じたことだ。今まで生きてきて全く感じたことのないようなぐらゐく感じた。言葉では伝えきれなく、皆さんが想像している何倍も重い。その重さは、命の重さや自然の怖さを表しているようにも感じられた。実際に現地に行ってみないと分からないことがあるというのが分かった。この衝撃は一生忘れることはないだろう。そして少しでも多くの方に、この衝撃をこの気持ちを共有したいと思う。

(4) 3年間を通して

阪神・淡路大震災から約24年後、私は、環境防災科に入学した。私は、生まれも育ちも神戸なので小学校、中学校でも阪神・淡路大震災のことについては自分ではある程度知っているつもりでいた。しかし、環境防災科入学後、たくさんの方々の体験談などを聞き、私が知っていたことはほんの一部にしか過ぎないことを知った。今もまだまだ知らないことだらけだと思う。この3年間で、多くの人の被災体験を聞いた。その中で多くの人が言っていたことは、「繋がりを大切にする」ということだ。この3年間で、この言葉は何度も聞き、本当に大切なことだと感じている。繋がりを大切にするということは、環境防災科を卒業した後も大切にしていきたい。環境防災科18期生のみんなと一緒に活動したり防災や災害について勉強したりしていく中で、一人ひとりの意見が全く違い、そんな視点から見えていたのだと感心することがあった。みんな違う角度から防災や災害と向き合っていて、防災はいろんな角度から見ないといけないのだと気づいた。いろんな人の意見を聞くことの大切さや物事を1つの視点からだけではなくいろんな視点から見ることの大切さを学ぶことが出来た。

この3年間では、普通の高校生の3年間よりもとても濃い3年間だった。3年間ではまだまだ足りないくらいの充実した高校生活を送ることが出来た。それも、環境防災科18期生のみんなや先輩方、後輩、先生方さらにボランティア活動でお世話になった地域の方々またいつもサポートしてくれる家族のおかげだと思う。これからも多くの人に支えられていることを忘れず、感謝し過ぎていきたい。

4 新型コロナウイルス

2019年12月中国の武漢市で初めて感染が確認された。それから瞬く間に感染が拡大していき、そして2020年1月日本でも初めて感染が確認された。その翌月にはダイヤモンドプリンセス号での感染が広がり、その後日本全国に感染が拡大していった。新型コロナウイルスは世界中を脅かし、人々の笑顔を奪っていく。特に芸人の志村けんさんが新型コロナウイルス感染のため亡くなったことは、日本中が悲しんだ。驚くほどの猛威をふるう新型コロナウイルスは、人々の日常生活を奪い、慣れない新しい生活様式に人々を導いていったように思える。

私は、新型コロナウイルスを一種の災害だと考える。この災害は世界規模で発生していて、世界中の人々が被災者である。誰もが予想していなかったような災害だ。この災害は、世界中の人の夢や目標、希望までも奪ってしまった。この災害とはかなり長い間、人々は向き合っていかなければならないことになるであろう。ほぼ全員が元の生活に戻りたいと思うだろう。私もそう思う。マスクをつけない生活が憧れとなってきている。そんなことを思っている間にも、自然は人々をさらに脅かしてくる。それはもう1つの災害、自然災害だ。特に2020年は豪雨災害だ。地球温暖化が進むことにより大雨の回数が多くなり、降水量も確実に増えている。

2つの災害が同時に起きると、避難所での対応がとても難しくなる。3密を避けたりソーシャルディスタンスをとったりと避難所運営が厳しくなる。また、感染拡大を防ぐためにも他県からのボランティアを断ることもしていた。そのため復旧や復興も遅れる。そのため支援側も新しい支援の仕方が求められた。募金活動でさえ行いにくくなってしまった。新型コロナウイルスは被災地や支援側にも大きな影響を与えた。

次に、自然災害が起きたときに新型コロナウイルスが収まっていなければ、避難所の運営方法は今回の豪雨災害の教訓を活かしているだろうか。また、避難所での感染を防止できているのか、この時代だから

こそその運営の方法が求められることになると思う。また、私たちは2つの災害の被災者に次になるのは自分自身だと考え、備えておく必要がある。この備えにも、自然災害に対する備えと感染に対する備えの2通り準備しておかなければならない。新型コロナウイルスの影響で私たちは活動が制限されてきた。やりたいこともできなくなり、今まで目標としてきたことが一瞬でその目標を奪われてしまった人も多くいるだろう。やはり当たり前の生活なんてないということだと思う。いつ自分自身の目標が奪われるかもわからず、目標を奪われたときに今まで積み重ねてきたことが無駄になったと考える人もいるだろう。しかし、その積み重ねてきたことはその場ではないかもしれないが、いつか必ず自分の経験値となり自分自身を進化させるだろうと信じて、今までやってきたことに自信を持って新型コロナウイルスを通して言われたような気がした。

この新型コロナウイルスという長期間の災害も、後世へ伝えていかなければならないと思う。当たり前は続かない、今やっていることに自信を持って私は伝えていきたい。また、この災害は今生きている人全員が被災者のため、若い世代が自分の子孫にだけでも伝えることで風化されないと思う。阪神・淡路大震災や東日本大震災と違い、今の時代を生きている人全員が経験しているため、この災害は語り継ぐということに対して、あまり抵抗なく伝えられると思う。各々が少しの勇気を持つことで後世へ伝えられる。最後に、新型コロナウイルスと最前線で戦う医療従事者の皆様には感謝の気持ちを忘れてはならない。

5 執筆を終えて

『語り継ぐ』を執筆して、両親が震災当時どんな行動をしてどんな気持ちだったのか知ることが出来た。気持ちを知ることができ、阪神・淡路大震災の恐ろしさも再認識した。また、この震災から人々は逃げず、真摯に向き合っていかなければならないと思う。この震災と向き合うことで、この震災からの教訓が必ず次に活かせると思う。人間は自然に勝つことはできなくても、人間には教訓を活かし次に備えるということ是可以する。完全に被害を防ぐということは無理かもしれないが、被害を減らすということは皆の意識次第で出来ることだ。この意識を多くの人に持ってもらいたい。私自身はこの執筆を進めていくうちに、この震災と向き合えたような気がした。これは今まで環境防災科で学んできたことを少しつなげることが出来たからだと思う。それでもまだ私は足りないことだらけだ。災害は3年間では学びきれないことだと思う。過去の災害は被災者一人ひとりの被害状況が異なるため、勉強してもしきれないと執筆を進めているときに思った。そのためこれも、すべてを知することは難しいかもしれないが、基本的なことを学ぶだけでもこれからのためになると思う。これからも少しずつでも災害と向き合い学んでいきたい。その学んできたことを多くの人に伝えられることが出来ればいいのだが、多くの人に広めるのは容易なことではない。しかし、広めなければならぬことだ。そのため、この冊子を通じてもっと多くの方に知ってもらえるようにしたい。この冊子には私だけではなく環境防災科18期生全員の想いや伝えたいことが書かれている。その想いを少しでも多くの方にお届けできるように卒業後も活動していきたいと思う。また、私たちの子孫や後世へこの想いを閉ざすことなくつなげていきたい。被災者から未災者へ、未災者から未災者へといつまでもこれまでの災害が風化しないためにも語り継いでいかなければならない。語り継ぐという命を受けた18期生だけではなく、被災者・未災者の誰もが。

願いを込めて

平川 歌帆

1 はじめに

今年で27年目を迎えた阪神・淡路大震災は、死者6,000人以上にも及び、戦後以来の未曾有の被害をもたらした。「経験していないのに何がわかるの」そう思う人もきっといるだろう。私自身も「経験していないから語り継ぐことなんてできない」と思っていた。しかし、活動していく中で震災当時の辛い記憶や状況を私たち若者にも心優しく伝えてくださる方にたくさん出会った。そういった方たちのおかげで私たちは活動できているし、すべての活動に意味と感謝をもって取り組む必要があると思う。また、そのような活動を通して、語り継いでいくことの重要性を感じた。経験していない、知らないからこそやるべきことがある、環境防災科の生徒として責任を持って『語り継ぐ』を執筆する。

2 母から聞いた話

当時、母は垂水区の実家で祖父と祖母の3人で暮らしていた。朝、すごい揺れと同時に爆発音のような音で目が覚めた。和室で布団を敷いて寝ていた母は転がるようにして起き上がった。仕事に行く用意をしていた祖父と朝ご飯の支度をしていた祖母と共に玄関の方へ向かった。木造2階建てだったため、家が崩れることを心配した祖母の指示だった。数十秒ほどで揺れは一旦収まった。玄関のドアを開けてしばらく様子を見ていたが、その間も何度か余震があった。近所の人たちも玄関先まで出ていた。外を見ると、どこからか黒い灰がたくさん飛んで降ってきて、近くで火事になっているのかと不安になった。少し落ち着いてきてから、西宮と大阪に住む兄2人に電話をして無事だと分かり、ほっとした。西宮に住む兄が外に出てみると、近所の家が何軒も倒壊していたと言っていた。この地震によって、大きな被害が出ているということにとっても驚いた。

何気なくテレビをつけると、見慣れた街が見たこともないような無惨な映像として流れていた。映像をみて、三宮や六甲山の辺りが大変なことになっていると知った。台所では食器棚から食器が半分くらい落ちていて、破片が散乱していた。怪我をはいけないからと祖父と祖母がスリッパを履いて片付けをしていた。

停電はすぐに復旧した。しかし、もう一度兄たちに電話をかけてみたが、何度かけても繋がらなくなっていた。また、トイレに行くと水の流れが悪いと感じた。それを聞いた祖母は慌てて米を炊いた。大きな鍋やバケツにも水を汲んだ。そして、すぐに水は出なくなった。浴槽には前日の残り湯が溜めてあったため、トイレの水に使用することができた。ガスと水道は使えなかったが、電気は使えた。調理にはカセットコンロやトースター、電気鍋を使った。震災から数日間は、水が出る近くの施設まで行って洗濯をしていた。やがて、給水車が来てくれるようになり、バケツを何個も持って水をもらいに行った。

地震の当日だったか次の日だったか、西宮に住んでいた兄が車で帰ってきた。西宮から須磨を越える辺りまで家やビルが倒壊していたそうだ。長田は道路の両側が火事で燃えていて、すごく怖かったと話していた。

3月になり、ガスと水道が使えるようになった。この時ほど普通に生活できることが有り難く感じたことはない。終わりにかけていた神戸の街も次第に復興していった。「立ち上がろうとする人の力って本当にすごい。」母は最後にこう言って語り継ぎを終えた。

3 話を聞いて

私はこれまで母から震災当時の話を聞くことが少なかった。それでもこの『語り継ぐ』の中で何度か聞いたことのある話があった。それは私が幼い頃から母に限らず、祖母や父が話をしてくれていたから、私の記憶に残っていたのだと思う。話を聞いて印象に残ったのは、浴槽に残り湯を溜めていたことやすぐに米を炊いたなど、祖母の判断が的確だったということである。私も普段から災害に備えた生活を送り、災害が起きた際には冷静で迅速な対応ができるようにしたい。

また、同じ神戸のなかでも被害の差があったことをあらためて実感した。母は兄から情報をもらったりテレビをみたりするまでは、神戸でここまで大きな被害が出ているとは思わなかったようだ。地震が起きたことにもびっくりしたが、それ以上に地震発生直後の被害の差から生じる温度差にも驚いたと言っていた。

私は家族であっても自ら震災当時の話を聞くことにためらいと不安があった。『語り継ぐ』を執筆して

いなかったらここまで詳しく話を聞くこともできなかったと思う。当時の話を聞いていく中でたくさんの発見があり、「こうしたらよかった」や「これはしない方がいい」など、私自身がこれからも行っていく防災に取り入れていこうと思った。過去の災害の教訓を生かすというのはこういう事なのだと実感した。これまでも「震災の記憶は風化されてはいけない」と思って活動や授業を受けてきたが、この『語り継ぐ』はやはり何よりも風化させないために大事な方法であると思う。この活動に多く携わり、広めていきたいという気持ちがこれまで以上に強くなった。

4 環境防災科

(1) きっかけ

小学生のときから心理学というものに興味があった私は、高校生のうちから何か学べることはないのかと、進路に頭を抱えていた。そんな私が環境防災科に入学を決めたのは、中学3年生のときに担任だった先生が言った言葉がきっかけである。「あなたには環境防災科で人のところに寄り添う活動をしてほしい。」最初は心理と防災にどのようなつながりがあるのか、全く分からなかった。私は理科がとても苦手なうえに「防災」という分野に特別興味があったわけでもない。そんな私が環境防災という名のつく学科など絶対に向いていないだろうと思っていた。しかし、調べていくうちに環境防災科の生徒は様々なボランティア活動に参加されているのだと知り、いつの間にか不安な気持ちよりもここで学びたいという大きな期待の方が上回っていた。臨床心理士になるという夢を叶えるために、今からできることがたくさんあると思った。これも環境防災科に入学を決めた理由の1つである。

夢を叶えるための近道ではなく、寄り道にすら思えるかもしれないが、私にとっては未来の自分が一番納得できるだろう最良の選択であり、今はこの道に進んでよかったと自信を持って言うことができる。

(2) 環境防災科での活動

私はこの3年間たくさんの活動に参加させていただいた。全てを紹介することは出来ないが、いくつかの活動とそこで学んだことなどを書こうと思う。

地域の夏祭りや防災訓練では、地域の方とコミュニケーションをとることができ、地域の防災力を上げることにも繋がると思う。重要なのは住民一人ひとりの防災意識を高め、自分の身は自分で守るという「自助」と住民同士で助け合う「共助」を行うことである。さらなる地域防災力の強化には様々な世代の人を巻き込んだコミュニティを作り、行政と連携を深めることが必要である。

出前授業では私自身が大切だと思った3つのことについて書こうと思う。

1つ目は、前後の話の内容が繋がるような授業を作るということである。私が1年生のときは各テーマの繋がりなど考えたこともなかったが、リーダーをさせていただいた際に繋がりをもたせることがどれほど大切で難しいことなのか思い知らされた。各テーマの繋がりがどのような効果をもたらすのかというと、一度言われても覚えられないが、何度も繰り返し聞くことによって頭に入ってきてやすく、理解度も高まることが期待されるという点だ。簡単にできそうにも見えるが、これは私が何度もぶつかった壁であり、出前授業をしていく中で一番苦労した点である。出前授業のようなことをさせていただく機会がこれからもあるのなら、忘れずに取り入れていきたい。また、出前授業に参加してくれる環境防災科の後輩たちにもしっかり引き継いでいこうと思う。

2つ目は、年齢や地域によって防災の広め方を変えるということだ。それに気付けたのは、私が入学してからずっと参加させていただいた南あわじ市の小・中学校で行う出前授業である。求めているテーマがそれぞれの学校で異なるということも関係しているが、各学校がこれまで行ってきた防災教育の内容や生徒の特徴、人数や年齢などにも少しずつ違いがある。例えば、小学2年生と5年生が別々に授業をしている場合、5年生には伝わるものが2年生には伝わらなかったり、2年生は興味を持ってくれても5年生は関心を示さなかったり、授業の受け取り方に違いが生じる。この違いを生かし、2年生には手を動かす作業やゲーム感覚で楽しめる防災を取り入れ、5年生には過去の災害の話やグループワークを通して自分の考えを相手に伝えるなど少し難易度を上げた防災を取り入れる。当たり前のことのように感じるかもしれないが、それぞれの学校や人が求めているものを実現させることは決して簡単ではなかった。しかし、それこそが出前授業の醍醐味であり、やりがいなのだと私は思っている。

3つ目は、継続するということだ。私は3年間続けてきたこの活動を通して、多くのことを学んだ。何度も心が折れてしまいそうになったが、継続してきたことによって得たものが多くある。ただ知識や達成感が得られるだけでなく、私はこの活動の魅力というものにも気づくことができた。

だからこそ、引き継いでくれる後輩にもこの魅力を感じてほしいし、私自身も続けて大事にしていきたいと思う活動なのである。ここまで一緒に頑張ってくれた仲間と本気で向き合ってくださった先生、そ

して環境防災科の出前授業を求めている方たちにも感謝したい。

防災教育や地域防災セミナーのスタッフをさせていただいた際には、防災を楽しく学ぶということはとても大切なことなのだと知った。私は入学した当初、防災を学ぶときに楽しさを求める理由やその必要性が分らなかった。むしろ、防災教育では逆に楽しく学んではいけないというイメージがあった。それは小学生の頃から受けてきた防災教育の時間が悲しかったり、重たく暗い話だったりをされることが多かったからだ。ただ防災についての難しい言葉や内容をしていても、興味をもってくれないと意味がない。少なくとも私は、楽しく防災を学べたことでもっと知りたいと興味をもてた。小さな子どもがいるイベントならなおさら、防災を楽しく学ぶということの効果を実感できるはずだ。これからの防災教育はいかに防災をなじみやすく、日常に取り入れていけるかが課題である。

(3) 3年間を通して

この3年間、ボランティア活動や専門科目の授業などを通して本当に多くのことを学んだ。ときには逃げ出したくなるようなこともあったが、人生の中で最も濃い3年間だったとも感じる。ここでは、3年間の活動や出来事などを通して、私自身が感じたことや学んだことについて書こうと思う。

新型コロナウイルス感染により、一斉休校や活動自粛が行われ、社会の動きと同じように私の心にも大きな変化がみられた。1年生のときは迷惑をかけないようにしようとか、指示されたことを言われた通りにしようとか、先輩についていこうと必死で、ボランティアに参加するだけでも大変だった。2年生になったら活動の中心に立って指示を出していこう、3年生になったら後輩の育成に力を入れよう、そんなことを目標としていたが、想像もしていなかった災害が起こった。休校期間は自分の無力さと何かを失ったかのような喪失感にかられていた。意外なことにぼーっとできる時間は減り、何かを考えている時間の方が多くなった。これまでは気を遣うこともなく、友達や親戚には会いたいときに会うことができていたし、顔の表情を見ながら近くで話すこともできた。これらができないというのは本当に苦しかった。誰かが悪いわけでもないために責め立てることもできず、このモヤモヤをぶつける場所もなかった。一番怖かったのは、自分も知らない間に大切な人を危険にさらしているのかもしれないということだ。一つひとつの行動や発言に責任を持つというのは今に言われ始めたことではないが、コロナ禍を通じてあらためて意識していこうと思った。

休校期間中の5月に環境防災科の卒業生からメッセージが届いた。そこには、「このコロナ禍はチャンスだと思う」といったことが書かれてあった。メッセージを読むまでは、私にとってコロナ禍というと気の重たくなることで、マイナスな捉え方しかしていなかった。しかし、チャンスだと考えたら、心が少し軽くなっていた。「コロナ禍だからできなかった」ではなく、「コロナ禍だからこそできた」というプラスな考えを持つようになった。例をあげると、本を読むことや家族と過ごす時間が増えたことなどもあるが、私がコロナ禍だからこそできたこととして一番に出てくるのは、自分自身と向き合う時間が増えたということだ。向き合う内容は私が過去に行った活動や進路など様々だ。この時間があったからこそ、私は自分が本当に実現させたいことは何なのかを見つけることができた。

そして最後にここで私が伝えたいことは、自発性を高めることの大切さである。私がこのように思ったきっかけはボランティア活動である。ボランティア活動では、指示を待つのではなく、自らすべきことを探して取り組むことを学んだ。また、ボランティアの要素にも入る自発性は、コロナ禍においても役立つと考えている。多くの人が無力感を抱き、動き出したくても動けない中で、よく考え、自発的に踏み出す勇気を持つことは、難しいことかもしれないが、とても大切になると思う。

5 夢と防災

(1) ころと防災

私が以前抱いていた将来の夢は、心理を専門とした職業に就くことである。私が心理学に興味をもったのは、たしか小学生の高学年頃だった。ここでは心理に興味をもったきっかけや目標について書く。

私には東日本大震災を経験した友達がいる。私は泣いている彼女に何もしてあげられなかった。環境防災科での学びを経て、ころのケアや寄り添うというのは話を聴くことや笑顔にさせることだけが正解ではないのだと知り、黙って隣にいても間違いではなかったのだと思えるようになった。私は彼女と出会ったことをきっかけに、専門的な知識や経験があるからこそできる寄り添い方というものに興味を持った。

夢である臨床心理士を追いかけるようになった当初は名前も難しく、聞き慣れない職業だった。そして、頑固な私は環境防災科にくるまでずっと他の夢や目標というものに目を向けることができず、「臨床心理士」という言葉にこだわり続けていた。大学で行われているオープンキャンパスなどで心理学科の

講義を受けたこともある。そのときにも話題として出てくる「公認心理師」は民間資格である臨床心理士とは違い、国家資格である。私がなぜ、その臨床心理士や公認心理師という言葉を使わなくなったかという、その職業に就くために必要な資格をとることにこだわるのをやめたからである。考えれば考えるほど、自分が何を優先して学びたいのか分からず、頭を抱えていた。そのときに心理はどこでもつながるのだということを教えていただいた。私はその話を聞いてから、本当に実現させたいことは何なのかを考えた。今は資格の取得を目標にするのではなく、広い視野でこころのケアやサポートに携わる仕事に就きたいと思っている。心理を専門とした職業に就けなかったとしても、人のこころについて考えるということは、やめずにずっと続けていきたい。

そして、私が入学前からこだわっている「こころに寄り添う活動」というのは、3年経っても正解がわからない。むしろ正解などなく、「寄り添いたい」という気持ちで接することが大切なのではないかと思うようになった。私は相手への押し付けにならないように注意しながら、自分が思う「寄り添う活動」というものをこれからもしていきたい。

(2) どのように防災を広げていくか

災害時、人々は心に大きな影響を受ける。それは「異常な出来事に対する正常な反応」である。これをあらかじめ知っておくことがこころの問題を軽減するのに役立つのだが、今の日本は「こころのケア」やストレスについて学ぶ時間や道徳の授業は少ない。私はこのこころについて考える授業を普及させることは、これからの防災教育でとても重要になると考えている。これから出前授業のようなものをさせていただく機会があるのなら、率先してこのテーマを取り上げていきたい。

6 最後に

私は今回の『語り継ぐ』を通して、伝えることの大切さに気づかされた。私は環境防災科に入学してから、防災について家族に話すということが少なかったが、この機会を経て、自分がこれまで参加してきた活動や学んできたことについて向き合うことができた。伝えることで自分の考えや知識が整理されるし、もしかしたら自分自身の命や誰かの命を守ることができるかもしれない。そう信じて、私はこれからも人に伝えるということをしていきたい。

そしてあらためて、このような機会を与えてくれた環境防災科と、時間を割いて丁寧に話をしてくれた母に心から感謝したい。環境防災科には他にはない経験や学びがたくさんあり、私は本当に素敵な環境に恵まれていると感じた。そして、私がこの3年間で学んだことや得たものが誰かに伝わってほしい、誰かのためになってほしい、そんな願いを込めて『語り継ぐ』の執筆を終えようと思う。

過去の私・今の私

真砂 怜生

1 三年前の私は…

3年前の私は防災に全く興味がなかった。正直、避難訓練も真剣に取り組んだことはほとんどなかった。人は、何かの「きっかけ」がなければ、興味を持つことも真剣に取り組むことも出来ないと思っている。私にとってそれは、「東北訪問」であった。ニュースだけでは伝わらない空気の重さは今でも体に残っている。特に、大川小学校に行ったときは命の重みを肌で感じた。今までに感じたことのない感覚だった。私はこのままでいいのかと考え、もっと防災に真剣に取り組まなければならないと思ったのだった。

2 環境防災科に入学した理由

環境防災科との出会いは中学3年生の時のオープンハイスクールだった。初めは、普通科として舞子高校に入学しようと思っていた。だから、環境防災科に関してあまり勉強もしていなかった。しかし、聞いたことのない学科だったため入学説明会に興味本位で参加した。説明会では、普段学んでいることの紹介や、どんなボランティアに参加しているかなどが説明された。防災科と言っているだけあって、被災地の訪問や、防災に関して深いところまで学んでいるようだった。しかし、私が一番惹かれたのはそこではなかった。私が惹かれたのは「授業内でコミュニケーション能力を伸ばし、人前で発表する」という点だった。小学生の頃から、人前で発表するのが好きだった。自分がどれくらい話せるのか試してみたい。それが入学したきっかけである。

3 両親の話

父は垂水の団地に住んでいた。当時20歳で大学に通っていた。地震が起きて、目が覚めると食器棚からお皿がすべて割れて床一面に破片が落ちていた。ガスが使えなかったため、ガスコンロで大量の水を沸かしてお風呂にはいった。食糧の調達が難しい状況だったらしく、知り合いが西宮のマクドナルドの食べ物を提供してくれた。近所の人からお皿や食料などを提供していただいた。地域の人達と助けあって乗り越えた。家の片付けをしたあと、長田の避難所に行った。救援物資は届いていたのだが、おむつなどが不足していたため、大量に買って持って行った。避難所では、多くの人が過ごしていた。自分の家が壊れなくてよかったと思った。

母は広島出身である。当時は西区に住んでおり寮生活を行っていた。次の日からヨーロッパに行く予定がキャンセルになってしまった。地震がおきて、目を覚ますと寮の管理人が車を出していたのでそこに避難した。車のラジオで情報収集を行っていた。収まると寮に戻り、テレビをつけて状況を把握した。次の日、新幹線で広島に帰り、家族が生きていることを確認した。

4 東北訪問

1年生の8月上旬、被災地である東北に訪れた。当時の私は防災に関してあまり興味がなく、東北のことについてもテレビで流れている情報しか知らない状態だった。この機会をきっかけに、防災に対して本気で向き合うことになるとは当時の私は知る由もなかった。

(1) 大川小学校

私は、人生で初めて被災地に訪問した。バスで大川小学校まで移動した。バスを降りた瞬間、空気の重さを感じた。心臓を誰かに掴まれているかのような感覚だった。校舎の方に行くと、花が添えられていた。

人の死を身近に感じることは日常の生活ではないので、どう捉えていいのかわからなかった。学校は安全な場所。そのような考え方が私にはあった。現場を見たとき、原型はほとんどなかった。自分自身の学校がこんな風になった時の気持ちは私には想像ができなかった。おそらく、経験した人にしか感じないものだと思う。たとえ、経験したとしても人それぞれ感じ方が違う。人の心を理解することは難しいのだなと感じた。

大川小学校を訪問する際、佐藤敏郎先生のお話をお聞きした。佐藤先生のお話を聞いて初めて、なぜ大きな被害に遭ったのかを知った。原因は、地震が起きてから51分の間グラウンドに待機していたことにより逃げるのが遅くなったことである。大川小学校の裏には大きな山がある。その山を登っていれば全員助かっていた可能性もあった。こんなことが二度と無いようにと語り部としての活動を始めたそうだ。

私は、防災に関してあまり知識がなかったが自分なりに解釈してまとめた。すべてわかりきったわけではない。今になって疑問に思うこともでてきた。しかし、佐藤先生の二度と同じことはしないという気持ちはとても感じた。一つひとつの言葉が心に入っていくイメージだった。私もいつかこんな風に語りたいと強く思った。

（２）現地の人との交流

東北訪問で、流しそうめんをする機会があった。招待するために招待状を書き、直接渡しにいった。あおい地区とは、震災が起きた時に元々いた場所を立ち退いた人たちが新しく創った町である。家や道、道路などはきれいで、きれいな田畑もあった。住民の皆さんも、優しく受け入れてくださった。初対面の人と壁がなく話せたのは久しぶりの感覚だった。流しそうめんの時も、気さくに話すことができた。神戸のことを話したり、東北の話をしたりした。話すことによって距離が近くなったような気がした。しかし、私には見せていない顔もあるのだろうと思った。町がきれいになったからといって心が癒されたかといえそうではない。おそらく、まだ癒されていない人もいただろう。しかし、そんな素振りは全く見せなかった。その時私は、強い心をもっているのだなと思った。

（３）多賀城高校との交流

多賀城高校とは、多賀城市にある県立高校だ。私たちと同じ高校生であり、防災を学んでいる同志である。１つ違うとすれば、災害を経験しているか、していないかである。経験をしていない私は資料や、人の話によってでしか話ることができない。しかし、多賀城高校の生徒は自分自身で感じたことを踏まえて話ることができる。私は経験していない分、多賀城高校の生徒と多く話そうと思った。同じ学年から話を聞くなどめったにない機会だったからだ。今までは、大人の目線の話が多かったが、同じ目線から話を聞くのはとても新鮮だった。

話を聞いていると、自分達で調べて地域の電柱などに津波がどこまで来たのか分かるように標識のようなものを作っていた。その他にも、過去の映像と現在の映像を見比べてどう変わったのかを調べたりしていた。自分達で調べて、積極的に活動していて私も防災に対してちゃんと向き合いたいと思った。話していく中で、たくさん意見交換が出来て防災の考え方について学べた。

５ ひょうご安全の日のつどい

2019年1月17日、クラス全員でボランティアを行った。舞子高校では防災ブースを作り、阪神・淡路大震災に関連する写真などを掲示した。舞子高校以外にもたくさんの団体がブースを開いていた。そこで起きた２つの出来事が私のなかで頭に残っている。

（１）１人の女性

私がブースを運営していた時、１人の女性がブースを訪れた。女性は写真を見回っていると、私に対してこう話した。「経験していないから語り継ぐのって難しいよね」と。全くその通りであった。自分たちは人の話や写真、資料を見ながら想像するしかなかった。どれだけ調べても経験した人とは言葉の重みが違うことも分かっていた。そして、僕はこう返した。「災害を経て、経験していない人の視点で語り継ぐことも大事だと最近思うようになりました。」と。経験していないからこそ、震災中の問題点や改善点を冷静に判断できるのではないかと考えていたからだ。すると、女性は自分の被災体験を私に話してくれた。話終わった後、「頑張ってるね」と言っていた。その時、私の活動は誰かの役に立っているのだと実感した。

（２）中学時代の友達

私が他のブースを見ている時、中学校時代の友達に出会った。学校の課外授業できているようだった。せっかくなので舞子のブースに案内した。すると友達が、「全然知らんことばっかやわ」と言った。これが今の現実なのかと思った。震災について学んでいない。知らないことが命取りになることをわかっていない。防災についてもっと知ってほしいと思った。今の世代は災害についてあまり興味を示していないように思える。防災を広げるためにはまず、興味を持ってもらうことから始まる。災害を知らない世代が増えてきているので、防災の必要性がわからない人が殆どだと思う。しかし、そうではないということを伝え、更に防災を楽しく学ぶことが出来れば私の友達のような人は、少なくなっていくのではないかと考えた。

６ 夢と防災

私の将来の夢は、ボディーガードになることだ。ボディーガードとは、DV・ストーカーなどの被害や災害から対象者を護る仕事である。私はもともと、警察官や消防士に憧れていた。人を救うために身体をは

る姿が格好いいと思ったからである。しかし、環境防災科に入って未然に防ぐことの大切さが分かった。警察官や消防士は、通報されてから動くことが多いため、私のしたいこととは少し違った。そして、警察庁管轄のSPに興味を持った。しかし、SPは総理大臣や衆議院議員などを中心に護衛する。私は民間人を護りたいと思っていたのでSPも諦めた。その時出会ったのが、ボディーガードである。ボディーガードという仕事は、あまり知られていない。見たことない人もいるのではないと思う。私がボディーガードになったら防災の知識を活用したいと思う。災害時は勿論、警護中などに建物や天候をみて危険であれば対象者に伝え、防災に関する話を隙間時間に話したりなどをしていきたい。

仕事をする上で大切にしたいことは、「相手と同じくらい自分を大切にすること」だ。理由は2つある。1つ目は、相手のことを思って行動し、仕事をすることによって、自分のことをおろそかに扱ってしまうからだ。自分のことを大切に出来ない人は相手を大切にすることはできない。まずは、自分のことを大切にすることによって頼られたり、信頼されたりするのだと思う。

もう1つは、もし私が死んでしまうと悲しむ人がいるからである。私が死ぬと、残された人達が苦しい思いをしなければならない。誰かが死ぬことなど、誰も望んでいない。死ぬことによって、他の人からの期待を裏切ることになるということである。私は、いろんな人の期待に応えられるように努力したい。

7 今の私は…

今の私は、3年前よりも大人になっただろうか。周りからは、まだまだ子供だと言われる。しかし、私自身、すごく大人になったと思う。3年前より落ち着いて人の話を聞けるようになり、自分の考えを相手に押し付けることはなくなったと思う。3年前は、私だけの視点で物事をとらえていた。相手の考えは聞かず、自分の意見が正しいと思っていた。しかし、防災を学ぶ上で、多角的な視点を少しずつ持てるようになった。必ずしも、私が思っていることがみんなの共通理解になっているわけではないことが分かるようになってきた。

もう1つ変わったことは、防災に興味を持ったことだ。東北訪問を始め、授業での講義やボランティアなどを通して防災の大切さ、必要さ、面白さが分かった。この感情を私だけではなく、私の周りの人にも伝えられるようにしていかなければならないと考えている。

8 最後に

3年間振り返って一番に思うのは「楽しかった」こと。これに尽きる。高校に入って初めて防災に触れ、知らないことを学び、貴重な経験もたくさんした。他の学校では出来ないと思う。勉強に限らず、部活動やボランティア、クラスとの生活などたくさんある。3年前の私は、防災に興味がなく何事にも無関心だった。3年前と大きく変わっているとすればそれは、防災に興味湧いたというところだろう。私自身びっくりしている。今まで知らなかったことが高校に入って分かるようになりいつの間にか好きになっていた。勉強することが苦ではなかった。とても楽しく学べていた。時には、厳しい事を言われたり、指導を受けたりしたが、私にとってそれはプラスになったので良かったと思う。防災は、これからも自分で調べたりしていきたい。

何かに興味を持つには、何かきっかけが必要である。きっかけは人それぞれで構わない。どんな理由であっても、3年間で何かに興味を持てることが出来たのなら高校生活は素晴らしいものになっていると思う。私は防災の他にプレゼンテーションや発表に興味を持った。きっかけは、もともと小学生のころから人前に出ることは好きだった。人前で話す事も苦ではなかった。小学校・中学校時の発表は大体周りと似たような発表をする人が多かった。個性をあまり出せていなかったように感じていた。しかし、高校に入って発表していくと各々の個性がはっきりしていた。自分のスタイルをしっかり持って発表していたのを見て、とても興味深かった。同じ人間でも、考え方や言葉の使い方が全く違うので、聞いていて飽きなかった。そして、発表のレベルが高かったので私も練習した。練習していくうちにうまくなっている事を実感するととても嬉しかった。プレゼンテーションや発表は、努力した分の成果が目に見えてわかる場所に惹かれたことがきっかけである。この力を高校で終わらせるのではなく、社会に出ても使えるようにしていきたい。

私は、舞子高校環境防災科に入学してよかった。環境防災科は、人とのつながりを大事にし「語り継ぐ」という大事な役割を担っている。被災者の方々が語って下さったことを、私自身が「継いで」そして、語っていくことは決して簡単なことではない。しかし、このような経験ができるのはこの環境防災科だけだろう。こんなに貴重な経験が出来てよかった。

今まで聞いたお話の内容を語るだけではなく行動で示さなければならない。私は大学に入っても防災

を勉強したいと考えている。この3年間で培ってきた知識を活かして防災を広めていき、未災者が防災に興味を持ち、防災に対して本気で向き合える人を増やしたい。そのために、未災者が被災地を訪れるきっかけを作りたいと考えている。災害とはどんなものなのか、なぜ防災が必要なのかを肌で感じるのが防災意識を向上させるのに必要なことだと考えている。私は、大学で被災地を訪問してどうすればたくさんの未災者が訪れてくれるのかを考えていきたいと思う。そしていつか、防災を通して他者がその人自身の命を大切にできるように取り組んでいきたい。

Providing is preventing.

溝内 友翔

1 はじめに

阪神・淡路大震災から 27 年目を迎える神戸では、震災を経験していない世代が、半数を占めると考えられている。だからこそ、神戸で防災を学んだ私たちが主体となって、多くの命を守り切れるように。いつかどこかで被災者になったときに、過去の教訓を十分に生かすことができるように。そして、多くの未災者が災害の恐ろしさを知り、防災・減災についてよく考えてもらうためにも、語り継いでいかなければならない。

2 阪神・淡路大震災の概要

名称：兵庫県南部地震

発生日時：1995(平成7)年 1月17日 午前5時46分

震源地：淡路島北部 (北緯34度36分、東経135度02分)

震源の深さ：16 km

規模：マグニチュード7.3

最大震度：7

死者数：6,434人 (死亡原因の8割以上が、建物倒壊による圧死)

行方不明者：3人 負傷者：43,792人

朝日新聞 DIGITAL より

3 父の知人のRさんの話

(1) 地震発生当時

当時Rさんは、灘区の文化住宅に住んでいた。夜中に帰ってきて2階にある自分の部屋で横になった。両親は1階で寝ていた。なぜかパチッと目が覚めた直後、「ドーーーーーン」と大きな音と共に家中が揺れた。とっさに布団をかぶり小さく丸まった。自分の上に何かが落ちてきたため、そっと布団から手を出して触てみると天井だった。布団から出ようとしたが、物凄い埃で出ることができず、再び布団に潜り込んだ。布団から横に手を出すと、いつも横にあるはずの壁がなくなっていた。「何か大変なことが起きている!」「地震か?」とは思ったが、布団から出ることができなかったため、もう一度寝たそう。

(2) 地震発生直後

揺れが収まってどうしようかと考えていると、しばらくして「Rくん、Rくん」と外から近所の人の声が聞こえてきた。自分も必死に「ここ!」と声を出したが届かず、近所の人はどこかに行ってしまったため外に出ることができなかった。その時はかなりショックで、家の中から外の声は聞こえるが、外から中の声は全く聞こえなかったと思った。再び、近所の人が「Rくん」と声をかけに来てくれた。自分の声は外に聞こえないことが分かっていたため、体の上に落ちてきた天井を叩いたら今度は気付いてもらうことができた。近所の人が小さい穴を開けてくれ腕を引っ張って助けようとしてくれたがちぎれそうなほど痛く、もう少し大きな穴を開けてもらい自ら這い出て外に出ることができた。外に出ることができたのは8~9時くらいだったため、倒壊した家に2時間ぐらい埋まっていたことになる。母親はその大分後に助け出された。家は斜めに崩れ、家の横にあったガレージの車は寝ていたベッドの下敷きになっていた。ベッドの足元は真二つに割れていた。外に出て自宅の屋根に座って周りを見た時は「夢か?」と思った。天井裏から地面に裸足で降りた時はものすごく痛かった。それを見た近所の人がスリッパを持ってきてくれた。そして、職場の人が職場の防寒具を持って来てくれた。

「咄嗟に体を丸めていなければ足がなかったかもしれない」「近くの地域では火事が起きている場所もあり、自分の家で火が出ていたら死んでいた」「声は聞こえるけど助けられずに生きたまま焼け死んだ人もいるって話も聞いた」など、当時の思いが語り継ぐ中でどんどん溢れて言葉になっていった。

(3) 地震発生から数日間、数か月間

とにかく状況把握が大変で、時の流れに身を任せている感じだった。地震発生後避難場所になっていた小学校に避難しようとしたが、被災者であふれかえっていたうえに、小学校に入った途端理科室から大きな爆発とともに火が噴き出したのを見たので、小学校に避難するのはやめて、約10か月間は公園で母と先輩や近所の人と生活をした。数日経つと新聞記者が線路の上から写真を撮ってくるが増え、今

では「記録に残すために必要だったから仕方ない」と考えることができるが、当時は、「見せ物じゃない」と腹が立った。また、現在と違って道路に歩道がなく、道路のすぐ横に家が建っていた。その道路脇に、毛布に包まれた遺体が置いてある様子を何度も見た。

地震発生3～4日後に配給があり、初めての配給は洗われていないたくあんとおにぎりがひとつずつだった。誰からの配給なのかは分からなかったがありがたかった。それから毎日避難先で「どこどこで食べ物を配っている」と言う話を聞くことができ、その場所にもらいに行った。数日経つと配給でお弁当をもらえたため空腹ではあったが、比較的食には困らなかった。

地震発生4日後に自衛隊が来て、父親が救出されたが亡くなっていた。家の柱の下敷きによる圧死だった。父親を救出する前、埋まってから4日経っており、亡くなっていることは分かっていたが、Rさんが「どこにおる」と聞くと父親の声で「ここ」と言う声がRさんとそれ以外の人にも聞こえた。軽トラックを借りて父親を乗せ、遺体安置所になっていた区民センターに行った。父親の体重は60キログラムほどだったがとても重く、区民センターの4階まで運ばなければならなかったことが大変だった。15センチメートル間隔でたくさんの遺体が並べられており、その中には、数日前に会った人や中学生の時の同級生など知っている顔もあった。兵庫医科大学の医師と看護師に死亡診断書を書いてもらうため、その場にいた遺族は全員廊下に出た。「明日、兵庫医大に死亡診断書を取りに来てください」と言われどうやって取りに行こうかと悩んだ挙句、知り合いから原付バイクを借りて取りに行き、その足で警察署に火葬証明書を取りに行った。棺桶が足りず困っていたが知り合いから運ぶもらうことができた。父親の実家がある加古川に行くために、兄のハイエースを借りて向かった。道中に自動販売機があり、それに電気がついていることにすごく驚いた。

地震発生5日後にお風呂に入ることができた。それがとても幸せだった。お風呂に入れなかったときは、「髪の毛が邪魔だ」と言って坊主にする男の人もいた。

地震発生6日後に、父親の火葬を行った。

地震で住む場所がなくなったため、公園で生活をしていたが、看板屋の人に小屋を建ててもらったり、電気屋に勤めている人が電柱から電圧を変えて電気を引いてくれたりと、そこまで苦しくはなかった。多くの人と一緒に生活をしていく中で、家がなくなった人と崩れずに残っていた人の、精神的な違いがはっきりと分かった。家がある人が夜に公園に遊びに来て談笑して帰っていくことが多くあったが、帰っていく姿を見ると心悲しくなり、避難している人間にはない心の余裕を感じた。公園が地域の人たちのたまり場になって、会話や情報共有を行うことが、心の安らぎになっていたのかもしれない。公園は、焚火の明かりしかなかったため、夜は真っ暗だった。そのため集団で行動していた。しかし、集団でいる時間が長いと、良くも悪くもリーダーが出てくる。「あの人が言うなら」となってしまう状況が多々あった。今でも焚火の匂いを嗅ぐと避難生活を思い出す。

地震発生約1か月後から放火が増えた。火災保険には加入しているが地震保険には加入していない人が多かったため、保険金をもらうためには家が燃えたことにしなければならぬから放火しているのではないかという噂がたえなかった。しかし燃え広がると困るため、3件は消火しに行った。トイレは近くの学校のトイレを使っていた。バケツがたくさんあった。トイレで水が流れず困った。また、火事場泥棒が多かったため、家の前に出していたテレビが少し目を離すと無くなっていた。しかし、配給やNTTが設置した電話などにトラブルを起こさずに並んでいる様子を見て「日本人ってすごい」と感じた。

炊き出しなどは大きい避難所には来ることはあったが、自分たちが住んでいた公園には来ることはなかった。

地震発生2か月後には、ガスが使えるようになっていた。

地震発生4～5か月後に、学校に仮設住宅が建ち、各学校に避難していた人たちが、1つの学校にまとめられ始めた。しかしRさんは公園にいたため影響はなかった。

地震発生10か月後に、公園に来た神戸市の職員に「仮設住宅に入ってほしい」と言われた。ポートアイランドの仮設住宅に入りそこで3年間過ごした。母親も仮設住宅に住んでいたが別々の住宅だった。文化住宅に住んでいたときは生まれてからずっと家にお風呂がなかったため毎日銭湯に通っていた。そのため仮設住宅にお風呂があったことが嬉しかった。仮設住宅に住んで3年目に、母親が20年借り上げの市営住宅に住み始め、そこに帰ったりしていたため、自分の住んでいる仮設住宅に帰ることが少なくなった。その後Rさんが公営団地に住むことになり仮設住宅を出た。

(4) 伝えたいこと

Rさんに、「阪神・淡路大震災を経験して備えておけば良かったと思ったもの」「経験したからこそ伝えたいこと」を質問し、3つ教えていただいた。

1つ目は、「大事なものは1か所にまとめておき、何かあったらすぐに取り出せるようにしておく」とだ。Rさんの母親が様々な場所に物をしまう癖があり、崩れた家から探しだすのに苦労した。通帳や印鑑は小さな金庫に入れておくことをおすすめしていた。しかし、火事場泥棒が来て持っていかれてしまう危険もあるため、1つの例として考えてほしいとおっしゃっていた。

2つ目は、「横とのつながり」だ。Rさんを救出したのは近所の方で、公園で生活をしているときは先輩にお世話になった。当時は自分がよく知っている人が周りにいたため頼りやすかったそうだ。しかし今住んでおられる地域では、近所の人を頼っていいのかと不信感があり、「昔から知っている人がそばにいるのは強かったな」とおっしゃっていた。

3つ目は、「家があるのと無いのでは備えが違う」ということだ。備えましようと言われている便利な防災グッズや食料は、家が崩れずに持ち出せたときにしか役に立たない。Rさんの先輩は、アウトドア用品がすぐに取り出せる場所にあったため、小屋が建つまでテントを貸して張ってくれたり、炭を熾してくれたりした。また、地震・火事・津波でも用意するものが異なってくる。すぐに持ち出せるか持ち出せないか、準備したものが外にあるか中にあるかで、被災したときの「生活の質」が大きく変わると思うとおっしゃっていた。実際に使って便利だったものは、トイレトペーパーとポリタンクだった。トイレトペーパーはティッシュペーパーの代わりになり、ポリタンクは、給水をするときに使用したからだ。阪神・淡路大震災のときは、灯油ストーブを使用していた家庭が多かったため、灯油を入れておくためのポリタンクが各家庭にあった。しかし現在は、灯油ストーブを使っている家庭が減少し、ポリタンクを使う回数が少なくなっているため、給水のときに大いに活用できるポリタンクを、ひと家族に1つ用意しておいても良いのではないだろうか。

(5) 話を聞いて

今まで講義などで聞いてきた阪神・淡路大震災の話と全く違うと感じた。炊き出しはほとんど全ての場所で行われたと思っていたし、保険金をもらうために自分の住んでいた家を燃やすなど考えたこともなかった。新たに過去の震災のことを知ることができてとても勉強になったが、知らないことがあまりにも多かったため勉強不足とも感じた。

Rさんが話の途中で、「思い出したくないわけではないけど、自分の中で風化されていて記憶が変わってしまっている部分がある」とおっしゃっていた。阪神・淡路大震災を経験して鮮明に覚えている方々が、年を取って少なくなっていることは事実であり避けられない課題である。その課題と向き合っていくためにも、震災経験者のお話を聞き続け、私たちの次の世代に繋いでいきたい。

4 環境防災科

(1) きっかけ

「生徒が自分で考えて、全部やっていくのです。」これは、2019年1月17日に放送されていた阪神・淡路大震災の番組内で、環境防災科創設者である諏訪清二先生がおっしゃっていた言葉である。これを見たとき私は、「高校生からこんな学習ができるなんて羨ましい」と感じた。また、中学生のときに通っていた学習塾の先生に進路について相談したところ、「こんなおもしろそうな学校があるよ」と教えていただいた。様々な職種の方の震災時のリアルなお話が聞けるところ、先輩・後輩が関係なく意見を出し合って1つのものをつくり上げていくところに特に魅力を感じ、環境防災科で学びたいという想いが強くなった。

(2) 環境防災科に入学して

「将来の夢は〇〇になること」とクラスの仲間ほぼ全員が言えることに驚いた。進む道はそれぞれ異なっているけど、応援し合えたり支え合えたりできる環境が最初からできていたことは心強いと感じた。環境防災科に入学をしていなかったら、発生するといわれている災害や過去に起こった災害を深く知ろうとは思わなかっただろう。そのため、外部講師の方に来ていただいたり施設に見学に行かせていただいたりと、様々な災害を経験した方から直接お話を聞ける機会が多くあったことはとてもありがたいと感じている。

入試の面接のときに答えた高校生活での目標は「オープンハイスクールで見た環境防災科の先輩方のように、堂々と前を見て話せるようになること」だった。壇上に立っておられた先輩方全員が笑顔ではっきりと説明をされていたその姿は憧れで、この先も忘れることはない。入学当初、クラスの仲間のほとんどが前で話すことに慣れていて、正直とても焦った。前に立つと考えていることの8割以上は伝えることができなくなる私が、あの先輩のようになれるのかと不安しかなかった。しかし環境防災科では、授業はもちろんボランティア活動でも前に立つ機会がとても多いため、気が付くと前で話すことが苦ではな

くなっていた。また、どんなに小さなことでも仲間が応援してくれたため、したくないと感じたことでも最後にはみんなと笑って終わっていることがほとんどだった。クラスの仲間に、数えきれないほど助けてもらった。

5 将来の夢

「助かるはずだったのに」と言われる命を1つでも減らすことができるような、救急看護認定看護師(以下、救急看護師)になることが私の夢である。中学校のトライやるウィークで消防署に行き、そこで見た救急車に心を奪われ「この中で働きたい」と思ったことがきっかけだ。救急看護師の仕事は、救急医療施設での医療行為はもちろんドクターヘリや災害現場などの医療施設以外でも看護活動を行う。救急看護師として働くにあたって大切にしたいことが2つある。

1つ目は、「自分の行動ひとつでその人の将来を左右する」という責任と自覚を持ち続けることだ。私は救命救急科で仕事をしたいと考えているため、判断力と行動の迅速さが鍵になってくる。今の私はとても優柔不断である。人任せにすることが多く、相手の意見に流されることがほとんどだ。しかし災害時の医療現場では、医師の判断を待っている時間が、患者の社会復帰できる確率を大きく下げってしまう。そのため、自分で物事を決めて失敗を恐れずに「逃げない」勇気を持ちたい。

2つ目は、「自分の体調管理を後回しにせず怠らない」ことだ。病院で働くということは、様々な病気にかかる可能性が非常に高くなる。今までは「風邪を引いただけ」で特に何もせずに終わっていたことが、入院している患者に風邪がうつってしまうと大きな病気に繋がりがかねない。そのような事態は絶対にあってはならない。そのため、自分の体調を把握し予防を徹底していきたい。

看護師として働く毎日苦しんでいる人を間近で看ることになる。苦しんでいる人も私も同じ1人の人間であり、命がある限り必ず身体には異変が起こる。自分の変化に気付けるのは自分しかいない。病気やケガを予防することは「防災」で、自分自身を大切にすることは「自助」ではないだろうか。

6 最後に

災害は地震や津波などの自然災害だけでなく、事故や犯罪などの人為災害がある。環境防災科の仲間は、この中のどれかの災害を防ぎ市民を守る職業を目指しており、あらゆる場面・分野で活躍する。そのようなメンバーと一緒に防災を学べたこと、災害について深く濃く知ることができたことを誇りに思っている。大人になっても今と変わらずこの仲間と共に。また、この仲間を軸に防災の大切さを広め続けていきたい。

生きている間に大きな地震が必ず起こると言われている。それは、何をしていたいつ起こるのか予想ができない。だからこそ、毎日当たり前にならない生活ができていることに感謝を忘れずに過ごしていきたい。

“Providing is preventing. (備えあれば患いなし)”という諺がある。発表を行う前に原稿を用意すること、災害が起きる前に危険性を知っておき備えておくこと。この2つは「事前準備」という点では全く変わらない。防災バッグが各家庭に用意されていて、地域の避難訓練に毎回参加し、心肺蘇生法や止血法などができる。これらのような「自分で行えること」を当たり前だと感じてできる人が増えていく社会にしていきたい。「前もって物事を考えることを日常にする」これは3年間どの授業でもいつも言われ続けてきた。いつか災害による死傷者・被害が0になるように語り継ぎ、多くの方の防災意識を今よりもっと高めていくこと。これこそが、環境防災科で3年間学んだ私の使命である。

経験をつなぐ

三好 彩香

1 はじめに

激しい揺れとともに阪神地域と淡路島を中心に襲った阪神・淡路大震災から 27 年がたった。27 年経った今では阪神・淡路大震災を経験していない人が半数を超えている。私も経験していないその 1 人だ。私のような人達はこれからも増えていく、増えていくと風化して人々から忘れ去られてしまう。忘れ去られてしまうとまたどこかで同じような被害が起こる。二度と同じような被害を起こさないために、風化していかないために私はできることから少しずつ阪神・淡路大震災を語り継いでいきたい。そして未経験でも語り継ぎができる後の世代に伝えていきたい。

2 阪神・淡路大震災の概要

発生年月日 平成 7 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分

震源地 淡路島北部(北緯 34 度 36 分、東経 135 度 02 分)

震源の深さ 16 km

規模 マグニチュード 7.2

死者 6,434 名

負傷者 43,792 名

行方不明者 3 名

住宅被害 639,686 棟 (平成 18 年 5 月 19 日消防庁確定より)

3 父の話

当時父は明石に住んでいた。その時は明石市立野々池中学校で教員として勤務していた。

(1) 避難所への安否確認

中学校の建物被害は直接なかったが、ライフラインの被害や校区内では住宅の倒壊等多数あった。8 割程度の教職員が交通機関の被害や家庭の被害により出勤できない状況が起こり、1 週間の臨時休校になった。休校中はプールの水を中学校近隣の住民に配給し、校区内の避難所であった鳥羽小学校へ避難している生徒の安否確認のために毎日鳥羽小学校の体育館で出席をとった。

(2) 神戸市内から転入生の受け入れ

2 月から受験を控えた神戸市内の学校から 2 名の転入生を引き受けた。震災後半年を過ぎた頃から神戸市内(特に長田区)から 10 数名の転入生が来た。

また、神戸市内の高等学校で建物被害が大きかった村野工業高等学校は明石市内の望海中学校の校舎を借り受け神戸市以西の受験者のために入試を行った。

(3) 神戸市和田岬小学校でのボランティア

1995 年 2 月下旬に、学校支援ボランティアとして兵庫区にある和田岬小学校へ向かった。当時の鉄道網の被害が大きく、JR 西明石から JR 鷹取駅までしか開通していなかったために途中から徒歩で移動した。そのため 40 分で行けるところが徒歩で約 2 時間はかかった。鷹取駅から和田岬小学校に向かっているとき、街並みが火事の跡で瓦礫に覆われ路地もなく茶色が目立っていたことが今でも印象に残っている。

向かった時、避難者も数名で仮設住宅へ移動し避難者はあまりなかった。着いた時に当時の教頭先生から震災直後の学校の様子を教えてくれた。その聞いた話として、和田岬小学校では最大約 300 名程度(50~70 世帯)がいた。避難者の多くは体育館と全ての教室に分散していた。食料の配給が定期的に行われていた。しかし当初は奪い合いが頻発、そのため学校は食料や毛布等が配給されるとすぐに渡さずに学校のカギのかかる教室で保管し管理をしていた。地震直後は体育館しか避難所として活用していなかったために、更衣や就寝時にトラブルが何回も発生していた。やがて避難者の中から自治が芽生えはじめ、食料や毛布の配給、避難者の区分け等、学校と相談して効率的に行うようになったと聞いた。

4 母の話

当時母は父と一緒に西明石に住んでいた。

(1) 震災直後

朝食とお弁当を作ろうと思いそろそろ起きようとした時に、ドーンときて次に横揺れが起こり、父と2人で起きた。揺れが収まって台所に行くと食器棚に入っていたものが落ちて破片が多くあり足の踏み場がなくなっていた。またオーブンレンジも床に刺さっているように落ちていた。そしてラジオをつけると震源地が淡路島と聞き、父の実家が大丈夫か心配になって電話を掛けた。当時の電話は携帯電話も今のように普及しておらず、外に出て公衆電話で行った。しかし電話をかけてもつながらず、ようやく昼頃につながり、父の実家は無事だと知った。父の実家は淡路島の南あわじ市にあり、幸いにも被害は少なく、西明石の方が電気、ガス、水道の被害がひどい状態だった。水道は近くのお寿司屋から井戸水が出ているので分けてもらった。お寿司屋の近くにいた時、たばこを吸おうとしている人がいて、その人に「ガス漏れがしています。このあたりに火が付いたらどうするんですか」と注意する人の声が聞こえた。その人の言葉を聞いてたばこを吸おうとしていた人はやめた。そしてここではたばこから引火して起こる火事はなかった。実際に地域の繋がりを見て「遠くの親戚より近くの他人」という言葉があるように、何気ない日頃の地域の人に挨拶をすることや、自治会活動などからできる人との繋がり大切さを実感した。

(2) 震災発生から2週間

震災直後から2週間はスーパーやコンビニに行ってもたくさんの人が食べ物を買っていて、何も買えなかった。偶然食べ物が残っていても見つけた人たちですぐに取り合いになった。また家では余震が続いていたため、寝る時はいつも靴を枕元に置き、寒い季節だったがすぐに逃げられるように玄関を少し開けて過ごした。これを経験して日頃からの備蓄、災害の備えの大切さに気づいた。

また、発生から2週間後くらいに車に車上荒らしが起こった。幸い車とガソリンは取られなかったが、好きな歌手のCDを30枚、好きな歌手のライブグッズを盗まれた(当時の車はCDを録音する機能がなく毎回聞きたいCDがないと聞けないために車に置いていた)。今まで大きな地震を経験したことがなく気持ちが混乱していたのと同時に、まだ生活が元通りになっていないためか、最初は何が何かわけがわからなかった。車上荒らしが起こる前にニュースでは「日本は治安が良いからこんな大きな地震が起きていても泥棒は起こらないと国内のみならず世界も称賛している」と聞いて安心をしていた。しかし、車上荒らしが起こって宝物が取られたショックと、たった一握りだけどそういう人がいるということにショックを受けた。その沈んだ気持ちが1週間は続いていた。

今考えてみるとニュースの言葉に過信しすぎたこと、そして今みたいに車の防犯対策をしていなかったと思った。

5 話を聞いて

私は外部の講師の人やボランティア活動で震災体験の話を聞いたことはあるが、両親から話を詳しく聞くのは初めてだった。両親からの話は私にとって想像上の話だった。話を聞く前に父から震災直後は自分が何をしていたのかわからないぐらいに職場に行っていたから覚えていないと言われた。わかっていただけ、改めてそれだけ兵庫県に大きな被害を与えたのがわかった。そして阪神・淡路大震災の直後に犯罪が起きていたことは知っていた。けれども、そのことがこんな身近に起きていたことに驚いたと同時に、テレビなどのメディアだけでは伝わらないものがあるとわかった。

それから淡路島の話を知りたいと思った。しかし淡路島の当時を知っている私の身近では、話を聞きやすい人は亡くなってしまい、話を聞くことができない。もっと早く聞いていたら良かったと後悔した。そして私のこのような後悔が起こることはこれから多くなってくると思う。だから私は後悔をしないように、被災体験を生で聴ける今だからこそ、被災体験の話を聞く機会があったら迷わずに行こうと思う。

6 環境防災科

(1) きっかけ

私は環境防災科を知る中学3年生の夏まで、防災をあまり好きではなかったし、むしろ避難訓練の日の夜はいつも地震と津波の夢を見るから怖くて進んで学ぼうとしなかった。けれども、夏休みに友達と参加した兵庫県防災ジュニアリーダー合宿で私は防災のイメージが大きく変わった。これまでの私は、災害の映像やこれから起こると予想されている災害の想定被害を聞いて防災をとて怖いものとして捉えていたが、合宿に参加して防災を学ぶ楽しさに気づいた。それと同時にいつも見ていた怖い夢が起こらなくなってきた。それでもっと防災を学ぼうと思い環境防災科に入った。

(2) 環境防災科に入学してから

私は2年生から新型コロナウイルスの影響もありながらたくさんのことを学ぶことができた。

特に1年生の時に参加したネパール訪問、全国防災ジュニアリーダー熊本合宿は私にとって大きな影響を与えてくれた。ネパール訪問は環境防災科に入る前から参加してみたいと思っていた行事の1つであった。訪問ではネパールの防災教育や現地の方と交流できた。ネパールの防災教育を通して日本の防災教育の在り方について考えることができたこと、また交流を通して海外の文化に触れることができたのは私にとってかけがえのない宝物になった。そして全国防災ジュニアリーダー熊本合宿は全国の高校生と中学生と一緒に勉強することでこんなこともできるなど、刺激を貰った。

また環境防災科の授業では、普通科にはできない様々なことを勉強することができた。特に私は色々な分野の外部講師の方々からお話を聞いたことは私にとって良い経験ができたと思う。加えて外部講師の方で印象に残っているのは、森松さんだ。森松さんの講義を聞いて福島県の現状をととても知れた。そして原発についてのこと、東日本大震災を他の知らない人に伝える大切さや避難について考えるきっかけにもなった。その他にもCODEの吉椿さんの「最後の1人まで」や齋藤先生の「防災教育は命の教育」の言葉は私のこれからの人生のモットーになっている。私はこのような様々な外部講師の方から話を聞くことができて、環境防災科は恵まれていると思った。学校の先生だけでは得ることができない広い視野で考えることが少しずつだが入学前の私と比べてできるようになっていると思う。

(3) 新型コロナウイルス

2020年の2月下旬思ってもいなかった新型コロナウイルスの蔓延が日本いや世界中で起こった。これは世界中の誰もが想像していない出来事だった。それに伴って兵庫県は約3ヶ月間学校が休校になった。休校期間の初めはこの生活は自由で何もしなくて良いことから開放感があって楽しいと思っていた。しかし徐々に増えてくる感染者と休校期間が伸びるにつれて何も見えないゴールに不安を感じた。

本格的に学校が再開したのは6月の中旬頃だった。休校期間が長かったせいか夏休みが短くなったのは残念だった。再開してから本来ならできるはずだった東北訪問やJICAの人と交流が出来なくなったそして高校生活で最も大きな行事と言ってもいい修学旅行が中止になり遠足になってしまった。誰もが悪くない状況にずっとイライラが溜まって悪い面ばかりに囚われすぎていた。その時の私は少しの間体調不良と精神状態がおかしいのも続いたと思う。けれども私は、新型コロナウイルスの悪い面だけでなく良い面を考えて過ごして見ると体の調子も良くなった。例えば、その場に行かずにトルコの人達と交流ができ、全国の中高生と交流ができ新型コロナウイルスが起こっていなかったらできなかったこともあると思う。

新型コロナウイルスの状況を経験している今だからこそ言えるのは、悪い面ばかり考えてしまうと心も身体も悪くなってしまうことと、日常の大切さだと思う。学校生活は制限が掛かっているけれど、この生活も新型コロナウイルスの時だけだと思うと、特別感があると思う。

7 夢と防災

(1) きっかけ

私の将来の夢は中学校の社会科の教師になることだ。なりたいたと思ったきっかけは、両親が教師で憧れをもっていたことと防災教育に携わりたいたと思ったからだ。防災教育に携わりたいたと思ったきっかけは、「社会環境と防災Ⅰ」で大川小学校の出来事を学んだことだ。そして同じような被害を起こさないために環境防災科で学んだことを活かしたいと思ったからだ。

(2) 何をしたいのか

私は教師になったらしたいことが4つある。

1つ目は、地元の南あわじ市で教師をすることだ。地元でこだわった理由は2つある。1つ目は今まで何もない地元をださいと思っていた。しかし島外の学校に来て地元の良さに気づき、いつの間にか地元が大好きになっていた。だからこそ私は大好きな地元で教師をしたい。

2つ目は、環境防災科で学んできた防災知識を使って生徒達とその家族が災害で命を落とさない防災教育と同時に楽しい防災教育をしていくことだ。私の地元は南海トラフ巨大地震が起こったら最大で8メートルの津波がくる。兵庫県の南海トラフ巨大地震の予想では南あわじ市の津波の高さが最大で被害も最大と予想されている。ただし怖い防災教育になってしまうと以前の私のような子供もいるため怖がらせない防災教育にしていきたい。

3つ目は、教職員の震災・学校支援チームEARTHに入り、他校への防災教育の推進や被災地の学校支援を行うことだ。このチームに入りたいと思ったのは、父がこのチームの先駆けとなる学校の支援をしたことがあり、父のような教師になりたいと思いこのチームに入ろうと思った。このチームは全国にある

ものではなく、兵庫県・熊本県・三重県にしかない。だからこそ地元で教師をしたい。これは私の秘かな野望だが、EARTHを全国規模のチームにしていきたい。

4つ目は、普段の授業から防災を取り入れたものにする事だ。普段から防災を行っている所は、行っていない所と比べて災害時になっても避難できると思う。加えて普段から防災について考えたり実施をしたりすることを通して防災の大切さがわかってくると思うからだ。それを行うために今の私の知識では足りないから、大学を通して足りない知識を学んでいきたい。

(3) 大切にしたいこと

私は教師になったら大切にしたいことが4つある。

1つ目は、自分ばかりが一方的に話す授業をしないことだ。私の癖で一方的に話すことがよくある。これは子供達にとってつまらない授業になり、教師になったら致命的なものになると思う。そして同時に伝えたいことが伝えられないと思う。

2つ目は、したいことにも書いている通り楽しい防災教育を行いたい。私は楽しい防災教育を大切にしたいのは、人は楽しいことは定着しやすいからだ。実際に私も楽しく消防車に乗ったことは今でも覚えている。だから私は楽しい防災を大切にしていきたい。

3つ目は、地域を巻き込んだ防災教育をすることだ。「夢と防災」を執筆するために避難所運営を調べた時、普段から地域の人と交流していた学校は、上手く避難所として運営していた。また、地域を巻き込むことで生徒が住んでいる地域のことに触れるができること、地域の人と交流できることの2つの良いことがある。

4つ目は環境防災科で学んできたこと、経験してきたことを教師になった時に、つないでいきたい。この「つなぐ」という言葉は題名にも使っている。この言葉には私が大切にしたいことがつまっている。この言葉の経験にはその災害に遭っていなくても被災者の話を聞いていたら私は語り継ぎができると考えている。私はその災害を経験していないからと言って、聞いた話を無駄するようなことをしたくない。だから私は被災者の話を無駄にせず聞いた話を伝えることを大切にしたい。

8 最後に

私は、『語り継ぐ』を執筆することにあたって、『語り継ぐ』って何だ」と自問自答しながら執筆してきた。また新型コロナウイルスについて執筆するかどうか最後まで迷っていた。けれども、この『語り継ぐ』は舞子高校のホームページに載せ、きっと未来永劫残っているから書くことに決めた。普通の高校生の視点で新型コロナウイルスについて感じたことが、新型コロナウイルスの状況を経験していない人や未来に同じような起こった時少しの人でも良いから見て知って欲しい。そして私が執筆した新型コロナウイルスについてのことが後の世代の人に想いが伝わるのが今の願いだ。

また環境防災科の3年間は色濃くて忘れられないものが沢山あると同時に、一つひとつの行動や言動に対する責任の重さを実感した。私は環境防災科の活動のおかげで私の人間性について考えることができ、成長することができたと思う。そして出前授業で自分の地元である南あわじ市の小・中学校に行くことができて本当に感謝している。

『語り継ぐ』を執筆することを通して語り継ぎはその災害を経験していなくてもできると思った。なぜなら私がこうやって両親の話を語り継ぎができるように、誰かのその状況の経験の話を聞いていたらできるからだ。最初は『語り継ぎ』を執筆することにプレッシャーを感じていた。しかし執筆をとおして語り継ぎのプレッシャーは次第になくなっていった。もし私のはじめのような語り継ぐことをしたいけどプレッシャーを感じている人がいたら、最初は友達から伝えるところから行っていくと私はよいと思う。私もそれを行ってプレッシャーが少しずつ減っていったからだ。そして語り継ぎをすることで後の世代の命を守っていけると思う。だから私は少しずつだけれども、これからも未経験でも聞いた話を題名の『経験をつなぐ』をモットーに語り継ぐことを行っていきたい。そして、私や他の人の語り継ぎを通して1人でも多くの人が災害で命を落とさないように願っている。

未災者なりの語り継ぎ

森 亮太

1 はじめに

私が生まれたのは阪神・淡路大震災から8年後の2003年。物心がついた時には街に震災による被害の面影は残っていなかった。今思えば、それも風化の一因になっているのだろう感じる。

私が育ったのは震災復興象徴の街「HAT神戸」。小中学校では防災教育が盛んに行われている。HAT神戸に住む方の震災当時の貴重な経験をこの場で繋ぐとともに、環境防災科で学んできた「語り継ぐ意義」や自分の思いを自分なりの言葉で執筆する。これを読んだあと、語り継ぎの大切さや防災・減災活動の必要性を1人でも多くの方が感じてもらえれば幸いだ。

2 阪神・淡路大震災

(1) 概要

発生年月日：1995(平成7)年1月17日午前5時46分

震源地：淡路島北部(北緯34度36分、東経135度02分)

震源の深さ：16km

地震の規模：マグニチュード7.3

人的被害：死者6,434名、行方不明者3名、負傷者43,792名

住家被害：全壊104,906棟、半壊144,274棟

阪神・淡路大震災教訓情報資料集阪神・淡路大震災の概要(内閣府 防災情報のページ)より

(2) 地域の方の話 ～被災直後～

私が住む地域の方(以降Tさんとする)は当時、神戸市北区の鈴蘭泉台のマンションに妻と娘2人の4人で暮らしていた。当時大阪に勤務しており、毎朝5時～5時半には起床し食事をしていた。そのため、震災時は起きて朝食の準備としてお湯を1人で沸かしていた。震災の前日、韓国から来た日本語が全く分からない高校生のホームステイを受け入れており、歓迎会を行ったばかりの朝だった。4階に住んでいたこともあり、かなり揺れ、食器がすべて飛び散って割れた。Tさんは机にかろうじて掴まって倒れることはなかった。家にいる人は皆何が起こったか分からないため飛び起きてきたが、「とにかく寝とけ、布団に入っとけ」と叫んだ。家族は布団の中でわめいていた。また、韓国の高校生は日本語を喋れないため相当怖かっただろうと話す。彼は部屋から飛び出してきて韓国語で何かを叫んでいたが、そこは怒鳴りつけて黙らしたという。

6時が過ぎると辺りもある程度明るくなってきたため、ドアを開けて外へ出た。揺れた直後は、辺り一帯が揺れるような地震も経験したことがなかったため、自分の所だけが大変なことになっていると思っていたが、外へ出たことでそうではないと分かった。近隣にこの地域の方よりも早く出勤する方がいた。その方が帰ってきて「大変や。有馬街道下りようとしているのに車が全く動かへん。」と聴き、会社に行くのはとんでもないと感じ、部屋の片づけに取り掛かった。起きてきた家族と片づけながら、何が起こったのか想像をしてみたが、想像がつかなかった。どこがどうなっているか情報が欲しかったためテレビをつけようとしたが、すぐにはつかなかった。電話もつながらないためボーッとしていたが、しばらくしてテレビがついた。だが、神戸で地震が起きたらしいということが放送されるも、まだどこでどのような被害が出ているのなど詳しい部分は放送されていなかった。

8時から9時ごろになり鈴蘭台から鷹取山の方を見ていると煙が上がっていた。どの辺りで火事が起こっているのだろうと考えているうちに、次第にテレビで詳しい部分の放送がされるようになってきた。しかし、まだ現場での取材はできていなかったため「死者100人」などを言葉だけで伝えている状況だった。韓国の高校生は、何が起こっているのか分からずパニックになっていた。説明をしても伝わらなければ、高校生が話していることも何も分からなかったが、テレビの映像などを通して状況を少しずつ理解していった。

(3) 地域の方の話 ～海外の方との生活と感動したこと～

Tさんは以前から多くのホームステイを受け入れてきたため、海外の方との交流が多くあった。

震災直後、輻輳して繋がらないはずの電話が鳴った。出てみると以前にホームステイを受け入れたカナダの方からの電話だった。「そんなことを心配してくれるのか」と感動した。しばらくして、出稼ぎに来

ていた海外の方が公園で生活をしていると知り、家に招き入れた。来てみると7人という大人数だったので、トイレなどの心配が多くあったが、そんな心配もすぐに無くなった。家に招き入れた7人は若さもあるが自分の意志がはっきりとしていて、「心配をかけたくない」という思いが伝わった。7人で手分けして食料調達を行ったり、自分のことだけに留まらず同じマンションの高層階の住民に水を運ぶボランティアをしたりなど活発だった。日中は活動し、夜は酒を飲んでどんちゃん騒ぎという生活が1週間ほど続いた。

街では信号機がすべて止まっていたため、警察官が交通整理を行っていた。その警察官のマスクは排気ガスの煤で真っ黒になっていた。また、飲み水を運ぶタンクを乗せた軽トラには網走市と書いていた。遠く離れた北海道から支援に来てくれていることに感動した。

日本で地震が起きた際、海外の方は日本人以上に心細く心配な気持ちになる。災害の時にかばってられない部分も少なからずあるが、それでも災害時要援護者として配慮しなければならない。震災時にできた絆は強く、今でも連絡を取っている。

(4) 話を聴いて

私はこの話を聴いて改めて災害時要援護者への配慮をする姿勢が足りないと感じた。災害が発生するとたくさんの心配事を一度に抱えることになると思うが、言葉が通じないということほど恐ろしいものは無いと感じる。なぜなら海外に行ったことがあるが、決して災害が起こっているわけではないのにとっても心配だったからだ。災害が発災した時に自分がどのような状況に置かれるかは分からないが、災害時要援護者にできる限りの配慮をしたいと思う。そのためにも、普段から英語や福祉のことを勉強し、様々な分野に目を向けて日々勉強をしていきたい。そして少しでも自分に余裕を持ち、災害時要援護者に配慮できるよう、できる限りの備えをしておく。

また、災害がもたらす絆も多くあることに気が付いた。災害は被害などに目が行きがちであるが、その時の助け合いの輪などが今でも続いていることが分かった。これから災害について学ぶ際に、こういった災害があったからこそできた絆や連帯感などにも視線を向けていきたい。

阪神・淡路大震災時に災害時要援護者がどのような生活をしていたのかを知ることは決して多くないため、こういったことを語り継いでいかなければならないと強く感じた。これからどのような道に進んでも災害に常に目を向け続け、防災と向き合っていく。

3 環境防災科

(1) 入学のきっかけ

私が生まれ育ったのは阪神・淡路大震災からの復興象徴の街である「HAT 神戸」だ。街にはマンションが立ち並び、HAT 神戸内にある5つの広い公園では子供から高齢者までたくさんの住民が毎日活発に体を動かしている。HATはHappy Active Townの略称で、小学校の校歌には「Happy Active しあわせ運ぶ」という歌詞が入っている。

そんなHAT神戸に「人と防災未来センター」という、阪神・淡路大震災の記憶継承を目的とした施設がある。私は小学4年生の時に、この施設へ校外学習に行ったことで阪神・淡路大震災について深く調べるようになった。施設内には震災当時の映像や写真、地震によって家屋等の下敷きになったことで大きく形を変えた物など多くの展示物があり、当時の私はその生々しさに言葉を失った。震災復興の象徴となる街にある小学校に通っていたので、1年生の時から防災学習を数多く受け、震災をわかっていたつもりだったが、施設の見学をしたことでまだまだ震災をわかっていないのだと感じた。この気づきをきっかけに私は震災や防災・減災に興味を持ち、進学した中学校では「防災ジュニアリーダー」として活動した。活動内容は防災イベントの運営や震災の枠を超えて水害の調査なども行った。中学3年生で進路を考えていた時に防災・減災をより専門的に学べるこの「環境防災科」があると知り、進学を決めた。

(2) 入学後

環境防災科に入学し、とにかく数多くのボランティア活動に参加した。地域イベントの運営や他校との交流、小・中・特別支援学校との共同防災学習など種類は多岐に渡る。

その中で特に印象に残っているのは共同防災学習だ。私が初めて共同防災学習を行ったのは芦屋特別支援学校で、今でもそこでの学びが様々な活動に役立っている。この共同防災学習では「伝える難しさ」を痛感した。芦屋特別支援学校には様々な障がいがある生徒が通い、その障がいの重さはかなりの個人差がある。障がいがある方に防災・減災を伝えるのは初めての経験で、準備の段階からどのように伝えれば伝わるのかを迷い続けた。当日はとにかく難しい言葉を使わず、実際に見たり持ったりできる資料を駆使して授業を行った。伝えることは「話す・聴く」だけではなく「触る」など様々な方法があるのだと

知った。この共同防災学習前後で大きく考えが変わったことは障がいがある人も持っていない人も何ら変わりはないということだ。この経験をする前は対応が難しい人のように考えていたが、いざ特別支援学校に行ってみると普段自分たちが学校で話していることと変わりが無く、むしろ何事にもまっすぐに取り組む姿に私は圧倒された。聴くところはしっかりと聴いて、楽しむところは全力で楽しんで私たちの授業に参加してくれたことで私もリラックスをして授業ができた。障がいがあるというだけで敬遠されることの多い障がい者は、関わる機会が少ないため障がいがない人と違うと考えられやすい。性的少数者もそうだが、関わる機会を増やしていくことが差別等の無い社会を作るために必要だ。これからもこの経験を活かし、多様性を意識した取り組みを行っていく。

他にも、環境防災科としてだけでなく生徒会長としても様々な経験をしてきた。ボランティア活動も生徒会活動もどちらにも共通して大切にすることは話すことだ。同じクラスの友達、先輩、後輩、先生、普通科、それぞれ全く違った視点を持っている。それぞれの視点でコミュニケーションを通じて知った時、新しい自分の考えが生まれる。そんな経験を何度もしてきたため、何かに行き詰った時ほど人と会話するようにしている。

(3) 全国防災ジュニアリーダー合宿

私は高校1年生の夏休みに、東北で行われた防災ジュニアリーダー合宿に参加した。これは全国の防災に取り組む中高生が参加する合宿で、語り部さんのお話を聴いたり、被災地の現状を実際に自分の目で見たりなど多くのプログラムがある。その中で、最も印象に残っていることがある。

宮城県にある多賀城高校には災害科学科という防災を専門的に学ぶ学科がある。その生徒が語り部となり、東日本大震災で津波が押し寄せた際の映像を見ながら実際に多賀城市内を歩く「まち歩き」を行っている。合宿の中でそのまち歩きに参加し、生徒の話を聴きながら街を歩いた。ある歩道橋の柱についていた津波波高標識(多賀城高校の生徒が自分たちの手で付けたもの)の紹介をしてくれた後、少し小さな声で「もう津波の跡が残っているのもここぐらいになりましたね」とその痕跡を見ながら呟いた。その時、私の中で大きく考えが変わった。私はその合宿に参加するまで復興することは良いことだと考えていた。もちろん今も復興することは良いことだと考えているが、必ずしも良いことばかりではないとその時感じた。震災を経験していない私たち(以降未災者と表記する)にとっては震災の痕跡を無くし街に新しい建物が建ち並べば街が元気になると考えがちだ。だが被災者にとっては、街から爪痕が無くなれば無くなるほど「風化」が進んでいるのでは無いかと不安になるのだと気づいた。

ここが未災者と被災者の最も大きな考え方の相違だと考える。未災者は、復興と言えば目に見える建物の様子で捉えがちだ。しかしそれは見かけの復興であり、被災者の心の傷は癒えていない。被災者全員の「こころの復興」を果たした時初めて復興したと言えるのではないだろうか。復興や風化と一口に言っても多くの捉え方があるのだと感じた。

4 夢と防災

(1) 多くの夢の1つ

私は新しいことが大好きで、少し興味を持ったものはなんでもまずはやってみたいという性格だ。長所として見れば好奇心旺盛、短所として見れば継続が苦手ということだ。今までたくさんの職業に興味を持ち、それに向かって今できることを行ってきた。今この執筆を行っている際も就きたい職業は1つに絞っておらず、無理に絞る予定もない。だが、私の性格に合っていると感じる職業が1つある。それは「社会起業家」だ。

社会起業家とは、今世界中で起こっている多くの問題を事業によって解決する人のことをいう。社会起業家といっても事業によって利益を得ることには変わりがないため、一般的な起業と別個として考える必要は無い。違う点を挙げるとするならば、一般的な起業は目的が利益の追求にあるが、社会起業家は社会問題の解決が利益の追求にプラスされるということだ。目的となる課題は日本だけを見ても、高齢化社会による福祉の問題、フードロスの問題、農村部の人口減少など例を挙げ出すとキリがない。これは防災についても例外ではない。防災を広めるとき、避難所生活の時、復興途上するとき、それぞれ多くの課題を今でも抱えている。むしろ、普段の生活が便利になればなるほど課題は増えていくのではと私は考える。つまり、防災という分野において必要不可欠な職業であると言える。

この職業が私の性格に合っていると感じた理由が2つある。

1つ目は、社会課題を解決するためには事業の革新性が必要であるという点だ。課題がある理由はこれまでの人のアイデアでは解決しなかった結果であり、解決するためにはこれまでの人が思いもしなかった革新的なアイデアが必要だ。舞子高校で行ったボランティア活動や生徒会活動では多くのアイデアを

出しており、褒められることも多かった。さらには、上記した好奇心旺盛という長所は多くの情報を吸収することができるということでもあり、それも生かせるのではないかと考える。

2つ目は、事業を行うためには時代や環境に合わせて変わっていく変革性が必要だという点だ。世界は時間とともに変わり続けている。その世界の変遷とともに事業も変わっていかなければ、事業は衰退する。また、事業を行う場所が変われば環境も違うため、また新たなアイデアが必要だ。つまり事業を継続するためには、軸は持ちつつも事業自体を変革させていかなければならない。ここでは上記した私の短所である継続が苦手という部分が役に立つと考える。同じことを続けることは苦手であるが、新しいことを追い求めることは得意である。同じことを続けないことが事業を継続させることに繋がるのだ。この職業を見つけた時、短所といえば悪い部分というイメージがあるが見方を変えれば長所にもなり得るということを初めて体感した。このような理由からこの職業が自分の性格に合っていると感じた。これからは社会起業家になるために多くの社会問題に自分なりの考えを持ち、アントレプレナーやインフォプレナーといった革新的な起業をする方の動きなどに目を向けていく。

(2) どの職業に就いたとしても

上記したように、私は夢を1つに絞っていない。ただ、どの職業に就いたとしても大切にしていきたいことがある。それは周りの人を笑顔にすること、そして、ほかの人に必要とされる人になるということだ。これは平時でも非常時でも大切になることだと私は考える。

周りの人を笑顔にすることは、何かおかしなことをして笑わせるというわけではなく、困っていたら助けるといったことだ。ありがとうという言葉が生まれる場には必ず笑顔があり、その笑顔は周りの人も笑顔にしていく。そのきっかけを作っていきたい。また、ほかの人に必要とされるためには信頼が必要である。周りの人と信頼関係を築くことは幸せにもつながると考えるため大切にしていきたい。

5 最後に

私はこれまで未災者が語り継ぐことはできないと考えてきた。実際に体験したことを話すときと、人から聴いた話を話すときには大きな差があるからだ。中学生のころから語り継いでいかなければならない、風化させてはいけないという使命感だけが心に残り、では実際にどうすれば良いのか悩んできた。だが、舞子高校環境防災科に入学し防災を学んでいる中で、なんでも自分なりで良いという風な考えを持つようになり、自分の中で心の靄が晴れた気がしている。多くのボランティア活動などで災害の話をしてきたが、一度も伺った話をそのまま伝えたことは無い。自分なりの言い回しや、伝える相手によって言葉の難易度を変えて話してきた。中学生の自分はこれが本当に語り継ぎになっているのか不安に感じていたが、今はその不安は無い。災害で現れた事実と、それを経験された方の思いを汲み取り、自分の考えやアイデアも交えながら伝える。このような語り継ぎができれば、多くの目線から1つの災害を捉えることができると思う。だからこれからは自分なりの言葉で、自分なりの表現で阪神・淡路大震災、そしてその他毎年のように起こる災害を繋げていきたい。そして、これを読んだ方にも自分なりの言葉で災害を誰かに繋いでほしいと思う。

過去を伝える、未来へつなぐ

森山 結惟

1 はじめに

1997年1月17日に起きた阪神・淡路大震災から約27年が経過した。被災地である神戸の街の風景は今、とても綺麗で震災の面影をあまり感じられない。災害を経験していない未災者の世代が増えてきていることもあり、震災の記憶が薄れているように感じる。それでも被災者の心のなかには、震災の記憶がずっと残っている。亡くなった人、その遺族、今も苦しい思いを抱えている人。たくさんの被災者のために、あの日の経験を忘れてはいけない。これから起こる災害から自分たちの命の守るために、あの日の経験を未来に繋ぎ、生かさなくてはならない。私たちのような未災者が増えてきている今だからこそ、被災者から未災者へ、未災者から未災者へ、震災の記憶を語り継いでいきたい。

2 母の話

当時、母は長田の下町のアパートに祖母と2人で暮らしていた。

(1) 地震が起きた日の朝

震災が起きた日の朝、珍しく早く目覚め、こたつで横になってくつろいでいた。午前5時46分。「ゴゴゴゴ…」という強風のような音が聞こえた直後、家全体が下から突き上げられた。トラックでもぶつかってきたのかと思い、驚いて、咄嗟にこたつの中に潜り込んだ。激しい揺れを感じるとともに、家具が「バタンッバタンッ」と倒れる音が聞こえ、必死にこたつの足にしがみついた。揺れが収まった後、別の部屋で寝ていた祖母のところに向かうためにこたつから出ようとした。だが、こたつの外には棚や冷蔵庫、テレビなどの家具がちょうど出口を塞ぐように倒れてきていて、こたつの中に閉じ込められた。そこはとても暗く狭くて、死ぬかもしれないという恐怖心と不安から、パニックになった。「助けて、助けて」と叫び続けていると、祖母がすぐに駆けつけて助け出してくれた。今でもあの暗くて狭いこたつの中の息の詰まるような感覚、恐怖心と不安感を鮮明に覚えている。

(2) 燃える街

家族で安否確認が取れた後、状況を把握するために外に出た。家の前の道路は大きなひび割れがあり、足がはまりそうだった。しばらく歩いていると、たくさんの家が燃えているのが見えた。消防士たちは、なすすべがないとでもいうように後ろに手を組んで、街中が燃えているのをただ眺めていた。上を見ると、太陽が赤く染まっていて、やけに不気味に感じた。

(3) 水、食料の確保

震災直後、水道、ガス、電気などのライフラインが止まっていた。中でも一番困ったのが「水」だった。当時、ペットボトルの水を買って貯蓄したり、風呂の残り湯を貯めておいたりということは全くしていなかった。とりあえず、生活するうえで確実に必要である飲み水を確保するために、近くのスーパーへ行った。だが、水どころか他の商品も品切れで、店の中はすっからかんな状態だった。その後も歩いていろいろな店を見て回ったが、どの店も同じような状態だった。諦めて家に帰ろうとした時、小さなパン屋さんが外で焼き立てのパンを売っているのを見つけた。食料もいつ手に入るかわからない。買えるものは買っておこうということで、行列に並び、袋いっぱいのパンを買った。

(4) 避難所

家の中はぐちゃぐちゃで生活ができそうになかったのも、近くの小学校に避難した。避難所は多くの人が押し寄せていて、教員たちは慌ただしく動き回っていた。たまたま、少しスペースが空いているのを見つけ、とりあえずそこに毛布を敷いて座った。仕切りはなかったため、自分のすぐ隣には全く知らない人がいるような状況だった。しばらくすると、隣にいた人が「お腹がすいた」と言い出したので、余ったパンを分けてあげた。そうすると、お礼にと、2リットルのペットボトルの水を1本くれた。避難所での生活は決していいものとは言えなかったし、しんどさや辛さはあったが、周りの人との助け合いが自然とできていたおかげで、乗り越えることができた。

3 父の話

当時、父はポートアイランドの岸壁を作る仕事をしていて、東灘にある寮に住んでいた。

(1) 地震発生時

体が浮き上がる感覚と大きな揺れで目が覚めた。最初は何が起こったかわからなかったが、咄嗟に布

団をかぶり、身を守った。揺れが収まった後、窓から外を見てみると、周りの木造家屋はほとんど倒壊し、電柱も倒れて、線路を越えたところにある商店街では火事が起きていた。あちこちで救助を求める声が聞こえた。父は倒壊した家屋の下敷きになった人を助けるために、部屋にあったボールやスコップ等を持って外に出た。ちょうど、近くで練習をしていた神戸製鋼のラグビー選手も来て、一緒に救助を行った。

(2) 工事現場に

住民の救助が落ち着いた後、自分が担当していた工事現場の状態が心配になり、車に乗って工事現場へ向かった。道路のつなぎ目が20 cm程度盛り上がり、道なき道を蛇行しながら進んだ。途中、車が道路のひび割れのところにはまりタイヤがパンクしたのでスペアに付け替えた。周りは液状化により人のくるぶしあたりまでヘドロだらけで、マンホールは浮き上がっており、高速道路は倒れていた。目のあたりにした街並みは地震が起こる前とは見違えるほど変わってしまっていた。まるで異世界にいるような気分だった。現場につくと、岸壁が約1 mもずれていて、ヘドロだらけだった。昨日まで自分たちが作っていた岸壁が悲惨な状態になっているのを見て、事の重大さを改めて理解し、恐ろしく感じた。その後、現場の状況を報告するために会社に戻った。途中、液状化で車のブレーキが効かず、何度か壁にぶつかった。会社での現状報告を済ませた後、「各自しばらく待機」と指示が出されたので、住んでいた寮に戻った。当時は水を貯蓄しておくなどという考えがなかったから、とにかく水に困った。トイレを流すために海水を汲んで使った。約1週間、風呂には入れなかった。待機している途中、何度もぐちゃぐちゃになった街の姿を見て、「自分ができることはないのか」「こんな状況なのに自分が休んでいていいのか」ともややもやした気持ちを抱えていた。それから1週間後、ようやく会社から、「出社できる者は全員会社集合」と連絡が来たので、急いで会社に向かった。

(3) 仕事再開

昼は測量の仕事を行い、夜はボランティアとして、自衛隊が運んできた物資を荷下ろししたり、詰め替えをしたりした。物資を各被災地に届けようとしたが、道路が崩れて通れない状態だったので、出来なかった。最初の4日間はほぼ24時間、働きっぱなしだった。そんなにも長い間ずっと働き続けるなんて、今では考えられないが、震災時は寝る暇もないほど忙しくて大変だった。ご飯は、届いた物資の中から、消費期限切れに近いおにぎりやバナナをもらって食べた。その後、神戸市から依頼を受けて、道路の補修や整備等、重機や機械を使った仕事を行った。

4 話を聞いて

父と母の話を聞いて、自分事として捉えることの大切さを感じた。父と母が震災で一番困ったことは「水」だと言っていた。水は飲むこと以外にもトイレを流したり、体を洗ったり、歯磨きをしたり、洗濯をしたり等、生活するうえで必要不可欠なものだ。震災前は、水を備蓄しておくという考えがあまりなかったため、震災でライフラインが止まってしまった時、本当に困ったらしい。当時は、「神戸には地震は来ない」と言われていたこともあり、防災の知識を持った人や防災意識の高い人が少なかった、つまり父と母を含め、ほとんどの人が防災を自分事として捉えられていなかったのだと思う。父は、「身を持って経験してみて初めて震災の怖さや辛さが分かった。自分事と思うようになった」と言っていた。実際に阪神・淡路大震災をきっかけとして、防災を自分事として捉える人が増え、市民の防災に対する意識が上がったと言えるだろう。しかし阪神・淡路大震災から約27年が経過した今、未災者が防災を自分事と捉えていない人が増えてきている。もう一度同じことを繰り返さないようにするために、過去の経験や記憶を生かすために、語り継いでいかなければいけないと思った。

また、母の話の中で、避難所内では被災者同士の助け合いが自然とできていたと聞いた。当時は空間に隔たりがなく、意識しなくても顔が見えて声も聞こえるような環境だった。だからこそ、自然に被災者同士で助け合いができていたし、コミュニケーションもとやすかったのだと感じた。今は、個人のプライバシーの保護の考えが昔よりも強くなり、避難所ではパーテーションで空間を仕切るというのが普通になった。それと同時に、被災者同士のコミュニケーションが昔に比べて取りづらくなっているように思う。だから、これからは避難所内で被災者同士がコミュニケーションを取って、お互いに助け合えるような工夫をしていかなければならないと感じた。また、非常時に助け合いがしやすいように、常時から住民同士でコミュニケーションを取っておくことも大切だと思った。

5 環境防災科

(1) きっかけ

地域で積極的にボランティア活動に参加している母の影響で、私は小学1年生のころから地域ボランティア活動を行ってきた。そこで何度か環境防災科の先輩方と一緒に活動させていただいた。先輩方の真剣にテキパキと活動に取り組む姿や、常に周りを見て臨機応変に行動している姿に憧れ、私も先輩方のようになりたいと思い、環境防災科に入りたいと思うようになった。

(2) 入学して

私は入学するまで、防災の知識が全然なかった。防災を学びたいというよりもむしろ、もっといろいろなボランティア活動をやってみたいという思いが強かった。しかし、講義やボランティア活動を通して、たくさんの人にお話していただき、過去の記憶や思いに触れ、次第に防災を学んでいきたいという思いも強くなった。防災を学ぶことは災害から自分たちの命を守ることに繋がるし、それを伝えていくことで被災者の記憶や思いを活かすことができる。そう考えると、防災は無くってはならないものなのだと感じた。

また、ボランティア活動にもいろいろな仕方があるということを知った。例えば、被災地ボランティア活動といっても、実際に被災地に行って活動するものだけではなく、募金活動を行ったり応援メッセージを送ったり等、いろいろな支援のかたちがあることが分かった。どのボランティア活動をしていくにあたって、思いやりの気持ちが大切になってくる。相手のことをしっかりと見て、聴いて、考えることが大切なのだ。私は、学校生活やボランティア活動を通して、相手を思いやって行動することを意識してきた。このことを生かして、これからも相手を思いやり、気持ちに寄り添えるような人になっていきたい。

(3) 出前授業

私は1年生のころから、継続的に出前授業に行かせていただいた。実際に授業をしていく中で、人に伝えることの難しさを感じた。相手が理解できるようにかみ砕いて、言葉や伝え方を工夫するために、まずは自分が知識や理解を深めること、そして相手のことをよく見ることが大切だということが分かった。また、防災を伝えていくにあたって、楽しいものにすることが大切になってくる。相手が必ずしも防災に興味があるとは限らない。また、興味を持っていたとしても、防災を難しいものと捉えてしまったら、やる気を失ってしまう。防災は誰でもできるもの、皆でするものと認識してもらうために、言葉や話し方、授業のやり方等を工夫して、伝えていかないといけないと感じた。3年間の中でやってきた出前授業で学んだことや身に着けた力を活かして、将来、たくさんの人に防災を広めていきたい。

6 夢と防災

(1) 私の夢

私の夢は地域で活躍できる保健師になることだ。きっかけは地域ボランティア活動にある。私は、地域ボランティア活動に参加する中でたくさん地域の人たちと話し、関わってきた。私が幼いながら、ボランティア活動に楽しさややりがいを感じることができたのは、周りで見守ってくれていた地域の人たちがいたからだろう。だから私は、地域の保健師になり、地域の人たちの身体と心の健康を近くで見守り、支えていきたい。

(2) 私の防災

私は将来、保健師として心の復興に携わっていきたいと考えている。心の復興は長期的なケア・支援が必要だ。ケア・支援を長期的に継続して行うというのは、普段から地域の人々を近くで見守り、支えていて、密接にかかわっている保健師だからこそできることなのだと思う。だから、私は保健師として災害時だけでなく、災害後も継続的にケア・支援を行い、被災者の心の復興を支えていきたい。また、心のケアをしていくにあたって、安心感や信頼がとても大切になってくると思う。だから、普段から地域の人々とのコミュニケーションを大切に、平常時も非常時も被災者が相談しやすいような環境をつくってきたい。また、コミュニケーションをとるにあたって、会話が大切になってくる。だから、一つひとつの言葉を大切にしていきたい。

(3) 私が学びたいこと

私は、心のケアについて学んでいきたいと思っている。その理由は主に2つある。1つは将来、保健師として身体のケアだけではなく、心のケア・支援も行っていきたいと考えていることだ。もう1つは、母がパニック障がいを持っていることだ。症状として、電車やバスなどの閉鎖された空間に居られないこと、人が多い場所には行けないこと等がある。発作が起ると息苦しさや吐き気、頭痛を感じ、場合によ

っては気を失ってしまう。また、ひどい場合はきっかけがなくても、予期せぬ発作が起こることがある。私は一度、母がパニック障がいを持っていることに対して嫌な気持ちを持ってしまったことがある。「なんでバスや電車に乗れないの。普通に乗れるでしょ。」と、言葉には出していないが、心の中で思ってしまった。その時は、パニック障がいのことや母の辛い思いを理解出来ていなかったし、理解しようとしていなかったのだと思う。環境防災科で学んでいく中で、障がいがあるないに関わらず、相手について理解することや、近くで見守ることが心のケア・支援において大切だということが分かった。これから、いろいろな人と関わっていくにあたって、相手のことを理解し、支えになれるように心のケアを学んでいきたい。

また保健師として支援者という立場になるということは、自分が健康であることが何より大切になってくる。自分がベストな状態でなければ、患者や被災者にベストな支援は出来ない。私は何かに集中すると、自分の身体や心の不調に気づくことができなかったり、無意識に我慢してしまったりするところがある。また、神経質な所もあり考えこみすぎてしまうことがある。だから、自分の身体や心の不調に気づき、自分で対処できるようになるためにも、学んでいきたい。

7 最後に

私たちは環境防災科として3年間防災について学んできたが、まだ大きい災害を経験したことがない未災者だ。だが、震災を経験していないことは、語り継げないことの理由にならない。経験していないからこそ、防災に積極的に取り組み、被災者の経験を聴き、自分でよく考えていかなければいけない。そして、私たちのような防災を学んでいる既知の未災者から、これから防災を学ぶ未知の未災者へ、自分たちなりの言葉で、伝え方で語り継いでいきたい。

また、幼いころからずっと取り組んできたボランティア活動をこれからも続けていきたい。今は新型コロナウイルス感染症の影響で、活動が制限されている。しかし、その中でも自分のできることを見つけ、少しずつではあるが、地域のボランティア活動を頑張っている。これからも、自分のできる支援のかたちを見つけ、ボランティア活動を続けていきたい。



兵庫県立舞子高等学校

〒655 - 0004 神戸市垂水区学が丘3丁目2番

Tel : 078 - 783 - 5151 Fax : 078 - 783 - 5152